





私は速やかに盗人のようにやって来る・・・
私は彼方の前に開かれた戸を置いた・・・
それは誰も閉じることができない。

啓示 22:12-15

啓示 3:8

それは終焉の時、光と闇は一つとなる

Time is come

赤く透き通るように

辺りが染まり

見える世界は

また闇に包まれる。

どうして、終わりは

こんなに切なく

美しいのだろう？

第1節 夏の思い出

大学の二年の

夏の日だった。

「おい、竜冶

お前 夏の予定

決まってるの?」

それは、悪友

通称コンパ屋

こと

金森の声だった。

「なーあ 竜冶

実はまた、

お前に頼みたい

ことがあるんだよ」

「わかってる金森」

「そっかー

そっかー

で

俺はお前に

何を頼もうと

していた？」

「また、

コンパが

あるんでしょ？」

「さっすがー

竜さん

さっしがいい。

もちろん来て

くれるでしょ？」

「それが、

森さん悪いけど

ちょっとそれは

無理かもね？」

「そんなこと

言わずに

ねっ

来て

おねがい」

「ごめん、森さん

きっとその辺りは

予定があるんだー」

「竜さん そりゃないぜ

まだ何時やるか・・・

言っていないし・・・激」

「そーだったっけ？」

「そーだよ

お願いだ竜治

お前が来てくれると

女の子を呼ぶ時、

助かるんだ。

お前だって

モテモテなんだから

いーじゃないか。

なっ

お願い

他の女の子に

竜治はもうメンバーに

入ってるって

言っちゃてるし」

「あれが

モテモテなら

僕は降りる。」

「あっ

あの時の事

言ってる

お前の顔を

引っぱたいて

行った

あの女?・・・??

俺もなんで

彼女が竜治の事

引っぱたいたんだか

わからなくてさ、

リサにそれとなく

聞いたんだ。

そしたら、

なんかを誤解して

いたらしいけどよく

俺には理解

できなかつたよ」

それは、

ちょうど二ヶ月前の

金森が主催した

合コンでの

出来事だった。

いつものように、

金森に頼み込まれて

僕はその合コンに

参加していた。

綺麗に着飾った

蝶が舞うように

女性達は華やかで

男達はその美しさに

目を奪われた。

その女性達は

世間から

お嬢様と呼ばれ

プライドが

高い女性が多い

気がした。

そんな中

僕は一人の

背の高い

綺麗な女性と

知り合う事ができた。

彼女はエレガント

な雰囲気

笑うとえくぼが

素敵な女性だった。

僕と彼女は

短い時間に

意気投合して

二人で会話を

楽しんでいた。

僕が彼女に

冗談を言うと

彼女は僕に

もたれ掛かり

そして、笑った。

突然

見知らぬ女性が

ワイングラスを片手に

僕の前に立ち

「あなたって最低ね」

そう言うか

言わないかのうちに

僕の頬に

おもいきり

ビンタを食らわせた。

僕は突然の出来事に

驚いて、

ただ頬に手をあてて

呆然と彼女を見つめた。

彼女の目は

怒りに満ちて輝いていて、

じっと僕の目を

捕らえていた。

そして

彼女は手にもっていた

ワイングラスを

足元に叩きつけ、

さっと身をひるがえし

その会場から

姿を消した。

周りの人達は

突然の出来事に

啞然として、

僕を犯罪者でも

見るかのように

じっと見つめていた。

僕は

ただ何が起きたのか

わからずに

その場に

立ち尽くしていた。

「森さんも

わからないし、

僕もわからない」

「おいおい

竜治

待ってくれよ

話はまだ

終わってないぜ」

大学の中央の門から

図書室に向かう

並木道を

小走りに駆け抜け

金森を避けながら、

それと

悟られないように

地面を見つめて

歩き続けた。

「おーい

竜治

まてって

待って

おねがい 待って」

金森は慌てた様子で

僕の腕をつかみ

引き止めた。

「竜一 そうだ

お前に一六万

貸していたよな？」

「ずるいぞ 森さん

こんな時に」

「そうじゃないよ

竜さん

どうだい

もし、

今度のコンパに

来てくれたら

その六万

返さなくていいよ」

弾けるような

ウインクと

森さんらしい

スマイルで

僕に投げかけてきた。

僕の返事は・・・・・・・・

「森さん 喜んで!!

で?

何時?空けとくし」

{速攻=即効}で

答えていた。

第2節 キャンパス

ざわめく

騒音の中にいた。

僕は時々こんな風に

辺りを見渡す。

心の中を空っぽにして、

この世から姿を隠す。

周りは

辺りの景色を

薄い透明なブルー

の世界へと染まりだす。

しばらくすると

人々の騒音が

リンクし始めて、

騒音は音楽へと

姿を変える。

その不思議な音色を

僕はただ楽しむ

幻想的な僕だけの世界。

僕の心は恐ろしく

覚めていて、

そして鋭く

やわらかく、

熱く、

そして、冷淡

優しさの中に

寂しさを

漂わせている

そんな世界に浸る。

冷淡さは

鋭さへと感覚を導き

熱さは

その熱で溶かした

氷を覆う

冷たい視線を

作り出す。

こんな僕を

人はいったい

どんな風に

見てるのだろう

そんな気に

させられてしまう

時間だった。

「よー

竜さん

なんだい

一人寂しく

お食事中かて、

もー あかんよー

えー男が台無しや

えー えー

俺でよかったら

話し乗るきに」

そう言いながら、

隣に修さんが座った。

修さんは大学四年

の同級生だった。

つまり、

二度ほど試験を

落とした。

一度目はそのとき

付き合っていた

女のため。

そして、

二度目は

前の晩の晩酌のため、

つまり酒のため、

本人曰く

「二度あることは三度ある、

女と、酒と来たら

次は博打だ」

らしい。 笑

自称関西人と言う事

にしているが、

本当は

麻布の江戸っ子で、

おまけに

いい所のぼんぼん。

つまり

お金持ちの家庭。

家は徳川家所縁の

老舗の料亭を

経営していると

聞いていた。

彼は時折、

関西の出身者や

九州の出身者と

宴会を催しては

関西弁や九州弁を

ひそかに勉強している

したたかな男でもある。

なぜなら

彼の将来の夢は

お笑い芸人

になってみんなを

笑わせる事なのだ。

本人曰く

「お笑いはインパクト

のある方言でナイト

だめ、だめ」

と言うわけで

関西弁や九州弁を

日夜特訓中の

日々を送っていた。

彼は相方を探し、

ある時僕と出会った。

その日以来、

彼の僕に対する

お笑い界への

リクルートが始まった。

僕はその申し出を

丁重に断っていたが

彼は日夜作戦をねっては、

僕をその世界に

引きずり込もうと、

あの手この手で

相方になってくれないかと

僕に相談を持ちかけた。

彼は僕にとって

一番の親友でもある。

数えるほどしか居ない

僕の友達の中で

彼と居る時間は

他の誰より長かった。

僕はいまだかつて

彼の財布の厚みが

薄かったのを

見た事がなかった。

つねに「一束」

それが、

彼の親父の

男子教育方針らしい。

僕が最もびっくり

させられたのは

なんと

彼が15歳になると

すぐに

この「一束制度」が

始まったらしい。

高だか15歳の

ガキンチョの

財布の中に

常に百万円の札束が

入っている。

その異常な世界に

僕は驚いが、

本人にしてみれば

それが当たり前

になっているらしい。

僕がその話を

初めて聞いた時

驚いている

僕を尻目に、

彼は何でそんなに

驚くのかと

逆に聞かれた事からも

それは明らかだった。

「また、一人で

こんなところに

浸っちゃって

どー したよ 」

両手に缶コーラを

持った修さんは

左手の缶コーラを

僕の肘にコツコツ

当てて

その缶コーラを

僕に飲むように勧めた。

「ごきげんよう。

修さん。

今日はどんな口説きで

僕をリクルート

する気なの？」

修さんから

缶コーラを受け取り

皮肉たっぷりに

言った後、

ウインクを投げつけた。

「おー もしかして、

口説かれるの

まっていたとか？

だけど今日は

そうじゃないんだ。

竜治、実はお前に

ちょっと頼みたい事が

あるんだ。」

修さんは

缶コーラの蓋を

押し込み

一口飲んだ。

そして、遠くを

見つめた。

日焼けした顔、

白い歯、

彼の自慢の金髪

痩せた細長い顔。

一般的な

ハンサムボーイ

僕は修さんを見ると

いつも羨ましくなった。

神様はこれほどに

そろうものがないほど

彼には何でも

与えてる気がした。

お金もちで、

ハンサムで、

優しくて。

僕が女性なら、

もしかしたら、

恋に落ちて

しまってたかも

しれない。

そんな気さえ

していた。

第3節 修治の願い

この時の修さんは

どこか落ち着きが

ない感じがした。

いつもの優雅な

堂々とした

風格も薄れ、

何処かそわそわ

している様だった。

「ふーん

で、

頼みってなに？」

そっけない態度で答えた。

僕は只、

また一人になって、

幻想的な世界に

浸りたかった。

けっして悪気はなかった。

しかしながら

修さんにはなるべく

早く話を切り上げて

去って欲しかった。 笑

「なー 竜治。

お前

俺がここに居ると

なんか迷惑か？」

何かを感じたらしく

修さんは悲しそうに

僕に聞いた。

「うーん 微妙」

「・・・・・・・・・・」

修さんは悲しげに

うつむいて黙っていた。

「うそ、うそ、

でっ 何?

ほら、頼みって

何 まー まー

そ一気にせずに」

下を向いて顔を

歪めていた修さんは

何かを

思い出したように

僕を見つめて言った。

「おー おー

そう、金森の合コン

竜出るんだろ?。」

「あっ あれね、

流石 金森

修さんを外さないね。笑

それにしても

早いね金森一笑

やっぱり、

修さんも

誘われたんだね？」

「そうだけど

お前

あれにだけは

出て欲しくないんだ。」

「・・・どうして？」

修さん???

でも—————、

も—金森に

買収されてるし、

出るしかないんだ。」

「いくらだ？」

「何が？」

「だから幾らで

買収されたかって

聞いてるんだ。」

修さんの迫力は

何かみなぎるもの

を感じさせた。

「六万だけど」

「じゃー

俺は12万だす。」

修さんは、

素早く自分の

懐に手を仕舞い込んで

分厚い財布を出すと、

ろくに数えもせずに

札束を掴み取り

今度はその札束を

無理矢理僕の手の中に

押し込んだ。

「まって、

ちっっつとまっ

まって 修さん

悪いけど金額

じゃないんだよ。

修さん

ちっと

ちっよと」

「なー 竜治

俺とお前の

仲じゃないか。

そんな冷たいこと

言わず

受け取ってくれ、

なっ 竜治

竜治君。

おねがい

なっおねがい」

なかなか札束を

握らない僕に

修さんは業を煮やし

辺りも気にせずに

今度は土下座

で僕を攻めた。

これには流石に

僕も参って

しまっていた。

僕と付き合い始めて

二年になる

修さんは僕の弱い

所を知っていた。

実際、僕は土下座

に弱かった。

土下座までして

乞う者に

嫌とはなかなか

言えない

性格なのだ。

修さんはその事を

良く熟知していたので、

土下座という手段を

ここぞという時

必ず僕に使った。

そして、僕が

彼の願いを

受け入れる。

というのが最近の

パターンだった。

もちろん

それが修さんの

手口なのは

僕も

熟知していたが

それでも断るのは

何故か気が引けた。

そんな訳で

僕は修さんに何とか

土下座を止めさせよう

と必死だった。

土下座を止めた

修さんは次に

僕の説得にかかった。

なぜ、

金森との約束をやぶって

修さんのとの約束を

取るべきなのか。

熱く僕に語った。

修さんの話を

聞いていると

修さんの言い分が

正しく聞こえる

のが僕は怖かった。

そして、

僕が少しでも

考えている素振りを

見せると

札束が次々に

僕の目の前に

積まれて行った。

積まれる札束を

見ながら僕はふと

考えた。

「もし、

僕がこのまま

考えつづけたら、

いったい

どれくらいの

札束が積まれる

のだろう?」

という悪戯心から

生まれた

ものだった。

「なー 竜治

そんなに考えても

これ以上は出ないぞ」

僕の行動を見破った

修さんは白い歯と、

ウインクを僕に

投げかけ頭を

ゴツンと殴った。

「ばーれたー」

舌を出す僕を見て

修さんは札束を

しまい始めた。

そして僕と修さんは

笑いながら札束を

奪い合った。

最近お金に縁が

あるなとぼんやり

思っていた。

第4節 次の日の朝

次の日の朝

どうやって、

金森のコンパを

断るのか考えていた。

正直、

とても気が重かった。

金森のコンパはあの日

{見知らぬ女性に殴られた日}

以来全て断っていて、

何処となく

悪い気がしていたし

なにより彼から

六万円の報酬を既に、

受け取っている事もある。

金森と約束した

はずなのに

買収額の高い修さんとの

契約を結んでしまった。

金森との約束を

破って……

つまり、

僕はお金に弱いのだろうか？

多分、そういうことなのだろう。

僕はそんな事を

思いながら

歩いていた。

昨日修さんが僕に

渡した報酬額は

三十七万だった。

適当に、

ひとまずお金を

回収して、

また適当に札束を

掴んで僕に渡した額が

37万円

ただコンパに出ない

だけという

なんでもない

アルバイト。

高すぎる報酬

修さんは後ろ

姿からサヨナラ

を言うように

軽く手を上げて

去っていった。

残された僕は、

その出来事以来

金森のコンパを

どうやって

断るかを考えている。

彼をがっかりさせる

のにも少し気が引けたし、

どのタイミングで

それを言い出したら

いいのか考えていた。

今日は体育の授業があり

そこで金森に

会えるはずだが、

彼はやはり

怒るのだろうか？

それとも、

がっかりするだろうか？

いずれにしろ

当分は口をきいて

くれそうにもないな

と考えていた。

「おーい 金森ー」

金森が体育着に

着替えようと

ロッカー室に

向かう途中

彼を見かけた僕は

金森に叫んでいた。

彼は、僕を見るなり

!! まずい !!

といったような顔を

した後、

僕を避けるように

ロッカー室に

入っていった。

僕は金森の耳に

僕の裏切りが

聞こえてしまった

のかと心配しながら、

金森を追いかけるように

ロッカー室に入った。

「金森？」

「おー

竜治

元気か？」

「どーしたの？」

金森？

なんかあった？」

上目使いで様子を

探るように金森に

聞いた。

「んっ ベっ

べっは何もないよ？」

金森は慌てたような

素振りを見せた後

バツが悪そうそうに

切り出した。

「んーそうだー

竜治 ちょっと

言いづらいん

だけどさー」

「ん なに

どーしたの？」

「なー 竜治

悪く思わないで

聞いて欲しい

んだけどなー」

「あーもちろん

何でも聞くよ」

{「これから、

僕も気まずい事を

言わなきゃいけない

からいいよ」}

とは言えなかった。

「なー 竜治

お前に俺、

コンパの事、

話したよな？」

「そーそー

その事で俺もね

はな・・・」

僕が話そうとすると

それをせき止める

ように金森が

話しをさえぎった。

「ごめん 竜治

実はさ

ちょっとした

問題が起きて

お前

来ないで欲しいんだー

今度のコンパ。

詳しくは、

後で話すけど、

ごめんなー

竜治

この埋め合わせは

後ですっからさー

そうだ 竜治。

お詫びに六万は

返さなくていいから

なっ

また後でな

なっ つーことで

お先』

金森はいつもの勢いで

話しまくって

さっと消えていった。

相変わらず忙しい

やつだと僕は思った。

しかし、

僕はついていた。

謝って断ろうと

思った約束は

向こうの方から

断ってくれるし、

何もしていないのに

僕に入った報酬は

六万円。

実際に現金では

ないものの

僕が背負う負債は

これで全てなくなった

事になる。

なんて、

いい一日だろう。

そして、

空を見上げていた。

第5節 講義の終わりに

その日の最後の

講義が終わると

僕は図書室へと

向かった

次の提出論文は

結構難解で、

苦戦を強いられる

事は確定していた。

教授の最後の

審判の言葉は

「来週の月曜日が

最終提出日」

その言葉を聞いた

学生一同は

その恐ろしさに

ざわめいた。

ここで、

みんなの睡眠時間と

遊ぶ時間は来週の

月曜日まで一切なし、

そう教授は学生達に

言っているようだった。

うなだれた学生たちの

目には悲しみと

悲観が漂い

肌荒れを気にする

若い女の子は

その言葉を呪った。

「来週の月曜日が

最終提出日」

現実が悪夢のよう

に思える瞬間

ときどき、

僕たちは経験する。笑

その光景を

思い出しながら

図書室へと歩いていた。

図書館は予想どおり

死刑宣告された

クラスメートたちが

群がっていた。

すでに、

必要な参考書類は

貸し出し中で、

他の誰かが死に物狂いで

判決の日までに

提出するレポート作りを

していることは

明らかだった。

僕は三十分ほど

図書室を見て回り

何処かに目ぼしそうな

ものはないか探したが

そんな書籍は既に

見当たらなかった。

そして、

うな垂れた肩を

落とした僕は、

その場を後にした。

急ぎ足で

渡り廊下を歩き

学生食堂へと

向かった。

学生食堂の掲示板は

アルバイトの求人や

サークルの連絡、

友人同士の連絡などに

使われていた。

僕はその掲示板を

いつもの日課のように

一通り目を通し

それから大学の校門

を出て家路に

帰る事にした。

校門を出た僕は

肩の上に乗っている

重い重圧を外そうと

おもいきり

背伸びをして

胸を張った。

レポートの事を

考えるとどうしても

気が重くなる。

「僕はこの危機を

今回も乗り切れる

のだろうか？」

不安は

降り積もる

雪のように

どんどん深さを

増していった。

その気持ちを

吐き出すように

力いっぱい

息を吐き出した後

大きく息を吸って、

背筋の骨がきしむまで

胸を張った。

「何とかやれる。」

そう自分に言い聞かせて。

そして、

今夜から始まる

であろう

地獄のような日々

を乗り切るために

自分を奮い立たせた。

人は気持ちが

滅入ると

自然に下を

向いてしまう

ものなのだろうか？。

僕は足元の

アスファルトを

ただじっと

見つめていた。

アスファルトは

先ほどまで

降っていた雨で

濡れていた。

道端の水溜りに

居酒屋のネオンが

うっすらと反射して

そこに新しい

オブジェを作り

出している。

都会の作り出す

芸術とでも言った

所なのだろう。

ネオンは水溜りの

淡い色に染められて

どことなく神秘的

な色をしていた。

駅に向かう途中、

傘を手に持って歩く

人を多く見かけた。

傘でゴルフのスイング

の練習をしている

おじさんもいた。

そして、

小さなかわいい子犬

を連れた女の子

を見かけた。

女の子は片手に

赤い傘を持って

そして、

もう一方の手に

犬の首輪からのびる

リードを持っていた。

子犬は

ちょこちょこ歩いて

すぐに止まり

道草を見つけては

その匂いを

せわしなく嗅ぐ

それからまた

辺りをきょろきょろ

見ている。

それがとても

かわいらしかった。

2、3歩

歩いては

立ち止まり

辺りをクンクン

嗅いでは

また

きょろきょろ

それでも女の子は
子犬のしたのように
させてあげていた。

あんなに小さな
女の子がまるで
母親の様に見えた。

女の子の
子犬に向ける眼差しは
優しさに満ちていた。

やはり女性は
生まれた時から
母性を持ち
合わせて
いるのだと
あらためて感じた。

小さな女の子の

あの優しい眼差しを

思い出しながら

僕は何か・・・

懐かしい・・・・・・・・

そんな、

不思議な

気持ちに

させられていた。

第6節 通学路

この道は大学から

駅までの

僕の秘密の

通学路だった。

僕と同じ大学に

通う多くの

学生達はこの道

を使わず

駅から伸びる

アーケード通りを

使っていた。

それが大学から

駅への近道だと

いう事は

僕も知っていたが

僕はいつも

このチョッとだけの

遠回りの道を

行き来した。

この道は色々な

風景と日常が

入り混じった

僕のひそかな

楽しみの空間

そして、

少しだけ心に

ゆとりをくれる場所

道は川沿いの

街路樹に囲まれ

公園の中を

散歩しているような

そんな綺麗な

場所だった。

通り沿いには、

時折ベンチが

置いてあり

昼時には

サラリーマンや

OLさんが

お弁当を食べていた。

時々僕もコンビニで

おにぎりとカップラーメン

を買ってきては

そこで食べた。

景色のいい場所で

食べる食事は

格別にうまく

感じる気がした。

僕が傘を

持っている日は

不思議と雨は降らず

傘を持たない日

に限って、

不思議と雨に打たれる

そんな僕だったので

この街路樹に

何度助けられたか

分からない

街路樹の

生い茂った葉は

雨に打たれるべき僕を

やわらかく

包んでくれた。

熱い日には

強い日差しを

柔らかい日差しに変え

風の吹く日は、

その風を

少しだけ弱めて

そこを通る

人達を見守って

いるように

僕には思えた。

この道は

季節ごとに

景色を変える

それを感じる事が

僕は好きだった。

秋の紅葉

雪に包まれた

街路樹

春の息吹を

感じさせる緑

夏に涼しさを

与えてくれる木陰

都会に住むと

なかなか

感じられない

四季を

ここでは

僅かながら

見る事が

できる気がした。

だからこそ、

僕は少しの時間

を惜しんで

この道を通らず、

アーケードを

通る事をしなかった。

この時間が

僕にとっては素敵な

時間でもあった

駅に着くためには

途中で

このお気に入りの道

を外れる必要があった。

僕は仕方なく

川沿いの道を

駅の方へと向かい

素敵な景色を

後にして

また、

この現実の世界に

引き戻される。

道には車が溢れかえり、

排気ガスで汚れた

空気が肌をはっていく

人が行き交う横断歩道

足早に駅に向かう人

携帯電話を必死になって

いじりまわしている人

道の途中で

立ち止まっている人

仲良く手をつないで

歩くカップル

僕はこの世界の

時間の流れが

とても早く感じている。

生活の中の無駄を

省き続ける

この現代社会。

そして、

僕は人から

あまり無駄を

取るべきでない

と思う。

無駄こそが

人の潤いだと

感じているからだ。

でも、

僕自身の現実には

無駄を省かなければ

とてもじゃないけど

今度のレポートを

完成させる事はできない。

みんな今を生きるために

一生懸命やっている。

そして、

心にゆとりが

なくなってしまう。

そして、

社会のスピードは

加速していく

僕たちを

急き立てるように

第7節 修治の目的

駅についた僕は

地下鉄の

エスカレータの

降り口に

向かい歩いていた。

すると

後ろのほうから

車のクラクションが

二度ほど鳴ったので

後ろを振り向いて

見ると、

派手な真っ赤の

オープンカー

がそこに止まっていた。

修さんの車が

そこで僕を

待っていた。

僕は修さんに

右手を上げて

手を振った。

すると修さんは

僕に向かって

しきりに手招き

をしていた。

僕は修さんの

車のそばまで

走っていった。

修さんの車は

ピッカ ピッカ

に磨かれ

僕の姿を鏡のように

映していた。

「修さん

これから何処かに

お出かけ? 」

「竜---これから

お前

なんか予定

入ってるの?」

「んー

別にないけど

何で?」

「まっ乗れ 送るよ」

修さんは車の中から

体を助手席に

横たわりながら

ドアを開けて

僕に車の中に

乗り込むように

うながした。

僕が車の中に

乗り込むと

カーステレオから

ケニーGのサックスが

心地よく響いていた。

「ケニー

いいね 修さん」

「だろー お前

俺と趣味

似てるもんな」

「そーだね」

「竜 これから

俺の家に来ないか？」

「んー 修さん

行きたいのは

やまやま

なんだけど

今日ね

波木教授からまた、

ありがたい贈り物

もらっちゃってねー」

「波木かー

あの野郎

また無理難題

学生に叩きつけて

やがるのか」

「そーなんだよ

修さん何とか

言ってやってよ

みんな彼に付いて行く

のがやっとなのに」

僕はふくれつつらを

しながらぼやくよう

に言った。

「竜 お前

なんでよりに

よってあいつの授業

取るんだよ？

あいつの授業が

難しいのは

どの学生だって

知ってるはずだぜ

お前が知らない筈

ないだろ？」

波木教授の授業は

学生の中で

ひそかに噂される

ほど過酷なものだった。

彼は二週間に一度は

学生にレポート

を提出させ

学生を遊ばせる事は

しなかった。

高校での受験勉強に

疲れた大抵の

大学生たちは

大学で勉強する

事よりも

遊ぶ事に興味を

引かれている。

誰もが青春と

いう短い時間を

有意義に過ごしたい

と考えていた。

それで大抵の学生

たちは

波木教授の授業を

避けた。

彼は経営学を学生

に教える傍ら

企業の相談役を

こなしていた。

つまり、彼の授業は

即戦力になる

学生を育てるものだった。

彼の提出させる

レポートの多くは

今、

企業内で起こっている

様々なリアルな問題を

取り扱い

それを学生たちに

考えさせ、

その事について

レポートを提出させた。

そして良い物は

実際の企業経営に

生かされた。

彼の授業は学生

の興味を引く

ものだったが

彼の過酷な授業を

途中で断念する

学生はその最初の

一ヶ月間で半分以上

になる。

最初満席だった

彼のクラスは

一人 また一人

と日数を重ねる毎に

空席が生まれていく。

大抵の学生達は

彼の教え方に

ギブアップした。

当然僕自身も

ギブアップしたい

と思わない筈は

なかった。

「修さん

僕は修さんと違って

お金持ちじゃないんだ

当然努力は必要になる。

これが、

僕の人生の戦い方だよ。

楽を生きたいのは

本心だけど

それを僕は選びたく

ないんだ。

自分の人生に

制限を与える事

になることは

僕はしたくないよ」

「お前の

そういうところ

俺も見習わないとな

竜治

お前は偉いよ 」

呆れたように

修さんは僕をみつめて

ハンドルを持つ手を

替えてたばこに

火をつけた。

「竜治

実はお前に

言い忘れた

事があってな」

「何？」

「いや

この前言おうと

思ってたんだけど……」

修さんは何かを

考える様にたばこを

ふかした

カーステレオから

流れるサックスの

音色が二人の沈黙を

つなげるように

流れていた。

「竜 今度

家で妹の誕生日会

があるんだ」

「えっ

修さん妹さんが

いるの?」

「ああ

お前に話した事

なかったかな?」

「多分ないよ

そうなんだ

妹さんが居たんだ。」

「それで

お前にもちょっとで

いいから顔を

出して欲しいんだ」

「でも

妹さんの誕生日でしょ

修さんの誕生日なら

まだしも、

妹さんの誕生日に

僕が顔を出して

いいのかな？」

「いいに決まってるだろ。

これは俺が頼んでるけど

実際には妹から

俺が頼まれたんだから。」

「???何で

妹さんが僕の事

知ってるの?」

「いや、

俺がお前の事、

色々妹に話してたら

是非会って見たいって

言うんだ。

あいつ、

どうもお前の事

気に入ったみたいで

是非誕生日パーティーに

お前を呼んで欲しいって

聞かないから

だからこうして

お前に頼んでるって

訳さ

な—どうだろう

ちょっとだけでも

顔出してくれると

助かるんだよ」

「そんなことなら

お安い御用だよ」

「今 何て言った？」

「だから、いいよ

別に顔出すくらい」

「本当に 本当だな？」

「もちろん 本当に

本当だよ

そんなことくらい」

「よかった—

妹もきっと喜ぶよ

竜

お前タキシード

もってるか？」

「タキシード？」

どうして？」

「どうしてって

妹の誕生日会

タキシードで来てくれ」

「誕生日会でしょ？」

「そう 誕生日会だよ

あっそうだ

言い忘れてたけど

家族の誕生日会には

財界の連中とか

会社の社長

そういう連中が

色々くるんだ。

だから出来れば

タクシーで

来てくれると助かるよ。

お前もその方が

目立たなくてすむぞ」

「・・・修さん・・・」

「竜

お前さっき来るって

言ったよな」

「・・・・・・・・」

「ただの妹の誕生日会さ

来てくれるんだろ

さっき約束して

くれたもんな」

「・・・・・・・・」

「竜

妹はお前が来て

くれるだけで

喜ぶんだ

俺はあいつの喜ぶ顔が

見たいよ

だからお前に

来て欲しいよ」

修さんは

なだめるように

そして、

心配を抱える

子供のように

僕を見ていた。

僕は一般家庭の

誕生日会と、

一流と呼ばれる

人々の催す誕生日会

の違いについて

考えていなかった。

それ以前に誕生日会

というのに呼ばれた

事もなかった。

「わかったよ

修さん

タクシー用意するよ」

「悪いな

竜

俺のでよかったら貸すよ

今度持ってくるから

多分サイズはそんなに

違わないし

よろしく頼むよ」

僕の返事を快く思った

修さんは

道を

風のように飛ばして

車を走らせていた。

すっかり辺りは

闇に包まれ

車のテールランプが

濡れた路面を

縦横に流れていた。

「そうだ 竜

金森のコンパ

俺が手を打って

置いたから

お前行かなくていいぞ。

金森には話しを

つけてあるから

謝る必要もないよ。」

この言葉を聞いて

先ほどの金森の

態度の意味がようやく

僕にも理解できた。

「そっか

修さんが……

で、

金森に

何て言ったの?」

僕は笑いながら聞いた。

「今度のコンパに

竜が出るなら

これからお前が

主催するコンパには

一切出ない

って脅してやった。

そしたら、

金森すんなり

聞いてくれたよ」

修さんは笑いながら

話した。

金森にとって修さんは

女性を集めるための

最大の武器の一つだった。

修さんはハンサムで

お金持ち

彼の周りに

群がる女の人

は星の数ほど居る。

そんな

最大の武器を金森が

手放すわけがなかった。

修さんは金森の扱い方

もよく知っている。

修さんにかかると

誰もがこの人の

ペースに

はめられてしまう。

ある意味、

本当に怖い存在だと

心の中で思った。

第一節 木曜日の夕方

僕は何とか

波木教授のレポート

を作成し月曜日の

提出日に間に合わせた。

今回は四日間ほどの

徹夜でどうにか

切り抜ける事が出来た。

そのおかげで体に

疲れがたまりきって

この日の授業を全て

キャンセルし

一日中寝ていた。

この日はちょうど

体育の授業しか

なかったと言うのは

僕の自分自身に対する

言い訳だった様に思う。

僕は深い眠りの中で、

世話しなくなる

電話の音で目を

覚ました。

「ーもしーーもし」

「おー 竜」

それは修さんの

声だった。

「あああー 修さん」

「もしかして、

寝てたのか？」

「あーいいよ

そろそろ僕も

起きなきゃね」

「今からタキシード

もって迎えに行くよ」

「 ? ????!」

そっかー 誕生日!!」

「やっぱりなー

忘れてると思ったよ」

「分かった!!

今すぐ用意する

から!!」

「もう俺は着いてるよ

下に居るから」

「えーごめん

少しだけ待ってて!!」

僕は慌てて

受話器を置き

準備していた

プレゼントを持つと

修さんの車に

走っていった。

「ごめん 修さん」

修さんは後部座席から

タキシードを出して

僕に手渡すと

車を走らせた。

「悪いな 竜

疲れてる時に」

「大丈夫

今日は一日中

寝てたから

こっちこそわざわざ

迎えに

来てもらっちゃって」

「おー

竜様のためだしな」

修さんはおどけて言った。

「修さんの妹さんかー

どんな人なんだろうねー

楽しみー」

「竜 それがな、

自分の妹ながら

いい女だぞ」

「うっそー

流石(さすが)

修さんの妹さんって

思っちゃったりして」

「おー おー

きっと思うぞ

俺も、もし

あいつが妹で

なかったら

絶対にあいつを

口説くと思うよ。」

「そっかー

綺麗な人なんだね。」

「あー

おまけに俺と違って

品があるぞ

第一にあいつは

昔からとても、

優しい」

「綺麗で優しい

人なんだー

ますます会うのが

楽しみだね」

「おう 竜

それにあいつは固いぞ

俺はあいつに振られる

俺の同級生

を何人も見てきた。

すごく、あいつは

もてるんだ。

俺の同級生だけ

じゃないぞ

たぶん」

修さんはたばこを

くわえながら言った。

「なあ 竜

実は俺も

心配していたんだ。

もしかして、

あいつは男に興味

がないんじゃない

かってね。

でも、

お前を誕生日に

呼んでくれって

頼まれた時は

少し安心したよ。

あいつが男に

興味を示したからな。

竜 あいつ

お前に惚れているの

かもな」

「修さん

まだ会ってもいないのに

気が早くない？」

「まっ

それも そうだ」

修さんは僕を

からかう様に言った。

車は府中の修さんの

家族が住む別宅

の門の前に到着した。

修さんは都内の

マンション

に一人で住んでいたが、

修さんの家族は

府中にある大きな屋敷

に住んでいた。

そもそも、

修さん一家の

所有する屋敷は

一つや二つではなく

多くの屋敷を所有し

お父さんの気まぐれで

度々本宅を

変えるらしかった。

家の敷地は

呆れるほど広く

大きなヨーロッパ風の

門をくぐってしばらく

敷地内を走って行った。

ゲートから

駐車場までは

ヨーロッパ風の

庭園が続いていて

駐車場から

家まで続く道は

日本庭園が

広がっている。

なんとも

贅沢な庭だった。

中にある日本庭園は

良く手入れが

行き届いて、

さながら京都の

お寺のように

洗練されていた。

家の玄関は広く、

アーチ型の

ドームの様な

作りになっていて

門の周りに

施された彫刻は

バロック建築に
使われるような
神秘的なものだった。

玄関と言うよりは

お城の門

といった方が

いいかも知れない。

僕は心の中で

そう思った。

玄関の前では

一人の品のいい

白髪の黒い

タキシード姿の

男性が立っていて、

僕達を迎えた。

彼は、

修さんと僕を

見届けると

深々とお辞儀をして、

中へと僕達を案内した。

玄関から床に敷かれた

真っ赤な絨毯は

芝生のように

沈み込み、

その絨毯が高級品

である事を僕は感じ

取っていた。

入ってすぐに

大きな広いスペース

が備え付けられており

そこに大きな

シャンデリア

が天上高く

きらびやかに

辺りを照らしている。

天井はドーム型に

なって

天使の絵が描かれ

何処か教会を思わせる。

大きな木彫りの彫刻と

中世の鎧が

入り口の隅に置かれ、

ここがいったい

何処なのか？

僕は一瞬

分からなくなるほど

驚いた。

僕が辺りをきょろきょろ

見回していると

修さんは僕の

そんな様子を

見て言った。

「びっくりしたろ？」

「びっくりだよー

まさかこんな

世界があるなんて!!

修さんの家って

たしか老舗の料亭

って聞いたけど？」

「もともとはそうさ

だけとおじいちゃん

がやり手でね。

銀行とか

いろいろ外にも

やっていたんだ。

それで……」

修さんは手を上げて

笑いながら言った。

「すごいね

修さんのおじいさん!!

びっくりだよ・・・」

「この廊下を

真っすぐ行くと

テラスに出るんだ。

そして、左に曲がると

パーティーを

やっている部屋がある。

竜は先に行って

待っててくれ。

もうパーティーは

始まっているはずだ。

一時間ぐらい遅刻

してしまったからね。

俺も着替えて

すぐ行くから

後で会場で会おう」

玄関中央の階段を

上りながら

修さんが僕に言った。

第二節 パーティー会場

僕は言われた通り

廊下を真っ直ぐ

進んで歩いた。

廊下は

厭きれるほど長く、

壁には男性の絵が

飾ってあった。

それはおそらく、

この水島家代々の

ご先祖なので

あろうと推測できた。

廊下を出ると

そこは中庭

を見渡すテラス

になっていて

外が良く見える

ガラス張りの

部屋に着いた。

そこには水が流れ、

池がしかれ

日本の美を

展示している様だった。

中庭に架けられた橋の

ような廊下を渡りながら

左手に大きなドーム型の

部屋が明るく照らし

出されるのが見える。

中には着飾った人々が

たくさん居て、

片手にグラス

を持って楽しそう

にしていた。

パーティー会場に

入るとすぐ右側に

誕生日プレゼントが

山済みにされて

置かれていたが、

僕は直接

手渡したかったので

そこに置かずに

プレゼントを

自分の手に

持っていることにした。

広々とした会場は

人々が話す会話や

グラスのぶつかる音、

笑い声、そして、

クラシックを演奏する

人達の音楽に支配され

残念ながら僕には

騒音に聞こえた。

テーブルには

綺麗に飾られた

花のブーケやロウソクの

かもしだす優しい光が

辺りを染めるように

漂い、

見るからに

美味しそうな料理が

所狭しと並べ

られていた。

試しに一口ばかり

口に運ぶと

僕の手は

止まる事を忘れ

次から次へと

その料理をつまんでは

口に運んでいた。

一通りの料理を

つまんだ後

僕のお腹が膨らみだし

息苦しさを感じた僕は

ズボンのベルトを

外して緩めた。

会場内を見渡しても

僕の知り合いは

誰一人としていない。

テレビで見たことのある

政治家や女優さんを

見かけたが、

もちろん話し掛ける

つもりはなかった。

僕はバーボングラスを

手に持って

会場のテラスへと

歩き出した。

テラスには

大きな白い犬が

ちょこんと

可愛よく座っていた。

サンタクロースが

かぶっている

ような帽子を

深ぶかとかぶり、

かわいい

そのいでたちは

僕にそれを

ぬいぐるみだと

勘違いさせた。

犬に近づくと

大きな尻尾を

モップのように

床につけて動かし、

ようやく僕はそれが

ぬいぐるみでない、

生きた犬なのだと

気が付くことが出来た。

僕がしゃがみこんで

犬の頭をなでて

あげると

犬は舌を出して

僕の顔をなめ回した。

僕は借り物の

タキシード

という事を忘れ

犬とじゃれあって

遊んだ。

そして、

テーブルの上に

乗っている

料理を小皿に乗せ

犬の前に差し出したが、

その犬はけっして

それを口にしようとは

しなかった。

きつとこの犬は

ご主人様が

与えたものしか

口にしないのだろう

と僕はその時思った。

そして、

僕は犬の隣に

しゃがみこんで

犬と一緒に外を眺めて

修さんの到着を

待つ事にした。

「あら、しろちゃん

新しい

お友達が出来て

よかったわね。」

僕が振り向くと

青いスレッドの

入ったワンピース姿の

綺麗な若い女性が

立って笑っていた。

第三節 Open the door

痩せた肩、

細くくびれた足

細長い顔

みずみずしい唇

長い綺麗な髪

大きな潤んだ瞳を

弾ませた女性が

そこに立っていた。

犬は彼女を見ると

喜んで飛びつくと

僕にしたように

彼女の顔をなめ回した。

彼女は、

くすぐったそうに

そして、

うれしそうに

犬の舐め回すしぐさを

止めようとしていた。

「風間……」

竜治さんでしょ？

兄がいつも

お世話になって

います。」

彼女は犬を

なだめるように

撫でながら僕に小さく

お辞儀をして言った。

「今晚は あっ

始めまして

修さんの妹さん!

えっと????」

「あっ

雪乃です。

水島 雪乃」

「あっ

雪乃さん

始めまして

風間竜治です。

それと、

誕生日おめでとう。」

「ありがとう

竜治さん。

今日は来て下さって

本当にありがとう。」

「こちらこそ

こんなに素敵な

パーティーに

招待していただいて

ありがとう」

「あら

ほんとにそんな風に

思ってくださいなの？」

「もちろん」

「だって竜治さんは

こんな所で

一人で寂しそうに

してますもの

おかげでしろちゃんは

寂しくなかったけどね」

彼女は犬の顔を

覗き込むように

話した。

「いや

退屈なわけでは

なくて

その・・・

話す人が

居ないから・・・」

「ごめんなさいね

そうよね

竜治さんの

知り合いはきっと

ここには兄しか

居ないものね」

「・・・・・・・・」

「兄は今、

お父様と何か

話していたから

まだ来ないと思うわ

よかったら

私が竜治さんの

話し相手になっても

いいかしら？」

「もちろん

その方がしろちゃんも

うれしいだろうし」

「あら 竜治さんは？」

彼女は悪戯を仕掛ける

子供のように

僕に聞いた。

「もちろんうれしいよ

あっこれ

つまらない物だけど

誕生日のプレゼント」

僕は立ち上がると

彼女に僕の持ってきた

プレゼントを

手渡した。

「ありがとう

何かしら

楽しみだわ

開けていいかしら？」

僕が頷くと

彼女は僕の手渡した

プレゼントの

包装を解き

プレゼントの中身を

箱から出した。

僕を選んだ

プレゼントは

オルゴールだった。

僕は彼女の様に

お金持ちで

何でも持っている

女性がどんなものを

プレゼントすれば

喜んでくれるのか

分からなかった。

そこで、僕の作った

曲をオルゴールにして

彼女にプレゼント

する事にした。

オルゴールの中には

僕が作曲した

「永遠」と言う曲が

入っていた。

彼女はオルゴールを

箱から出すと

その上蓋を開いた。

「素敵な曲ね

竜治さん

初めて聞く曲だけど

あったかくて

心地いいわ」

「それ 実は僕が

作った曲なんだ」

「すごーい

竜治さん

これ 竜治さんが

作った曲なの？

とってもいい

雪乃

とってもうれしい

今までもらった

プレゼントの中で

一番嬉しいかも

いい曲ねー」

「{永遠}っていう

タイトルの曲なんだ

雪乃さんが永遠に

美しいように!

なんてね!」

「竜治さん 素敵

ほんとにありがとう」

「そんなに

喜んでくれるなら

僕もうれしいよ

こちらこそ

ありがとう

喜んでくれて 」

彼女はしばらくの間

僕のプレゼントした

オルゴール

から流れる曲に

耳を傾けていた。

僕は彼女の顔を

見つめていた。

彼女の目は優しく

オルゴールから

流れる曲は

彼女の存在を

輝かせていた。

痩せてとがった顎が

メロディーと共に

少しだけ

動いていて、

唇から

メロディーを

なぞるように

曲を口ずさんだ。

綺麗な彼女の声は

僕の心を洗い流し

僕はその時間の中を

旅している様に

新鮮で晴ればれとした

気分になせられていた。

「しろちゃんって

言んだね。

この犬の名前」

「ええ 真っ白でしょ

だから私がつけたの

兄はアーサー

にしようって言ったけど

私がつけた名前の方が

かわいいでしょ？

だから

白ちゃんになったの

ねー しろちゃん」

大きな犬は

首をひねって

彼女の言っている事に

耳を傾けていた。

「しろちゃんと

三人でここで

話そうよ。

雪乃さん」

「そうしましよ

竜治さん」

僕と彼女は白ちゃんを

真中にして三人・・・

二人と一匹で

テラスに並んで

座った。

第四節 二人の時間

「雪乃さん」

僕がそう言うか

言わないかのうちに

彼女が言葉を

遮るように言った。

「雪乃さん

なんて

おかしいわ

だって竜治さんの

ほうが年上だし

雪乃って

呼び捨てにして

欲しいなー」

「そっかー

それじゃー

雪ちゃん

はどうかかな?」

「えー でも

雪は呼び捨ての

ほうがいいなー

でも・・・

竜治さんが

その方が

呼びやすいなら

雪はそれで

がまんする・・・。

私は何て

呼べばいいかしら？

兄は竜治さんのこと、

なんて普段

呼んでるの？」

「修さんは竜って

呼ぶけど

雪ちゃんの

呼びたいように

呼んでいいよ」

「やっぱり

雪は竜治……

さんかな？」

「じゃあ

それでいいよ」

「でも、

呼び捨てにしても

いいのかな？」

「好きにしていよ

雪ちゃんは

特別に許す」

僕がおどけて

言うと彼女は

照れくさそうに

言った。

「竜治……

……さん

やっぱり

竜治さんって呼ぶね」

彼女は素敵な笑顔を

僕に投げかけて

照れくさそうに

微笑んだ。

「雪ちゃんは今日で

幾つになったの？」

「雪は今日から18才です。

これですっかり

大人の女性になったの。

どう 竜治さん

雪はもう

大人の女性でしょ？」

彼女は胸を張り

色気のある

流し目をして

僕を誘うように

言った。

「うーん

どうかな？」

僕がからかう様に

言うと彼女は

膨れっ面をして言った。

「もー竜治さんったら

意地悪!!

雪はもう大人です。

れっきとした大人です。

竜治さんも

お兄ちゃんみたく

雪をからかうんだから」

「ごめん 雪ちゃん

雪ちゃんは かわいい

素敵な大人だね」

「本当に？」

彼女は少しおどけて

そして、怒ったように

僕に聞いた。

「本当だよ 初めて

見たとき

びっくりしちゃったよ

とても綺麗だから」

「本当に？」

こんどは顔を

真っ赤に染めて

僕に聞いた。

「本当だよ 修さんが

誉めるだけの事が

あるなー なんてね。

修さん君の事

我が妹ながら

いい女だって僕に

自慢していたんだよ」

「でも……」

私お兄ちゃんに

聞いちゃったもの」

「何を？」

「竜治は優しい奴だって

竜治さんは人を

傷つける事

言わないって。

だからきっと

そうだろうし」

「違うよ

僕は正直に言ってるよ

雪ちゃんは綺麗だよ

でも かわいいのかも？

どっちにしても

素敵な人だよ」

「ありがとう

竜治さん」

彼女は照れを

隠すように

犬の首に自分の顔を

埋めて言った。

「雪も竜治さんを

見てびっくりしちゃた

だって

かっこいいんだもん

お兄ちゃんも

言ってたけど+++++

こんなに

かっこいい人だと

思わなかったし

正直びっくりしたよ」

「ありがとね

雪ちゃん。でも、

僕はそんなに

かっこよくは

ないしね。

お兄さんの

かっこよさには

かなわないしね」

「そんなことないよー

まつげが長くて

女の子みたいに

綺麗だし

目が大きくて

びっくりしちゃった。」

「雪ちゃん

僕は人から

誉められるの

弱いんだ

どうしたらいいか

わからなくなるし

その辺でっね」

「わかった

それじゃ雪乃の事

子ども扱いしたら

雪は竜治さんを誉める

事にするよ。

いい事聞いちゃった。」

彼女は舌をだして

おどけるように言った。

それがなんとなく

お茶目に見えて

かわいらしかった。

それから

しばらくの間

僕らは沈黙した。

僕達は黙って

外をぼんやり見ていた。

僕は

バーボングラスを傾け

ちびちび飲んでいた。

僕が何気なく

彼女を見ると

そこには先程まで

僕の目の前にいた

あどけない少女は

居なかった。

彼女が急に

大人びて見えた。

僕は彼女の美しさに

心を盗まれてしまった。

時間が止まり

彼女の心が

僕の中に入ってくる。

とても暖かく

優しい心

僕は時間の中に

身を任せるように

ただ彼女を見つめた。

第五節 雪乃の不安

彼女は

寂しげに膝を抱え

うつむきながら

僕に言った。

「ねー 竜治さん

竜治さんはやっぱり

雪の事、

すごく幸せな

女の子だと

思ってるんで

しょうね?。」

彼女は上目遣いで

叱られた子供のように

弱々しく

僕を見つめたあと

また僕から

視線を外して

うつむきながら続けた

「こんなにお金持ちの

お嬢様なら

幸せで当然だと

周りの人は

思ってるものね。

こんなに大きな

家に住んで、

周りには

ありとあらゆる贅沢品

と呼ばれる物に

囲まれて・・・

でも・・

私はそんなに

幸せじゃない・・・

私には飢えも無く、

乾きも無い・・・

よその国では

貧しさの中で

死んでいく人が

沢山いるって

言うのにね……。

せめて……

私は飢える人々の

為に役立ちたいと

思って、

お金を送ったのね……

でもね、

後で分かった事だけど

送った先の

政府関係者が

そのお金を

自分の懐に

しまっしまっ

飢えた人々に

そのお金が一銭も

届かなかったわ・・・・・・・・。

私は何も

結局してあげられない。

私は結局無力だし・・

誰の役にも

立てないもの・・・・・・・・

もしかしたら私、

自分の為に

募金を送った

だけなのかも

しれない・・・・・・・・

それも結局は

何にもならなかった

けどね・・・・」

彼女は両膝を抱え

肩から寂しさが

にじみ出るのを

押さえる様に

強く膝を

抱えなおした。

「生きている喜びを

与えようとしても

結局その喜びは

お金では買えない

ものなのですもの。

お金で彼らの飢えは

救えるかもしれない。

でも、

生きている喜びは

私よりあの人達の方が

持っているように

私には思えるの・・・

だって貧しい国の

子供達の笑顔は

輝いていて、とても

素敵なんですもの

日本の子供達でさえ

あんな綺麗な目を

していないもの・・・

・・・私だって・・・」

彼女の目は寂しさに

震えていた。

「本当に貧しいなんて

私には

わからないから・・・

かわいそうなのは、

私も一緒

毎日繰り返す日々を

ただ送るだけ。

それに何の意味が

あるのかしら・・・

そう考えてしまうの。

私は生きていても

死んでるのと

一緒なの・・・

ただ私には

飢えが無い

それだけでも

幸せなはずなのに

私はそれを

理解しているのに・

私はどうしても

幸せとは

思えないの」

僕は彼女を見つめ続け

ただ黙って彼女の話

聞いていた。

「私はいったい

何のために

生きているのか

さえ分からない。

生きることに

楽しみを感じず

ただ息を吸う

お人形・・・

そんな自分が

時々嫌になるの

ね一竜治さん

雪はあまり幸せとは

言えないのよ

私は贅沢なのかな？

やっぱり？」

先程まで彼女を

覆っていた

優しさの

オーラは消えていた。

真剣な彼女の眼差しは

誰かの助けを

必要としているように

僕には見えた。

彼女の目は孤独の闇に

覆われて、

心の闇から

逃げ出したいと

もがいている

ようにも見えた。

第六節 竜治の提案

「雪ちゃん

がんばろう!!」

それが

何を言って

あげたらよいか

分からずに

彼女を見つめる

僕自身の

精一杯の言葉だった。

「僕達はやっぱり

みんな迷いながら

生きているんだね。

みんな似ているのかも

しれない。

雪ちゃんの気持ち

すごく良く分かる

気がするよ・・・。」

僕は慌てる様に

元気を振り絞って

彼女を勇気づけよう

としていた。

「僕も何のために

生きてるのか

それが知りたくて

今生きているのかも

しれない。

だからがんばろうよ

君にそんな寂しそうな

顔は似合わないよ。」

僕は彼女の笑顔を

また見てみたいと

この時思っていた。

「二人でこれから

見つけてみないかい？

その幸せって

何なのか？」

彼女は

びっくりしたように

僕を見た後

笑顔を取り戻して

元気に言った。

「ええ 竜治さん

二人で

見つけましょうよ

なんだか

それが生きてるって

事なのかもね!!

竜治さん」

「やっぱり雪ちゃんは

笑ってる顔が

一番かわいいね」

「もー 竜治さん

お上手なんだから

でも うれしー」

そこには先程まで

姿を隠していた少女が

戻って来ていた。

あどけない少女は

犬の頭を撫でながら

おでこを犬の首に

寄せて笑っていた。

「じゃー手始めに

雪を何処かに

連れて行って

竜治さん」

僕が困った顔をして

彼女を見ていると

彼女は悪戯盛り

の子供のような

顔をして、

僕に言った。

「さっき

二人で幸せ

見つけてくれるって

竜治さんが

言ったんだよー」

「わかったよ

雪ちゃん

何処に連れて

行ってあげれば

君は幸せを

見つけられそうなの？」

僕はあどけない

彼女の姿に

自然に笑っていた。

「竜治さんとなら

何処でもいいよ

雪は」

彼女は自然に

僕の腕を掴み

僕を見つめ続けていた。

僕は彼女に見つめられ

時間が止まっている

かのような

錯覚に落ちていた。

「何処がいいかなー

んー

ディズニーランド

もいいし、

海でもいいなー

そうだ 竜治さん

海に連れて行って。

二人でドライブに

行こうよ。」

「雪ちゃん

僕は免許はあるけど

車が無いんだ」

「大丈夫

雪が持ってるから」

僕は余り驚かなかった。

もう既に

この家の敷地に

入った時から

別世界の物ばかり

見すぎていたせいで

それが

当たり前のような

気にもなっていた。

「じゃー 決まり

今度の日曜

それでいい

竜治さん」

「わかった

今度の日曜って

明々後日ね

別に用事がないし

大丈夫だよ」

「用事があっても

空けてくれるんでしょ

竜治さんは

雪の為に・・・」

彼女は人差し指を

僕の頬にあてて

からかう様に言った。

「はい、はい、

竜治は、雪様の為に

その日は

空けておきます。

お姫様」

「やったー

じゃー約束だよ」

彼女は頬を赤らめて

僕に小指を差し出し

二人で指きりの誓い

を立てた。

誓いを立てた二人は

お互いの連絡先を

教え合い、

僕は彼女に僕の部屋の

電話番号を書いて

渡し、

彼女の携帯電話の

番号を受け取った。

第一節 落陽

赤く透き通るように

辺りが染まり

見える世界は

また闇に包まれる。

どうして、終わりは

こんなに切なく

美しいのだろうか？。

世界は目まぐるしく動き

僕はその速さに

僕自身を見失ってしまう。

何故 僕は

生まれてきたのだろうか？。

沈む夕日は

最後の美しさを

搾り出すように

惜しむ気配を知らない

どうして、僕は

こんなに寂しいのだろうか？

ゆっくり近づく闇は

赤く透き通る世界を包み

やがて全てを飲み込む・・・・・・・・

それを惜しむように

消えてゆく洛陽を

僕はただ見ていた。

誕生日パーティーの翌日

この日、

僕は学校をサボり

寮の部屋で

一日を過ごしていた。

バーボンを片手に

部屋の中から

外をぼんやりと見つめ

時間の流れに身を任せた。

自分の気配を消して

この世界に属し

そして、また別の世界

の中にいた。

賢人は日常から

芸術を見つけ、

それを楽しみ、

生きる喜びと

変えてしまう。

本当に賢い人は

こんなにも寂しさを

感じないのだろうか？

それとも寂しさを楽しんで

しまうのかもしれない。

僕は彼女の

あの寂しげな目を

思い出していた。

彼女は言った。

「私はそんなに幸せじゃない・・・」

その光景が僕の頭の中で

何度も何度も繰り返されて、

浮かんでは消えた。

僕が寂しさに

押しつぶされそうなのは

彼女自身の寂しさからなのか

それとも僕自身から

湧き出るものなのか

分からなかった。

だだ、彼女のあの目の

奥の寂しさを

僕は思い出していた。

そして僕が癒せたら

どんなにいいのだろうか

心の奥底から思う自分を

僕は見ていた。

別世界から

この現実世界を

見つめる僕も

やはり寂しさを

感じているが

現実世界の僕とは

明らかにその感じ方に

違いがある。

現実世界の僕は

寂しさにおぼれ

別世界の僕は

決して溺れる

事は無い。

寂しさを美しさと

変えて感じている。

他の人にこの感覚

を説明するのがとても

難しい事だとは

僕も分かっているが

もしかしたら彼女には

そんな説明は

要らないのかもしれない。

そんな気がした。

僕は以前哲学書にはまり

プラトン 老子 孔子

その他色々な哲学書を

読みあさった。

何故今僕が生きなくては

ならないのか

知りたかった。

僕達人間は何も

知らされず

ただ生きている。

何のために生まれ

何の為に生きるのか？

誰もその理由を知るものは

この世界にいない。

その答えを探し出そうと

昔から人々は考えつづけているが

その答えを見つけ出せたものは

人間としては存在しない。

悩み、苦しみ、楽しみ、

僕らは生きる。

その答えを探す事を

あきらめた人々は自ら

命を絶ちこの世の意味を

否定する。

僕は自殺こそしていないが

時々僕の心は闇に覆われ

生きる意味さえ失う。

心の闇は僕に語る

なぜ生きるのか？

苦しいだろう？

楽になりたくないか？

そんな事を思い出しながら

彼女もまた僕と同じ

闇を持っているのだと思った。

闇が辺りを包み込み

僕は真っ暗な部屋で

外を見つづけていた。

暗闇はその闇の力で

町の明かりを際立たせ

光の輝きを

強くさせる。

町明かりは美しく際立ち

宝石のように輝いている。

時々聞こえる

車のクラクションは

お前は一人じゃない

と僕に知らせてくれている

気がして

すこしだけありがたい

気がした。

第二節 なんでもない一日

どれぐらいの時間

こうしてるのだろう？

僕がふと

そんな事を

考えていると

部屋の電話が、

けたたましく

突然鳴り出した。

僕ははっと

我に返ったように

腕時計を見ると、

既に21時を

過ぎていた。

「もしもし、

風間です。」

「もしもし、

竜治さん？

ですか」

若い女性の声だった

聞きなれない

声に僕は

記憶を探るように

聞きなおした。

「はい。

そうですけども？

あのー？」

「雪です。

水島雪乃」

「雪乃?

雪ちゃん!!

ごめん

雪ちゃん」

「も一竜治さん

冷たいな一

雪のことなんて

忘れてしまったの?」

「だから

ごめんね雪ちゃん」

「も一竜治さんなんて

なーんて

気にしないでね!」

彼女は僕をからかう様に

言った。

「どう18才の最初の一日は」

「とっても

いい一日だったよ。

竜治さんは

どうだった？」

「なんでもない

一日だった」

僕は笑いながら言った。

「竜治さんは今

何してるの？」

「今僕は

何もしてないよ

ただぼんやりしてたよ」

「なんでもない一日を

素敵な一日に

変える方法を

雪が竜治さんに

教えてあげよっか？」

「へー

雪ちゃんが

教えてくれるの？」

「もー

また竜治さん

雪の事

子ども扱いして

そんな事するとまた、

竜治さんの事

褒めちぎって

困らせてやるんだから」

「わかった ごめんね

素敵な一日に

変える方法

教えてよ お姫様」

「どー しよっかなー

雪の事忘れてたしなー」

「ねー ゆきちゃん

忘れてた訳じゃないよ

だって今まで

君の事考えてたもの」

「え???

「あっ……

考えて……たんだ」

僕は自分の言って

しまった事に

恥ずかしさを感じて

しどろもどろに答えた。

「雪のどんな事

考えてたの？」

彼女も急に

よそよそしい

態度で僕に

聞きなおした。

「昨日の事とか・・・

色々よね・・・」

二人の会話の間に何か

今までと違った

空気が漂うのを

僕は感じて

自分の言って

しまった事に

後悔した。

彼女はその空気を

感じ取って

僕をなだめるように

言った。

「昨日はわざわざ

来てくれてありがとう

雪は竜治さんが

来てくれた事が

一番のプレゼント

だったよ

何よりのね

だから

本当にありがとう

それに

素敵なプレゼント

大切に作るね」

彼女の優しい声は

その場に流れていた

よそよそしさを

洗い流し僕らはまた

今までどうりに

話したした。

「そうだ

どうやって

素敵な一日に

変えるの?」

「もー

雪の質問にまだ答えて

くれてないよー

でも、まっいっか

その前に竜治さんは

夕食済ませたの？」

「そういえば

まだ食べてないよ

忘れてた」

「忘れてたって？

お腹空いていないの？

雪なんて

お腹が

すいていなくても

食べ物の事考えてるよ」

「雪ちゃんは

育ち盛りだからね。

それとも、

食いしん坊

だからかもね」

「もー

意地悪なんだから

竜治さんは」

「で どうするの

早く教えてよ」

「そーだった

今から竜治さん

お兄ちゃんの

ところにこない？

今日 雪

お兄ちゃんのところに

泊まって

行くつもりだから

夕食作ったんだけど

ちょっと

作りすぎちゃって

よかったら竜治さんも

手伝って欲しいんだ

二人じゃ

食べきれないから」

「それなら

喜んで手伝うよ

そっかー

今日は素敵な一日に

変わるかもね

雪ちゃんの

手料理のおかげで」

「あっ

でも余り期待されても

雪 困るんだけど・・・」

「大丈夫

余り期待してないし」

僕は悪戯交じりに

笑いながら言った。

「もー

ちょっとは期待してよー」

「大丈夫 期待してるよ」

「じゃー 決まりだね

お兄ちゃんが

竜治さんの事

迎えに行くから

待ってて」

「いいよ

修さんに悪いし

まだ

バスが出ているから

バスで行くよ」

「いいよ

お兄ちゃんは

暇なんだし

お兄ちゃんが

迎えに行くよ」

「誰が暇だって？」

電話の受話器の

向こうから

修さんの声が

聞こえた

「かせって 雪」

受話器の向こうで

修さんと雪ちゃんが

なにやら話をした後に

修さんが受話器

を取り、僕に話した。

「竜 遠慮するな

俺は暇じゃないけど

お前を迎えに行くよ」

「でも・・・大丈夫？」

「大丈夫? って何が?

お前はいつも

気を使いすぎだぞ

こっちから来てくれ

って頼んでるんだから

いいんだよ

それにこちとら

もう夕食

を待たされて

何時間も

立っているんだ

お前が早く

来てくれないと

俺は腹が減って

死にそうだよ

だから一刻も早く

飯にありつくためにも

迎えに行くから

待ってろよ」

「わかった 修さん

待ってるよ

いつも悪いね」

「いって事よ じゃ

あとでな」

「それじゃまた後で」

第三節 修治の母

それから

二十分ぐらいして

僕を迎えに来た

修さんの車に

僕は乗っていた。

修さんは余程

お腹が空いて

いたらしく

マンションに着く

手前のコンビニで

おにぎりを一つだけ

買って車に

戻ってくると

僕に言った。

「この事は内緒だぞ

妹にコンビニで買った

おにぎりの事、

死んでも言うな!

こちとら

これでも

大変なんだから

もう腹が減って

死にそうだよ

何時間も

腹が減ってるのに

我慢してるんだ

いきなりあいつが

俺のところに来て・・・

掃除を始めたかと

思ったら

何処かに出かけて

帰ってきたと

思ったら

料理作るの

手伝わされて

くたくたなんだから

四時間も鍋を

かき回して

まだ夕食に

あり付けやしない」

修さんは買ってきた

おにぎりを

貪りながら僕に言った。

「修さん

でも羨ましいよ

あんないい

妹さんがいて」

「そうでもないぞ

竜

口やかましくて

お袋みたいだ。

でもお袋が早く死んだ

俺にとっては

やっぱりあいつが

お袋かもな」

「やっぱり羨ましいや

兄弟がいるだけでも

僕は羨ましいと思うよ」

「やっぱりそうだな」

修さんは

何かを考えるように

しみじみと言った。

修さんのお母さんは

修さんが10才の時

ガンで亡くなっていた。

その話を修さんから

聞いたのは

僕が大学一年の冬、

初めて修さんの

マンションに行った

時の事だった。

修さんはその時

付き合っていた

女性と別れ、

新たな生活

を始めるために

引っ越したばかりで、

部屋にはまだ

ダンボール箱

が詰まっていた。

僕達二人は

修さんの新たな

生活物資を揃える為に

買い物に出かけ

手に食い込む紙袋を

さながら

オットセイのような

足取りで運び、

真っ暗な

部屋に入った。

「竜

気おつけろよ 足元」

「わかった 修さん」

そんな会話を

している中で

僕は買い物袋を

何かに

引っ掛けてしまい。

床の上で何かが

割れる音がした。

修さんが部屋の

電気をつけて

みると、

そこには

ガラスで出来た

フォトスタンドが

こなごなになって

散乱していた。

「ごめん 修さん」

「いいよ

気にするな

それより

お前は怪我は無い？」

修さんは何気なく

言った後

ほうきと塵取を探しに

隣の部屋に

向かっていった。

僕は粉々に

なってしまった

フォトスタンドを

片付けようと

腰をおとし、

その写真を覗いた。

するとそこには

セピヤ色の写真に

綺麗な若い女性の

姿があった。

その女性は

東洋人と西洋人

どちらとも

見分けが付かない

雰囲気、

とても

綺麗な女性だった。

僕は修さんの

別れたばかりの

女性だと

かってに思い、

何かとんでも

ないような事を

してしまったと

反省しながら写真を

じっと見ていた。

「それ、

俺のお袋の写真なんだ」

修さんはほうきと

塵取を持って

僕の横に来ていた。

「すごい美人」

「だろ

俺の一番のお気に入り」

「こんなに

綺麗な人なら

今でもきっと

綺麗な人なんでしょ？」

「生きていれば、

そうだったかもね」

「.....

修さんの

お母さんは.....」

「あー 死んだよ

俺が十歳の時

ガンで.....」

「ごめん・・・

修さん

そんな大切なもの

壊しちゃって・・・」

「いいんだ竜

物は所詮いずれ

壊れる。

それに、

その写真

まだ他にもあるし

たいした事無いよ」

「本当にごめん・・・」

「いって 竜

それより

お袋の写真綺麗だろ・・・

これは親父と

出会った頃の

写真らしいんだ。」

「とても綺麗な人だね

修さんのお母さんは

外人さんなの

それともハーフ？」

「ハーフだよ

おじいちゃんは

フランスの

画家だった人

多分竜も名前は

知ってると思うよ」

「えっ 誰なの？」

「忘れた

今度教えるよ」

「えっ 誰なの？

教えてよ」

「本当は三流の画家さ

名前なんて

どうでもいいよ

そんなことより

何か飲む？

ビールでいいか？

何でもあるから

好きな物言ってくれ

何がいい」

「それじゃバーボン

あるかな？」

「わかった

ロックでいいのか？」

「うん」

「了解

じゃ竜は

後かたづけ頼むよ

俺は飲み物を

用意する。」

僕は粉々に

なってしまった

ガラスを塵取で集め

写真を持って

部屋の中に

備え付けられた

バーカウンターに

座った。

僕は大切な写真を

カウンターテーブル

の上にそっと置き、

修さんが

飲み物を

持ってくるまで

じっと

その女性を見ていた。

外国の映画スター

を写したような

綺麗ないでたちに

気品漂う

その雰囲気は

写真の中からも

十分に伝わってくる

ようだった。

修さんは両手に

グラスを持ち

片方の

バーボングラスを

僕に差し出しながら

言った。

「お袋とっても
優しかったんだ」

僕を見る修さんは
何処か
寂しげに見えた。

「あれは俺が4歳
ぐらいだった頃かな
俺はとても怖がり
一人で寝る事が
出来ずに
いつもお袋のベッドに
忍び込んで
寝ていたんだ。

でも、
お袋はあまり
臆病な俺を

心配して、ある時から
一人で寝かせるように
なったんだ。

その時必ず絵本を
読んでくれてた。

とてもいい匂いがして、
心地いい時間だったよ。

俺の中のお袋はいつも
笑っているんだ。

暖ったかくね」

修さんは

グラスに入った

ワインを飲み干すと

僕に笑いかけた。

修さんの笑い顔は

悲しげで、

僕は何処か

居たたまれない

気持ちになった事を

その時思い出していた。

第四節 素敵ない日

修さんと僕を

乗せた車は

マンションの

駐車場に車を止めた。

マンションの

地下の3階は全て

駐車場になっていて

地下二階に

修さん専用の

駐車場がある。

この駐車場に

止まっている車は

全て高級車ばかりで

さながら高級車の

展示会が開かれている

ような感じがした。

おそらく車泥棒が

この光景を見たら、

涎をたらして喜ぶに

違いないと僕は

確信している。

僕達は駐車場に

備え付けられた

エレベータに乗り

一階のロビー

まで上がった。

このマンションは

セキュリティー

が何重にも敷かれ

駐車場から

ロビーにいったん出て

そして、

部屋に直接繋がる

エレベーターに

乗り換える

必要があった。

僕達はロビーから

部屋に直接

繋がるエレベーター

に乗り換え修さんの

部屋のある23階

へと向かった。

僕は途中の

花屋で買った

ひまわりの

花束を抱えて

修さんの後に続いた。

「だだいま

雪 竜連れてきたぞ」

修さんは玄関の

ドアを空けると

叫ぶように言った。

すると綺麗に

着飾った雪ちゃんと

大きな白い犬の

白ちゃんが

僕を迎えるために

玄関に姿を現した。

彼女は背中の開いた

白い

ワンピースドレスに

身を包み、

大きな潤んだ

瞳を弾ませ

僕の手を取って言った。

「いらっしゃい

竜治さん

白ちゃんと

首を長くして

待っていたのよ」

「今日は素敵な夕食に

ご招待していただき

本当にありがとう

これよかったら

飾って」

僕は持っていた

ひまわりの花束を

彼女に差し出した。

「まー

綺麗なひまわり

もう

ひまわりが

咲いているのね

珍しいわ

ありがとう

竜治さん

でも どうして

竜治さんは雪の一番

好きな花を

知っているの？」

「実はお兄さんから

聞いたんだよ」

「竜

そんな時は

もっと気が利く台詞を

言うものだぞ」

修さんは

僕と雪ちゃんの間を

すり抜けるように

隣の部屋に

向かいながら言った。

「ありがとう竜治さん

花瓶何処かに

あったかしら？

早速飾りましょうね。

さあ 竜治さん

どうぞ中に入って。」

彼女は僕に部屋の中に

入るように

手をさし伸ばした。

僕はお行儀良く

僕の目の前で

座っている

白ちゃんに再会の

挨拶のつもりで

顔を両手でなでなで

してあげると

白ちゃんは

それを喜んで

また僕の顔を

大きな舌で

舐め回した。

「なんだ白、

お前は家族以外の人に

無愛想なくせに竜には

ずいぶん

人懐こいんだな

お前といい、

雪といい

竜にはずいぶん

愛想がいいな」

隣の部屋から

見ていた修さんは

僕らのところに

やって来て

白ちゃんの頭を

片手で撫でながら

顔をしかめるように

言った。

「白ちゃんは

竜治さんの事

好きなんだものねー

さっ お兄ちゃん、

竜治さんこちらに

早くいらして

雪の料理

食べてください。

白ちゃん

こっちにいらっしやい」

「竜 行こう

雪が怒り出す前に

あいつは怒ると

鬼に代わるぞ」

「お兄ちゃん

なんか今言った。激

聞こえたわよ。

も一竜治さんの前では

そういうことは

言わない約束でしょ」

修さんは舌をだして

肩をすくめると

僕にウインクをして

ダイニングに向かった。

テーブルはロウソクの

火が灯り

薄いブルーの

テーブルクロス

上にはフォークと

ナイフが綺麗に

並べられていた。

そして白いバラと

僕の持って行った

黄色いひまわりが、

所狭しと

並べられた料理の

脇に飾られていた。

「うわー これ全部

雪ちゃんが作ったの？

何処かの

高級なレストランかと

思っちゃったよ」

僕はその豪華な料理を

見て驚きの余り言った。

雪ちゃんは

照れくさそうに

にっこりと笑い

そして、

ちょこんと頷いた。

「味は

どうか分からないけど

早くみんなで

いただきますしょう」

「竜

ワインを注いでくれ」

僕がみんなの

グラスにワインを注ぎ

三人でテーブルを

囲むと、

なんでもない一日

だった今日は、

素敵な一日へと

変貌した。

「うわー

とってもおいしいね

雪ちゃん」

僕は彼女の

作った料理を

次々に口に

運びながら言った。

彼女はそんな僕を見て

うれしそうに

してくれて、

ニコニコ僕に

笑いかけてくれた。

「竜

そのスープ

飲んでみてくれ」

修さんは

僕が中々スープに

手をつけないで

居るので、

それを待ちきれない

とばかりに

僕に言った。

「むーん まずい

どーして他の料理は

こんなに美味しいのに

これはずばぬけて

まずいんだろう？

雪ちゃんこれは

失敗だね」

「竜 刺すぞ

このやろう

俺がこの料理を

作るのを手伝わされて

どんだけの時間

鍋をかき混ぜたと

思ってるんだ」

僕が舌を出して

からかうと

修さんは笑いながら

ホークを手にかざして

言った。

「竜

今日こそお前を

これで串刺しに

してやる」

「うそうそ 修さん

美味しいよ。とっても。

ありがとうね 修さん」

修さんは

ニコニコしながら

ワイングラスを

僕に差し出し

それにワインを

注ぐように

グラスを何度も傾け

命令した。

「ご苦労様でした。

修シェフ」

僕は感謝の意をこめて

そのグラスの中に

ワインを注いだ。

第五節 三人で囲む食卓

三人で囲む食卓は

格別に楽しかった。

修さんと僕は

身近に起こった

エピソードを

面白可笑しく

雪ちゃんに語った。

彼女は目を

ルンルンに輝かせ

楽しそうに

僕らの会話を

聞いていた。

修さんが僕の起こして

しまったかっこ悪い

エピソードを

雪ちゃんに話すと、

僕は修さんの

恥ずかしい秘密を

雪ちゃんに話した。

彼女が腹を抱えて

笑う程、

僕達の話は大きくなり

僕達はだんだん

ありもしない話を

二人で作っては、

雪ちゃんに話して

彼女を笑わせた。

「そうだ 竜

例のものは

ちゃんとまだ

お前が

持っているよな」

「大丈夫

ちゃんと

持ってるから」

「ねー 何

例一の物って？

竜治さん？

お兄ちゃん？」

彼女はとても

興味深げに

僕らに聞いた。

正直

僕はこの時点で

修さんが何を

言っているのか

分からなかったが、

雪ちゃんをからかう

つもりなのだど

勘違いして、

会話を合わせている

つもりでいた。

「実はな 雪

お前誰にも言うなよ

でもなー お前なー」

「ねー 何よー

お兄ちゃん。

二人で隠して

何なのよー

雪にも

教えてくれても

いいでしょー

ねー 竜治さん？」

「そーだよ

修さん

話して上げなよ

妹さんなんだし」

「そっか

竜がそういうなら

話すよ でもな雪

お前

絶対、

誰にも言うなよ」

「わかってる

お兄ちゃん 何!」

「お前

おじいちゃんの話

知ってるか?」

「何?

おじいちゃんの

話って?」

「おじいちゃんが昔

徳川の財宝を

探していたの

知ってるか？」

「そうなの？

知らなかった」

「その資料を

俺が見つけた」

「またー

お兄ちゃんの

勘違いでしょ」

「違うって

本当に見つけたんだ」

「何処で？」

「雪は麻布の古い家に

蔵がいくつか有るの

見たこと有るだろ？」

「うん……………」

そこで見つけたの

お兄ちゃん！」

「そうなんだ

それを竜に

預けている」

「本当なの

すごーい」

僕は

その時修さんから

預かってくれと

頼まれたダンボール

箱を思い出した。

「修さん それって

この間、頼まれた

ダンボールの事？

もしかして？」

「おお 竜

それ それだよ」

僕はこのとき初めて、

この話は雪ちゃんを

からかう為に作られた

ものではない事に

気づいた。

修さんも僕が

そのことにやっと

気づいてくれたと

ばかりに

話を始めた。

第六節 兆し

「竜

お前にも説明して

なかったからな

ちょうどいい。

お前も聞いてくれ。

俺の爺様は、

おやじに自分の

後を告がせ、

引退した後、

徳川家の失われた財宝

を探していた。」

「失われた財宝？」

「ま一聞いてくれ。

事の起こりは、

徳川家の大政奉還、

権力を天皇に返す

ということが

発端だった。

徳川家では、

大政奉還に備え

自らの財宝や金を

数ヶ所に分けて

隠した。

その中には

天皇に返さな

ければならない

三種の神器

というものが有った。」

「三種の神器って何？」

「三種の神器って

言うのは、

日本のルーツと

呼ばれる

古事記や日本書紀に

出てくるあれだよ

雪ちゃん、確か

やたの鏡

やさたにのマガ玉

草薙の剣

この三つの神宝の

事を言うんだよ

これは神様が

この世を治める者に

与えた宝物で、

天皇の継承と共に

伝えられ

その神器なしには

天皇の即位は

認められない。

日本が出来た時から

伝わる王権の

シンボルなんだよ。

そもそも、

この三種の神器と

いう物は

天孫降臨に際して

この地上に

もたらされた

物らしいよ。

天界の高天原と

呼ばれる

異次元空間を司る

アマテラス大神が

ニニギの命

つまり、

現在の天皇家の祖先に

あたる人を地上に

降ろすにあたって

この三種の神器を与え、

この国を

世界が続くかぎり

支配する事を

命じたと言われている。

つまりこう言う事、

神様が人間の為に

わざわざ居心地の

いい天界の生活を捨て、

この地上界を

天界のように居心地の

よい場所に変えて

あげようと

降りてきてくれた時に

この世にもたらされたと

言われてるんだよ。

でも、

何故天皇である者

しかもてない

そんな大事な物を

徳川家が所有していたの?」

「そこなんだよ 竜

現在三種の神器のうち

アガ玉は宮中に、

そして、

鏡は伊勢神宮に祀られ

剣は熱田神宮に

祀られている。

では、

宮中であって

代々受け継がれている

三種の神器は何なのか?

勾玉をのぞき

宮中に存在する物は

レプリカで形代と

呼ばれている物だ

そのレプリカでさえ

天皇自身

いや如何なる人間も

直接目にする事は

許されていない。

形代は

あくまでレプリカで

本物は幾つかの戦争、

或いは災害で

どこかに焼失、

あるいは紛失している

のではないかと

おじいちゃんは

考えていた

みたいだ。」

「つまり、

今存在する

三種の神器の内

本物はアガ玉だけ

って事?」

「いや

お爺ちゃんは

アガ玉も

形代ではないか

とっていたみたいだ。

そして、徳川家で

その三種の神器の内の

鏡を持っていた。」

「でも、

どうして徳川家が

それを手に入れる事が

出来たの お兄ちゃん」

「おじいちゃんの

資料をさっとしか

まだ見ていなくて

詳しく

憶えていないけど確か

綱吉が納めている頃

獵師の仕掛けた網に

引っかかって

いたらしい。

それが流れ流れて

そのときの権力者

の元に辿り着いた

って訳さ」

第七節 神器

「三種の神器かー

それについて

修さん他に

知っている

事はある？」

「ああ

もちろん

俺なりに調べた

日本最高の秘宝

そして、

最大の謎の神物。

三種の神器の由来は

日本の神話なんだ。

古事記によれば

アマテラス大神の

「天の岩戸隠れ」

の時に

鏡と玉が作られたと

されている。

アマテラス大神が

弟のスサノオウの

乱暴な行いに

憤って天上界の

岩戸に隠れ、

世界は闇となった。

困りはてた神々は

天の安河原に集まり

相談した。

そこでイシコリドメ

の命という

神が天の安河の河上の

天の金山の金を取って

作った明鏡が

やたの鏡。

玉造部の遠祖である

玉祖命が作った物が

やたにのマガ玉

らしい。

これらを天の香山

の真榊につけ、

神々が踊り楽しんだ。

どうして外があんなに

楽しいげに歌って

楽しんでいるのか

気になった

アマテラス大神は

不思議に思って

そっと岩戸を空けた。

すると地上界は光が

戻ったという話だ。

そして、

スサノオウは天上界

を騒がせた責任を

とって地上へと

追放された。

スサノオウは

追放された

出雲の国で

ヤマタノオロチを

退治した時、

その時

尾から出てきた物が

草薙の剣だと

されている。」

「すごいお兄ちゃん

良く調べたはね

でも、

剣と鏡は分かるけど

アガ玉ってどんな物？」

「古事記によれば

{八尺の勾玉の

五百津{いおつ}の

御須麻流{みすまる}

の玉と書かれている。

八尺のとは

長いという意味

いおつとは

たくさんの

という意味

みすまるとは

多くの玉を

貫いて輪に

する事を意味する。

つまり多くの玉を

つないで輪にした

ネックレスのような物

と考えられる。

レプリカでの材料は

メノウ、ヒスイ、水晶

などの材料を使って

作られているらしい。

だが本物は誰も

見たことが無い。

言い伝えでは

金のような物が

使われたらしいが

誰も見たことが

無いので

噂に過ぎない。」

「伝説の時代を

今生きている

人間がいけない以上

仕方がない事だよな。

でも、

修さん本当に

今まで誰も

見たことが無いの？」

「俺もそれが気になって

調べてみたんだ」

「それで？」

「居たんだ。只

この箱の中身を

見ようと

しただけだけど、

10世紀の半ば

冷静天皇という人が

天皇に即位していた。

天皇は興味心に駆られ

玉の入った箱を

開けて中を

覗こうとしたらしい。

しかし、

その直後箱から

白い煙が立ち昇り

驚いた冷静天皇は

恐怖の余り

見ることをやめた。

そして、もう一人、

順徳天皇がその箱を

振るとカラカラと

音がしたという

言伝えもある。」

僕と雪ちゃんは

突然聞かされる

得体の知れない話に

クギ付けになった。

「この三種の神器は

全て見る事を

堅く禁じられていた。

なぜならば

それを見た者は

次々と不幸が襲う。

ある物は病に倒れ、

あるいは事故で

その命を落とすと

言われている。

江戸時代に

熱田神宮の

神官数人が

こっそりと見た

という記録があった。

そこに祀ってあった

神剣は長さが

およそ80センチ、

刃の先は菖蒲の葉

のようで、

色は全体的に

白かったらしい

そして、

彼らは次々に

原因不明の

病にかかり

そのうちの一人が

死ぬ間ぎわに

この事を

語ったらしい。

それと、鏡だが

今で言うと

144センチぐらいで

僕らの使う鏡とは

幾分性質が

異なっていて

僕らがそれを見た時

にはおそらく鉄の蓋

ぐらいにしか

見えない。

神器のレプリカと言われている神器。

明治の神仏分離令

まで気多大社と

白山神社に

飾られていた神器のレプリカの

写真をお祖父ちゃんの

資料で見たけど

俺にはそう見えた。」

第八節 形代 (かたしろ)

「修さん、

江戸時代に

神官が剣を見て、

命を落としたのなら、

熱田神宮の剣は

本物

という事じゃないの?」

「俺も竜と同じように

思ったよ

ただおじいちゃんは

例えレプリカと呼ばれる

形代でもそのぐらいの

ことは起こると

思ったんじゃないかな?

そもそも

その三種の神器と

呼ばれる神器は、

持つ物に権力と

力を与える

といわれている物だ。

その形代でも、

そのぐらいの事を

出来てもおかしくない

と俺も思うしな」

「お兄ちゃん。

でも、お兄ちゃんは

鏡のレプリカの

写真見たんでしょ？

それなら、

お兄ちゃんは

大丈夫なの？」

「雪

俺が見たのは

あくまでレプリカさ、

だから大丈夫。

レプリカと形代は

一見

同じように見えるが

性質が異なるらしい。

レプリカは人間の手に

よって作られ、

形代は神に近い存在が

作った物だ。

当然、

その内に秘める力は

違ってくる。」

「人が作った物では

人に及ぼす力は

ほとんど無いって

事かな？」

「そういう事だ、

話を元に戻そう。

徳川家が城を

無血で明渡し

権力の移譲が終わる頃

金や財宝は

掘り起こされたが、

鏡だけはある場所に

隠されたまま

掘り起こされる事は

無かった。

そして、

今もその場所に

眠っている。」

「おじいさんは

それを探していたの?」

「そうだ」

「修さん

そんなに大切な物

僕に預けていいの?」

「竜

お前だから預けた。

そして一緒に探して

くれないか?」

「お兄ちゃんずるい。

私は誘って

くれないの?」

「もちろんお前も

誘うつもりさ」

「私はもちろんOKよ

ねっ

竜治さん

一緒に探そうよ」

雪ちゃんは

僕の手を取り

それを左右に振って

子供が駄々を

こねるように

僕にすぎった。

僕は少し考えていた。

確かに、

財宝を探すのは

面白そうだった。

だだ、

本当に財宝を探す

ともなれば

資料集めから始まり

その労力と時間は

膨大となる事は

目に見えているし、

第一に僕には

余り時間が取れそうに

無い。

大学は二年で

殆どの単位を

取っておこうと

講義を朝から晩まで

めい一杯に詰め込んで

あるし、

大学から帰って来れば

何かしらの

レポート作りに

追われていた。

「竜

お前が大学の事で

忙しいのは

俺も知っている。

だから月に何度か

こうして三人で会って

食事をして、

おじいちゃんの

資料を見て

それについて

みんなで話すだけさ。

俺だって忙しいんだ。

ただこういう機会を

作ればお前だって

遠慮せずに

俺達の食卓に

来てくれるだろ。

だから、

気軽に考えてくれ。

俺だって血眼になって

探す気なんて無いさ。

おじいちゃんが

見つけられなかった物

俺が探して

あげたいって気持ちが

そうさせるだけで」

僕は

修さんの優しさに

感激しながら、

その申し出を快く

引き受ける事にした。

「ありがとう 修さん

喜んで参加させて

もらうよ」

「やったー

これでまた竜治さんと

会える機会が

増えちゃった。

ありがとう

お兄ちゃん。」

「おおっと

こんな時間だ。

雪 竜治 悪い

俺、約束があるから」

修さんは携帯電話を

片手に持つと

立ち上がり

車の鍵を探して

玄関へと歩いていった。

「ねー

お兄ちゃん何処かに

出かけるの?」

「雪

俺今日は

帰らないからな」

「え？」

「今から女と

会ってくる

お前もしっかりな」

「ちょっと

お兄ちゃん。

竜治さんどうするの

帰れないじゃない」

「何言ってるんだ

せっかく

俺の好意なのに」

「ちょっと

お兄ちゃん」

「竜一

悪いが俺は

今から出かける

送っていけないから

お前泊まっていけよ

俺の部屋

使っていいから」

「分かったよ

修さん

デートなの？

しっかりね」

このときの僕は何も

分かっていなかった。

僕と彼女が

二人きりになると

考えていなかったのだ。

第一節 フォトグラフ

ボタン

と玄関の閉まる音がして

僕達は二人きりに

なってしまった。

二人の間に急に

張り詰めたような

雰囲気の流れ出し、

僕は、場を

取り作るように

ワインのグラスを

傾けた。

彼女も何処か不自然に

ステーキにフォーク

を入れていた。

「二人っきりになっちゃったね

雪ちゃん」

彼女は僕の言った事に

びっくり

するように体を弾ませ

飲み込んだステーキを

喉に詰まらせて、急いで

ワインを飲み干した。

「ええ そうね 竜治さん」

「ごめんね 雪ちゃん

びっくりした 大丈夫？」

「やーね 私ったら、

大丈夫じゃないかも、

恥ずかしい」

「かわいいね 雪ちゃん」

「もー また子ども扱いして」

「だって可愛いんだもん」

「また褒めちぎるわよ

竜治さん」

僕達は二人で笑った。

「ねー 竜治さん

ちっと聞いてもいいかな？」

「うん どうぞ」

「さっき電話で雪の事

考えてたって言ってたでしょ

いったい

どんな事考えてたの？」

彼女はもじもじして

恥ずかしさを隠すように

俯きながら僕に聞いた。

「聞きたい？」

「うん 聞きたい聞きたい」

「えっとねー 雪ちゃんと

キスしたら

どんな味がするのかなー

って考えてたんだ」

僕はなんとなく

彼女をからかい

たい気持ちに駆られて

言ってしまっていた。

「えっ」

彼女は急にびっくりして

僕をまじまじと見ていた。

僕は彼女の視線に

真剣さを感じ、

そして、

自分の本心でもあることに

気が付いた。

「ごめん 雪ちゃん

本当はね、

君の寂しげな目を

思い出していたんだ。

なんとなく

寂しそうだったから。

君が

「何の為に生きてるのが分からない」

って言ってた時の、

君の目を思い出していたよ。

ねえ雪ちゃん

僕達は誰かに出会う為に、

もしかしたら

生きてるのかもしれないよ。

だって、

君に出会えて僕は

とってもうれしかったよ、

僕と君は似てるもの。

それだけで、

なんかうれしかったんだ。

どうって説明したらいいのか

僕にもよく分からないけれど、

君と始めて話した時

僕は感じたんだ。

生きていてよかったって。」

雪ちゃんは輝く

笑顔で僕を見つめていた。

僕の心はその笑顔の中で

暖められている。

そう感じた。

「竜治さん 私も今は、何の為に

生きているのか

なんて考えられないの。

だって

今 私は幸せですもの。

こうして貴方と話してるだけで

今の私は幸せだから。」

彼女は照れくさそうに

ステーキを細かく切り

自分の口へと運んだ

僕も自然に

ニコニコしていた。

僕はこのとき程、

間抜けな顔は無い

とばかりに

でれでれしていたに

違うと思う。

「竜治さんは座っていて。

私これを洗ってしまうから」

僕達が一通りの

食事を済ませた所に

彼女が言った。

「僕も手伝うよ

そのほうが早く終わるし

また二人で話せるでしょ」

「そうね、

それじゃ二人で片付け

しちゃいましょう。

竜治さんやさしいー」

彼女は子供のようにはしゃぎ

僕らはまるで

幼稚園児に戻った様

だった。

「ね一竜治さん

普段竜治さんは

食事どうしてるの？」

僕はスポンジに洗剤を

泡立てながら

食器を洗っていた。

「ちゃんと自炊しているよ」

「今度、雪も竜治さんの

手料理食べたいなー」

「もちろん

喜んで招待するよ。

今度是非来てね。」

「今度っていつ？」

「いつでもいいよ。

雪ちゃんが来たい時で、

いつでも」

「へえー 竜治さん

雪の為にいつでも

空けてくれるんだ」

「もちろん、 あっでも」

「デモはなしだよ」

「でも」

「男が一度言ったんだから

デモはなしだよ」

「やっぱり

レポートがある日は

だめだよ」

「わかった それなら

大丈夫だよ私

やったー

竜治さん大スキー」

「あっ雪ちゃん

なんかついてるよ」

「えっ何々」

「ちょっと

もうちょっと顔こっちに

近づけて見て」

「えっなに」

彼女が真剣な眼差しで

僕の方に顔を近づけると、

僕は手の上でまんまるに

作っておいた洗剤の泡の玉

を彼女の鼻に付けた。

「もー 竜治さんは

いたづらっ子なんだから。」

「かわいいよー 雪ちゃん」

僕がケラケラ子供のように

笑っていると彼女も僕の

鼻の上に泡をつけた。

「竜治さんもかわいいよー」

彼女も子供のように笑っていた。

僕らは記念にポラロイドカメラを

取り出し、二人で初めての

写真を撮った。

写真の中の二人は輝いていて。

二人の幸せそうな笑い顔・・・

そして、その時間は今でも止まっている。

あの幸せだった時間を

忘れるなと言うように・・・・・・

第二節 迷い

僕は湯船につかりながら

考えていた。

この先彼女と、

どうなってしまうのか

考えていた。

果たして僕は

彼女の事が好きなのか？

分からなかった。

彼女に惹かれている

自分がいるのは

確かだけれど、

好きなのかと聞かれると

何も答えられない

自分がいた。

惹かれているのは

確かだけれど

これ以上先に

進んでいいのか

分からなかった。

僕は彼女を傷つける事は

出来ない。

僕はバスタオルで体を拭き

リビングへと向かった。

リビングでは

彼女がソファで

横になりながら

何かを書いていた。

「雪ちゃん 上がったよ」

「いいお湯だった。？」

彼女はソファに

座りなおして

僕に聞いた。

「うん とってもね

雪ちゃんも入ってきなよ」

「分かった

それじゃ行って来るね」

彼女は立ち上がり

お風呂へと向かった。

浴場から彼女の水浴び

の音を聞くたびに

僕は自分の欲望を

抑える事に必死だった。

僕自身の下半身は

彼女を求め

しだいに大きくなっていった。

体の中から熱くなり始め

どうする事も出来ない波に

飲み込まれている。

僕は自分に言い聞かせた。

彼女を傷つける事

だけはしたくない。

欲望だけで接したくない

という思いが僕の唯一の

ストッパーになっていた。

僕が気づくと、

彼女はピンクの

シルクのパジャマを着て

僕の前に立っていた。

僕はソファーに

腰掛け彼女を

見上げるように見ていた。

「竜治さん 麦茶どうぞ」

彼女は両手に持ったグラス

の片側を僕に差し出して

いった。

「ありがとう」

「竜治さん 考え事？」

「うん ちょっとね」

「なんか竜治さん

寂しそうね」

「そんな事・・・

無いと思うよ」

「そんな事 ある」

「そんな事無いよ」

「あるのー

じゃー

私にさっき考えてた事

話してみて」

「そんなの言えないよ」

「どうして？」

「だって雪ちゃんとHしたら

どんな感じなんだろうって

考えてたって言ったら

きっと嫌われちゃうから」

「もー また私をからかって」

「からかってないよ

ほんとだよ」

「竜治さんて 不思議」

「そっかな？

どんなところが？」

「そんなところが不思議。

私、初めて貴方を見たとき

何処となく冷たい人

だと思ったの。

でも、

話してみると

それが間違えだと

すぐ分かったわ。

それに今だって

普通そんな事

言わないと思うし。

とても意外な事ばかり。

だから、不思議な人」

「そっかー

僕は君にとって

不思議な存在なんだね。

でも、

僕にとっても

君は謎だらけだよ」

「そうだね

お互い知り合ったばかり

だものね」

「それならこれから、

そのお互いの

謎を解き明かしていこうよ」

「はい 雪は賛成一」

彼女は大きく手を上げて

こたえた。

「それでは、

まずは僕から質問。

雪ちゃんは何処の高校に

通ってるの?」

「雪は高校に通ってません。」

「そっかー 働いてるの?」

「んーん 何もしてないの。」

「途中で止めちゃったの?」

「んーん 卒業しちゃったの」

「えっだって雪ちゃんは

まだ、

18才になったばかりでしょ?」

「竜治さん。

雪は大学も卒業

しちゃったの。

16の時」

「うそー だよね 汗」

「うそじゃないよ」

「すごいね 汗」

「やっぱりすごいかな？」

「とっても 汗」

「でもね、私の同級生で

13才の子がいたの。

それなら彼女はもっとすごいよ」

「雪ちゃんは何処の大学を

卒業したの？」

「やっぱり竜治さん。

引くからいいよ。

言いたくない。」

「感心してるんだよ

ビックリしてるのかな

分からないけど？

教えてよ」

「ハーバード」

「ハーバードってあの

アメリカの？」

彼女は僕の顔を

覗き込むように

見ていた。

「やっぱり引いたでしょ？」

「少しだけ」

「約束違反だよ。

竜治さん。

次は私。

竜治さんは今

付き合っている人

が居ますか？」

「居ないよ」

「ほんとに？」

「ほんとに居ない」

「じゃー好きな人は？」

「ずるい 一回の質問は

一つだよ。

次は僕。

雪ちゃんは付き合っている人は

居ますか？」

「居ません」

「ほんとに？」

「ほんとに」

僕達はお互いに見つめあい

笑いあった。

そして互いにグラスを

取り二人で乾杯した。

彼女は少し濡れた前髪を

かきあげ白い歯を

大きく僕に見せて笑った。

「雪ちゃんは普段化粧

してなかったんだね」

「えっどうして？」

「だって今でもすごく綺麗なもの」

「でもファンデーションは

してるよ。

日に焼けるから」

「そうなんだ 綺麗な肌だね」

「竜治さんこそ 綺麗な顔

なんか女の子みたい」

「女の子？褒めてないよ 笑」

「ごめんなさい……………」

次は私の質問だったわよね。

今竜治さんは

好きな人居ますか？」

「それは分からないけど

惹かれてる人はいるよ」

「そっかー

やっぱり居るんだ」

彼女の目が曇り、

僕は少し慌ててしまった。

「君に惹かれてるんだ。」

そう喉まで出かかっている

気持ちを僕は押し殺した。

「それじゃー

雪ちゃんはドライブ

何処に行きたいですか？」

「ありがとう

ちゃんと憶えていてくれて」

「約束したからね。

それに僕も

楽しみにしていたしね。

ねっどこ行こうか？」

「横浜なんてどうかな？」

「横浜かー じゃ決まりだね」

「雪の車はこの駐車場に

今日お兄ちゃんが

置いておいたから。

ばっちりだよ」

「明日行こうよドライブ」

「はい 雪も賛成」

「それじゃ明日も早いし

今日はもうねよっか」

「えー それも残念」

「明日ゆっくり

また話そうね」

「そうしましょ」

彼女はおやすみなさい

と手を僕に振り、

僕は修さんの部屋に入った。

第三節 安らぎ

僕がベットに入って

ちょうど眠気が襲う頃

部屋のドアが開いた。

僕は人影に気づき

寝ぼけまなこで目をこすると

そこに彼女が立っていた。

「眠れなくて」

彼女がぼつんと言った。

僕は掛け布団をずらして

彼女が隣に来るように勧めた。

彼女は黙ったまま僕を

見つめつけ、そして

僕の隣に肩を並べた。

僕は彼女を抱き寄せ

そして眠りに落ちた。

その時の眠りは深かった。

これほどまで

深い眠りを経験した事が

無いぐらい深い眠りだった。

彼女の髪から漂う甘い香りが

そうさせたのかもしれない。

とても懐かしい匂いだった。

それはかつて母親の腕に

抱かれた時に

かいだ事のある

匂いだったの

かもしれない。

彼女の呼吸が僕の髪

を揺らし、それに合わせて

細い肩が動いていた。

僕はもう一度彼女を抱き寄せ

彼女の存在を確かめた。

僕は満ち足りた何かを

手に入れていた。

深い闇の中での

安らぎだった。

とても暖かい

陽だまりに

抱かれているような、

そんな暖かさを

心が感じていた。

その時

僕は確かに母親の

夢を見ていた。

僕を優しく抱きながら

母は笑っていた。

母親の顔は

光にぼやけて

よく見えない。

彼女は何かを歌い、

抱きかかえながら

僕の背中に

優しくリズムを

取っている。

僕はそのリズムに

誘われるように

深い温かみに落ちていく。

幸せな時間が流れていた。

この時間がこのまま

続けばいいと

心の底で祈っていた。

僕がもう一度

母の顔を見つめ

続けていると、

光にぼやけていた顔が

しだいに姿を現した。

そして、

そこには雪ちゃんが居た。

僕がはっとして

夢から覚めると、

隣に居るはずの

彼女の姿は

既になかった。

ブラインドから

日の光が少しだけ

漏れていて、

蒸し暑かった。

ブラインドを上げ

窓を開けると、

近づく夏の太陽は

透き通るように

辺りを照らしていた。

「もうすぐ夏がやって来る」

僕は独り言を言っていた。

第四節 さりげない優しさ

ぼさぼさに寝癖

のついた髪を

ブラシで梳かして

ダイニングに行くと

スポーティーに

着飾った彼女が

白ちゃんと

じゃれあって

遊んでいた。

「ごめんね 雪ちゃん

寝坊しちゃったみたいだね」

「ううん いいの

わざと起こさなかったの。

竜治さん

疲れている

みたいだったから」

「やさしいんだね

雪ちゃん ありがとう。

今何時ぐらいなの？」

「今ね十一時になる所よ

もう少しで。」

「ごめんね」

「いいの

謝らないで竜治さん。

本当にいいの」

「それってもしかして」

僕はテーブルの上に

置かれている

バスケットを

見て言った。

「うん

一応お弁当

作っておいたの

いつ起きるか

分からなかったし

せっかくだから

今食べましょうよ」

彼女はバスケット

の中から

サンドイッチや

鳥のから揚げ

ウインナー

と卵焼き

そして、

スパゲティー

などを取り出し

テーブルの上に

並べた。

僕は自然な

彼女の優しさに

安らぎを感じていた。

「これ作るの

大変だったでしょ

いったい何時に

起きて作ったの？」

「わすれちゃった」

「それにしても

雪ちゃんは

料理上手だね」

「作るの

結構好きだから

さー どうぞ

召し上がれ」

「雪ちゃんは

きっと良い

お嫁さんに

成れるね。

すごく美味しいよ」

「じゃー竜治さんが

雪のことお嫁さん

にもらってくれる？」

「それなら、

こちらから

お願いしたい

くらいだよ」

僕達は二人で

笑いながら話していた。

「これから

どうしょっか

雪ちゃん」

「竜治さんは

どうしたいの?」

「これ食べてから

横浜に行こうか

って考えてるんだけど」

「雪はドライブに

こだわってないよ」

「そっかー

じゃー

何か借りて来て

二人でカウチポテト

でもする?」

「それじゃー

白ちゃんの

お散歩して、

その帰りに

レンタルビデオに

よりましようよ」

「賛成

じゃ早く食べて

お散歩に行かなきゃね

白ちゃん待っててね」

「わん」

「白ちゃんは僕の

言ってる事

もしかして

分かっているのかな？」

「わん」

「君もご主人様

みたいに

賢いんだね」

「わん」

「もーしろちゃんたら」

「わん」

部屋の中には常に

僕達の笑い声があった。

第五節 初めてのデート

食事を済ませた僕達は

白ちゃんを

車の後部座席に乗せ

上野公園へドライブを

兼ねて向かう事にした。

道は休日という事もあり

渋滞せずにスイスイ流れ

予想以上に早く公園に着いた。

僕達は立体駐車場に車を止め。

二人並んで歩いた。

僕が雪ちゃんの

手を握ると

彼女は照れくさそうに

僕の手を握り返して、

おでこを僕につけた。

彼女が照れると決まって

彼女は自分の

顔を隠すように

おでこを僕の体の

何処かにつけて

僕に見られないようする。

僕はそんな彼女を見て、

心の奥から

幸せを感じていた。

公園の池のそば

を歩きながら

僕達は黙って歩いた。

初夏の太陽は

さんさんと輝き

池の水辺に反射し、

水辺が揺れる度に

僕は目を何度も細めた。

木々の緑は

太陽の光を

一杯に浴びるように

葉を広げ、

時々そよぐ風に

身を任せるように

揺らいでいた。

周りでは休日を

楽しむ家族連れ

の人々が子供と

キャッチボール

をしたり、

フリスビーを

したりして、

楽しんでいた。

「竜治さんは

休日ってどうやって

過ごしてるの?」

彼女は大きな目で

僕を見つめた。

僕はそのしぐさに

ドキッとしてしまった。

彼女の目は子供の

ように純真で

まるで穢れを

知らないかのように

真っ直ぐに僕を見つめた。

「あまり有意義とは

言えない過ごし方かな。」

「余り有意義でない

過ごし方って

どんな過ごし方なの?」

「ただ寝ているだけ」

僕が舌を出して

おどけた顔を

すると彼女は

微笑んだ。

「じゃー

たまにはこういう

一日もいいでしょ？」

「最高だね

雪ちゃんみたいな

綺麗な人の隣に

居れるんだから」

「そーよ 竜治さん」

彼女は僕を

からかうように言った。

「竜治さんは

兄弟とか居るの？」

僕はその問いに

答える事を

少し戸惑った。

「いないよ」

「じゃー

一人っ子なんだ？」

「そう 一人っ子」

「お父さんは

何している人なの？」

僕はこの質問を

誰かにされる度に

気が重くなる。

それは彼女も

例外ではなかった。

僕は新しい友達が

出来るたびに

自分の身の上話を

しなければならない

事が嫌で、

人見知りする。

親しくならなければ

僕の過去を

話す必要が無いからだ。

「そうだね

何してる人

なんだろうね。」

「竜治さん 教えて」

「そうだね 今度」

「じゃーお母さんは？」

「それもこんど話すね」

「竜治さん？」

「何」

「どうか した？」

「っん

別になんでもないよ」

「それならいいんだけど」

彼女は僕を

気遣うように

僕を見つめ、

僕にはそれが

何故か辛かった。

彼女はそれから

黙り込んで

僕達は沈黙した。

時が永遠のように

感じ始めた頃、

僕はその沈黙が

耐えられなくなり

言っていた。

「雪ちゃん

僕は

捨てられたんだ」

「えっ」

「生まれてすぐに
教会に
すてられたんだ」

彼女はうつむき、
どうしたらいいのか
わからない様子で
僕の顔を見ると
すぐに地面に
視線を落とした。

「ごめんなさい
竜治さん」

「んっ いいよ
別に、
ただ僕の話をする
みんな

暗くなってしまうから

.....

ねー雪ちゃん

アイスクリーム

食べたくない？」

「えっ」

「買ってくるから

ここでちょっと

待っていて

すぐにくるから」

僕はこの暗く

沈みこむ雰囲気

どうにか変えたくて、

その場から

すこし離れたかった。

僕は逃げるように

その場から

離れてアイスクリームを

探しに行った。

彼女のところに戻ると

彼女は優しく

僕に微笑み

手渡した

アイスクリームを

子供のように

わざとむしゃぶりつき

僕を笑わせた。

僕を笑わせる事に

満足した彼女は

ハンカチを取り出して

自分の口の周りについた

アイスクリームを

ふき取った後

そのハンカチで

僕の口の周りを

拭いてくれた。

「ねー白ちゃんは

アイスクリーム

食べるかな？」

「あげた事無いから

わからないけど

でも白ちゃんは

私とお兄ちゃんが

あげたものしか

食べないし・・・」

「あげてみても

いいかな？」

「お腹壊さないかな？」

「大丈夫だとは思うよ」

「ええ それならいいわ」

僕が白ちゃんに

アイスクリーム

を差し出すと、

白ちゃんは

彼女の顔を見つめた。

彼女は白ちゃん

の気持ちを

察したように頷くと

白ちゃんは僕の

アイスクリームを

食べてくれた。

「白ちゃんは

おりこうさんだね。

この前白ちゃんに

食べ物を与えた時、

実は食べて

もらえなかったんだ。」

「白ちゃんは私に

気をつかって

いるのかしら？」

「そうだね

君が与えた物

しか食べない事で

愛情表現して

いるのかもね」

「ありがとう白ちゃん

今まで気が付かなくて

こめんね」

「わん わん」

白ちゃんは

うれしそうに

尻尾を振って

何度も何度も

僕の顔をなめまわした。

おかげで僕の顔は

アイスクリームと

白ちゃんの唾液で

べとべとになった。

それを見ていた彼女は

ニコニコ笑っていた。

楽しい時間は

時間の流れを

早く巻き取る

ものらしい。

僕達は時間を忘れ

二人でその流れを

楽しんでいた。

気づくと時計は

午後五時をしらせ

人々がまばらになり、

空が赤く染まり

だしていた。

「そろそろ私達も

帰りましょう」

僕達は車に乗り込み

マンションへと

帰っていった。

第六節 悪戯っ子

マンションに

ついた僕らは

車を駐車場に置き

歩いて近くの

レンタルビデオ

ショップに向かった。

白ちゃんに部屋の

お留守番を

頼むと、

白ちゃんは自分も

連れて行って

欲しいとばかりに

吠えて僕らを困らせた。

彼女は

白ちゃんをなだめ

その様子はまるで

親子のようだった。

僕がその様子を見ている

事に彼女が気づくと、

彼女は首を傾げ、

僕に微笑みかけたあと、

困った顔で白ちゃんの

頭を撫でた。

ようやく白ちゃんが

お留守番を承諾し、

すねるように

座り込み、

僕達は後ろ髪引かれる

思いで部屋を後にした。

レンタルショップ

につくまで

僕らは自然に手をつなぎ

寄り添いながら

ゆっくりと歩いた。

辺りの空気が

濃密な影を

つくりだし、

見える物全てが

彩りを深くした。

レンタルショップに

つくと僕は

アダルトのエッチな

ビデオが並ぶ

コーナーに彼女を

引っ張っていった。

彼女は顔を

真っ赤にさせ

何も言わずに

僕の後ろからついて

歩いた。

僕は立ち止まり、

適当なビデオを取り

まじまじと

見ていた。

僕は彼女が

困っている顔を

みて楽しむ悪質な

性格らしい。

彼女がうつむくたびに

僕は笑いを堪えていた。

僕が堪えきれなくなり

笑い出すと

彼女は顔を膨らませ

怒り出した。

「もー 竜治さん

きらい。

また、雪のこと

からかっているでしょ。」

彼女は僕と繋いだ

手を振り払い

アダルトの

コーナーを

出て行ってしまった。

僕はちょっと

やりすぎたかな？

と反省して

彼女の後ろを

追いかけた。

「ごめん 雪ちゃん

おこったの？」

「怒った」

「ごめんね」

「んー竜治さん

きらい」

「でも、怒った顔も

またかわいいね」

「そんな事言っても

許してあげない」

彼女は

僕の予想以上に

怒った様子で、

流石の僕も

肩を落として

怒る彼女の後について

レンタルショップの

中を歩いた。

「ね一竜治さん

本当にあれ見たいの？」

「別に今は

見たくないよ

男同士でなら借りて

一緒に見るけど。

ただ君を

からかったんだ。

本当にごめんね」

「竜治さんが

見たいなら

借りてもいいよ

本当は

恥ずかしいから

嫌だけど」

「僕は雪ちゃんが
見たい物を一緒に
見たいよ」

「よかった。
それじゃ今度
あれは見ようよ」

「いいよ あれは
雪ちゃん見たい物
あるの？」

「うん あるけど
でも竜治さんは
もう見てるかも
知れないし」

「何？」

「タイタニック。

もうやっぱり竜治さん

見た?」

「まだ見てないよ

だから

それにしようよ」

「よかったー

私決めていたの」

彼女は何かを考えたあと

黙ってしまった。

「何を決めていたの?」

彼女は何かを

言いかけた後

恥ずかしそうに言った。

「秘密」

第七節 カウチポテト

「竜治さん

家まで二人で

競争よ」

彼女は突然走り出し

僕は慌てて追いかけた。

「ちょっと

あぶないよ

雪ちゃん

そんなに急がなくても

いいじゃない」

「何言ってるの

竜治さん。

早く帰って

これを二人で見るの。

だから、

早く私を捕まえて」

彼女は笑いながら

僕に捕まらないように

マンションまでの

道を走りつづけた。

僕は体力が衰えていて

彼女に追いつくのが

やっとだった。

マンションの

前でようやく彼女

の手を取って

僕は彼女を

抱きしめた。

「ようやく

捕まえたよ

もう離さない。」

僕は息を切らせて

彼女にすがっていた。

「ありがとう

竜治さん

けっして

離さないで」

彼女は

僕の髪をかきあげ

僕を見つめた。

僕も何も言わず彼女を

見つめた。

僕が彼女のおでこに

自分のおでこを

つけて見つめると

何故か二人はお互いに

笑い出していた。

二人は

手を繋ぎなおして

またマンションの部屋

へと歩き出した。

映画は若い男女の

恋の物語だった。

貧しい青年が賭けで

手に入れたアメリカ

行きの切符を手に

タイタニック号に乗り込んだ。

彼は手荷物のバックと夢

だけをもちアメリカ行きを

決めた。

その船がアメリカに

着く事が無い事も

知らずに・・・。

物語が進むたびに

それを見ている

彼女の目から

大きな涙が

滝のように流れた。

そんな彼女の後ろに行き

そっと抱きしめ

寄り添いあった。

彼女は僕を見て

微笑んだあと

流れる涙を拭いた。

僕は自分も

泣きそうになり、

それを彼女に

見られなくなかった。

エンドロールが流れる頃

僕の涙は彼女の

肩をぬらし

彼女はそっと

ティッシュペーパーを

僕に手渡した。

僕は人に自分の

涙を見せる事を

これまで恥じて来た

筈なのに、

彼女に対しては、

見せてもいいと

少しだけ思った。

少しづつ僕は

彼女に心を許していた。

「いい映画だったね。

竜治さん」

「うん。

泣いちゃったよ。」

僕はテレを隠すように

言った。

「私もいっぱい

泣いちゃった。

竜治さん。

別に泣く事は

恥ずかしい事

じゃないよ」

「そっかな」

「そうよ」

彼女は優しく微笑み

僕の涙を拭いてくれた。

「夕食何が食べたい？」

何でも作ってあげるよ

竜治さん」

「昼に食べた

お弁当

まだいっぱい

残ってたよね？」

「ええ

でもそれでいいの？」

「それでいいの

雪ちゃんの手料理

捨てたらもったいないもの」

「それじゃ

暖めなおすね。

竜治さんは

お風呂のお湯を

出してきた」

「わかったよ」

雪ちゃんがキッチンに

向かいお弁当を

温めなおしている所に

お風呂場から

僕が聞いた。

「ねー 雪ちゃん

今日は修さん

帰ってくるって

言ってたの?」

「たぶん戻らないと思う

何も聞いていないけど」

「そっかー

今日も泊まっても

大丈夫かな?」

キッチンに僕が行き、

彼女の顔を

覗き込むように

聞いた。

「もちろん

大丈夫だよ。

お兄ちゃんが

帰ってきたら

また雪と一緒に

寝ればいいでしょ」

彼女は僕を

からかうように言った。

僕は顔を真っ赤にして

もじもじして

しまっていた。

それを見た彼女は

悪戯げに

僕の耳元で言った。

「今度はちゃんと

私を抱いて」

僕が真っ赤に

なって彼女

をちらちら

見ていると、

彼女はもっと

僕をからかった。

「竜治さんって

意外とウブね。」

「雪ちゃん

さっきの仕返し

してるでしょ?」

「あら 何の事?」

彼女は悪戯げに

顎をあげて

僕をチラッと見た。

「もー

意地悪だね

雪ちゃん」

「竜治さん

程じゃないよー」

「もーすねるぞ」

「あらいいわね。

そんな竜治さんも

みてみたいなー」

「ごめん まいったよ」

僕達は手を取り合

って笑った。

第一節 重なる時間

夕食は白ちゃんと

僕ら二人で

寄り添うように食べた。

僕は初めて

自分の居場所

を見つけた気がした。

彼女の側に僕の居場所

がそっと用意

されているようで

僕はただうれしかった。

そして、この時間がずっと

流れてくれないかと

願っている

自分をそこでみつけた。

僕はここに

ずっと居たいよ

そう心が言っていた。

彼女は長い髪を白い

ヘアーバンドで止め

大きな二重の目で

僕に微笑みかけた。

時々白ちゃんに

「美味しい？」

と聞いては白ちゃんを

撫でていた。

白ちゃんは彼女に

見つめられると

うれしそうに

瞳を輝かせ

彼女の顔を

ぺろりとなめた。

彼女は無邪気に喜んで

くすぐったそうに

首を曲げた。

今までの

僕の生活に無い

暖かいその光景に

僕は浸った。

彼女は僕を見て微笑み

僕は自然に微笑を返した。

「先にお風呂入って。

竜治さん」

「分かったよ」

僕はお風呂で

念入りに体を

洗った。

この時僕は

彼女と深い関係に

なる事を心から

望んでいた。

「雪ちゃん

どうぞ上がったよ」

「うん

それじゃあ

行って来るね。」

彼女は顔を

真っ赤にして

小走りに

お風呂へ向かった。

僕達は無言のまま

これから先起こる二人の

出来事を了解していた。

お風呂から

上がった筈の

彼女は中々

ダイニング

に現れなかった。

僕は彼女を待つ事に

疲れて

キッチンに向かった。

僕に背を向けた彼女は

胸に手を当てて

じっと立っていた。

僕は彼女を後ろから

抱き寄せた。

「どうしたの？」

大丈夫？」

彼女の顔を見ると

ひどく苦しげに

していたので僕は

心配になって言った。

「ええ 時々あるの

だから心配しないで

もう治ったから」

「ここに座って

ゆっくり さあ」

「心配しないで

もう大丈夫だから」

「さっ早く座って」

彼女を

カウンターの椅子に

座らせ冷蔵庫から

麦茶を注いで彼女に

渡した。

「本当に大丈夫かい。」

「ええ

子供の頃からの

持病なの。

私心臓が弱くて

時々あるの

だから心配しないでね」

「でも、よかったよ

さっき顔を見たとき

すごく青白かったから」

「ええ

でもだいぶよくなったわ」

「これ飲んで

きっと落ち着くよ」

「ありがとう

ごめんね

驚かせて」

「大丈夫だよ

ちっとだけ

ビックリしたけど」

「私恥ずかしいけど

ドキドキして

落ち着かなくて

そしたら

っね・・・・・・・・」

「僕もドキドキ

してるんだ

ずっと……」

僕達は見つめあい

ゆっくりと

口付けを交わした。

そっと唇をかさねて

お互いの体温を知り合った。

しだいに舌がからみ合い

激しくお互いを求め合った。

何度も何度も口づけを

交わした僕は、まるで

夢の中に居るようだった。

僕は彼女を抱き寄せ

彼女を見つめた。

彼女は細い腕を僕の

首に絡めさせ潤んだ瞳で

僕を見た。

「さっきから

ずっとこうした

かったんだ」

「私も・・・」

「ねえ

もう一度・・・

したいよ・・・」

「私も・・・」

僕の中の何かが熱くなり

僕はこの気持ちを

どう抑えたらいいのか

分からなくなっていた。

そして二人は唇で激しく

舌を絡ませて

お互いを感じあった。

「ねえ竜治さん。

こんなところ

お兄ちゃんに見られたら

大変」

「そうだね

ちょっと

恥ずかしいね」

「竜治さん

先に雪のベッドで

待ってて

後から行くから」

「わかったよ」

「部屋の電気は

消していてね

恥ずかしいから」

「いいよ

わかってる」

僕は彼女のおでこに

キスをして、

彼女のベットに向かい

彼女を待った。

部屋のドアが

静かに開いた。

月明かりに

照らされた彼女は

怪しく光り、

これまでの少女は

そこに居なかった。

細く長い足が、

ガウンの間から

ちらりと見え、

引き締まった腰

のくびれを

月明かりが照らした。

彼女は美しい

大人の女性へと

変貌していた。

長い髪の間から

見せる目は

僕の欲望を

駆り立てるように

僕を見つめる。

ガウンを脱ぎ捨てた

彼女は下着姿のまま

雌雫のように

ベットの上に

四つん這いになり

僕の目を

覗き込んだ。

幾らか垂れ下がった

彼女の前髪は

彼女の魅力を

怪しく光らせ

僕は彼女の魅力に

魅了された。

僕の視線は

吸いつけられるように

彼女の唇に向けられ

優しく口付けを交わした。

僕らはお互いに求め合い

しだいに舌を絡めあった。

僕は彼女を抱き寄せ

ベットの中に

呼び寄せると

彼女を寝かせ

彼女を見つめた。

[性表現の規制により一部内容を削除しました。Byじん]

第二節 新しい朝

目覚めると

彼女はまだ

すやすやと

僕の隣で眠っていた。

彼女は長い睫毛を

枕につけて

子供のように

眠っていた。

昨夜僕が見た彼女は、

とても

官能的な女性で、

とても同一人物

とは思えないほど

かわいらしい

あどけない

少女姿の彼女が

眠っていた。

僕は彼女を見つめ

あどけないその寝顔に

自然と微笑んでいた。

しびれた左腕をそっと

彼女の首から外すと

感覚が消えた腕から

次第に波打つ痛みが

僕を襲った。

僕は起き上がり

彼女の頬にキスをして

シャワーを浴びた。

シャワーから上がり

彼女の寝室を覗くと

あどけない少女はまだ

夢を見ていた。

僕は彼女を

起こさないように

そっと着替えを済まして

白ちゃんと

散歩に出かけた。

白ちゃんは

すっかり僕に

なついてくれて

うれしそうに

僕の後についてきた。

外に出ると、

街はまだ静けさを

保っていた。

朝焼けの空は

すがすがしく

白く輝き、

これから始まる

一日を照らしていた。

地面から上がる冷たい

水蒸気が体を

撫でるように

風となって

上空に舞い上がり

小鳥達は世話しなく

朝の挨拶を

交わしていた。

「おはよう」

「今日も一日始まるね」

「今日は何をして

遊ぼうか？」

そんな会話を

しているのかも

しれない。

と、

僕はふと思った。

「白ちゃん、

今日は一緒に

何して遊ぼうか？」

「わん？」

白ちゃんは

かわいく首を

まげて僕を見つめた。

僕は白ちゃんの

頭をなで、

白ちゃんは

僕の顔をぺろりと

舐めた。

「白ちゃん、雪ちゃん

そろそろ起きたかな？」

「わん」

「じー競争だよ

走って

どっちが勝つか

お家まで

いいね」

「わん」

「それじゃー

僕がいいって

言うまで

そこ動いちゃだめだよ

わかった」

「それじゃ

いくよー」

僕は思いっきり走った。

白ちゃんは

僕の言った事を

お行儀良く守って

その場に

座って待っていた。

100メートルぐらいの

距離を走り

後ろ向きに

白ちゃんに言った。

「いいよ

白ちゃん

競争だよ」

白ちゃんは僕を追いかけ

あっという間に

僕を追い越し

僕の先を走った。

しばらくすると

僕は息を切らして

歩いて白ちゃんを

追いかけた。

すると白ちゃんは

ちょこんと座って、

僕が側に来るまで、

その場で待っていた。

僕が側まで行って

走り出すと

白ちゃんは面白がって

なんども

ぴよんぴよん

跳ね回りながら

先を走った。

「やっかついたー

も一わかったよ。

僕の負けだ」

僕が倒れていると。

白ちゃんは

尻尾を振って

僕の顔をぺろぺろ

舐めていた。

第三節 幸せの後の不安

ドアを開けて

部屋の中に入ると

バスローブを

着て彼女が

座っていた。

「おはよう ゆきちゃん」

「何処に行っていたの？」

竜治さん」

彼女は後ろ向きに

ソファーに座り

小さな肩を

上下に小刻みに

震わせていた。

僕は彼女の声聞いて、

彼女が泣いている事に

気が付いた。

「どうしたの？

なんで泣いているの？」

白ちゃんも

そんな彼女を

心配して彼女の側に

行って座ったまま

彼女を見つめていた。

「・・・・・・・・」

彼女は黙ったまま

大きな涙を落とした。

「白ちゃんとお散歩に

行ってきたんだ。」

「ひどいよ、竜治さん

突然いくなるんだもの。

黙って出て行くんだもん。

私、嫌われたのかと

思ったんだよ・・・」

「ごめんね

雪ちゃん

君があんまり

気持ちよさそうに

寝ていたから、

わざと起こさなかった

んだよ。

泣かないで雪ちゃん。

僕が君を嫌いに

なるはず無いでしょ。

どうして、そんな風に

君は思うんだい？」

僕は彼女を抱き寄せ

彼女の頭を子供を

あやすように

撫でながら言った。

「だって私、淫乱だから。

昨日・・・

私・・・分かったの。」

「そうかい？

でもそんな

ゆきちゃんの事

もっと僕は好きに

なったけどね」

「本当に？」

「本当さ

君は素敵だよ

今も、あの時も」

「本当に？

嫌いになってない？」

「なるはず無いでしょ 笑

だから泣くなんて

おかしいぞ」

「よかった一竜治さん

でも、これからは

黙って私の前から

消えたりしないで

お願い竜治さん。」

彼女は僕に抱きつき

子供のように泣いていた。

「雪ちゃん

わかったよ。

これからこんな事

が無いように

ベットを出る時には

必ず君にキスをするよ。

それは待って

いてって意味だから

泣かないで

待っていてね。」

「わかった。約束だよ」

「約束。

でも、起きないのは

僕のせいじゃ

ないからね 笑」

「意地悪ね 竜治さん」

彼女は笑い、

僕達は口づけを

交わした。

「白ちゃんごめんね

昨日、こんな思いで

私達の帰りを

貴方も待っていたのね。

本当にごめんなさい。」

彼女は側に居る白ちゃんを

抱き寄せて白ちゃんの

首元に顔を押し付けた。

白ちゃんは黙って

座っていた。

「雪ちゃん

早くシャワーを

浴びて着替えなきゃ

泣いてる時間は無いぞ。

今日は二人で

ドライブに行く

からね。」

「うん。

じゃーシャワー

浴びてくるね。

その前に」

二人は寄り添い合い、

キスをした。

第四節 ドライブ

朝食を済ませた僕達は

白ちゃんを後部座席に乗せ

車の電動開閉式のトップドア

を開きオープンカーにして

高速道路を走っていた。

目に映る緑は鮮やかに

輝き、光る太陽は

僕達のデートを

見守るように

サンサンと光を

放っていた。

先程泣いていた彼女

からは涙の後さえなく

笑顔が太陽のように

僕を満たしていた。

「ねー竜治さん」

「何？」

「んーんなんでもないの」

「さっきからそればかりだね？」

「竜・治・さ・ん」

「なあに？」

「何でもない」

「もーゆきちゃん怒るぞ」

「いいよ 怒っても」

「もー」

「あのね、昨日一緒に

映画見たでしょ」

「うん」

「だからとてもうれしいの」

「僕はその次の

二人に起こった

事の方がうれし

かったけど」

「もー竜治さんのHっちー」

僕が笑って彼女

を見つめると

彼女は真っ赤な顔をして

もじもじと足元を

見つめていた。

「ゆきちゃんも

とってもエッチだよね」

「もー

またからかっているの?」

「ごめん」

「あの映画は絶対

彼が出来たら一緒に

見ようと思ってたの。

だから雪は

とってもうれしいの」

「それなら僕も光栄だよ」

「本当にそう

思ってくれる。」

「もちろん」

「よかったー

ほんとによかったー」

「ねーゆきちゃん」

「うん 何」

「やっぱり

なんでもないよ」

「何」

「何でもない」

彼女は急に無口になり

黙ってしまった。

先程まであんなに

はしゃいでいた

彼女からは笑顔が消え

何処か寂しげに

外をぼんやり見ていた。

そして、僕は考えていた。

僕の過去を少しずつ彼女に

話そうと心に決めていた。

でも、

僕の過去は余りに

暗かった。

僕は誰も幸せな

気分のしない

話を人に話すことを

快く思わない。

なるべくなら

避けてしまう。

ただ彼女には

知って欲しかった。

ありのままの僕を

もっと知って欲しいと

心から思い始めていた。

「ねー雪ちゃん」

「なあに」

彼女は優しく

僕を見つめた。

「何でもない」

「話にくい事なのね」

「・・・・・・・・」

「いいよ、竜治さん

私、何でも聞いてあげる。

例えそれが私に

とってつらい事でも

いいんだよ・・・

言って竜治さん」

彼女はとても

優しい目で

僕を見つめていた。

僕はその優しさに

切なさを

感じて胸が一杯になり

言葉が胸につかえて

声にならなかった。

彼女はそっとハンドルを

握る僕の手には彼女の手を

乗せ、僕を優しい眼差しで

見つめつづけていた。

僕が彼女を見て微笑むと

彼女は優しく

微笑みを返した。

それはまるで

マリア様のように

優しく包み込む

眼差しだった。

僕達は横浜から

鎌倉に向かって

車を走らせた。

お寺についた

僕達は白ちゃんを

先頭に手を繋いで

歩いた。

境内を回り庭が良く

見渡せる縁側につくと

僕は息を切ったように

彼女に話し掛けた。

「雪ちゃん・・・」

「なあに、先っきから

大丈夫だよ。雪は、
だから言ってよ」

彼女は満面の笑みを
浮かべて僕の顔を
覗き込んだ。
僕は勇気を出して
話し始めた。

「生まれてすぐに教会に
捨てられた……」

「えっ……」

「僕は生まれてすぐに
教会に捨てられたんだ。

だから、

兄弟が他に居るかどうか

わからないんだ。

ほんとはね。」

彼女は困ったように

僕を見つめた。

「ごめんね、

君に話したくて」

「うん いいの

よかったら

もっと話して」

「僕が捨てられた日は、

とても寒い日で、

雪が降っていた

らしいよ、

クリスマスの

夜だったんだ。

みんな家族の集う

暖かい暖炉で、

クリスマス

お祝いしてる時に、

僕はバスタオルを

何重にも巻かれて

マリア様の下で

眠っていたんだって。

おかしいでしょ。笑」

僕は暗い話に

ならないよう勤めて

明るく振舞っていた。

しかし、

彼女の優しい

眼差しは

僕の心の中を

見透かすように

優しく包んだ。

「だから、

僕の誕生日は12月25日。

それが僕の誕生日なんだ。」

そして、僕は沈黙した。

それを気遣うように彼女は

黙って僕に身を寄せた。

お寺の庭の境内に座り

庭から見える綺麗な池や

盆栽をぼんやりと見ていた。

しばらくの沈黙が続き

彼女を見ると彼女は息を

殺すように泣いていた。

僕は彼女を抱き寄せ

心で泣いていた。

「ごめんなさい。」

「何で雪ちゃんが謝るの？」

「本当にごめんなさい」

彼女は何故か泣きながら

僕に謝りつづけた。

「雪ちゃん

ありがとね。

うれしいよ。

ありがとね」

「・・・ごめんなさい・・・」

「やっぱりこの話は

今度にするね。

なんか湿っぽく

なっちゃったね。

また、泣いて。

ほんとに雪ちゃんは

泣き虫だね」

「ごめんなさい」

「また謝って。

おかしいぞ

謝るなんて。

何も悪い事して

ないのに」

僕が微笑むと、

涙と鼻水

でぐちょぐちょに

なった彼女は

真っ赤な顔をして

笑ってくれた。

白ちゃんは僕達の

横ですやすや

と寝息を立てて

寝ていた。

彼女と僕はそんな

白ちゃんを見て

笑いあった。

第五節 離れられない二人

帰りの車の中で、

彼女は僕に隙を

与えないほど

わいわい騒いで

楽しそうに

はしゃいだ。

僕にはそれが彼女の

優しさだと

すぐにわかった。

彼女は彼女の

明るさで僕の心に漂う

闇を引き離そうと

努力して

明るく接して

くれていた。

そして、彼女は

僕をからかい、

そして僕を笑わせた。

僕は彼女を知るたびに

彼女の優しさに

惹かれている。

そして、

その事に対して

少し臆病に

なっている自分を

知った。

僕は幸せを、

今、知ってしまった。

僕の人生は捨てられた

事から始まっている。

そして、

今の僕は手放したくない

幸せを手に入れて

しまったのだ。

失う事の怖さを

人一倍知っている

僕にとって、

それは、

重大な問題だった。

そんな僕の考えを

知ってしまったのか

彼女は途中から

余り話さなくなった。

僕はこの時気が付いた。

彼女は僕の心が

わかるのかも

しれないと。

僕が考え込むと

彼女は決まって

悲しい目をしている

気がしたのだ。

「雪ちゃんどうかした？」

彼女はただ微笑んで、

黙って

僕を見つめ続けていた。

車が首都高の出口に

近づく頃僕らは

何も話さなかった。

二人とも口には

出さなかったが

別れたくないと

思う気持ちは

お互いに通じ

合っていた。

「ね一竜治さん、

今日はもう

帰ってしまうんでしょ」

車をマンションの

駐車場に止めた時

彼女が寂しそうに

うつむき

目を曇らせて言った。

「明日は早いし、

それに、

明日提出しなくちゃ

いけないレポートがまだ

完成してないんだ。

だから今日は

帰って続きを

やらないと

いけないんだ」

「やっぱりそうだよね。

わかった。

それじゃ雪が

今度は竜治さんの事

送ってあげるね」

「いいよ

今日はゆっくり休んで」

「いいよ

雪もこの車運転したいし。

まだ運転した事無いから。

この車」

「何言ってるの雪ちゃん

君はまだだめだよ」

「また竜治さん雪のこと

子ども扱いして」

「そうじゃないでしょ

免許も無いのに乗ったら

だめでしょ」

「やっぱり雪の事

子ども扱いしてる。」

「してないよ

あたりまえのことを

言っているんだ」

「雪はちゃんと

免許もっています。」

「？」

「まだ国際ライセンスしか
持ってないけど、アメリカ
で免許は取っているの
ぶんぶん」

「えっ それじゃー
運転できるの？」

「運転できるし、
法律上問題ございません。
それに、雪はもう18才」

「ごめんね
しらなかったよ
君はすごいね」

「ちょっと引いた？」

「うん ちょっと」

「もー

竜治さんの意地悪 笑」

「へー雪ちゃんは

すごいね。僕より

何でも出来てしまうから

少しへこんじゃうよ」

「では、では、

私の王子さま。

この召し使いに

貴方様をお送りする事を

許可していただけますか？」

彼女は悪戯げに僕に聞き

僕は笑ってそれに答えた。

「わかった

おねがい、しちゃう」

彼女が車を走らせると

その車はジェットコースター

へと姿を変えた。

猛スピードで走る車は

次々に車線を変え、

みるみる前の車を

追い越した。

そのテクニックは素早く、

あらゆる車を

次々に抜いて行った。

「わーお けっこう

この車加速するんだね」

彼女は僕に笑いながら

話し掛けた。

「スピード出して

いるんだから

ちゃんと前見てね

雪ちゃん」

「わかってる

竜治さん」

彼女は運転も僕より

数段うまかった。

車を寮の前につけ

彼女は車のヘッドライト

を消して

エンジンを止めた。

「竜治さん

行っちゃうの?」

「どうしたの?」

雪ちゃんそんな顔して。

もう会えない

わけじゃないよ。

またすぐに会えるんだし、

だからそんな顔

しないで」

「じゃー

サヨナラのキスは」

僕はゆっくり彼女を

抱き寄せ

長いキスをした。

僕が何度も彼女から

離れようと

する度に彼女はそれを

拒み、僕らはその場所で

熱いキスをし続けた。

サヨナラを言った二人の

唇はうっすらと

腫れていた。

第六節 レポートの勘違い

月曜日、

僕は学校で、

重大な事を知った。

僕が提出するために

作成したレポートは

別の教科のレポートで、

今日提出するはずの

物ではなかった。

僕は提出するレポートを

勘違いしていたのだ。

僕は教授に何度も頭を

下げ、

頼み込んでどうにか

提出を金曜日まで

延ばしてもらった。

「風間君。

君はまじめな生徒だ。

確か君は奨学金をもらって、

学費の免除を受けていたね。」

「はい。教授」

「いいだろう。

今回は大目に見るよ。

金曜日までに

提出しなさい。」

「ありがとうございます。」

「今度からは

気をつけるんだぞ。

君も奨学金がもらえないと

大変だろう?」

「はい、

それでもう一つ

ついでに頼みたい事が

あるんですけど」

「どうせ成績が落ちても

奨学金が貰えなくなるから

Aをくれと私に

頼むつもりだろう」

僕がしまったと

言う顔をすると

教授は手に持った出席簿

を僕の頭にぶつけいった。

「ばか者

そんなに人生甘くないぞ

お前もしっかりやれ

以上」

教授は笑って

僕の肩を叩き

僕は頭を下げて

教授を見送った。

午前と午後の授業を

命一杯受けて

帰宅した。

すぐにレポートの

作成にとりかかり

風呂に入らず

何日も過ごした。

頭は

もじゃもじゃになり、

髭が汚くそのままに

伸びきっていた。

僕はそんな事を

気にもせず、

学校から自宅の道を

行き来した。

木曜日の午後、

僕は例の僕の

秘密の通学路を歩き

自宅へと向かって

足を進めていた。

梅雨が明けたばかり

の午後は

蒸し暑く、

僕は汗をうっすらと

シャツに染み込ませて

ぼんやりと

景色を見ながら歩いていた。

そして、手前のベンチに

見覚えのある女性が

座っていることに気付いた。

・ ・ 前川えり ・ ・

僕の前々の彼女だった。

「やあ」

僕が挨拶すると

彼女は笑って

手を振った。

「竜治

久しぶり

元気そうね」

「ああ

君こそ元気そうだね

えりさん」

「えりさん？

そうよね。

もう呼び捨てには

してくれないわよね」

彼女はちらりと下を

見てから僕に言った。

「ねー竜治

座らない。

ここ空いてるわよ」

「ごめん

余り時間無いんだ」

「あらっ

ポーとして歩いてる

貴方が？」

「わかったよ

でも、

本当に余り

時間無いよ」

「いいわ

さっ早く座って」

「どうしたの？

こんな所で」

「なんだか

懐かしくなって

ここに来てみたの。」

「そーだね

君とここで

よく話したね。」

「憶えていてくれる？

あなたも……」

彼女は真剣な

眼差しで僕を

見つめた。

「竜治怒らないで

聞いて欲しいの。

.....

お願い・・竜治・・、

私とやり直して……。

勝手なお願い

なのもわかってるわ。

貴方を傷つけた事。

本当に悪かったって

思ってるの。

でも、

聞いて、お願い。

もし、

もう一度私とやり直して

くれるのなら

私はもう二度と

浮気なんかしない。

だから、

おねがい竜治

私をもう一度・・・

おねがい

竜治

おねがい」

僕はただ黙って

地面を見つめていた。

第七節 元カノ

えりと付き合い始めて

三ヶ月が過ぎた

頃の出来事だった。

僕は詰に詰めた

大学の講義や、

レポート作成など

忙しい毎日で、

あまり彼女に

会えずにいた。

そんな時、

僕は突然彼女の所に

出向いて彼女を

脅かせたい

と悪戯心にかられ、

えりの好きな

店のケーキを

片手に、

彼女の住む

マンション

に出かけた。

僕の心は久しぶりに

会える喜び

にワクワクしていた。

彼女は僕に

抱きつき

僕の突然の

訪問を喜んでくれる

と想像すると

拍車をかけるように

楽しい気分

になっていた。

僕は以前、

りえが僕に渡した

合鍵を鍵穴に挿し、

そっと音がしないよう

に回した。

彼女がリビングに

居なかったので

留守だと思った僕は

ケーキをテーブル

の上に置いて

ソファに座った。

えりが帰って

くるまで待とう

と新聞を

手にした時、

寝室から彼女の

声が聞こえた。

僕は寢室のドア

の前に立ち

静かに寢室のドアを

少しだけ開いた。

「あっん、あっん、

いい、いい」

ベットの上では

僕の知らない

三十代の男性が、

えりを騎上位

に乗せて腰を

優しく突くように

揺らしていた。

僕は呆然として

その場に

立ちつくした。

僕は覗きでもする

ようにわずかな

隙間からその光景を

見ていた。

僕の心からサー

っと何かが消えて

僕は何も考えられずに

その光景を

見ていた。

えりが男性に

ペニスを挿入され、

気持ちよさそうに

身をくねらせ、

快感に酔いしれる

姿を見るほど

僕の心は冷めていき、

冷酷にそれを

見つめている自分が

物凄く恐ろしく

感じた。

僕は自分のその姿に

恐怖を覚え、

我に返った。

ゆっくりと

気づかれないように

僕はドアを閉め、

えりの部屋に残した

僕のわずかな

洋服を、

持ってきた時と

同じバックに詰め、

短い最後の

手紙を書いて

お土産のケーキ

の箱の上に載せ

て部屋を後にした。

えりへ

僕達はもう

別れよう

さようなら

竜治

僕は部屋の鍵を閉め、

郵便受けに

彼女の部屋の

合鍵を入れて

自分の住む寮へと

そのまま向かった。

やり場のない気持ちは

しだいに僕の心に浸透して、

そして僕の心は少しずつ

凍っていった。

それきり僕らは

連絡を絶ち、

会う事はなかった。

第八節 前に進んで

えりは僕に抱きつき

そして、キスを奪った。

僕はされるがまま

地面を見つめていた。

彼女はゆっくりと僕から離れ、

凍るように僕を見ていた。

「えり・・・

ごめん。

もう他に付き合い始めた

人がいるんだ。」

「そう・・・

・・・なんだ・・・

いつから・・・」

「つい最近かな？」

「ちょっと

遅かったみたいね」

「えり・・・さんは

例の彼とは

どうなったの？」

「貴方と別れる原因に

なった彼の事？」

僕が笑って頷くと

彼女も笑って答えた。

「すぐに彼とは

終わったの。

わたしって馬鹿ね。

失ってから気づいたの。

貴方を愛していた事に」

「今は付き合ってる人

いないの?」

「もう、貴方にうそを

つきたくないし、

その必要も無いから言うけど

実は二人ほど付き合ってるの。

一人の人じゃ物足りなくて」

「まだやってるの 笑

変わらないな君は」

「貴方なら私を

変えられるのに」

「僕はだめだった

じゃない 笑」

「それは昔の事よ

今は違うもの」

「違うよ、

きっとね 笑」

「どんな人

竜治の新しい彼女

・・・さんは」

「とっても

綺麗な人だよ。

優しくて、

彼女といると

安心できるんだ」

「ま一妬けるわね。

今振った女の前で

よくそんな事言えるわね」

「君が聞いたんだぞ 笑」

「そーだった。笑」

「君も相変わらず綺麗だね」

「あら、

今度はうれしい事

言ってくれるのね。

そういう貴方も

相変わらず優しいのね」

「本当に綺麗だよ」

「

さてっと、振られた女は

いさぎよく退散するわ。

浮気がしたくなったら

いつでも私に連絡してね。

期待せずに待ってるわ。

それと、

もし彼女と別れたら

私に一番最初に

連絡してね。

いつでも飛んでくるから。」

彼女は頭の上に

載せていた

サングラスをかけて

ベンチから立ち上がり

僕が来た道を

歩いて去っていった。

僕が彼女をベンチ

から見送ると

道の影にこちらを

覗く人影を見つけた。

人影はさっと

道の奥に消え、

僕は見覚えのある

人影の主を

記憶の中で

照合しようとしたが、

記憶から人影は消え、

その努力は

不意となった。

僕は立ち上がり

駅へ向かって

歩き出した。

過去に背をむけて

僕は前に進んで

歩いていた。

金曜日の授業を

全て済ませ。

寮の自分の部屋から

雪ちゃんの携帯電話に

電話をかけた。

何度電話しても

繋がらないので

メッセージに土曜日、

修さんの

マンションに行く

約束がある事

だけを伝えて

電話を切った。

久しぶりの風呂に入って

すぐに寝てしまった。

そして、

僕はこの後に起きる

事件を知らなかった。

僕は知らぬ間に

彼女を傷つけていた事に

気づいた時、

彼女は僕に

泣きながら言った。

「私は竜治さんの何？

何なの？」

雪ちゃんは

唇を震わせて

僕に迫るように

言った。

第一節 土曜日

土曜日

午前七時に寮を出て、

修さんのマンションに

向かった。

僕は雪ちゃんに

また会える喜びで

胸を弾ませ

マンションへと

向かって歩いた。

手には修さんから預かった

ダンボール箱をかかえ

足は地に付いてないように

軽く小走りになっていた。

早く彼女の笑顔が見たくて

僕はうきうきした気持ちを

抑える事に必死だった。

修さんをフロントのモニター

から呼び出してエレベータ

を降ろしてもらおうと僕は

ひまわりの花束を

後ろのズボンの中に入れて

見えないように隠した。

エレベータが玄関の前に

つくと僕はドアを開け

マンションの中に

入っていった。

僕は玄関で待つ彼女の笑顔

を期待したが、そこに彼女

の姿は無かった。

白ちゃんだけが

ぽつんと座り

僕を暖かく待っていた。

白ちゃんの頭を撫でながら

僕は大きな声で言った。

「修さーんいる？」

「お一竜おはよう。

こっちにいるぞ」

「雪ちゃんは来ているの？」

「あーあいつ

自分の部屋にいる

はずだよ。」

僕がダイニングにつくと

修さんはソファーに座り

ファッション雑誌を

読んでいた。

「おー持ってきたか」

「あっこれ

おじいさんの資料

ここにおいて置くね」

「何だよ その後ろのものは」

「あっ これ

雪ちゃんへの

プレゼント」

「お前も結構まめだな」

「ひまわり」

「馬鹿の一つ覚えか

お前は、

いくらあいつがその花を

好きでも、普通今度は

変えてみるもんだろ」

「そっかな」

「お前

花束を持ってくるところを

見るとまさかあいつの事

気に入ったって事か？」

僕は雪ちゃんに固く

口止めされて

二人のあの日の

夜の秘密を

修さんに話して

いなかった。

「ははーん

赤くなっただけは。

やっぱり凶星か。

それもって、

行ってこいよ。

部屋はわかって

るんだろ」

修さんは僕を

からかうように言った。

僕はテレを隠すように

修さんをにらめつけて

彼女の部屋に向かった。

「なんだあいつ。

おっかねーの

ちっとからかった

だけだろ」

修さんは独り言を

言うように

つぶやいていた。

「ゆきちゃん

元気だった。」

僕は花束を手に勢いよく

ドアを開けた。

彼女はベットに横になり

顔を隠すように布団を

頭まで覆っていた。

「雪ちゃんおきて

もう朝だよ」

「うんわかってるよ」

「じゃー早く起きて

君に見せたい物

があるんだ。

だからおきて」

「まって竜治さん

私今とっても

ぶさいくだから。

引っ張らないで。

こんな顔貴方に

見せたくないの」

「何言ってるの？

はやく」

「やめて、

引っ張らないで」

「早く、

ゆきちゃん見て見て」

雪ちゃんは少しだけ

毛布を降ろして

僕の花束を見た。

「まあ

綺麗なひまわり。

ありがとう。

きれいね。」

「さー早く僕に

顔を見せて」

彼女はゆっくりと

毛布を降ろし

僕に顔を見せた。

彼女の目は

ウサギのように

真っ赤で

少し腫れていた。

「どうしたの雪ちゃん。

また、泣いていたの？」

彼女は首を横に

振りながら

また涙を流していた。

「どうしたの？」

雪ちゃん

修さんと

喧嘩でもしたの？」

「何でもないの

竜治さん。

どうしたのかしら、

私。」

彼女は必死で

笑いを浮かべ

そして泣いていた。

僕は彼女を抱きしめて。

彼女が落ち着くまで

そうしていた。

「だいぶ落ち

着いたみたい。

竜治さんは

お兄ちゃんのところに

戻って、

余り二人で長くいると

お兄ちゃんに

気づかれてしまうから。

大丈夫。

さー早く行って」

僕は後ろ髪を

引かれながらも修さんの

いるリビングに向かった。

第二節 気まずい食事

「じゃあー

そろそろ飯にしよう。

竜」

修さんは資料を

捨てるように

置き、僕に言った。

「どうしたんだ

雪その目。

真っ赤じゃないか」

「何でもないの

お兄ちゃん」

修さんは心配そうに

雪ちゃんを気遣い、

それ以上何も聞かなかった。

三人で食卓を囲み食事をした。

僕と修さんは雪ちゃんの様子

を心配してお互いに見つめあい

顔を見合わせていた。

「なあ一雪

竜のやつちょっと芸が

ないと思わないか？

またひまわりなんてなー」

「あらどうして

お兄ちゃん

とっても素敵じゃない。

私はうれしいわ

ごめんなさいね

竜治さん」

「いや、いいんだ

ありがとう雪ちゃん」

「そうか？

そうだよな

竜治もまめだよな

わざわざお前の為に

花束を持って

くるんだから」

「あらお兄ちゃん

竜治さんがまめ

ですって。

竜治さんは私に

電話もくれないし

一度メッセージに

今度お兄ちゃんの

ところに行くよ

って入れただけの人よ。

そんな人の何処が

まめな人なの。

まめな人は

もっと頻繁に

連絡をくれる人の事

を言うものよ。

誘ってもくれないん

ですもの。

それがまめな人

なのかしら?」

僕は初めてみる彼女の一面を

ひやひやししながら見ていた。

「な一雪、

お前、今日俺に

やけにあたってない?」

「ごめんなさい。

お兄ちゃん」

「な一竜治

お前達もしかしてなんか

あったのか?」

「何言ってるのよ

お兄ちゃん」

「な一竜治

俺に話してないこと

なんかあるだろう?」

「お兄ちゃんやめて」

「わかったよ

でも、今の会話からして

雪は竜治に怒ってるんだろ?」

修さんの問いに彼女は

何も答えず食事を続けた。

「そうなの?修さん」

「そうだろ やっぱり。

お前雪といつ話した。」

「今話してるよ」

「そうじゃないよ

今週何回雪に連絡した?。

なんか約束してたのか?

雪と?、

原因はきっとお前だ

よく考えて後で

謝って置けよ。

俺からの忠告だ。

あいつは怒らせると

たちが悪い。」

「何を二人で

こそこそ話してるの

お兄ちゃん」

彼女は修さんを

にらめつけ

修さんは言葉を失い

パンを口に黙って運んだ。

僕と修さんは彼女の迫力に

圧倒され、

そのまま黙って食事

を取った。

第三節 パズル

食事を済ませた後

雪ちゃんも

加わり三人で

資料を読みあさった。

雪ちゃんは明るさを

取り戻し、いつもの優しい

瞳で僕を見つめてくれた。

僕は彼女に

見つめられるたびに

幸せを心の奥底から感じ

自然に彼女に微笑んだ。

彼女は僕からすぐに目を

そらして、

資料を調べていた。

僕はこの時、

何処か避けられている

ことに気づき始めていた。

夕食の準備を

三人で済ませ、

食卓を囲み僕達三人は

自分達を読んだ資料に

ついて情報を

交換し合った。

「竜 お前が読んだ

資料は何の事について

書かれていた?。」

「うん、それがね。

イエス・キリストの

生涯についてかかれていたよ。

でも、僕が知っている

内容とは少し

違っていた気がする。」

「雪、

お前の読んだ資料は

いったい何について

かかれていた?。」

「わたしの

読んだ資料には

古代エジプトの

エメラルドタブレット

についての説明だったわ」

「そーか

俺が読んだ資料は

東洋思想

についての資料だった。」

「ねーお兄ちゃん

おじいさんは日本の

古代から伝わる

伝説を探して

いたのよね。

なぜ、それに

かかわりの無い

こんな物まで

調べていたのかしら？」

「分からない、

僕達の知っている情報は

まだ断片的で

つなげようが無い。

このまま

続けてみないと

分からないよ。

きつとな」

「このまま

続けるとしても

相当の時間を費やすね

多分、

このダンボールの

資料は全体の一部

に過ぎない。

何故なら

僕の読んだ資料は

まだ続きがあるはずだ。

途中で終わって

しまってたから」

「その通り

さすが竜だな

これはほんの一部さ

実は蔵の中にまだ

この手のダンボールが

ぎっしりとあるのさ」

「本当にお兄ちゃん。

なんだか

気が遠くなったわ」

「雪、それは

ダンボール箱

全てを見てから

言ってくれ、

泣けるぞきっと」

「そんなにあるの？

資料って」

「ああ 今度

全部お前達に見せるよ。

楽しみにして

おいてくれ。

おっと、そうだ、

今日も

俺は女のところに

泊まるからな。

竜お前は どうする。

なんなら、送るぞ」

「んーと

僕は どうしようかな」

ちらりと彼女を見たが

彼女は僕に目を合わせずに

下をずっと見ていた。

「修さん悪いけど

今日も修さんの部屋

借りていいかな？

まだ、

ちょっと資料を

調べたいし」

「ああ

分かった好きに

使ってくれ

じゃ俺は行くよ。

後片付け、

後は頼んでいいかな？」

「いいわお兄ちゃん

大丈夫

私がやっておくから」

「悪い、

それじゃ後は

よろしくな。」

「気をつけて

修さん」

「おう

それじゃ

行って来るよ」

修さんは車の鍵を

手に取り、

出かけていった。

第四節 疑う心

修さんを見送った僕は、

雪ちゃんを見つめつづけ

口づけを交わそうと

ゆっくりと

彼女に近づいた。

彼女は僕の唇を

避けるようにかわし、

冷たく言った。

「竜治さんは

お風呂に行って、

後は一人で

片付けるから」

やはり彼女は何処か

僕を避けている。

僕はお風呂に

入りながら

考えていた。

お風呂から上がり

彼女に

お風呂に入るよう

進めた後、

リビングで彼女が

お風呂を

済ませるまで待っていた。

僕が彼女に

連絡をしなかった事を

後悔しながら

ずっと待ちつづけた。

彼女は風呂場からあがり、

髪にタオルを

巻きつけたまま

冷蔵庫から

麦茶を取り出し、

グラスに注ぐと

一気に飲み干した。

空になったグラスに

もう一度

麦茶を満たし、

それをもって

僕の隣に座った。

「はい。

のどか沸いていない？」

「ありがとう」

僕がそのグラスを

取ろうとすると

彼女はグラスを

胸元に隠すように持ち

僕に言った。

「だめ、

私が飲ませて

あげるから」

子供のような

彼女のしぐさが

とてもかわいらしく

思えた。

彼女は自分の

口の中に

麦茶を含ませ

僕に口づけをして

それを僕に与えた。

彼女の舌が

僕の口の中で

絡まり、唾液と共に

麦茶がこぼれた。

彼女は激しく僕を求め

僕の舌を強くすった。

僕はそのまま彼女を

押し倒し彼女のバギナに

手を当てた。

すると彼女は僕の手を

止め真剣な眼差しで

僕に言った。

「お願い。竜治さん

今日は私に何もしないで。

ただ一緒に隣で

寝て欲しいの」

「わかったよ。

そうしよう。

さっ君のベッドで

二人で寝ようよ」

僕は彼女の手を取って

彼女の寝室へと二人で

向かい、寄り添いあって

眠りについた。

その日僕は

一睡も出来ずに

朝を迎えた。

僕は自分の欲望と戦い

夜を明かした。

僕のペニスは

硬く硬直して熱を持ち

ペニスの先からは

粘り気のある液体が

溢れ出していた。

それでも、彼女が隣で

すやすや寝ている姿を

一晩中見ていられたので

幸せな気持ちで

いっぱいだった。

彼女は時々寝言で

怒り出し

そして、泣いていた。

その後は幸せそうな顔で

愛してると言っていた。

彼女は夢の中でも

無邪気な人なのだと

それを見て思った。

僕は彼女の細い

肩を抱き寄せ

彼女の唇を奪った。

何度も何度も彼女に

キスをした。

彼女は薄く目をあけて、

僕の唇の中に舌を入れ

僕は優しく絡ませた。

「おはよう。竜治さん」

彼女は目を覚まし

にっこり微笑んで

僕に言った。

「おはよう。

ゆきちゃん」

僕達は小鳥のように

何度も口づけを交わし

朝の挨拶をした。

「竜治さん。

私、幸せ。」

「ゆきちゃん。僕も」

すると彼女はまた泣いた。

「泣かないで。

雪ちゃん。

君を悲しませるのは

いったい何？

僕に話して

くれないかい。」

「何でもないの

ごめんなさい。

だだうれしくて」

「雪ちゃんごめんね

君にまったく連絡しないで

．．．．

僕もちょっと色々と

忙しくて、本当に

ごめん。」

「いいの。

わかっている

つもりだから。

いいの。」

彼女は僕に抱きついて

またしくしく泣いていた。

「私、

泣いてばかりだね。

貴方に会って

泣いてばかり

本当にごめんなさい。」

「どうしてまた謝るの

何も悪くないぞ」

僕が微笑むと彼女は

また僕にキスをねだった。

「今日はずっと

私のそばに

いてくれたのね」

「君がまた僕を探して

泣き出したら大変だから

起きるまで待っていたんだ」

「ありがとう竜治さん」

「でも、ちょっと

トイレに行っても

いいかな」

彼女はにっこり笑い

流れ出る涙を拭いて、

「どうぞ

いってらっしゃい」

そう言った。

第五節 不安な雪乃

トイレを済ました僕は
雪ちゃんの待つベットに
入り込み何時間も
ベットの中で過ごした。

彼女の髪をかきあげ
彼女を見つめ何度もキス
をして体をよせた。

彼女の僕を見つめる目は
どこか寂しそうで、
僕は心の奥に不安を
感じていた。

僕達は互いに見つめあい
彼女は僕の髭を不思議そうに
見ながらそれを手で触った。

「竜治さんの 髭
竜治さんの 目

竜治さんの 鼻

竜治さんの 睫毛 ながーい

竜治さんの 唇」

彼女は人差し指で軽く触れ

ながら声に出していった。

「雪ちゃん

君は何か心配事でも

あるの?」

「・・・・・・・・」

彼女は子供のような眼で

僕を見て言った。

「何でもないの」

「分かったよ

話したくなったら

話せばいいよ。

それでいいかい？」

彼女は小さく頷いた。

「ね一竜治さん

雪は竜治さんにとって

どんな存在なの？」

「雪ちゃんは

僕にとって一番

大切な存在だよ」

彼女は悲しそうな目で

聞きなおした。

「そうじゃなくって」

「失いたくない存在」

「ちがうのー」

「愛してるよ

雪ちゃん」

彼女の目から涙が

また溢れ出して

彼女は僕を抱き寄せ

強く体を押し当てた。

「雪は一番なんだ？」

「もちろん」

「うれしい。竜治さん」

「ねー竜治さん

．．．．．」

「何？」

「何でもない」

彼女は起き上がり

僕を覗き込むように

優しい眼差しで言った。

「そろそろ起きましょう。

もうお昼すぎちゃうから」

彼女は僕に背を向けて

恥ずかしそうに

着替えを始めた。

僕は彼女の着替える所を

ちらちら見つめ、

ドキドキしながら

自分の服を着た。

第六節 すれ違い

二人でキッチンに立ち、

昼飯の準備をした。

彼女はいつもと

何処か違っていた。

何処か寂しげで、

見ているだけで

痛々しさの

ような物を感じた。

僕は彼女を

どうにか元気づけ

ようと話し掛けたが、

彼女は何処か上の空で

なんども僕の質問を

聞きなおした。

彼女もできるだけ僕に

心配をかけないように勤めて

明るく振舞ったが、

僕にはそれが何処か

痛々しく見えた。

彼女は何かを悩んでいる。

僕は何とかその悩みを

聞いて、一緒にその問題に

立ち向かいたかったが、

彼女は僕にその悩み事を

打ち明けてはくれなかった。

僕は何もして

あげられない

自分の不甲斐なさに、

どこかいらだちに似た

感情を自分自身に向けていた。

「竜治さん ありがとう」

微笑みながら僕に言う

彼女を見て僕は不安に

掻き立てられた。

もしかしたら、彼女は

僕と深い関係に

なった事を

後悔しているのかもしれない。

やはり僕達は少し急ぎすぎ

たのかもしれない。

もっと時間をかけてお互いを

よく知り合ってから

夜を共にすべき

だったのだろうか？

僕はそんな事を考えていた。

僕はどんな事があっても

この雪ちゃんへの思いを

忘れたくないと

強く思っていた。

こんなに女性に

惹かれた事は

僕の今までの

人生に無かった。

初めての本当の意味での

恋だった。

僕は勇気を振絞り

雪ちゃんに聞いた。

「ねー雪ちゃん。

正直に答えて欲しいんだ。

例えそれが僕を

傷つけるとしても

本当に正直に

答えて欲しい。」

僕は彼女の目を見つめ

彼女はコクンと頷いた。

「君は

あの日の夜の事を

後悔しているの?」

「どうして、・・・・・・・・

どうしてそんな事

私に聞くの、竜治さん?

貴方は私の事

ぜんぜん分かってない。

いつも、

私がどんな思いで

貴方を見つめ、

一緒にいたいと

願っているのか

貴方はぜんぜん

分かってくれていない。」

彼女は突然泣き出し、

その場にしゃがみこんだ。

「ごめん雪ちゃん」

僕は慌てふためいて、

彼女の肩を抱いた。

「やめて、竜治さん。

私にこれ以上

優しくしないで、

貴方の優しさは

残酷よ。

貴方は私をけっして側に

置いてくれないじゃない。

私がどんな思いで、

貴方の電話を

待っていたと思うの？

こない電話を何で

待っていたのよ。

そんな事、

考えた事ある？

それなのに貴方は

私に聞くの？

後悔したかですって？

それなら私が

竜治さんに聞きたいわ

貴方は私と

.

私は竜治さんの何？

何なの？」

予想していない

展開に僕は

ただ慌て、何も言えず

その場に立っていた。

彼女は泣きつづけた。

僕は彼女の背中を撫でて

抱き寄せようとする

彼女はそれを拒んで言った。

「お願い竜治さん。

今は雪をそっとしておいて。

一人になりたいの。」

僕は何もいえないまま

部屋を後にした。

第一節 別れの予感

翌日僕は一日中

ぼーとしていた。

雪ちゃんのこと

ばかり考えていた。

彼女が何処か遠くに

行ってしまふ

ような気がして、

何処か

落ち着けずに

一日を過ごした。

帰宅して

すぐに雪ちゃんの

携帯電話に電話しても

留守電になっていて、

まったく繋がらない。

何度も受話器をおき

その度に僕は先週彼女に

まったく連絡しなかった事を

後悔した。

次の日も、

その次の日も

彼女は捕まらなかった。

僕は修さんに連絡して、

大学の授業が終わってから

会う約束を取り付けて

ジャズ喫茶で待った。

喫茶店で僕は

ミルクティー

を注文してこの店の

僕の特等席に座った。

カウンターテーブルの

端から二番目の僕の

お気に入りの場所だった。

「竜治君、久しぶりだね」

カウンター越しに

マスターが

僕に話し掛けた。

喫茶店の中は昼間でも

薄暗く、

ネオンが綺麗に

光を放ち、

淡い青色とピンク

が優しく部屋を

演出していた。

僕とマスターは世間話に

花を咲かせて色々話した。

僕はマスターに僕の好きな

シンガーの音楽を

かけてくれるように

頼むと、

マスターは快く引き受けて

その曲を流してくれた。

10分ほど約束の時間を

遅れて修さんが

僕の隣の席についた。

「竜治どうした？

しけたつらして？」

修さんは僕の顔を

見て言った。

「わかる？

やっぱり」

「なんだ 悩み事か？」

僕が黙っていると

修さんは

優しく僕に言った。

「幾らだ？」

「？」

「幾ら必要なんだ

貸してやるから

言ってみろ」

「違うんだ。

お金じゃないよ」

「そうか

じゃーなんだ

お前が恋の悩みとは

考えられないし・・・」

「そっかな実は恋の

悩みだったりして・・・」

僕は照れながら言った。

「何？ そうなのか？

で、誰なんだその相手」

「ちょっと

話しづらいな」

「人を呼びつけておいて

それは無いだろ。

早く言ってみろよ。

誰なんだその相手は」

僕は顔を真っ赤にして

修さんに話した。

「実は雪ちゃんなんだ」

「ははーん

そうか、

なんとなく

そうじゃないかと

思っていたよ。

で、妹には伝えたのか？」

「もちろん伝えたよ」

修さんはその僕の答えを

聞いて気まずそうに言った。

「な一竜

実はお前に

隠していた事があってな。

あいつ、

男にまったく

興味が無いんだ。

レズなんだ。

だからお前も

気を落とさずに

新たな恋を探せ。」

「修さん、

そんな嘘は僕には

通じないよ。

修さんが嘘を

つくとき必ず

鼻をそうやって何度も

搔くよね。

だから、

嘘はつかなくていいよ」

「わかった竜治。

そうだなお前に

嘘はつけないな。

聞いてくれ竜治。

あいつは男を

信用できない。

それは、

俺や親父のせいでもある。

俺や親父が

多数の女性と同時

に付き合っ、

女の人に嘘を付いて

いるのを

知っているし、

それを見てきた。

だから、

きっとあいつは

男を好きになると、

そいつに近づこうと

しない。

それ以前に

男を自分に近づけようと

しないんだ。

昔から。

だからお前を

誕生日に呼んでくれ

と頼まれた時は

俺もビックリしたし、

うれしかった。

だがな・・・竜治

昨日突然あいつは親父の

仕事先に行くと言って

タイ行きの飛行機に乗って

飛び出していったんだ。

あいつが突然そんな事を

言ったので

何かあったのかと

思っていたが、それが

お前の事だとは流石の俺も

わからなかったよ。」

僕はじっと

修さんの目を見つめ続け

話を聞いた。

修さんは

僕を気遣うように

話し続けた。

「たぶんあいつはお前と

距離を取りたくてタイに

行ったんだと思うよ。

あいつが進んで親父の仕事を

手伝う時は何かあるからな」

「そうか、

雪ちゃんは今

タイに居るんだ。……」

「竜治、

女はあいつだけじゃない。

他にいい女紹介してやるから

元気出せよ。

俺はあいつに振られる

男を何人も見てきたし、

このパターンは

初めてじゃない。

お前はきっと

振られたんだ。」

「やっぱりそうかな？」

「多分そうだよ。」

「雪ちゃんと

連絡は取れるの

修さんは？」

「二週間は連絡が

取れないぞ

きつとな。

今、親父と雪が

行ってる場所は

まだ開発が

進んでないし、

電話も無い場所だ。

ポケットに

戻れば連絡の

取りようもあるが、

おそらく二週間は

戻らない。」

「じゃー

ポケットの滞在先

の電話番号だけでも僕に

教えてくれないかな。

修さん。」

「それはかまわないけど

国際電話は高くつくし、

何時つかまるかも

分からない。

それより、

あいつの仕事で

使っている

メールアドレスを

教えるよ。

ポケットに戻ったら必ず

あいつはメールの確認を

するはずだから、

その方が確実にあいつが

お前のメールを読む機会を

与える事が出来る。

だがな、竜治、

お前には悪いが、

あいつがもし、

お前の事を

迷惑だと思っているようなら

お前に協力できない。」

「分かった修さん。

僕も彼女に僕の気持ちを

きちんと伝えるよ。

それでだめだったら、

きちんと諦めるから。

だから、

教えてくれないかな

雪ちゃんのメールアドレス」

修さんは黙ってコースター

を手にとり雪ちゃんの

メールアドレスを

書いて僕に渡した。

「竜治、例えあいつが

お前を振ったとしても、

俺達の関係は何も

変わらないよな?」

「当たり前だよ。

その時は慰めてよ

修さん」

「OK ちゃんこの胸を

貸してやるから思いっきり

振られて来い」

「ねーもう振られる事が

前提なんだね」

「ごめん 竜治

まっがんばれよ」

修さんは僕の肩を叩いて

笑った。

第二節 返事のない手紙

僕は大学のコンピューターに向かい
彼女への短い手紙を毎日のように
書いた。

お元気ですか?雪ちゃん

今日、修さんから君がタイに
行った事を聞きました。

何度か君の携帯に電話したけど
つながらなかったよ。

僕はやはり君に避けられているのかな?

それでも僕は構いません。

これから僕の正直な気持ちを

ありのままに伝えたいと思います。

僕は貴方を好きに成ってしまいました。

愛しています。

雪ちゃん。

僕の心は君で一杯です。

僕と付き合ってください。

君が僕に言った事を僕なりに

考えていました。

私は貴方のいったい何？

そう、君は僕に聞きました。

僕はそのとき一番大切な人

と答えた事覚えていますか？

でも、もしかしたら君は違う答え

を聞いたかったのではないか

なんてかってに、今思っています。

違っていたらごめんね。

君は僕の大切な人

僕の彼女

そうであって欲しい人だよ。

君さえ良ければ付き合っただけ欲しい。

これが僕の正直な気持ちです。

君にまだ言ってなかったね。

だからここでいいます。

僕の彼女になってください。

よろしくお願ひ致します。

僕は貴方を愛しています。

今日はこれぐらいで

終わりにします。

また、書きます。

それじゃ

お元気ですか雪ちゃん

今日は一日中貴方の事を

考えていました。

君に逢いたいです。

君は今何をしているのですか？

僕は君に振られたのでしょうか？

それだけでも僕は知りたいです。

僕は君に振られたとしても

君を思いつづけていいですか？

それはきっと迷惑だね。

僕は今何も手につきません。

ずっと君の事を考えています。

お元気ですか雪ちゃん

もし、君が僕を信じてくれなくても

僕は構いません。

何故なら僕は貴方を愛しています。

それだけです。

でも、もし君が僕を避けているのだと

したら、その理由が知りたい。

君が僕を避けても僕は構わない。

君を愛しつづけるから、きっとね。

僕はあの時の二人を信じたいんだ。

だから正直に話して欲しい。

僕を避ける理由を。

僕は君を愛している。

だから君が一番幸せになれる

方法を見つけて欲しい。

例えそれが僕との別れだとしても

僕はそれで構わない。

喜んで君を送り出すよ。

後でいっぱい泣くだらうけど

修さんが胸を貸してくれる

って言ってたから、

気にしなくていい。

できれば、その後友達になって欲しい。

僕は友達として今度は君を

愛するから。約束するよ。

だから、僕を避けないで欲しい。

君に避けられると僕の心は

ずたずたに引き裂かれてしまう。

ちょっと自分自身で驚いているよ。

こんなに自分が女々しいなんて、

今まで知らなかったよ。

君に出会ったおかげで

自分の女々しさを知ってしまった。

また書きます。

それじゃ

お元気ですか雪ちゃん

今日で何日君と話していないのだろう？

僕には永遠に感じるほど長い時間

君と逢っていないような気がします。

お仕事は順調に進んでいますか？

今日貴方の夢を見ました。

君は泣いて僕にすがり

何も話してくれないのです。

だから、僕は困ってしまいました。

僕が君にキスをすると、

君は暖かく僕を抱いてくれました。

君の香りが懐かしいです。

帰ってきたら連絡ください。

待っています。

僕は今レポートに追われて

やっています。

もうすぐ夏休みですね。

でも雪ちゃんはいつもやすみだもんね

羨ましいよ。

でも今は工作中だね。

がんばって。

それでは、また書きます。

お元気ですか 雪ちゃん

今夏休みをどう過ごすか考えています。

本当の事を言えば、

一日でも長く君と一緒に過ごしたい。

でも、君はどうなのかな？

こんなふうに思ったら迷惑なのかな？

それでもいいです。

僕は自分自身に正直で居たいから

僕は君と一緒に夏休みを過ごしたいよ

帰ってきたら一日でも早く知らせてください。

といつつ、僕も生活の為に

アルバイトをしなければならいかもしれません。

今僕が取っている経営学を担当する

波木教授から、ある企業に体験的

なワークショップをやってみないか

と誘われています。

たぶん、夏休みの最初から

そちらで働くと思います。

君に逢う時間は幾らでも

作るつもりなので、

帰ってきたら連絡を待っています。

そちらの仕事はうまくいっていますか？

また書きます。

それでは また

雪ちゃんお元気ですか

明日からワークシップに向かいます。

僕は情報集積部という所に

配置されるらしく、

今から少しびびっています。

いったいどんな仕事を任されるのか

ドキドキしています。

君の仕事は順調に進んでいますか？

君を僕は愛しています

それではまた

雪ちゃんお元気ですか

今日は疲れました。

愛しています

雪ちゃん

雪ちゃんお元気ですか

逢いたいです。

愛しています。

今、企業の業績内定調査

という物をやらされています。

とても忙しいのですが

結構楽しくやっています。

僕を教える担当は啓子さんと言う

25才の女の人なのですが、

とても面白い人です。

今度機会があれば是非君に逢ってみたい

と言っていました。

君がよければ是非三人で

食事をしたいですね。

こちらは何とかやっています。

そちらはどうですか？

元気でやっているのでしょうか？

それではまた書きます。

雪ちゃんお元気ですか

君と連絡が取れなくなって

早二週間がたとうとしていますね。

お仕事がんばっていますか

僕も今日は休みだったので、

掃除と洗濯に追われました。

部屋が綺麗になったので

是非一度遊びに来てください。

君に早く逢いたい

愛しています。

僕は僕自身の内から

沸き起こる不安を抑えながら

手紙を書きつづけた。

雪ちゃんに本当は嫌われて

しまっているのではないかと言う

思いを押し殺し、

不安の中で書いていた。

けっして自分の書く文章に

その不安を乗せないよう

勤めて書いた。

本当は不安でいっぱいだった。

僕は彼女に愛されているのだろうか？

そう考えると、

本当のところ自信は無かった。

毎日のように手紙を

eメールで送り、

僕は寮の自室へと戻り

すぐにベッドの中で眠りについた。

第三節 嵐の予感

僕は唇に暖かい

感触を感じた。

懐かしい感触に僕は

眠りの中で欲望を覚え

上に覆い被さる

細くしなやかな

肩を抱きよせて

彼女の胸に顔を埋め

もう一度

激しく唇を交わした。

「雪ちゃん……」

僕は眠気眼を

ゆっくり開けた。

「えり……」

「こんな所で何してるの?」

そこには以前

付き合っていた

前川えりがいた。

「竜治続き・・・

・お・ね・が・い」

「えり・・・どうして?

ここに?」

「さあ早く」

彼女は僕の手を引き

ベットの中にたぐり寄せ

またキスをした。

「ちっつと

ちょっと待って

えり・・・

何の冗談？」

「竜治

冷たくなったのね

前ならぎゅって

抱きしめてくれたのに

まっしょうがないか」

「しょうがないじゃないよ

何で君が此処にいるんだ」

「ちょっとこれを

返しに来ただけよ」

彼女は以前僕が貸したCDを

カバンからだして僕に渡した。

「別に送ってくれて

よかったのに」

「あら

せっかく届けたのに

そんな言い方ないじゃない。

あなたも相変わらずね。

今日は日曜日よ、

また寝て過ごしているなんて。

そんなことしてると

また、

彼女に浮気されちゃうぞ」

彼女は舌をだして僕を

からかった。

「今付き合っている子は

君とは違うぞ」

「てへ ごめんね」

「いいよ。」

「彼女と今日は

デートじゃないんだ」

「そーなの

彼女も色々忙しくてね」

「あらそうなの

それなら私にも

まだチャンスがあるかもね」

「無いよ・

・ ・ 僕は彼女に

ぞっこんだからね」

彼女は膨れっ面になって

僕をにらんだ

「今に見てなさいよ

貴方は私に

すがりつくんだから

もういちど

やり直そうって

私の腕を掴んで・・・」

「そしたら

やり直してくれるの?」

「考えてあげる」

「わかったよ

そのときに考えて」

「ねー竜治

ご飯まだでしょ

一緒に食べない

何処か外で

私がおごってあげるから」

「やったー

おごってくれるなら

もちろんOKだよ。

着替えるから

そっち向いていて」

「あら私はぜんぜん平気よ」

「僕が平気じゃない」

「何言ってるの

ちょっと前まで

見せ合った仲じゃない」

「いいから」

「へー意外」

僕は急いで着替え

彼女と並んで食事へと

向かった。

第四節 嵐

寮の門を出てすぐに僕は

凍って動けなくなってしまった。

僕の目の前には雪ちゃんが

笑顔で立っていた。

僕から僕の隣の女性に

目を移し彼女の目は突然

悲しみに沈み、そして地面を

じっと見つめた。

雪ちゃん目から涙が

突然溢れ出し、僕は

慌てていた。

「雪ちゃん・・・

違うんだ・・・

そうじゃなくて

その・・・違うんだ」

僕はえりの腕を解き

訴えるように言った。

「ちがうって

何が違うの竜治さん。

貴方の口についているの

何」

僕が手をあてて唇を

こするとえりの口紅が

薄らとついた。

僕は言葉を失い

そのままじっと動けなかった。

雪ちゃんは視線を落とし

僕達を避けるように

走り出した。

「早く追わないと竜治」

えりが僕にウインクして

肩を押した。

僕は急にスイッチが入った

ブリキのおもちゃのように

雪ちゃんの後を追いかけて

走った。ようやく雪ちゃんの

右手をつかみ彼女を

止めて必死に言った。

「雪ちゃん聞いて

本当なんだ

彼女とは何でもない

この口紅はちょっとした

アクシデントなんだ

信じて雪ちゃん

お願いだ。」

雪ちゃんは僕の手を

振るい落とし

その場でじっと

堪えるように泣いた。

「雪さんでしょ？」

後から追いかけてきた

えりが彼女を気遣う様に言った。

「私、前川えり

って言います。

竜治さんの元彼女

今は本当に

何でもないのよ。

彼の唇に付いた口紅は

私が寝ている彼に

襲い掛かって

つけたものなの

ごめんなさいね。

ちょっとした悪戯心なの。

今日はちょっと借りた物

返しに来ただけなのよ

信じてあげて。彼の事。」

雪ちゃんはそれを聞いて

安心したのか僕の胸の中で

子供のように泣いた。

時々僕の胸を叩いて

僕を叱った。

「ごめんね雪ちゃん

うまく説明できなくて」

雪ちゃんは鼻水を

すすり、泣きつづけた。

「雪さんよかったら

これから三人でお食事でも

どうかしら、お詫びに

私が美味しいとこ

連れて行ってあげる。」

「はいっぐすん、ぐすん」

第五節 過ぎ去る嵐

僕は近所のスパゲティー

の専門店に入った。

三人でテーブルを囲み

向かい合って話した。

「流石に竜治が惚れる

だけのことはあるわね。

彼女。とっても綺麗な人。

私貴方を見てすぐに分かったの

この人が雪さんだって」

えりが僕をからかうように言った。

「でも、ああいう場面では、

貴方はいつも相変わらず

なのね。

私も、雪さんの気持ち

すごく分るわ。

この人、私が肩を押さなければ

きっと貴方を追いかけてなかったわよ。

私の時もいつもそうだった。

追いかけて欲しい時、

この人はいつも立ち止まっているの。

だから雪さんの気持ち

すごく分かるわ。」

えりは僕と雪ちゃんを

気遣ってくれていた。

僕にはそれがよくわかった。

「雪さん。

この人自分がどれだけ

付き合っている人を

不安にしているか

いつまでも

気づかないの。

どこか、人を避けるでしょ。

そして、きっと貴方にも。

それに誰に対しても優しいし・・・

特に女性には」

えりは悪戯な顔で僕を見ると

気遣うように雪ちゃんに聞いた

「そうでしょ？」

雪ちゃんはコクンと頷いた。

「やっぱりー

だめよ竜治、貴方は

まだ、何も分かってないのね

女の子の気持ち」

僕はどっかって言いか分からずに

顔を真っ赤にして下を向いていた。

「えりさんこの前、私、

竜治さんに言われました。

僕と付き合ってから後悔してるのかって

そしたら、私悲しくて・・・」

また雪ちゃん目からは

大粒の涙がぼろぼろ零れ落ち

大きな声で泣き出してしまった。

「おーおーよしよし

わかる わかるよー

私は、だって言うなれば

先輩ですもの。

雪ちゃん泣きな、私が

聞いてあげるから

よしよし」

そして、二人は僕の悪口

に花を咲かせて

大いに盛り上がっていた。

えりは僕をあだこうだ

まくし立て、雪ちゃんは

それを聞いて笑った。

僕は「いいかげんにしてくれ。」

を何度も連発し、その度に

雪ちゃんはまた笑った。

雪ちゃんは突然

何か思い出したように

はっと身をひるがえし、

下を向いたまま話した。

「あの一えりさん

私見ちゃったんです。

この前竜治さんと、

えりさんがキスしている所。

本当はこんな事

聞いちゃいけないのかも

知れないけど、

私それ以来、

二人の事が気になって。」

「あれっ見られちゃったの？」

えりは舌をだして肩をすくめた。

そして、僕はこの時彼女が何故

僕を避けていたのかその理由

を理解した。

「違うんだ

信じて雪ちゃん

あれは、違うんだ」

「竜治相変わらずね。

そんな言い方だから、

貴方は付き合っている相手

に誤解されるのよ。

私が説明するから黙っていて。

いい、竜治」

僕はコクンと頷いた。

「実はあの時、

私、この人にもう一度

付き合っ欲しいって

求愛していたの。

ごめんね。雪ちゃん。

この人にもう他の人

いたなんて知らなかったし、

ましてや、その相手が

こんなに美しい人だなんて。

だから、許してね。

私への最後のプレゼントだと思って。」

「でも、えりさん今日も

したでしょ？」

雪ちゃんは怒った顔で

聞いた。

「ごめんなさい。

そんなに怒らないで、

あの時はそう思ったのよ」

「まーまー」

僕がそう言って雪ちゃん

を見つめると彼女の目は

恐ろしく尖っていた。

僕は再び言葉を失った。

「雪ちゃん

私は卑怯な事はしないわ。

だから本当の事言うわね。

私まだ竜治の事好きよ。

だから、貴方が竜治から

離れたらその隙にすぐに

この人を奪って、

返してもらおうつもりなの。

でも、今は無理みたいよ。

だってこの人は貴方に

夢中なんですもん。

私、それを知ってるの。

だから、安心して。

この人は貴方の物よ。

今わね」

えりがウインクすると

雪ちゃんは笑いながら言った。

「安心なんて出来ないじゃない。

えりさんおかしい。」

「そうね。

でも、私たちいいライバルに

なれそうね」

「おいおい、えり

君には他に恋人が

二人もいるはずだよ」

「そーなの えりさん」

「そうだったりして」

「ずるーい えりさん。

それなら竜治さんは、

いいじゃない」

「よくないの」

「そんなのダメだよ」

「いいでしょ雪ちゃん」

「ダメだよ えりさん」

「でも、私は雪ちゃん

が手放したら、

すぐにうばっちゃん」

「雪は手放したりしないよ」

「チャンスはあるわ」

「もーえりさん

渡さないから」

僕達は笑いながら

スパゲティーを食べた。

ガーリックで蒸した

香ばしいフラスパン

をかじりながら。

第六節 深まる絆

食事を済ませた僕らは

店を出た。

「雪ちゃん今日は

楽しかったわ。

ありがとう。」

「私の方こそ

色々ありがとう」

「私も影ながら

貴方達の幸せを

願っているわ」

「あら、そんな事言って

本当はえりさん

彼の事狙ってるんでしょ？」

「ばれた？」

「もー正直ね えりさん

可笑しい人」

「でもね

私は彼を愛しているの

だから本当に願っているの。

私は彼に悲しい思いをさせたから、

だから幸せになって欲しいわ。

だから、本当の気持ちなの」

「ありがとうえりさん」

「どういたしまして、

貴方の笑い顔

とっても素敵なのね」

「えりさんもとっても素敵」

「それじゃまた」

「また逢いましょ

えりさん」

「竜治それじゃ・・・

私は・・・

彼のところにでも行くわ

貴方もしっかりね。

今度は彼女悲しませないでね

そうだ、二人が分かれたら

どっちからでもいいから

私に連絡してね」

えりはウインクを投げつけて

手を振った。

「素敵な人ね 竜治さん」

「そうだね」

僕がえりを見つめて見送っていると
彼女は僕の腕を思いっきりつねった。

「いたっー」

僕の声が街に響いた。

「雪ちゃんまだ怒ってるの？」

「ぜんぜん」

僕のを歩く雪ちゃんに

恐る恐る聞いた。

「じゃーどうして

僕と手を組んでくれないの？」

「怒ってるから」

「やっぱり怒ってるんじゃない」

「怒ってるの

でも、怒ってないよ」

「どっちなの？」

僕は彼女の隣に

走って行って彼女

の手を掴んでいった。

「怒ってない」

「よかった」

「えりさんって

綺麗な人ね」

「そうだね」

彼女は僕をまた強く

ひねった。

「私だって彼女ぐらいの

年齢になればもっと、

彼女見たく色っぽくなれるんだから

私だってもっと胸が

大きくなるんだから」

彼女はまた怒り出して

先を歩き始めた。

「雪ちゃん

よく僕にもう一度顔

を見せて」

先に行く彼女の手を止め

僕の方に引き寄せた。

「逢いたかったよ雪ちゃん。

とっても」

「私も竜治さん」

「まだ怒ってるの？」

「怒ってないよ もう」

僕は彼女の髪をかきあげ

彼女を見つめた。

細く尖った彼女の顎を

片手であげて、

僕達はキスをした。

長い熱いキスだった。

「これからどうしょっか

雪ちゃん」

「私も竜治さんの

部屋に行きたい。」

「いいよ、今から行こうよ」

「でも、えりさんと

さっきまで一緒にいたんでしょ。

その部屋の中に」

「まだ、気にしてるの？」

「べつに気にしてないの。

行きましょ竜治さんの

部屋」

「わかったよ

いこう」

彼女は僕の胸の中で

甘えるように言った。

寮につき、僕が先頭になって

彼女を僕の部屋に連れて入った。

僕の部屋は綺麗に整頓されている。

本棚に参考書などが

かかっている程度で

まったく物が無いからだ。

「へー竜治さんて結構

綺麗にしてるんだね」

彼女が僕の部屋に

入ったの一声はこうだった。

「何も無いって言ってもいいよ」

僕が笑って言うと彼女も

笑った。

「竜治さんはこういう所に
住んでいるだね」

「何も無いところで
ごめんね」

「シンプルでいいよ」

「そっかな？」

「ええ とっても」

「雪ちゃん何か飲み物出すよ
お茶で良いかな？」

「ありがとう」

雪ちゃんは天上を見回して
テーブルの前に座った。

「どうぞ」

「ありがとう 竜治さん。

ここは結構眺めがいい

所なのね。」

「そうだね。丘の上に建っている

からね。そろそろこの時期になると

あそこの河原から花火が

上がるんだ。

とっても綺麗だよ。

今年の夏は一緒に

その花火をここから二人で

見れるね。」

彼女はうれしそうに黙って

僕を見つめ続けた。

「ね——一緒に見てくれるよね。

雪ちゃん」

「もちろんよ。竜治さん」

僕達は見つめあい

そのまま時間が停止しているようだった。

このまま、ずっとこうしていたいと

そう心の奥から声が聞こえた。

彼女はゆっくりと目を閉じて

僕達はゆっくりと抱き合い、

口づけを交わした。

甘い、初夏の味がした。

彼女の髪からは甘い香りが漂い。

僕はうっとりとして溶けてしまっていた。

「竜治さん。ごめんなさい。

貴方の事疑ってしまった事」

「いいんだ雪ちゃん。

こうしていられれば僕はそれでいい。

でも、もし今度こんな事があつたら

何でも僕に話して欲しい。

僕は言い訳が余りうまくないけど、

ちゃんと説明するから。

解ってもらえるまで、何度でも、

説明するから……

いいね」

「ええ、ちゃんと話す。

今度からは……」

第七節 初めての訪問

「ああっ

ああっ

いっいく・・・」

隣の部屋から

女性の快感に喘ぐ

声が聞こえて、

僕と彼女は真っ赤に

なりながら黙って

じっとしていた。

「ごめん。

今日は休日だから、

多分稲垣の奴が

彼女を連れて

来ているんだ。

ここ、壁がそんなに

厚くないから

大きな声を出すと

どうしても、

聞こえちゃうんだ。

僕は慣れてる

から平気だけど、

雪ちゃんは

別だから・・・」

「雪も平気だよ・・・

ただちょっと

ビックリしただけ

だから・・・

でも、

こういう生活も

スリリング

でいいわね」

「スリリングとは

ちょっと違うと

思うけど」

「でも、

私にとっては

そうなの」

「そっか、

気に入ってくれた

のならどっちでも

いいよ」

僕らは今までの

沈黙を破り

大きな声で

二人で笑った。

「竜治さん。

メールありがとう。

毎日、送ってくれて。

私とっても

うれしかったの。

昨日読んで、すごく」

「僕も今日君の

笑顔が見れると

思っていなかったから、

見れてとっても

うれしいよ」

「私、

竜治さんのメール読んで、

飛んで帰ってきちゃったの。

お父様にまた怒られるかしら」

「仕事、

途中で投げ出して

きちゃったの?」

「いいえ、

仕事は全て

終わったの。

ただ、

今日はパーティーに

出席する

はずだったのだけど、

抜け出してきちゃった」

「いけない子だ。

雪ちゃん。

でも、ありがとう。」

「ねー竜治さん。

キスして」

彼女はうっとり

僕を見つめた。

僕達は激しく

口づけを交わし

からだを寄せ合った。

僕の腕は彼女の

胸を優しく

揉みほぐし

彼女の唇から

甘い吐息が漏れた。

「ね一竜治さん。

きっと、

声が聞こえちゃう。」

「僕は構わないよ。」

「お願い。やめて。」

僕は湧き上がる欲望

を抑えて、

手を動かすのを

止めた。

「わかったよ」

「ごめんなさい。」

「いいよ、

でも、

しばらくこうしていたい。」

「私も賛成」

僕達はベットの中で

寄り添いあいながら

見つめ合った。

「今、

アルバイトは

忙しいの？」

「そうだね、

結構忙しいよ。

明日からまた、

働かないとね。」

「そうなんだー。

せっかく

夏休みなのに残念」

「ごめんね。

雪ちゃん。

でも、

お盆までの約束だから、

それが終わったら、

今度二人で花火大会に

出かけようよ」

「賛成、賛成、大賛成。

わーい、楽しみー。

それまで、

がんばってね。」

「ああ、がんばるよ。

雪ちゃんの浴衣姿、

綺麗だろうな。」

「うーん、秘密。

今度見せてあげる。」

「僕も楽しみだ」

「竜治さんの浴衣姿も

素敵だろーなー」

「ごめん、

浴衣持ってないんだ。」

「そうなんだ。

でも大丈夫。

竜治さんは普段着でも、

十分素敵だから」

「ありがとう。

ねー雪ちゃん。

僕は君から

まだ返事聞いてないよ。」

「何？」

僕は突然起き上がり、

自分の右腕を

差し出して言った。

「雪乃さん。

僕と付き合っ

てもらえますか」

「もちろん YESよ」

彼女は僕の首に

手を巻きつけ、

僕を抱き寄せた。

「うれしいよ。

竜治さん。

うれしいよ。」

彼女の瞳から

大粒の涙

が溢れ出し

僕の胸元を湿らせた。

「愛してるよ。

雪ちゃん

愛してる。」

「ええ、

私も愛してる

竜治さん。

初めて会った日から

ずっと・・・

竜治さん。

私これから

竜治さんの事

呼び捨てにして

いいかな？」

「もちろん。

いいに決まってる

でしょ」

「よかった。

私

えりさんが

竜治さんの

事呼び捨てに

している事に

ちょっと嫉妬したの。

だから、

私」

「いいよ、

雪ちゃん。

呼び捨てにしてくれて。

今日から僕は

君だけのものだ。

好きに呼んでよ。」

「ありがとう。

竜治さん。

でも・・・

やっぱり・・・

私は・・・

竜ちゃんって

呼ぶよ。」

「いいよ、

そうして・・・」

「私の竜ちゃん」

彼女は絡めた

腕を巻きつけて

僕達は口づけを

交わした。

第一節 二人の生活

次の日僕は目覚まして

目を覚ました。

隣ですやすやす眠る僕の

お姫様は少女のように

眠っていた。

僕は彼女にキスをして

ベッドから起きだそうと

体を起こした。

彼女が僕の腕を掴み

自分の方へと引き寄せ、

僕に口付けをした。

「おはよう。竜ちゃん。」

「おはよう。雪ちゃん。」

起こしちゃったね。ごめん。」

「いいえ、私も起きるね。」

「まだ、寝ててもいいんだよ。」

「ううん・・・いいの。」

一緒にご飯食べましょう。」

「いいね。なんか、同棲してるみたい。」

「いいでしょ。」

さっ起きましょう。」

彼女は僕の貸した

パジャマを脱ぎ捨て、

自分の洋服に着替えた。

僕はパジャマのまま、

パンとハムをテーブル

に出し紅茶をカップに

注いだ。

僕の部屋は八畳ぐらいの

スペースしかないので、

冷蔵庫以外は、

全て自分の手に届く

ところに据え置かれ

ている。

小さな冷蔵庫、

電話機、ベットと

小ぶりのテーブル、

そして、割と大きな本棚、

本棚一杯の本。

本棚の後ろには、

水蒸気で部屋を暖める

ためのパイプが走っていて、

冬場の朝は、

パイプの中を走る

水蒸気が暴れだし

カン、カンと

けたたましい音をたて、

寮生を起こした。

部屋の床はタイル張り

なのでスリッパを常時

履いて部屋の中を歩いた。

僕はいずれ彼女が

僕の部屋に遊びに

来る事を見越して、

ピンクのウサギ

のスリッパを

買っていた。

それを彼女が

履いているのを見て、

僕は何か暖かい幸せ

を感じていた。

彼女はあどけない

少女のように

僕に笑いかけ、

僕も自然に

彼女に笑いかけた。

この時の僕は

気づく事はなかったが、

幸せとはこんな

日常なのだと、

今の僕は感じている。

何気ない会話、

何気ない優しさ、

そんななんでもない事が、

幸せなのだと気づく時、

人はその幸せを失っている。

失うことで気づかされ、

後悔して、

でもひたすら前に進む。

僕にはそれしか

生きる道はないのだ。

僕はスーツに着替え

アルバイト先の

会社へと向かった。

部屋から彼女に

送り出され、

僕はとても幸せな

気持ちで一杯だった。

新婚のカップルは

こんな感じ

なのではないのか？

そんなことを考えていた。

その日は一日中

会社周りをして、

経理担当の相手方との

ミーティングをして、

内部に不正な経費が

落ちていないか

を調べる仕事が待っていた。

会社周りが終わると

コンピューターの画面に

映る数字を細かく

チェックして、

一日の仕事を終えた。

電車に乗って帰る

ころにはすでに

十時を回っていた。

僕はくたくたになって、

重い足を引きずって寮の

自分の部屋の明かりをつけた。

「パーン」

突然クラッカーがなり

僕はその場にボーゼン

と立ち尽くした。

「お帰りなさい。

竜ちゃん。

びっくりした？」

「びっくりしたよ。

雪ちゃん。」

「ごめんねー

竜ちゃん。

お仕事疲れたでしょ？」

「疲れも吹っ飛んだよ 笑」

「めんご めんご。

ねー疲れてないんだったら

私に少し付き合っで。」

「んー

どうしょっかな?ー 笑」

「もー だめ、

絶対つき合っで

もらっちゃうから。笑」

「どっしょかなー? 笑」

「だめだよー

付き合っの。」

「わかったよ。

で、

何に付き合えばいいの」

「うんとねー

私に黙っでついて来て

ほしいの」

「わかったよ。

どこに行くの?」

「それは内緒。

だから、

黙ってついて来てって

言ってるの。」

彼女は僕の手を

引き外へと僕を

連れ出した。

寮の門を出てコンビニを

左手に二百メートルほど

進んで彼女は突然

歩みを止めた。

彼女はビルを見上げ

悪戯な笑いを

僕に向けると

僕の手を引き中へ

と入っていった。

彼女はポケットから

カードを出して

玄関に備え付け

られた読み込み機

に通すと自動ドア

が開いた。

僕は彼女に

引きづられるまま

エレベータに乗り、

最上階の六階

のフロアで降りた。

彼女は奥の大きな

扉にカードキー

を差込み玄関の

ドアを開いた。

そして、

その瞬間白いもの

が僕に飛び掛り

僕はその場に

しりもちをついて、

座っていた。

「白ちゃん。

びっくりしたよー」

白ちゃんは僕の

上に覆いかぶさり

僕の顔をぺろぺろなめた。

彼女はそれを見て

大いに笑い

腹を抱えていた。

「白ちゃん、

そろそろ竜治さん

を放してあげて。」

彼女は白ちゃん

の頭をなで

僕から大きな白い犬を

自分の方に寄せた

「白ちゃんも竜ちゃん

に会いたかったのね。

こんなに喜んで。

竜ちゃんは白ちゃん

にも人気なのね。」

「うれしいけど、

白ちゃん。

また、顔が涎で

べとべとになったよ。笑」

「さっ奥に入って竜ちゃん」

僕は彼女の後ろについて

ダイニングへと足を進めた。

ダイニングのテーブルには

所狭しと並べられた

料理が並べられ

蝋燭の光が淡く辺りを

照らしていた。

「これ全部雪ちゃん

が作ったの?」

「そうだよ。

竜ちゃんの為に

作ったの。

たくさん食べてね」

「雪ちゃんは本当に

料理上手だね。

でも、

こんなに手の込んだ

料理大変だったでしょ?」

「ぜんぜん。

だって、

竜ちゃんが

おいしそうに
食べてくれる事、

想像しながら

作ってるから。」

「ありがとう。

でも、
雪ちゃんが作って

くれるなら

何でもうれしいから、

こんなにいつも

がんばらなくても

いいのに」

「いいの。

私も楽しいから。

さっ座って

一緒に食べましょう」

「ところで雪ちゃん。

ここはいったい?????」

「実は今日からここが

雪のお家なの」

第二節 同棲

「えっ？」

「今日近くの不動産

によってここを

借りることにしたの。

もっと広いところ

もあったけど

ここが一番

竜治さんの寮から

近かったから

ここにしたの」

彼女は突然

真剣な眼差しになり、

僕に聞いた。

「迷惑だったかな？」

「そんなことはないよ。

うれしいけど……

でも、
家賃がとても

高そうだね。

ここはできたばかりの

マンションだし、

大丈夫なの？」

「家賃なら大丈夫。

雪はちゃんと

貯金してるし、

普段お金を使うこと

あまりないから」

「でも、

お父さんとかに

相談したの？」

「さっき電話で

話したよ。

好きにきなさい

って言ってたし、

お兄ちゃんには

まだ話してないけど。」

「でも、

この家具を

今日揃えたの？

たった一日で？」

「家具は私が

アメリカにいる時

に使っていた物なの。

なんだか思い出が一杯で

捨てれなくて

持って来ちゃって。

それでも使わないから

倉庫の肥やしに

成りかけてた頃に

ここに救出して

上げたの。」

彼女はにっこり

微笑んで

首をちょこんと

曲げた。

「じゃ救出した

雪ちゃんには

ご褒美を

あげないとね。」

「ええ竜ちゃん

ところで

さっきのご褒美

今してくれたら・・・

私・・・」

僕は彼女の唇を奪い

激しくキスをした。

彼女は自分の足を

僕の足に絡め、

そして激しく

舌を絡めた。

僕達が倒れこむように

ソファで

キスをしていると、

白ちゃんも

僕たちに加わり

僕と雪ちゃんの顔を

ぺろぺろとなめて、

僕らに加わった。

そして僕ら二人は

顔を見合わせて

笑いあった。

彼女は白ちゃんを

冗談半分で叱り、

白ちゃんを

追い掛け回した。

白ちゃんは

それを面白がって

ぴよんぴよん

飛び跳ねて

踊っている

ようだった。

彼女が突然

しゃがみ込むと、

白ちゃんは

突然彼女に駆け寄った。

そして、

「今だー」

という掛け声とともに、

彼女が白ちゃんを捕まえ、

二人でじゃれあっていた。

そこには幸せが

溢れていた。

「竜治さん。

ちょっと来て」

彼女は僕の腕を掴み

部屋の中を

案内した。

「見て見て。

ここが雪の部屋。

じゃじゃーん」

彼女がドアを開けると

大きなベットが

目に飛びこんで来た。

「へー雪ちゃんって。

女の子の割に

とってもシンプルな

部屋なんだね。」

部屋の中は

部屋を演出する

ための照明と、

大きなベット。

四隅に並べてある

観葉植物

そして、

鏡張りの衣装タンスが

置かれているだけで、

何もなかった。

「とー お大人でしょー」

彼女は悪戯っ子

のように

上目づかいで

僕に聞いた。

「ハイハイ、そーだね」

「なあに」

「そうかなー

とって。」

「もーいい。

次こっちの部屋」

彼女がドアを開けると

青いネオンで薄暗く

輝くベットがあった。

四方はやはり観葉植物

が置かれ雪ちゃんの

部屋の作りと一緒にあった。

「竜ちゃんのお部屋」

「えっ」

「お願い。竜ちゃん。

今日から二人で

ここに住みましょうよ。

同 棲・・・

・・・しよ。」

「同棲？」

「しよ。

竜ちゃん。

そしたらずっと

一緒にいれるから。

ねーおねがい。

ここから学校に通って。

今の部屋も

そのままでもいいし、

帰りたくなったら、

近いんだもの、

いつでもいけるし

、

ねーいい

アイディアでしょ。

竜ちゃん。

何か言って。」

「それはとっても

いいアイディアだね。

そうする。

ここから通っちゃう。

雪ちゃん君は天才だ。」

「でしょ。

雪は天才なのだー」

「あっ修さんには

僕から話すよ」

「そう。おねがい。」

彼女はハジケル笑顔と

ウインクを僕に向けた。

そして僕たちは

子供のように

跳ね回って喜び、

それを

白ちゃんは真似た。

「ねーこの家具

全部アメリカ

から持ち帰った

ものでしょ。

このベットも

昔のボーイフレンド

が使ってたもの

だったりして」

「あーばれた」

「そうなの？」

「違う。

これはお兄ちゃんが

前に使ってたやつなの」

「本当に？」

「本当よ。

ちょっと

からかっただけ。

ごめんなさい。

竜ちゃん。」

「わかったよ。

信じてあげる。

それじゃ

雪ちゃんが作った

料理食べようよ。

楽しみなんだ」

「ええ、そうしましょ」

第三節 一週間の地獄

食事を済ませ

先にお風呂に入って

彼女を待ちながら、

僕はそのまま

ソファで眠って

しまっていた。

朝目覚めるとフアファの

毛布が僕に掛けられていた。

「おはよう。竜治さん。」

彼女はエプロン姿で

僕の目の前に立っていた。

「へーパンダちゃんだ。」

「何が？」

「雪ちゃんの今日のパンツ」

「えっ もー

竜ちゃん何見てるの？

恥ずかしい。」

僕は彼女の手を引き、

僕の方へ引き寄せると

彼女に覆い

かぶさりキスをして

言った。

「おはよう。雪ちゃん。」

「おはよう竜治さん。」

「ねっ雪ちゃん。

したいんだ。」

「えっ何を？」

僕は黙ったまま

彼女の胸を優しくもんだ。

彼女は恥ずかしそうに

頬を赤らめて首をすぼめた。

僕は彼女の首筋に

ゆっくり舌を

滑らせ耳を軽く噛んだ。

彼女はその瞬間、

野生の本能を

刺激されたように体を竦め

湧き上がる欲望

を掻き毟るように

僕の肩を撫で回した。

僕は彼女から湧き上がる

甘い香りに刺激されて

下半身から突き上げる

欲望を全身で感じた。

僕が彼女を見つめると、

彼女は潤んだ瞳で

僕を求めた。

「ね一竜ちゃん。

こんなことして大丈夫？

遅刻しないの？

私はうれしいけどね。」

「???

そうだ、今何時だろう?。」

「よしよっと。

えっと、8時34分だよ。」

「いけない。

遅刻だ。」

「えっ大変じゃない。」

「ごめん、

着替えてすぐ行かなくちゃ。

遅刻は流石にまずいよ。」

「早く着替えて。」

「わかった。」

僕は急いで昨日と同じ

服に着替えた。

「竜ちゃん。

行っちゃうんだね。

残念。」

「雪ちゃん僕も残念だよ。

続きは帰ってから。

っね。」

「わかった。待ってるね。」

「待ってて、

すぐに帰ってくるから」

「うん。それじゃ。

・今・夜・」

「行ってきます。」

「行ってらっしゃい」

パタンとドアを閉めて、

僕は会社へと

急いで向かった。

何とか遅刻せずに

会社に到着して

朝のミーティングに出ると、

今日から一週間四国の会社へ

出張があり、

担当者が風邪の為、

僕に行ってほしいと告げられた。

僕は急いで寮に帰り、

旅支度をして

その足で愛媛へと向かった。

愛媛のホテルに

ついてすぐに

彼女にその事を

電話で告げると

彼女はとても

がっかりした様子で

僕に言った。

「そうなんだ。

しょうがないね。」

僕は彼女のさびしげな声を

聞いて、

とても会いたくなった。

会えない時間が愛を育てる。

それをわかってはいるものの

とてもやるせない気持ちで

一杯だった。

彼女に会えない時間は

鬼のように長く、

僕の心はその場所には

常に居なかった。

そんなせいで、

僕は仕事上の

ミスが増え

スタッフから

こっぴどく叱られた。

第四節 新たな気づき

夜になるとすぐに彼女に

電話をして、

彼女の明るい

声を聞いた。

彼女は白ちゃんが起こした

お茶目なエピソードや

今調べているおじいさんの

残した資料の事など、

僕の話す余裕がない程

僕に話して聞かせた。

「ね一竜ちゃん。

私思うんだけど・・・」

「うん、何？」

「おじいさまは、

三種の神器を

探していたのでは

なくて、

「神様」を探して

いたんじゃないかな？」

「う・・・・ん」

「だって、

そうでしょ。

この資料の全ての共通点

と言ったら、

神様に関係している

って言う一点

しかないもの」

「雪ちゃん。

僕もそれは思ったよ。

やはり君も

そう思ったんだね。」

「ええ、

思ったわ。

竜治さんも

そう思ったなら

きっと二人の

意見は合っている。

私今そう思ったの。

直感で」

「女の人の直感は

当てになるからな

きっとそうだよ。」

「でも、

お爺様は神様を

見つけて

どうするつもり

だったのかな？」

「雪ちゃん。

人はただ知りたいんだ。

僕もそうだし、

君だってそうでしょ。

会って見たくないかい。

もし、

本当に神様が居るなら。」

「ええ。もちろん。

会って見たいわ。

そうね。

ただ会って見たいわ。

お爺様もきっと

同じ気持ちだったのね。」

「そうだよ、きっと。

僕も最初は三種の神器

の為の補足の資料だと

思って読んでいたものが

あったんだけど、

その資料は三種の神器とは

まったく関係がないと理論

付けるまでいっていなかった。

でも、君に言われて僕も

確信したよ。おじいさんは

「神」そのものを

探していたんだ」

「そうね。

なんか私

ワクワクしてきた。」

「見つかるといいね。

雪ちゃん。

神様を。」

「きっと見つけるわ。

だって私達が

探すんですもの。

必ず。」

「そうだね。きっと。」

「そうよ。竜ちゃん。」

「僕もこのバイトが

終わったら。

本格的に調査しないとね。」

「それまで、

私がかんばるから

安心して」

「また何か見つけたら

報告してよ。

待ってるから」

「わかったわ。

報告する。

ねーあとどれぐらいで

会えるの私達」

「あと二日だよ。」

「まだ二日もあるの。」

長ーい。怒」

「あと二日じゃない。

すぐだよ。」

「本当にそう思うの？」

「思わない。涙。

やっぱり長いね。

でも、

会える事楽しみにしてる」

「私も」

「それじゃまたね」

「おやすみなさい。」

「おやすみ」

第五節 久しぶりの再会

次の日

相手方の社長さんが

東京へ赴いていた為、

僕との面会はキャンセルされ

直接僕を派遣した会社の

専務と会う事になった。

僕はその日のうちに

東京へ戻る事ができた。

羽田から電車を乗り継ぎ

雪ちゃんの待つ

マンションに着いた

のはちょうど夜の

九時を回った頃だった。

僕は塀の奥に置かれた

電子掲示板のルームナンバー

を押して、

雪ちゃんを呼び出した。

「あの一どちら様でしょう」

「はい、竜治です。」

「えっ竜ちゃん?。」

彼女が慌てる様子

を笑いながら

僕が立っていると、

目の前にある

モニターに雪ちゃん

の姿が映った。

「竜ちゃーん。

あいたかったー。

あー竜ちゃんだ。

でも、どうして。

今日?

あれ？

今日だったかな？

帰ってくるって

言っていた日？」

「本当は明日

だったんだけど。

仕事が早く終わったから

飛んで帰ってきたよ。

雪ちゃんに会いたくて。」

「うっそー。

やったー。

白ちゃん見て見て

竜ちゃんだよ。

今日帰ってきたよ。」

「わん わん」

「白ちゃんも

喜んでるよー

竜ちゃん。

見える？」

「ああ 見える。

やっほー白ちゃん。

ねー開けて」

「ああ ごめん。

すぐ開けるね。

エレベーター

降ろすね。

待ってて」

僕がエレベータ

に飛び乗り

六階に着くと

玄関を大きく開けて

白ちゃんと彼女が

僕を迎えて待っていた。

「おかえり竜ちゃん」

「ただいま。雪ちゃん。」

僕の腕の中の彼女は

甘えるように僕に身を寄せた。

「ね一竜ちゃん

食事は済ませたの？」

「いや、まだなんだ。

君に早く会いたくて

何も食べないで来たから。」

「うれしい事

言ってくれるのね。

竜ちゃん。

わかった。

今何か作るから

まってて。

竜ちゃんはオムレツ

好きかな？」

「大、大、大好き」

「すぐ作るね」

僕はネクタイを外し

シャツのボタンを外した。

ダイニングのテーブルには

所狭しと並べられた

資料が散らかっていた。

「ごめんない。

散らかしてて、

私てっきり貴方が

明日帰って来るもの

だとばかり思っていたから

そのまま散らかしていたの。」

彼女は作ったばかりの

オムライスを片手に僕の隣

に座った。

「あっ汚れると

いけないから

ここで食べるよ。」

僕はテーブルに置こうとした

トレーを取りソファ

の上に置いて

オムライスを口に入れた。

「おいしいー

感激だよ。雪ちゃん。」

「ありがとう。竜ちゃん。

竜治さんは

本当においしそうに

食べてくれるから、

うれしいの。」

「だって、

本当においしいんだもの」

「よかったら

サラダもどうぞ」

「ありがとう。

雪ちゃん」

僕が見つめていると彼女は

首をかしげて僕を見た。

「何?」

「あいしてる」

「私もよ。竜ちゃん。」

僕らは見つめあい

笑いあった。

「ねー竜ちゃん。

仕事はどうだった?。」

「何とか全て終わったよ。

明日から二日間お休みを

もらえたし。」

「うそー

やったー。

やっとゆっくり

二人で過ごせるね。」

「そうだね。

ここの所なんだか忙しくて、

二人で居れなかったからね。」

「よかったー。

雪うれしい」

「何処か二人で行こうか？」

「うん、でも竜ちゃん

きっと疲れてるから

お家でゆっくりしましょうよ。

せっかくの休みだし。」

「ありがとう。雪ちゃん。

それじゃ一日中

いちゃいちゃして居ようよ」

「雪も賛成一

やった一。

甘えさせてね。竜ちゃん」

「もちろん」

彼女は子供のよう

はしゃいでいた。

「雪ちゃん。随分一生懸命

資料を読んでいるみたいけど、

何か新しい情報は見つかったの?」

「あっそうだ。

竜治さん。これ見て。」

彼女は一冊の本を差し出し

僕に手渡した。

「仙道?

何?この本」

「著者を見て」

「水島 道」

「それお爺様の

書いた本だと思うの」

「これは雪ちゃんの

おじいちゃんの名前なの？」

「違うけど、

この出版社。

今はお父様の会社だし、

前にお爺様が何か

出版していたって、

お父様が話していたから

きっとこれがそうだと思うの。

お父様に明日にでも

聞いてみるけど、

資料の中にあったものだから

間違いないと思うわ。」

「仙道ってなんだろう？」

「私もまだパラパラめくった

程度で何なのか

よくわからないけど、

どうやら、仙人に成る為の

方法らしいの。」

「仙人って、あの仙人？」

空を飛んだり、

姿を消したりする。

あの漫画のような話かな？」

「そう、そのマンガのような話」

「まさか、でも本当に仙人に

なる方法が書かれているのかな？」

「たぶん」

「うーん。」

雪ちゃんのおじいさんは

本当に謎だらけだね。」

「私も、今になってようやく

そう思えるの。

余りお爺様の事知らなかった

っていうのもあるけれど」

「おじいさんはいつ亡くなったの。」

「よく知らないけど、

私が生まれる前みたい。

でも、お父様にお爺様の事

聞いてもなぜか余り私と

お兄ちゃんにお爺様の事

話してくれないの。」

「どうしてかな？」

「わからない」

「謎が深まるばかりだね。」

これ、僕も読んで良いかな？」

「もちろん」

僕はその本を手に取り

読みふけた。

第六節 おじいさんの残した本

「竜ちゃん。

お風呂どうぞ」

僕の目の前に濡れた髪

をタオルで拭きながら

彼女が僕の顔を覗き込む

ように言った。

「あっありがとう。」

「早く入って。」

「わかった。」

僕は読んでいる本を

テーブルの上に置き

お風呂の浴槽に

頭まで浸かった。

体の中を流れる

血流がスピード

増していくような

感覚に襲われ

目眩を起こしてしまった。

体は疲労で動きが鈍く

目じりが重い、

何とか体と頭を洗い

お風呂場から出ると

彼女がソファで

僕を待っていた。

彼女の隣に座り

優しく二人はキスを交わした。

彼女は恥ずかしそうに

僕を見つめ、言った。

「抱いて、竜ちゃん」

「ねー雪ちゃん。

今日は少し

疲れてるみたいだ。

何もしないで、

隣で寝るだけでも

構わないかな？」

「意地悪ね。竜治さん。」

彼女は優しく笑い

僕を見つめて言った。

「ええ。もちろん。

ちょっと残念だけど。

どっちの部屋で寝よっか？」

「もちろん、雪ちゃんの

部屋がいいよ。

君の匂いがいっぱいするから」

「ええ、いいわ。

それじゃ行きましょ。

私のベットへ」

僕たちは手を繋いで

彼女の部屋のベッドに

二人で身を寄せた。

眠りながら漂う、

彼女の髪の毛の

甘い香りが僕の睡眠を

深く、果てしなく深い

闇へと誘った。

僕が目覚めたのは

夕方の四時頃だった。

部屋の中を彼女を

探して見て回ったが

彼女は居なかった。

僕は白ちゃんと何処かに

出かけたのだろうと思い、

テーブルに目を移すと、

そこに昨日途中まで

読んでいた本がポツリ

と置いてあった。

「『仙道』っか」

僕は昨日の最後に

読んだページを探し出し

またその本の世界に

のめり込んで過ぎてゆく

時間を忘れた。

「ガチャン」

玄関のドアが開く音と共に

白ちゃんが僕の所に駆け寄より

僕を見て吠えた。

時計を見ると午後七時を

回っていた。

「わん わん」

「お帰り白ちゃん。

どこ行っていたの？。

寂しかったんだからねー」

僕は白ちゃんの頭を撫でまわして

白ちゃんとじゃれあった。

「ごめんない。

竜ちゃん。帰りが遅れて」

「雪ちゃんお帰り。

何処行っていたの？」

「さっきまで麻布の

お家に行っていたの。

お爺様の残した資料を

ここに運ぶ準備をして、

運送会社に頼んで

きたからちょっと

遅れちゃって。

今すぐ何か作るね。

カレーでいいよね。

竜ちゃん」

「もちろん。

また期待しちゃう。

雪ちゃんの手料理は

絶品だから。」

「竜ちゃんの期待に

応えなくっちゃね。」

彼女は長い髪をゴム

で結び、両腕の裾をあげると

手際よく、野菜を洗い

鍋に入れた。

「あー竜ちゃん。

そうだ。

昨日の本やっぱりお爺様が

書いた本なんですって。」

「そうなんだ。

お父さんに聞いたんだね。」

「いいえ、お兄ちゃんが

今日私のところに電話してきて

聞いたの。」

彼女は笑いを堪えるように

僕の隣に座って言った。

「ねーお兄ちゃんったら竜ちゃん

の事すごく心配していたわよ。

私に振られて自殺でも考えて

いるんじゃないかって真剣に

私に聞くの。」

「そっかー

そういえば忙しくてこの所

修さんに会ってなかったね。」

「お兄ちゃん何度も竜ちゃん

のところに電話したみたいよ。

でも、いつも居る時間に

居ないって。とても慌てていたわ」

「そっかー。

修さんに電話しないと」

「大丈夫。

私がお兄ちゃんに話したから」

「それなら、大丈夫だね。

ねっ雪ちゃん、あの夜の事も

修さんに話したの」

「そんな事、できるわけないよ。

それは、竜ちゃんに任せるわ。

今日、お兄ちゃんが二人の

新居祝いに来るって言ってたから

もうすぐ来ると思うわ」

ピンポン ピンポン

「あっ噂をすれば、

きっとお兄ちゃんよ。」

彼女は玄関のモニターに

僕の腕を引っ張って連れて行き

二人でモニターを覗いた。

「やっぱり女の人の感はすごいね」

「でしょ。」

お兄ちゃん空いてるわよ。

エレベーター下ろすから

上がって来て。」

「おー わかった。

竜治 心配したぞ」

修さんはモニターに

シャンペンを突き上げて

僕に笑いかけた。

僕は照れくさくて、

髪を何度も掻き上げて

笑っていた。

「竜ジー 生きていたのか。

このやろー心配させやがって。」

ダイニングのソファーに腰を落とし

修さんが言った。

「お前も勝手なやつだな。

人に相談しておきながら

何の連絡もなし。

おまけに姿をくらませやがって。

俺がどれだけ心配したか

わかるか?お前」

「ごめん、修さん。

今、並木教授の紹介で

ワークショップで夏休みの間

だけ、企業にアルバイトに行って

居るのは知ってるよね。」

「ああ」

「それで、急に愛媛に出張
してしまって、電話するのを
忘れていたんだ。」

「何を言っているんだ竜治。
その出張の間、雪乃には
毎日電話してたくせに、
どうして俺にはできないんだ。」

「ごめん。修さん」

「だいたい、お前」

「はいはい、お兄ちゃん。
もうそのくらいでいいでしょ。
お兄ちゃんが愚痴りだすと
しつこいんだから、
それくらいに。」

「だから・・・」

「わかったから、

お兄ちゃん。

竜治さんを許してあげて」

「お前竜治と同棲始めたら

いきなり女房みたいになりやがって」

「わかったから。

お兄ちゃん。」

「まっいい。

竜治、今回の事は、

これでよかった。

お前もうまく行ってよかったな」

「ありがとう。修さん

全て修さんのおかげだよ。」

「おっ わかってるじゃん」

「本当に修さんに

感謝しているんだ。

こんな素敵な人に

巡り合せてくれた人だから。

心から」

修さんは照れくさそうに笑った。

「ありがとう。

お兄ちゃん。

私も同じ気持ちよ」

「お前ら幸せにな。

そうだ、新居祝いに

シャンパン持って来たぞ。

雪ーグラス頼む。

みんなで祝おう。

二人の新たな門出だ。

盛大に飲もう。

これ、高いぞ。」

「いくらしたのお兄ちゃん」

「聞くな、お前はこういう事に

細かいから」

「また、無駄ずかいね。」

「今回はそうじゃないだろう。」

二人の門出を祝うんだから」

修さんはにこりと笑い、

雪ちゃんは優しく微笑み顔いた。

第七節 楽しい食卓

「それでは、

雪乃と竜治の

新たな未来に」

「カンパニー」

「チーン」

三人でグラスを傾けて

密やかに僕らの新居

祝いが催された。

「流石。

雪乃の料理はうまいな」

「どう、修さん

うらやましいでしょ。

僕はこれから毎日

雪ちゃんの手料理

食べられるんだよ。」

「おお 竜治。よかったな。

そして、雪乃も」

「ありがとうお兄ちゃん。」

「雪乃

お前しばらく見ないうちに

なんか色っぽくなったな。」

「そうかな？」

雪ちゃんは僕にうれしそうに

上目ずかいで聞いた。

「雪ちゃんは出会った頃から

色っぽかったから……

でも、そうかもよ」

彼女は照れくさそうに下を向いて

笑った。

「で、お前ら。

もう、したのか？」

「ぶー」

僕が咳き込んでいると

彼女が真っ赤な顔で言った。

「お兄ちゃん 怒」

「何怒ってるんだ。

雪乃。」

修さんは平然として

僕に聞きなおした

「なーやっぱりしたろ。

なんか、雪乃のやつ

色っぽくなってるし、

原因はお前だろ」

「お兄ちゃん 怒」

「雪乃恥ずかしがるな。

お前もとうとう処女を捨てたのか？

お兄ちゃんはちょっと

複雑な気分だぞ」

雪ちゃんは真っ赤になって

下を向いてもじもじしながら

助けてほしいと僕の腕を

引っ張った。

「修さん。

今度二人で話そうよ。

雪ちゃんをこれ以上

困らせないであげて」

「わかったよ。竜治。

こいつ、面白いだろ。

からかうと」

「もーお兄ちゃんたら 怒」

彼女は真っ赤になりながら

むしゃむしゃとカレーを

口に運んだ。

「わっはっはっはー」

修さんは勝ち誇ったように

大きく笑い、

僕らは熱く顔を赤らめて

下を向いたまま何も言えずに

カレーを食べていた。

僕は話題をべつのものに変えて

話を変えようと必死だった。

「所で、修さん。

修さんはあの資料

ちゃんと目を通しての」

「当たり前だ、

お前と違って俺は暇だしな」

「あら、女の人のは尻ばかり

追って、

いつも忙しいって

言ってるくせに」

「おい、雪。

今日は俺にそういう口を

聞かない方がいいぞ。」

「あらっどうして」

「竜治お前ら、

やっぱりしたろ？」

「わかったわよ。

お兄ちゃん」

彼女はおろおろして

見ていてかわいそうなくらいだった。

修さんは笑いを堪えて

僕たち二人を見ていた。

「修さん雪ちゃんと

話したんだけど」

「その事なら俺もそう思う。

じい様が探していたのは、

『神』そのものだ。

三種の神器を探していたのは

その一端に過ぎない。

本当の目的は、神を探す事だ」

「竜治さん。

さっきお兄ちゃんには私から

話したの。そして、三人の

意見はやはり一致したわ」

「そうか、やっぱり

修さんもそう思うんだね。」

「日を見てお前らには

その事について話すつもりだった。

今、三種の神器を探している。

けっこう金を使ってな。

今はまだ話せないが、

それなりの情報が集まっている。

それについては機会を見つけて

そのときにお前たちにも知らせるよ。

今のところはこれだという

ものは何も見つかって

いないからな」

「お父様も関係しているの?」

「当たり前だ。雪乃。

これは水島家の宿命なんだ。

水島家に生まれたって事は

そういうことなんだぞ」

「知らなかったわ。

お兄ちゃん。」

「お前も18才だ。

だからお前に話した。」

「もしかして、修さんの

お父さんはずっと僕達が

探しているものを

探していたとか?」

「ああ もちろん。

親父も18の時にお祖父さん

からこの事は聞いていたらしい。

ただ、事業が忙しくて、自分自身で

探している暇などなかった

だけだ。」

第一節 未知の領域

「そうなのお父様が・・・」

「そうだ、

修さんは、お爺さん

が書いた本は読んだの？

仙道とか言う。

これ、この本」

僕はテーブルに置いた本を

修さんに差し出して聞いた。

「もちろんすでに読んだよ」

「で、どう思う？」

「それは、

おまえ自身の問題だよ

竜治。

お前はどう思うんだ？」

「僕はこの本を読んで、

仙人になる事はまんざら

うそではないと思うよ。」

「それは、なぜなの？

竜ちゃん？」

雪ちゃんは興味深げに

僕に聞いた。

「この仙道という方法は、

とても科学的だからさ。

雪ちゃんはまだ、全てを

読んでいないからちょっと

説明させてよ。修さん」

「ああ、いいよ。

雪もちゃんと聞けよ。

竜治様がおっしゃるらしいから」

「も一修さん。

またちゃかして」

「お兄ちゃんの事はいいから、
早く話してよ、竜ちゃん。」

「まず最初に
僕が科学的だと
感じた訳から話すよ。

雪ちゃん。

まず最初に僕の言った通り

イマジネーション

して欲しいんだ。」

「わかった。いいよ。」

「まず、君の身体を想像して」

「わかった。いいよ。」

「君の身体は細胞の集合体だ。

小さな細胞がいろいろ集まって、

組織を作りそして、

臓器になり、

生命を維持している。

どう?想像できる?」

「大丈夫。出来ているよ。」

「君自身は細胞の固まりでもあり、

そして、細胞のひとつでもある。

そうでしょ?

どちらが君だとは断定できない。

そうでしょ?」

「そうね。やっぱりそうだわ」

「じゃその君自身の

細胞のひとつ

を想像して見て」

「わかったわ。いいよ。

これが私ね。

想像したよ。」

「その細胞は君のものだ。

君自身ともいえるでよ。

だって、その細胞が集まって

君自身が作られているのだから」

「まあ—そうとも言えるわね。」

「そのひとつの細胞を電子

顕微鏡で見て見よう。」

「うん、想像できたよ。」

「そうすると、原子核の

周りを回っている電子

が見える筈だよ」

「ね—そんなの想像できないよ。」

「そんな事はない筈だよ。

理科の教科書のページ

を思い出して見て、

一度は必ず見た事あるから」

「んーわかった。

ok出来たよ。」

「どう、ここまで想像して見て

気が付いた事ない？」

「別にないよ?。」

「こう考えられると思わない?

つまり、僕らは原子核の周り

を回る電子の塊。

つまり、エネルギーの集合体。」

「確かにそうね。

そう考える事出来るよ竜ちゃん。

むー そうね。

竜ちゃんすごいね。

よくそんな事に気が付いたね。」

「続きがあるんだ。いいかな？」

「おねがい。竜ちゃん」

「そういう風に

考えて見ると、

この世は全てエネルギー

の集合体だと思わない？

だって、物質は全て原子核

の周りを電子が飛んでいる

んだから」

「考えて見ればそうね。」

「この世の物全てが

エネルギー

の集合体だよ。

もちろん君自身も

エネルギーだ。」

「こういう風に世の中

を考えることが

まず仙道始める

第一歩らしい。」

「そうなんだ?。」

でも、仙道ってすごく

古いものなんでしょ?

そんな昔に

そんな事考える事が

出来た人がいたなんて

私驚いちゃった。

だって、昔は今よりも科学が

発達してなかったはずだし、

それに……」

「ちょっとまって雪ちゃん。

お爺さんが残した資料の中に

オーパーツという

ものがあつたでしょ?

わすれちゃった?」

「オーパーツ?

あつ オーパーツね。

確かその時代では

作れない筈の

高い科学技術を

必要とする遺跡や建物、

あるいは装飾品のあれね。

たとえば

水晶で作られた髑髏の彫刻とか、

剃刀の刃も通さない程

隙間を作らずに作られた

石の土台

のあれでしょ。」

「そう、

その時代にそぐわない

高い科学技術を必要とする

いろいろの物をあつめた

オーパーツ。

それから、見られるように

昔は、

今より優れた科学技術

を持っていた証拠もある。

伝説の類では

アトランティス大陸

なんて言うのもある。

だから、今より昔の方が、

科学技術が進んでいたと

予測する事はそれ程困難な

作業ではない筈だよ。」

「そうね、

やっぱりそうかもね。」

「話を戻すね。

仙道はこのエネルギーを

コントロールする為の

方法なんだよ。

僕たちはエネルギー

の集合体だ。

それで、

先ほどの想像を続けて欲しい。

原子核を回っている

電子を想像できたかい？」

「ええ、準備はいいわ」

「それをもっとも

小さいものまで

探っていって欲しい。

何が見える。」

「わからない。」

「それは、そうだよ。

誰も見た事がない。」

「それなら、

解るはずないでしょ。

意地悪ね竜ちゃん。」

「雪ちゃん。

見た事がなくても

想像は出来るでしょ。

想像して見て。」

「うん。

なんだかあったかい感じ

紅色に赤くて

あったかい空間かな？」

「そう、それでいいよ。

それが気と

呼ばれるものなんだ。」

「気？」

「そう『気』。

エネルギーをこれ以上

小さく出来ないまで、

小さくしたエネルギー。

それを昔の人は

『気』と呼んだんだ。」

「へーこれが『気』ね。」

「どうここまで聞いて

科学的だと思わない？」

「ええ。 とっても。

だけど、どうやって

この『気』を

コントロールするの」

「それが、

君のお爺さんの書いた

本の中に書かれていたよ。」

「本当に？」

「本当かどうかは僕自身も

わからない。ただ、この本を

読んでみて、やってみる価値が

あると僕は直感したよ。

僕は君のように

今回はこの直感を

信じるよ。

つまり、

これから自分自身を実験台

として試して見ようと思うんだ。

僕はこの本の中に書かれた

修行方法を実践して

いく事に決めた。

そうした所で、

誰も損をする訳では

ないから。」

「でも、『気』をコントロール

出来るようになると何かいい事

でもあるのかしら」

「僕も半信半疑だけど、

コントロール

出来るようになると

病はおろか、

不老不死になるらしいよ。

それに、この本によれば、

気を散ずれば姿を消し、

気を集めれば姿を表す。

つまり、

仙人になれると書いてたよ。」

「でも、

なんだか信じられないわ。」

「僕はやって

みて駄目なら信じない。

でも、やってみたいんだ。」

「それなら、私も付き合うわ。

私も竜ちゃんと一緒にやりゆ」

「わーい。

本当に。やったー。

一緒にやろうよ雪ちゃん」

「うん。うん。

一緒にやろー。

雪もがんばるから」

「おいおい。

二人とも。

お前達は知っているか。

仙道の道はそんなに甘くない。

大体 この地球上の全人口

の人が全員、つまり67億人

が仙道を今から初めて

仙人になれる人が何人いると思う？」

「？」

「おそらく限りなく0に近いだろう。

ただ0ではない。

それは個人の可能性にかかっている。

つまり、揺ぎ無い信念と信じる心、

そして、行動がその人物に

備わっているのなら

その機会は近いだろう。

だが、そんな逸材は何千年、

いや、何万年という歳月に

数え切れる程しか現れていないのも

事実だ。

そんな中で、この一生だけで仙人

に成れると考えるお前たちが

愚かなのか、それとも、

そう考えられるほどお前たちが

優秀なのか俺には分からない。

ただ一つ言える事は、

爺様の書いた通りに

ひょいひょいと

修行という奴は進まない。

ある段階から、

次の段階まで

何年、何十年もかかる場合もある。

そんな中で、

この仙道が続けられる忍耐力

は想像をはるかに越えるほど

この道には要求される。

ここで信じる心を試されると

いっても過言ではない。

誰もが気軽に始め、

そして、ここで躓く。

人間は結果が速く見えるものに

心を奪われる。

仙道は結果が目に見える

までは俗人にとっては遅すぎる。

大抵の人は

結果が出ても本人は気が付かない

程度のものだ。

その人の能力に依存するけどね。

気が付くために更なる修行が

必要なのに、そこで人は諦めて

止めてしまう。

お前達だって

きっとそうなるだろう。」

第二節 仙人への道？

「そうかもしれない。

でも、

僕はやってみるよ修さん」

「私もやって見たいの

お兄ちゃん」

「好きにしろ」

「ところで修さんも一緒に

どう？」

「実はな竜治。

俺は18からすでに

やっている。

お前と同じように

爺様の本を読んで

すぐに始めた。」

「さっすがお兄ちゃん。

で、どうなの？」

「えへん

結構成果が最近出てきた。」

「うそ、どんな風に？」

「聞いて驚くな。」

「うん」

「腹に熱が溜まるようになった。」

「それってすごいのか？」

お兄ちゃん」

「どうだろ？」

すごいと思うか？竜治」

「僕はすごいと思うよ。」

だって本に

書いてあることが

ちゃんと修さんに

起こっているの

だから、これは、

すごい発見だよ。」

「そうね。

お爺様の書いたことが

実際に起こってるんだもの。」

「だが、ここまで来るのに

俺は4年かかったぞ」

「えっ4年!。

だって腹に気を溜めるって。

確か仙道の基本中の基本。

まだ、始める前の段階の事

の筈だよな。修さん。」

「その通り。

俺は4年もたって

まだ仙道に入る準備も

出来ていないって訳さ。

それでも、

お前達はやるつもりなのか？」

「もちろんよ、お兄ちゃん。

さっきお兄ちゃんは

その人の可能性によって

上達のスピードが違うって

言っていたでしょ。」

「そうだが、

これはちゃんと聞いたか？

仙人になれる可能性は

0に近いと」

「ええ、でも0ではない」

「参ったよ雪。

流石だな。

お前にはかなわない。」

「ねっ竜ちゃん」

「そうだね。雪ちゃん。

修さんは、今まで4年間

仙道をやって来たんでしょ？」

「ああ」

「よかったら雪ちゃんと僕に

やり方をご教授

してもらえないかな？」

「竜治、頼む時には

それなりの事を

するもんだろう。」

僕は土下座をして、

笑っている

修さんの期待にこたえた。

「よろしくご教授の程

よろしく願い

いたしまする。」

「よろしい」

満足げに笑みを

浮かべた修さんは

両腕を組んで、

うん、うん、

頷いていた。

「それでは、

話してしんぜよう。」

「仙道には大きく分けて
二つの方法がある。

一つは外丹法。

もう一つは内丹法だ。

外丹法。

というのは

鉱物などを使って

熱したり

焼いたり、

色々に科学的処理

をして、薬を作り、

それを飲む事で

仙人になる方法だ。

これを西洋では

錬金術と呼んでいる。

しかし、

これは殆ど実現不可能だ。

何故なら、

作れる人がいない。

その製法を記した

本もあるにはあるが、

それを見てわかる

鉱物や処理方法は余りに

少なすぎる。

仮にその本を読んで

全ての製法、材料を

理解できる人が

居たとしても、

きっとその人は

世の中に出てこない。

そういう理由で、

僕らがこの方法を

用いるべきでない。

しかし、

この外丹法の書物を

無駄なものとは

言い切れない。

これを内丹法に

応用できる

筈だから。

それは後にして。

もう一つは内丹法だ。

内丹法とは、

自然界に存在する未知の

エネルギー『気』

と呼ばれる物を

自らの体内に発生させ

保持し、強くして、

そのエネルギーを自在に操る。

そういう人を我々は

仙人と呼ぶ。

つまり、

俺らが取べき方法は、

内丹法しかない。

この方法をとる理由は

幾つかある。

まず第一に、

自分で、自分自身を

使って実験できる点。

つまり、

直接の理解が可能な事。

人は自分で体験したものを

否定はしない点を考慮に入れて

もらえば解る筈だ。

そして、

体系が整っていて、

どういう段階に至ると、

どのような体験が起きるかを

きちんと説明している。

つまり、

修行方法がはっきりと

示されている。

それで、

内丹法を使う仙道家

が多い事も頷ける訳だ。

そして、仙道の段階には、

次の段階が

大きく分けて5つある。

まず一つ目の段階

『気』とはどんなもの

なのかを

自分自身で感じる事。

解る事。

ここから始まる。

俺は4年かかったよ。

これが『気』と解るまで。

そして、二つ目の段階。

『棟精(れんせい)化気』

.....

精を練って気に変え、

体のある決まったルート

を還流させ気を強めていく。

仙道ではこの事を小周天

と呼んでいる。

そして、三つ目の段階。

『棟気(れんき)化神』

.....

気を練って陽神という

自分の分身を作り出す

段階。

仙道ではこの事を大周天

と呼んでいる。

そして、四つ目の段階。

『棟神還虚(かんきょ)』

.....

陽神を鍛えて空間、

時間、次元を自由に

行き来できるようにし、

最後には肉体も陽神と

同じエネルギー状態

に変えていく段階。

仙道ではこの事を出神

と呼んでいる。

そして、五つ目の段階。

『還虚(かんきょ)合道』

.....

肉体を陽神のエネルギー

状態にした後、

今度は自分そのもの

つまり、肉体、陽神、

自分の心を根源的な

エネルギー状態に

戻す作業。

仙道ではこの事をタオ

と呼んでいる。

簡単に言えば

これでやっとな人に

なる事が出来る。」

「でも、どうしてお爺様は

仙道をやっていたのかしら？」

「雪ちゃん忘れたの？」

お祖父さんは

神様に会いたかったんだよ」

「この仙道をやっていると

神様に会えるの？

竜ちゃん。？」

「僕も会った事がないから

何とも言えないけど、

似たようなものらしいよ」

「似たようなもの

ってどういう事？」

「人はタオに戻る。

つまり自分が

神様だった事に

もう一度気づく事が出来る。

そう書いてあったよ。」

「えっ人間は神様なの？」

「そうだ雪乃。

俺たちは自分が神様

だという事を

忘れてしまった。

それとも、

わざと忘れた存在なんだ。」

「でも、

どうして私たちが神様なの？」

「それを知る為に

仙道があるんじゃないか」

「そっかーお兄ちゃん

頭いいっー」

僕達はあどけない彼女の

姿を見て三人で笑った。

第三節 仙人への道? pert2

「それじゃー

お兄ちゃん

まず最初に私達が

やらなくちゃいけない事

教えて」

「ああ、まず第一に

『気』を感じ

なければならない。

それにはまず我々の五感を

使って知る必要がある。

我々が認識できるからね。」

「うん。うん。」

「まずは触覚を使う」

「竜治 雪乃の手の上に

お前の腕を乗っけてくれ」

「こうかな？」

「ああ、そうだ。

そして、

その手を付くか

付かないかの

距離に保って

そのまましていてくれ」

「どうだ、雪乃。

何か感じるか？」

「ええ、静電気のような

モワットした、

電気のような

ものを感じるわ」

「竜治、

お前は何か感じるか？」

「うん。熱のような物が

雪ちゃんと僕の手の間に

感じるよ」

「そう、今二人の言ったものが
感触による、つまり、皮膚から
僕らが情報を得た。『気』の
存在だ。

まず初心者はここから始める」

「これが『気』？」

「そうだ、それが『気』だ」

「なんだ簡単じゃない」

「ところがそうでもない。

雪、お前に聞くが、

俺がそれを『気』と

説明したが

おまえ自身は

それで納得したのか？」

「そう言われてみると

わからない。

納得はしてないかも」

「そうだろう。

それを『気』と

おまえ自身が

納得するまで、

例えそれを感じる事

が出来たとしても

それを『気』だと、

お前自身の中で

理解できていない。

そうじゃないか？」

「そう言われて

みればそうね。

お兄ちゃん」

「その感覚を

おまえ自身が

『気』と本当の意味で

理解するには、

もっと確かな事実が

必要だろう？」

「そうね。

確証が欲しいわ。」

「それで、次の事を

始める。」

「別の五感を使うのね」

「いや、他の五感は

ここでは使わない

初心者にはこの感触

以外探る手立てはない。

もっと修行が進んだ段階で

他の五感を使うが、

それは、

まだまだ先の話だ。」

「そうなんだ。

それじゃ

どうしたらいいの?」

「呼吸法という物を使う」

「呼吸法?」

「そうだ。

呼吸を使う。」

「どうするの?」

「まあ待て、雪。

最初に説明しないと、

また、

なぜそうするのかを

説明しなくてはならない。

だから最初に

説明させてくれ。」

「ええ、わかったわ」

「仙道が教える

ところによると、

『気』という存在は、

我々が意識を集中させる

場所に集まる。

だが我々人間は

意識を集中

させよと言われても、

それを

すぐに出来る人は

そんなに

居ない筈だ。」

「試しにやって

見てくれないか？

竜治。」

「でも、どうやって？」

「そうだろ。」

それが、

普通の感覚だと思うよ。

集中させる為には、

まず最初にこの絶対条件

が必要なんだ。」

「絶対必要条件？

ってどんな事」

「それは、

リラックスしている事だ。

人間が意識を集中

させる為には、

必ずリラックスした

心の状態がなければ

集中など出来ない。

うるさい所で

集中できない人

が多いのはリラックス

できないから

なんだ。

そこで、次の事を

此処で思い出して欲しい。

実生活のなかで極度に

緊張した時、

無意識のうちに

我々は深呼吸する。

すると、

なぜか緊張がほぐれて

リラックスできたなんて事は

今まで何度か

経験した事があるだろう？」

「そう、

言えば私もある。

そんな時」

「そうだろ。

深い呼吸は精神を安定さ

我々をリラックス

させる事が出来る。

そこで、腹式呼吸を使う。」

「腹式呼吸ってどうやるの。」

「簡単さ。

空気を吸い込む時に、

お腹を大きく膨らます。

そして、吐き出す時には、

お腹を縮める。

吸い込む時は口

から吸い込み、

吐き出す時は鼻から出す。

その時、

男性はへその下、

大体指四本ぐらい下の、

丹田と呼ばれるポイントに

意識を置く。

女性は両乳首を

結んだ真中辺りの壇中

と呼ばれるポイントに

意識を置く。

姿勢は仰向けに寝て

リラックスしてやるべきだ。

なぜなら、それが一番

楽な姿勢で初心者には

丁度いい。

手と足は開き伸ばして、

あるいは手を、

男性は腹の上

女性は胸の上

に置くのもいい。

そうすることでそこに

意識が向かう筈だから」

「これでいいかな

お兄ちゃん？」

「もう少し、

深く、

ゆっくり、

やるんだ。

雪。」

「これでどう？

修さん」

「んっいいぞ。

竜治。

それをずっと続けろ。」

「ずっとって。

どれぐらい？」

「そうだな。

慣れるまでは、

一日に少なくとも

一時間。

理想は二時間って

とこかな？」

「そんなに

やらなくっちゃ

いけないの?」

「おいおい。

これは初歩の初歩

ここでそんなこと

言ってどうするんだ

雪。」

修さんは笑いながら

からかう様に

僕らに言った。

「修さん。

これが出来たんだから

次を教えて」

「竜治。

残念だがお前達は

まだこれが出来たとは

言えないだろ？

何故ならこれが出来る

といえる人なら、

腹にホッカイロを

入れてるように

熱くなって

感じている筈だから。

お前はどうか？

竜治そんな風に、腹は

熱くなっているか？」

「まったくくなってないよ」

「じゃーそうなるまで

それを続けるんだ。

早くて大体二週間。

遅くても三ヶ月ぐらい

たてばそれを感じる

ぐらいになれる。」

「なんか大変なんだね。

お兄ちゃん。」

「そうだ。

簡単じゃない。」

「でも、修さんは

四年でやっとこれが

出来たんでしょ」

「いいや、

これは、

大体二週間で出来たよ。」

「じゃ……」

「熱を感じるまで

四年かかった。

と言ったのは、

この事じゃない。

それは、この『気』という

者の存在を確認して、

自分自身がまったく

その存在を疑わないと

言う意味なんだ。

これからお前達も、

仙道をやって行くそうだが、

俺がお前達に出来る唯一の

アドバイスは、信じる事。

それが全てだ。」

「信じる事ね．．．．．」

「そう、

それしかない。

そのうち、

この本に書いてある

事が色々自分自身の

体験として現れる。

それまでは、信じるしか

これをやり遂げる

方法はない。」

「解った。お兄ちゃん。

私信じてやってみる」

「それと、

本に色々書いているが

とりあえず熱が

発生するまでは

これ以外をするべき

じゃないぞ。」

「なんで、お兄ちゃん。」

「時間の無駄さ。

この一番優しいやり方で

出来ない事を、

もっと難しい方法で

出来る筈ないだろ？」

「そうだね。」

「だからこれを

やりつづける事だ。

一つの事をやり遂げる事が

出来るってことは、

全てをやり遂げる事と

変わらないと、

昔の人は言った。

そして、それは事実で

それを証明出来るのは

何を隠そう俺達しかいない。」

「そうね。

お兄ちゃん。」

第四節 仙人密話

次の日の朝、

目覚めると本を片手に

真剣なまなざしをした

彼女が僕の目の

前に座っていた。

隣には白ちゃんが

行儀よくお座りして、

頭を床につけてすやすや

安心して寝ていた。

「おはよ。雪ちゃん。」

「おはよ。竜ちゃん。

よく眠れた。」

「ああ。

よく眠れたよ。

そして、

目覚めも最高だよ。

だって、

君が居てくれたから。」

「うれしい。竜ちゃん。

私も最高よ。

貴方が居てくれるから。

今、紅茶持って来るね。」

彼女は僕にウインクして

キッチンに向かい、

香ばしい紅茶を片手に

僕の隣に座った。

僕は手渡された紅茶

を乾いた喉に流し込んだ。

「生き返ったよ。

ありがとう。」

「いいえ、

どういたしまして。」

彼女はウットリとした目で

僕を見つめつづけ、

僕は吸い寄せられるように

彼女の唇に僕の唇を重ねた。

「ね一何を読んでいたの？」

僕の胸の中に子供のように

顔をつけている彼女に聞いた。

「えっと、お爺様が書いた本。

『仙道』だったかな？

この本の題名」

彼女は上目遣いで

答えた。

「そっか、

雪ちゃんも本格的に

勉強を始めたんだね。」

「一応。私も読んで

おこうと思ってね。」

彼女は僕の襟をつかんで

じゃれていた。

「その本面白いよね」

「ええ。

とっても。

ね一竜ちゃん。

竜ちゃんは仙人の

存在を本当に信じるの？」

「もちろん」

「でも、

本当にこんな人

居るのかしら？」

「そう思うのも

無理はないよね。

雪ちゃんは彭祖

の話まで読んだ？」

「まだ読んでないよ。」

「そっか。」

その本の中に書いて

あったんだけど、

彭祖という人は

仙人で夏王朝のころ仙道

を極め、殷王朝の末期には

すでに760歳にも

達していたんだって」

「すごーい」

「それに、

鐘離権

という仙人は弟子である

呂洞賓

という仙人に仙道を教えたのが

唐の則天武后

の時代で、この時既に、

鐘離権

は500歳にも

なっていたらしいよ」

「じゃー仙人は

死なないんだね」

「ところがこんな

話もあったよ。

太極拳の伝説の祖として

知られる張三坊

という仙人がいて、

彼は身長が

2メートル10センチ、

耳は大きく、

目はまんまる。

ヒゲはまるで矛のように

垂れ下がり、

一年中裸

同然の格好をして、

時には大食して、

時には何ヶ月も

食事をとらずに

本ばかり読んで

過ごしたんだ。

一日に千里もの

道を歩いたり、

時には黙って

十日も静座して

座っていたんだって。

彼は宋の時代の人で、

元の時代の末期に一度

死んだあとに

再び生き返り、

明、清の時代にかけて

多くの弟子に仙道を教え、

いつの間にか消え去ったと

言われている。」

「そうなんだ。

一度死で生き返る仙人

も居るってことなのね」

「もっと興味深いのが

その死に方なんだ」

「死に方？」

「仙人が死んだ後、

柩を開けてみたら

死体が消えて

無くなっていた

という話が

よくあるらしい。

こうしたタイプの仙人を

屍解仙

というらしいよ。」

「へーそうなんだ」

「漢の武帝の後の一人に、
こうよく夫人という人がいて
彼女は正真正銘の
仙女だったらしいんだけど、
漢の武帝に寵愛され、
昭帝を生んだ。
武帝はその生まれた子が
自分の子では
ないのではないかと
疑いをもった。
こうよく夫人は自分の
潔白を証明するために
自ら死を選んだらしい。
ここからが本題だ。
なんと彼女の死体は
一ヶ月たってもまったく
腐らず、かえって香しい
匂いを漂わせ、
まるで今でも生きているよう

に肌は桃色に輝き、

決して土色に変わらなかった。

後に埋葬され、

息子の昭帝

が柩を開けて

死体を調べてみると

身に付けていた装飾品だけ

を残して死体は

完全に消えていた。」

「死体が消えたの？」

「そうだよ。

消えたんだ。

こういう話もある。

蔡経という

人が仙人の王遠

という人に出会った。

王遠は蔡経

に言った。

「そなたは仙人になる

運命のようじゃ。

わしが戸解の術を施して

しんぜよう」

蔡経は家に

帰ったとたん、身体全体が

炎にあぶられたかのように

発熱し始めた。

驚いた家人が水をかけたが、

音を立てて水が蒸発したらしい。

まるで焼け石に水を注いで

いるように。

そんな高温の状態が

三日も続き

身体はやせ細り、

衰えて骨ばかり

のようになった。

蔡経は

自ら布団を

被ったかと思うと、

突然、

姿が消えてしまった。

家人が恐る恐る

布団をめくると、

そこには

蔡経の皮膚

だけが、まるでセミの抜け殻

のように残っていた。

しかし、十年も後になって、

彼はひょっこりと

家に帰ってきた。

家人は驚いた。

さらに不思議なのは、

彼の風貌だったらしい。

彼は以前より

若々しくなっていた。

と書いてあったよ。」

「不思議な話ね。

あまり現実と

かけ離れていて、

今の私には、

信じることが

難しそう。」

「そうだね。

だからこそ、

僕は信じて

みたいんだ。」

「竜ちゃんが信じるなら

私も信じるわ。

そうしょ。私決めた。」

「そうだね。

雪ちゃんが信じるなら

僕も信じ続けないとね」

「もっと仙人の事について

話してよ竜ちゃん」

「僕の知識はその本から

得たものばかりだよ。

だから、

雪ちゃんのおじいちゃん

の書いたその本を読めば、

雪ちゃんだって・・・」

「私は竜ちゃんから

聞きたいの。

そうしたら全部

信じられると思うから」

「わかったよ。

それじゃ話すね。

仙道の祖と言われる

老子の話を」

「お願いします。

竜ちゃん」

第五節 不思議な人 老子

「老子は現在の中国の

河南省鹿邑県に生まれ、

姓は李、名は耳、

と呼ばれていた。

一説によると、

老子の母は、ある夜

巨大な流れ星が家の

近くに落ち、その衝撃

により老子を宿したという。

そして、72年もの間、

母親の胎内にいて、

生れ落ちた時には既に

白髪で杖をついてたとも

伝えられている。

仙道家の解釈では、

その母親と呼ばれる

女性が仙道を72年間行い、

その体内に出来た気

の塊そのものが老子

となったと言う人もいる。

それは、さておき、

老子は成長して周王朝の

王室図書館の司書を務めるが、

やがてその博識の高さ、

多彩な才能

は広く世間に伝わるようになる。

彼はけっして名声や地位を求めず

ただ、一介の司書官として

仕事をこなしていた。

彼の噂を聞きつけた高官などは、

高名な人物に一目会おうと、

彼のもとに何人も駆けつけた。

彼は服装などもまったく無頓着で、

あまりのみすぼらしさに接見した

誰もがあっけにと取られた程らしい。

そんな時、その時代にあの思想家

で有名な孔子が老子の評判を

聞いて合いに来たんだ。

孔子は自分が思っている「道」

という思想を老子に話した。

老子はやさしく笑い、

こう言った。

「よい商人は品物をたくさん持って

いてもそれは店の奥にしまい、

表では何も売っていない振りを

するものです。

徳の高い人も同じこと。

どれだけ徳を積んでいても、

それをただ腹の中で養い、

見つめて満足するのが

本物の知者であり、

それを見て愚者と思うのが、

一般的な人々です。

貴方は知識をこれ見よがしに

鼻先にぶら下げ、

野心が顔に現れすぎて

いるようじゃな。」

彼は老子に会った後、

こうもらした。

「あのお方は、あたかも

天に上る龍のような人で、

私ごときの間人では、

計り知ることができない。」

どう？

雪ちゃん。」

「すごーい。で、

どうなったの？」

「やがて、老子はその時代の

周王朝の終わりを感取り、

隠棲を決め、職を辞職して、

一人牛の背にまたがり、

西方に向かって旅をした。

時は大体紀元前600年。

つまり、

キリストが生まれる

600年前、

ここからあの有名な

道徳経と呼ばれる思想が

人々に伝わることとなったんだ。

周の西方の国境近くの関所に

尹喜(いんき)という番人がいた。

彼は人里離れた関所で、

だだひたすら勉強に

打ち込むことで

退屈を紛らわせていた。

そんな変化のない毎日に

うんざりし始めた頃。

いつものように

関所の前に立ち

遠くをぼんやりと見つめた。

するとあたり一面がなにやら

うっとりとする空気に包まれ

正常な雰囲気は辺り一面に

広がっている。

これはどうしたことか？

と不思議な気持ちに包まれた

いんきは、遠くをみつめた。

すると、一人の老人が、

青い牛にまたがってこちらに

やって来る。

いんきは此方にとって来る老人を

見て思った。

この得もいわれぬただならぬ

雰囲気、顔立ち、しかも、

身体から見られる気高い靈気。

只者ではない。

彼は思わずその場にひざまづき

言った。

「どなたかは存じませぬが、
おそらく貴方様はこの国境を
超え、世を捨てて仙人の道へと
入られるお方と

お見受けいたしました。

しかし、どうかその前に

この私に

『道』という計り知れないものを

教えてもらえないでしょうか」

老子はいんきの申し出に、

「私は弟子など持った事が

ないのじゃよ。どうか、その

お頭をおあげください。」

と、再三断りの言葉を

述べた。しかし、いんきは

決して諦める事無く地面に

額をこすりつけた。

老子はいんきのその姿をみて、

哀れに思い、いんきの手を

取ってやさしく微笑みかけて

いった。

「わかりました。

貴方のその熱意に

私は決して勝てないでしょう。

そして、貴方は私を見抜く

非凡な才能を持ち合わせている。

このみすぼらしい老人を

貴方は慕ってくれる。」

こうして、老子はしばらく

関所にとどまり、道と徳の

5000言をいんきに口伝し、

それをいんきが筆録した。

これが、仙人になる為の

生き方の書であり、

人間の本来あるべき

姿を書いた書と知られる、

道徳経なんだよ。

この書は『道』を

宇宙生成における

根源とし、かつ全ての

現象とならしめる

原理として明確に

打ち出したもので、

宇宙の律動の中に、

人間の精神的超越

を見出す思想と

考えられているんだ。」

「そうなんだ。

それから老子さんは

どうなったの?」

「彼のその後の消息は

わからないんだ。

でも、色々な伝説で

その後もさまざまな時代

に登場し人々に

目撃されている。

でも、その事について

確かな証拠はない。

でも、僕はこれを

読んだ時思ったんだ。

きっと老子さんは

今でも生きていて。

この時代の我々を

見つめつづけている。

そう思うんだ。」

「きっとそうね。

私たちの事も見えていて

くれるかな？」

「きっとね。

きっと、

見ていてくれているよ。」

「そうね。竜ちゃん。」

彼女は甘えるように僕の胸に

額をこすりつけ言った。

第六節 道

「ね一竜ちゃん。

そもそも『道』って

なんなんだろうね？

これを読んでも
私にはよくわからないの？」

彼女は顔をしかめながら

本をにらみ僕に言った。

「安心して雪ちゃん。

この道德経を理解するには

何度も何度も読み直して、

そして、自分の生活の中に

取り入れてみないと

理解できない

作りに意図的に

してあるんだ。」

「んーどうということ？

それって」

「つまりは一度読んで

理解できる人間は居ないって

事だよ。」

「なんだ、そうなんだ。

じゃ一竜ちゃんも

やっぱりわからないんだ」

「ところがそうでもないんだ。」

「やっぱり竜ちゃんて、

天才？」

「違うよ。

実は中学の頃から

老子さんに

ちょっと興味があって、

その頃から何度も何度も

この教えを読んでいるんだ。」

「何度もって

どれくらい読んだの

この教えを」

「数え切れないよ」

「へー竜ちゃん。

すごいね。

やっぱり私の竜ちゃんだ」

「ありがと。

だから、

ちょっとなら『道』って

いう得体の知れないものを

説明してあげる。」

「おねがい。竜ちゃん」

「いいかい雪ちゃん。

結論から先に

言わせてもらえば

『道』を説明できる

人は存在しない。

ただ知るための

アプローチの仕方は

無限にある。」

「意味わかんないよ。

竜ちゃん」

「いいかい雪ちゃん。

『道』とは全ての存在の

本当に核として存在している。

つまり、

君も僕もこの世界全てが

『道』という核に

よって成り立っている。

では、その核とは

なんなのだろう？

そこから、説明しなきゃね。」

「うん。おねがい。」

「『道』を説明できる

人は存在しない。

ただ知るための

アプローチの仕方は

無限にある。

ってさっき言ったの

覚えてる？」

「うん。でも・・・」

「『道』を簡単に言うなら、

それは、何物かであり、

何物でもない。

原因と因果律から自由で、

しかも同時に因果律の中にも

生まれる。

認識できないが、

一体となることができ、

空間を超越しているが、

またいかなる空間にも、

遍満しているもの。

簡単に言い換えれば、

そのような性質のエネルギー

と考えると理解しやすいよ。」

「何物かであり、

何物でもない。

原因と因果律から自由で、

しかも同時に因果律の中にも

生まれる。

認識できないが、

一体となることができ、

空間を超越しているが、

またいかなる空間にも、

遍満している性質のエネルギー。

なるほどね。

なんとなくだけど

わかった気がする。」

「『道』とは全ての存在を

維持し、支え、時には壊し、

そして、僕たちを存在させている

力だ。

あらゆるものに存在するため、

アプローチの仕方が無限に

あり過ぎて、

僕らはかえって混乱する。

だから、

エネルギーと捕らえることで、

その混乱を緩和させるんだ。」

「うん。わかった。」

「混乱しないように

最初に説明しておくね。

『道』を知るための

アプローチの

仕方は無数にある。

例を挙げるなら、

例えば、

存在と非存在の両方を

成り立たせている原理

と捕らえたり、

根源的な気と捕らえたり、

ある種の精神的な

境地ととらえたり、

宇宙に遍満する

エネルギーと捕らえたり、

生きる目的としての道、

つまり正しい生き方

の方法と捕らえたり、

様々だ、

一方では原理であり、

また一方ではエネルギー、

そしてまた一方では、精神論。

どれも、

同じものを説明しているのに、

そのアプローチの仕方で

僕たちの捕らえ方では

違って見えるように見える。

でも、それはあくまで同じものなんだ。

さっきも言ったけど、

全ての存在の核

となっているから

どのような現れ方

を問わずに必ず存在するもの。

これを『道』と

昔の人は言ったんだ。」

「うーん。わかったような？

わからないような？」

「笑 それでいいとおもうよ。

そんなに面白い顔しないで

雪ちゃん。」

「だってー」

「全ての存在の核

となっているから

どのような現れ方

を問わずに必ず

存在する『道』は、

形態を必ずしも伴わない。

なぜならエネルギーだから。

つまりは僕たちの思考でさえ、

その中にそのエネルギー

が存在する。」

「なるどね。」

「この『道』のエネルギー

をもう分解できないほど

小さくしたものを『気』と

呼んだんだ。」

「へーそうだったんだ。

竜ちゃん。」

「その気が結ばれると、

物になる。

僕たちの体を見てもらうと

理解しやすいよ。

だってたくさんの細胞が

折り重なって

僕たちは存在してるでしょ」

「流石(さすが)竜ちゃん。」

「今度はその気が解けると

それを僕らは空と呼ぶ。

世界は『道』の中で揺れ動く

気の一様態に過ぎない。

つまり、本当の世界とは

多次元であり、

僕らが捕らえられる

世界はこの今の世界しかない。

でも、もし『道』を

正しく捕らえることが

できるのなら、

僕たちはそこで

世界がもっと

多くの数え切れない

世界と同時に

動いていることが

わかると言われている。」

「でも竜ちゃん。

説明できない『道』を

どうやって私たちは

理解したらいいの?」

「それはもっともな質問だね。

雪ちゃん」

彼女はぬいぐるみを片手に

いらいらしながら子供のように

すねた

「確かに『道』を言葉で

説明することは不可能だ。

ただ言葉だけが我々の理解

方法だけではない。

例えば自転車だ。

自転車の乗り方を

説明することは

出来ないけど、

感覚で理解できることは

我々も経験済みだ」

「えー私自転車乗れないよ」

「じゃー自動車は？」

「なるほど。それなら納得」

「感覚の理解を説明できない

以上我々は体験として

経験していくしかそれを

理解することはできない。」

「でも、どうやって」

「そこで出てくるのが

この『仙道』さ」

「なるほど。

でも、どうして？」

「僕たちの思考でさえ、

その中にそのエネルギー

が存在するって僕が言ったの

覚えてる？」

「うん？。

そうか、つまりその

思考の中に存在するエネルギー

の『道』を感覚的に理解するって

事なんだね」

「さっすがハーバードだね」

「もーからかってるの？」

「ごめん。

仙道家たちは意識で

気を操作する方法を

編み出してその方法を残した。」

「つまりそれが仙道なのね。

竜ちゃん。

なんかわくわくしてきた。」

「僕も君のおじいさんに

感謝だよ。今まで思いも

よらなかったよ。

意識の中にある

根源的なエネルギーを

意識によってコントロール

するなんて、

びっくりしたよ。」

「そうよね。

私もびっくりだよ」

「仙道家たちは、

呼吸法や瞑想を駆使して、

腹部に神秘的な袋

『胎』を作り、

それを体験的に理解して、

そして、『気』と合一する。

感覚的理解はつまり一体化

を意味するから、

そこで彼らは神となる。

それが仙道なんだ」

「ふーん。

なるほどね。

なんだか難しくて

頭がこんがらかっちゃうよ。」

「一度に理解しないで

少しずつ理解していこう。

この旅は先が長いんだ。」

「そうね。

いっしょにつね。」

「そう雪ちゃんと僕で」

「ね一竜ちゃんキスして」

「もちろん」

第七節 仙道ミッション1

「よーお前等。

朝から熱いな。」

「おっお兄ちゃん。

何時からそこに」

「なんだ気が付かな

かったのか？

さっきからずっと居るよ」

修さんはぼさぼさの寝癖

頭で頭を掻きながら

テーブルの隅に座っていた。

「雪なんか飲み物」

「わかったわ、

ちょっと待ってて」

雪ちゃんは真っ赤な顔で

その場から逃げるように

キッチンに走っていった。

「竜

おまえなかなか

飲み込み

がいいな。」

「そっかな」

「はい、紅茶。

お兄ちゃん」

「ありがとう。雪。

俺にもすこし仙道について

説明させてくれるかな。」

「もちろん。喜んで。

ねっ雪ちゃん。」

「えーお兄ちゃんからは

聞きたくない。」

「雪。

まーそういうな。」

「うそよ。お兄ちゃん。

話して」

「仙道をやる上で

まず第一に取り組まなくて

はならない事について、

話しておきたいんだ。」

「まず第一に取り組まなくて

はならない事？」

「さっき竜治の話にも

あったように仙道では

思考の中に存在する

エネルギーの『道』を

感覚的に理解することが

最大の道といえる。

それを実現するためには、

我々の心を最初にきれいに

洗い流さなくてはいけない。

つまり、怒り、嫉妬、欲望

その他のネガティブな状態の

心を浄化しないとイケない。

なぜなら、

思考の中に存在する

エネルギーの『道』を

感覚的に理解する為には、

その綺麗な心の状態

でないと不可能だからだ。

そのために我々、

仙道家達は

普段の生活を自分自身で

観察して、

自分が今何をしているのかを

把握しなくてはならない。

そして、もし、

自分が怒り、嫉妬

その他のネガティブな感情を

抱いた時にそれを止めさせる。

自分で自分の行動に責任を

負う。そうしていくことで、

感情を自ら

コントロールしていく。

それは、つまりエネルギー

をコントロールすることに

他ならない。

これがつまり、

修行というわけさ。」

「なるほど。」

「そして、

この綺麗な心を

作るための方法として、

瞑想という方法もある。

瞑想とは、

ただ何も考えず

目を閉じて心を見つめる。

これだけの簡単なことだが、

凡人の我々には

それがなかなか出来ない。

それは、

自分の心をコントロール

出来ていないといえる。

だからこそ、最も簡単に

心をコントロールするために

普段の何気ない生活の中で

沸き起こる自分の心の中を

観察して、それをコントロール

する事から始める。」

「もし、

心をコントロール出来たら、

どうなるの？。お兄ちゃん。」

「心はおしゃべりを止めて、

静まり、そして、

『道』が現れる。

この状態を達成した人

を真人と呼び、

老子はこの状態を『無為自然』と

呼んだ。」

「『無為自然』？」

「そうだ、『無為自然』

道德経の表現では、

万物を生成しつつ、

その跡を残さない。

働いた結果はあるが、

その形は見えない。

別の例で挙げると

イエスキリストの

言葉からも伺える。

「右の頬を打たれたら、

左の頬をだせ」

凡人は右の頬を

殴られて返すのは、

左の頬ではなく、

拳だろう。

だがもし、

目の前にイエスキリスト

がいてそういう事件が

起こっていたら

どうだろう。

これは、俺の想像だが、

イエスは殴るものを

真っ直ぐな眼差しで

見つめ何度も打たれるだろう。

おそらく彼の目には怒りなど

微塵も感じられない。

自愛に満ちた

何かとてつもない

意思のような、

そんな何かだと思う。

そのうちに殴っている

人間は怖くなるはずだ、

なぜ、殴る人間が怖くなるのか、

それは、そのイエスの心を

殴るものが感じるから

に他ならない。

そのイエスキリストの

心の状態を『道』と呼び

それは、イエスが、『無為自然』

となっている事に他ならない。

俺はそう思う。」

僕たち三人はそれからしばらくの

間沈黙した。

三人それぞれが、『無為自然』

の心の状態というものを

想像していた。

「きっと、

イエスキリスト様は

そういう生きた

無為自然の手本

となるために、

十字架にかけられたん

だね。お兄ちゃん。」

「そうだ、

彼のような生き方が

自然に出来ると心は純化され、

自ずと『道』が現れる。」

「じゃあ聖書は無為自然を

実践するための教科書といえるね。

修さん。」

「そうだ。

だが、凡人が彼のように

なる為には、

何万回の輪廻転生を

必要とするだろう。

あれだけの人間性を

手に入れるには

それ相応の苦しみを

味わう必要が

あるだろう。

なぜなら、

人がやさしく成れるのは、

自分自身で苦しみを味わい、

その苦しさを理解しないと、

やさしさは生まれない。

そこで、

仙道ではその補助手段

として、瞑想や呼吸法などを

取り入れて、補助している。」

「つまり、人間性がないとしても

『道』を理解できるって事なの？

修さん」

「あくまで補助的なものだ、

人間性がないにしても、

超能力ぐらいは

使えるようになると思うよ。

ただ、『道』を

本当の意味で理解

することは不可能だ。

俺は言い切るよ。」

「じゃお兄ちゃんが

言いたいことは、

つまり、日常の生活の中で、

人間性を常に磨けて事なの？」

「簡単にいえばそうだ。

だが、もし本当の意味で

自分自身を見つめる

ことが出来るなら

それは、人間性のある程度は

身に付けたという

事とも言える。」

「がんばらないと

いけないね。雪ちゃん。

僕たちも。」

「竜ちゃんと一緒なら

私何でも出来ちゃう気がするの」

雪ちゃんは甘えるように

僕の腕をつかみ子供のように

笑った。

「まっそれが、先輩である

俺からのアドバイスさ。」

「ははー

よーく肝に命じまする。」

僕はおどけて深くお辞儀をした。

「っと。

俺はそろそろ出かけるよ。」

「デート？」

「ああ

今度また遊びに来るよ。

お二人さん。

どうぞ俺が居なくなったら

好きにイチャイチャ

してください。」

修さんは雪ちゃんに

からかうように言った。

「おかまいなく」

雪ちゃんはすねたように

ぷっいと顔をそむけて言った。

「じゃ竜治またな」

「修さんも気をつけて」

僕と雪ちゃんは修さんを

玄関まで見送り手を振った。

第一節 浴衣

修さんを見送った僕らは、

ダイニングの

ソファの上で

寄り添いあい、

何度もキスをして

見つめ合った。

「そーだ竜ちゃん。

実は竜ちゃんに

見せたいものが

あるの、

ちっよと待ってて」

彼女は突然立ち上がり

自分の部屋に行くと

大きな袋を手に持って

それを僕に差し出した。

「何?これ」

「開けてみて」

「何？」

「いいから」

僕は手渡された

紙袋から綺麗な包装

されたプレゼントを

開けた。

「わー浴衣だ」

「そう。こっちが私の。

お揃いのを買っちゃった。」

「へーありがとう。

浴衣か。初めて着るなー」

「着てみて竜ちゃん。

私も着替えるから」

僕たちは互いの部屋で

着替えて、

僕はダイニングの

ソファで彼女が来るのを

待っていた。

「ねー竜ちゃん。

着替え終わったの？」

「うん。

君が来るのを此処で

待ってるよ。

早くこっちにきなよー」

「わかった。

今行くねー」

「じゃじゃーん。

どう？似合うかな？

竜ちゃん。」

「うん。すごくいい。

綺麗だよ雪ちゃん。」

「わー

竜治さん素敵過ぎる。

なんか急に大人だね。」

「ありがとう雪ちゃん。

こんないいもの

プレゼントしてくれて。」

「どういたしまして、

ねー竜ちゃん。

明日花火大会が

あるみたいなんだけど

二人でこれ着て行こうよ。」

「いいよ。そうしよう。

そっかー花火大会か。」

「どうしたの。

なんか浮かない顔してる。

もしかして、

本当は行きたくないとか?」

「行きたいよ。

雪ちゃんと二人で」

僕がウインクすると、

彼女は無邪気に

走り回って

喜んでいた。

夏の日の出来事だった。

次の日

浴衣に着替えた僕たちは、

バスで花火大会の会場へ

と向かった。

バスの車内で僕たちのように

浴衣を着たカップルが仲良く

手をつないで

こちらを見てやさしく

笑った。

僕は頭をぺこりと下げて

テレを隠すように笑った。

「知り合いなの？。

竜ちゃん。」

「違う。

初めて会った人。

ほら、お互い浴衣

着てるでしょ。

だから、なんとなくかな。」

彼女は手を振って目の前の

カップルにお辞儀した。

「きっとあの人たちも

私たちと同じ

場所に行くのね」

「そうだと思うよ。」

雪ちゃんは長い髪を束ねて

細くくびれた白いうなじ

を僕の胸元に押し付けた。

「ね一竜ちゃん

白ちゃんお留守番

かわいそうだったかしら。」

「うん。

ちょっと僕もそれを

気にしていたんだ。

でも、しょうがないよ。

きっと、混雑しているから、

白ちゃんの安全のためにも

この方がよかったんだよ」

「そうね。

それじゃ一帰りに

白ちゃんに何かお土産

買って行かないと。」

「そうしよう。」

バスが会場近くの停留所

に止り、

僕たちはそこで降りた。

すると先ほどのカップルが

僕たちに近づき

話しかけてきた。

「あのーもしかして、

貴方たちも

花火大会に行くの？」

「ええ。

そうです。」

「よかったら私たちと

御一緒しませんか？」

雪ちゃんは見知らぬ女性

に声をかけられ

困った様子で

僕を見つめた。

「あの一

実は今日、

二人の久々の

デートとなんです。

出来れば二人っきりで・・・

ごめんなさい。」

僕は二人の話に

割り込むように

言った。

「あらっごめんなさいね。

私ったらおじゃまして。」

「いえ、

そういうわけじゃ

ないんですけど」

「いいのよ。

ただあなたたちが

とっても

素敵だから話し

掛けたかったの。

仲がいいのね。

うらやましいわ。」

「そちらのほうこそ仲が

よさそうで素敵です。」

雪ちゃんは

真っ赤になって

下を向いて言った。

「それじゃ」

大人びたカップル

はニコっと僕らに

笑いかけ歩いて行った。

「ありがとう。」

竜ちゃん。

断ってくれて。

私二人っきりに

なりたかったの」

彼女は甘えて僕の腕にじゃれた。

僕たちはにぎわう通りを

手をつないで

寄り添いあって歩いた。

通りを歩く人々は

楽しそうに笑い、

活気で満ちていた。

通りを埋め尽くすほど

立ち並ぶ屋台は

ほのかな光をはなち、

僕たちは虫のように

その光の中に

吸い込まれて行った。

「ね一竜ちゃん。

私これ食べたい。

買って」

「ワタ飴か、

いいよ。ちょっと僕にも

頂戴ね。」

僕たちはアニメの袋

に入った綿菓子を買ひ、

二人で分け合って食べた。

僕は目の前で屈託のない

笑顔で笑う彼女を見て、

幸せを心から感じていた。

「どうしたの？

竜ちゃん。」

彼女は首をまげ、

上向き加減で

子供のように聞いた。

「何でもない。

ただ、

君が余り素敵だから。

見つめちゃったの。」

「ありがと。

竜ちゃん。

でも、

竜ちゃんはどうして、

時々そんなに寂しげなの？」

「そんな事ないよ。

だって今は君がそばに

居てくれるから

寂しいなんて

これっぽちも

感じてないよ。」

「そう？」

「そうだよ。」

「よかった。

私 時々

あなたが何処か遠くを

見ているような

気がして心配

になるの。

貴方が何処か

遠くにいっちゃう

気がして、すごく。」

「大丈夫。雪ちゃん。

僕は何処へも

行ったりしないよ。

こんなに素敵な女性

を置いてどこか遠くに

行ける男は

この世に居ないよ。」

「ほんと？」

「本当だとも。

僕は君のそばから

離れたりしないよ。

君が別れたって

言ったら

分からないけど?。」

「えー竜ちゃん。

もし、

私が別れたって言ったら

分かれちゃうの?。」

「君がそう言うなら

僕はきっと

別れを選ぶよ。」

「えーそんなの嫌。」

「じゃーずっと

一緒に居ようよ。」

彼女は急に悲しげに

地面を見つめ

僕に言った。

「竜ちゃんは。

私の事好き？」

「あたりまえでしょ。」

「じゃー私が

分かれたいって言っても

分かれないで。」

僕は急に駄々を

こねる子供の

ような彼女をみて、

笑いながら言った。

「別れたいって

言っているのに？」

「そう。

それでも。」

「なんかめちゃくちゃだね」

「女の子は複雑なの、

追いかけてほしいの。」

「わかった。

それなら、

追いかける。

でも、雪ちゃんが

本当に別れたかったら

雪ちゃんが迷惑するよ。」

「貴方が追いかけて

くれるなら

私は貴方から

離れたりしない。

迷惑だなんて

これっぽっちも

浮かばない。

だから、

私を手放さないで。」

「分かったよ

雪ちゃん。

どうしたの急に？」

さっきまで無邪気に

笑っていた

綺麗な少女は、

目にいっぱい

涙を浮かべて、

僕にしがみつき

泣いていた。

第二節 雪乃の願い

「どうしたの?。」

雪ちゃん。

泣くなんておかしいぞ。

僕は君を手放したりするはず

ないでしょ?」

「うん・・・

ぐすん・・・

約束だよ。」

「ああ、約束。」

「ぐすん・・・

約束なんだから。」

「そう、約束だよ。」

「ね一竜ちゃん。

もし・・・・・・・・・・」

「もし、何?」

「もし・・・

もし、

私たちが分かれて

しまったら・・・」

「そんな事ないよ」

「いいから・・・

お願い、

聞いて竜ちゃん。

もし、

私たちが分かれてしまったら・・・

貴方はきっと

私の事なんて忘れてしまうわ」

「そんな事ないよ。」

「いいえ、

貴方はすぐに別の人

と一緒にあって、

私はきっと思い出しても

もらえない」

「そんな事ないってば」

「ね一竜ちゃん。

私は貴方のこと

死でも忘れない。

貴方の事毎日の

ように思い出して、

きっと悲しみに

暮れるんだわ」

「雪ちゃん。

もうよそう、

今からそんな事・・・」

「竜ちゃん。

私、貴方に一つだけ

お願いがあるの。」

「お願い？」

「そうお願い。

聞いてくれる？」

「もちろん聞くよ。

僕のお姫様」

「ね一竜ちゃん。

もし、私たちが

分かれてしまったら・・・

分かれてしまっても、

私の事・・・

時々でいいから思い出して。」

「思い出すだけでいいの？」

「そう、思い出してほしいの。

私と過ごしたこの時間を・・・

貴方と過ごしたこの時間を・・・

そしたら、私はいつでも

貴方と一緒にいれるから・・・

貴方の記憶の中で

私が生きつづけることが

できるから

そしたら . . .

竜治さんは . . .

迷惑かな？」

「約束するよ雪ちゃん。」

「ありがとう。」

竜ちゃん」

彼女は僕の

胸の中に顔を埋め

僕を力強く抱きしめた。

「雪ちゃん。」

泣かないで。

君は笑っている顔が

一番素敵なんだ。

お願いだから、

笑って雪ちゃん。

別れのこと今から考えないで、

僕らは今始まったばかりだよ。

もう、終わりを恐れるなんて

気が早いよ。

今を楽しもう。

そして、今を共に刻もう。

心の中に。

雪ちゃん。

僕の記憶に刻まれた君は、

けっして輝きを失わない。

仮に僕らが分かれたとしても、

君は僕の心に刻み込まれて

何処へも行かない。

僕と共に生き続けるんだ。

わかったかい。雪ちゃん。」

「うん」

「君に振られた僕は

きっと一人ぼっちで

部屋の隅に座って、

真っ暗な部屋で涙を浮かべて

君を思い出すんだ・・・」

僕の胸の中で

泣いていた彼女は

笑顔を取り戻して言った。

「ほんとに一人ぼっちなの？

ベットで綺麗な女の人が

待っているんでしょ」

「そうかな？」

「も一違うって言ってよ」

「ごめん」

「も一おかしい。

竜ちゃんたら。」

「やっと見れたね。

君の笑顔」

「うん……。

でも、

私が振るわけないよ。」

「分からないでしょ」

「分かるの。

私たちが分かれたとしたら

貴方が私を振るしかない。」

「そんな事言って、

雪ちゃんが別に

好きな人ができて

僕に分かれようって

言うかもしれないよ」

「雪はそんな事ない」

「わからないじゃない」

「竜ちゃんわかって、

おねがい。」

「わかっているよ雪ちゃん。」

僕は彼女の頬に流れる涙

をハンカチでふき取りながら

彼女に言った。

「やさしいね。

竜ちゃん。

大好き竜ちゃん。」

彼女の唇にそっと唇を

重ねて僕たちは

長いキスをした。

ぴゅー ドン ばばーん

空高く花火が舞い上がり

頭上で花火が爆音と共に

上がった。

「わー綺麗。

ねー竜ちゃん

見て

見て」

花火が上がるたびに人々は

喚声を上げ、

僕たちは二人抱き合いながら

空を見上げた。

甘い夏の日の夜、

僕らの幸せな時間と共に

花火はその色合いを添えて

僕たちの心に刻まれた。

花火が全て打ちあがる前に

僕たちは帰り支度をはじめた。

花火が頭上を舞い、

人々が喚声をあげて

その色合いに見せられている頃

僕らは人通りの多い道を

手を繋いで肩を

寄り添い合わせながら

歩いた。

「ね一竜ちゃん。

いけない、忘れてた。

白ちゃんのお土産」

「そーだった。

それを買って

いかなかったら、

すねている白ちゃんが、

今度はカンカンに

怒り出すかもよ」

「大変。

危ないところだったね。」

彼女は子供のように僕を

みあげニコリと笑った。

「おじさーん。

フランクフルト

10コください。」

屋台の中のおじさんは

愛想よく笑い、言った。

「へいっ まいど。

けー

これはべっぴんさんだね。

今日は仲良くデートかい。

この色男。」

「はいっ」

僕は照れながら頭をかいた。

「おじさん。

たこやきと、焼きそば

それとお好み焼きも

お願いします。」

「よーそれはありがたいね。

べっぴんさん。

これは俺からのサービスだ。

やきとりもつけてあげるよ」

「ありがとう。

おじさん。」

彼女は照れくさそうに

にっこりと

笑った。

「いやーうらやましいね。

に一ちゃん。

こんなべっぴんさんと

付き合えるなんて。

昔は俺のカーちゃんも

色っぽくてな、

思い出したぜ。」

「さすが、おじさん。

それなら奥さんは

今でも素敵なんですよ。」

「それが、おめー

いまじゃー

すっかりよぼよぼの

バーさんになっちまって、

昔の面影なんて

これっぽっちも

ありやしねえ。

いまじゃー

三人の孫をかかえて、

なんとか幸せに

やっているがよ。」

「いいなー幸せそうで」

「兄ちゃん。

いいもんだぞ。

長く二人で人生を歩くのも。

だから、このべっぴんさんを

大切にな」

「はいっ。

そのつもりです。」

「いいね一色男。

おまえならきっと

俺のように

幸せになれるよ。」

「ありがとう。おじさん。

これ、全部でいくらですか？」

「竜ちゃん

私が払うからいいよ。」

「どうして？」

「そうしないと、

なんだか

白ちゃんに悪くって」

「へっいまいど

おじょうさん。

幸せにな」

「ありがと、おじさん。」

「これは、ふたりで

食べていきな」

おじさんは焼き鳥を

僕らに一つづつ手渡し

ニコリと笑っていった。

「ありがとう。おじさん」

僕と彼女はお辞儀をして

御礼を言って

その場を後にして

バス停まで歩いた。

第三節 約束

「ね一竜ちゃん。

私たちもおじいちゃんと

おばあちゃんになっても

ずっと一緒に居たいね。」

「それを言うなら

一緒にいようでしょ」

「そうね、居ようね」

「うん。」

「私がしわしわの

おばあさんになっても、

貴方は変わらず

愛してくれる？」

「もちろん。約束するよ。」

「いいの。」

私はさっきしてくれた約束で

十分満足できるから」

「わかった。

僕は君を忘れたりしない。

そして、おばあちゃんになった

君を今と変わらず愛するよ」

「ありがとう。

竜ちゃん」

彼女は照れくさそうに笑い、

僕の腕の中に顔を

隠すようにして

甘えた。

「ねー竜ちゃん。

もし、私と別れたら・・・」

「またその話かい、

先を怖がるのはわかるけど

そんな事していると

今を楽しめないよ。

君は未来をおそれて、

今を台無しにしているよ。

先のことは

誰にもわからないし、

分かったとしても

僕たちには所詮

どうすることもできない。

僕は未来を恐れて、

今を楽しまない

なんて馬鹿なことを

君にして欲しくない。

未来は未来に任せて、

僕らは今を生きようよ、

こうして二人で一緒に・・・

ずっと・・・」

「わかった・・・」

わかったけど

これだけは聞いて、

今の私の気持ちを」

「いいよ・・・

でも、

それを僕が聞いたら

君はもう未来を

恐れないって

約束してくれる？」

「ええ、約束する。」

「じゃー話して」

「仮にもし、

貴方が私を

捨てたとしても、

私は貴方を

責めたりしない。

私はずっと

貴方を愛しつづけるわ。

ずっと・・・

仮に私が

死んでしまった

としたら・・・」

「雪ちゃん・・・」

「聞いて・・・おねがい」

「わかった。」

「仮に私が先に

死んでしまったとしたら・・・

貴方は私を

早く思い出にかえて

誰かと幸せに

なって欲しい。

私は貴方が泣いている

ところなんて

見たくないから、

貴方にはいつでも

幸せで居て欲しい。

貴方にはいつでも

笑っていて欲しい。

今のようにやさしく。

それが、

私に向けられない

優しさでも

かまわない。

貴方が幸せで

居てくれるなら、

私は幸せだから。

私は貴方が好き。

貴方が思っているより、

もっと貴方を

愛しているの。

私の貴方に

対する思いは、

嫉妬より深いの。

竜ちゃん知ってる。

女の嫉妬は深いだよ。笑

でも、

そんな嫉妬を超えるほど

貴方を愛しているの。

私は貴方の幸せそうな

姿を見れるだけで

幸せになれるの。」

彼女は真剣な眼差しで

僕を見つめ

そして、

彼女の周りから何か強い

光が発している

ような気がした。

それは、

やさしく、暖かく、

高貴な光で

彼女の体を覆い

尽くしているようだった。

「ありがとう。

雪ちゃん。

今度は僕の気持ちを聞いて」

彼女は僕に優しく笑い

じっと前を向いて

黙って歩きつづけた。

「もし、

雪ちゃんが

僕を捨てたら、

僕は悲しみに

暮れるだろう。

僕は明日を

見出せないかも

しれない。

でも、

君の幸せを

祈りつづけることには

今と何ら変わらない。

君が例え別の人の元へ

行ったとしても、

僕は君を

嫌いになれそうにもない。

それほど君を

愛してしまったんだ……

仮に僕が先に

死んでしまったとしたら……

君も僕を早く

思い出に変えて

新しい人を

見つけて欲しい。

君が僕を

思ってくれるように、

僕は君に

笑っていて欲しい。

幸せ一杯の生活を

おくって欲しい。

君が笑顔を見せる相手を

僕以外に見つけたとしても、

僕は決して怒ったり、

嫉妬したりしない。

僕はただ君の幸せな

姿を見て居たい。

あの世から君が

笑っている姿を

いつも見ているよ。

だから、

僕が先に死んで

居なくなっても、

幸せに笑っていて欲しい。

僕は君が思っているより

深く君を

愛してる。

僕の君への思いは永遠だ・・・

君の思い出と共に

僕の心の中で

いつまでも生き続ける。

今のこの瞬間でさえ、

僕は君と居る

この時間をしっかりと

心に焼き付けている。

君を決して忘れない。

例え、

死が二人を引き裂いても、

また、

別の時代に二人で会おう。

今のように寄り添い合って

今のように一緒にいよう。

だから、

僕は未来を恐れない。

死が二人を引き裂いたとしても

また出会える事を疑わない。

きっと何処かで

また二人は出会える。

僕はそれを信じているから、

死の別れを恐れない。

僕は君とこうしていたい、

ずっと……」

「竜ちゃん……」

彼女は僕を見つめ僕の

胸の中に飛び込むように

身を寄せた。

「うれしい……

竜ちゃん。

うれしいよ……

私……」

彼女は僕にしがみつき

僕の胸の中で泣いた。

「雪ちゃん。

また、泣いちゃったね。」

「これは、嬉し涙よ。」

だから、

思いっきり泣かせて」

「わかった」

僕は何も言わず

彼女を抱きしめ

強く抱擁した。

「落ち着いたかい？」

雪ちゃん」

「ええ、私今とっても幸せ」

「僕もだよ雪ちゃん」

「今ね私想像しちゃった。」

「何を？」

「私が先に死んで

竜治さんが

他の女の人に優しく

微笑んでる姿。」

「そっか。それで？」

「私ったら天国で

二人を見ながら

ハンカチを

思いっきり噛んで、

足をじたばたして

嫉妬してた 汗」

「笑 そうなんだ」

「私、本当にさっきは・・・」

「雪ちゃん

僕もきっと嫉妬しちゃうよ。

それでも、

君にはずっと

幸せで居て欲しい。

その気持ちは本物だよ。

だから、気にしないで」

「竜ちゃん。

もし私が先に死んだら

やっぱり別の人のこと

愛するよね」

「君がそうして

欲しくないなら

僕は誰も愛さない。

君だけを思って

一人で生きていくよ」

「やっぱりそんなのダメ。

竜ちゃんの

悲しむ顔なんて見たくない。

だから、

やっぱり誰かを愛して、

幸せで居て欲しい。

私は時々・・・

私の事を思い出して

くれるだけで

十分幸せ。

竜ちゃん。

だから、

もしそんなことがあったら

やっぱり誰かを愛してあげて、

そしたらその愛される女性も

今の私のように幸せに

包まれるから。

貴方の存在は魔法。

貴方に愛される女性は幸せに

ならない筈なもの。

私はどんなに

嫉妬したとしても、

貴方の新しく

愛する人と貴方を

天国から見守るから」

「わかったよ。

雪ちゃん。

白ちゃんがしびれをきらして

僕たちの帰りを待ってるよ。

そろそろ行こうか。」

「うん。」

僕たちは手を繋ぎバス停

まで小走りになって

歩き出した。

「だだいまー白ちゃん」

玄関を空けて

僕らが帰宅すると、

白ちゃんは

ソファの上に

寝転んですねていた。

雪ちゃんが帰ると

いつも飛び掛るように

玄関で歓迎する白ちゃんは、

その日、

ふて腐れるようにソファー

でじっと動かなかった。

「だだいま白ちゃん」

彼女が優しく白ちゃんの頭を

なでるとうれしそうに尻尾を

振っていたが、

それを隠すように

じっと動かなかった。

僕は心配そうに白ちゃんを

見ている彼女に、

そっと、

喜んで尻尾が左右に振られて

いることを教えた。

すると彼女は

優しく笑っていった。

「白ちゃん。

今日のごめんね。

一人ぼっちにさせて、

でも、

白ちゃんのために

ちゃんとお土産

買って来たんだよ」

白ちゃんは

なおもすねるように

寝転んでいたが、

お土産と聞いた瞬間

垂れ下がった

大きな片方の

耳をぴんと立てた。

僕はその様子を見て

ひそかに

笑っていた。

犬が人間のように

すねている所を

初めてみた僕は

微笑まずには居られなかった。

「白ちゃん。

僕からも誤るから。

許してよ。

雪ちゃんお土産は何を

買ったんだっけ？」

「じゃじゃーん。

白ちゃんの大好物。

ウインナーでし。」

「ワンワン」

白ちゃんは突然雪ちゃんに

飛び掛りいつものように

顔を何度もなめまわした。

「もーこの子ったら。

げんきんねー。

ウインナーと聞いたら

これなんだからー

もー 笑」

白ちゃんは早く

お土産が欲しくて

僕の手を持っている

袋の匂いを

何度も嗅いで、

僕を見上げていた。

「今お皿持って来るから

待っててね。白ちゃん」

僕はお行儀よく待つ

白ちゃんの頭をなで

ながら言った。

お皿にウインナーが

盛られると

待ちきれないと

ばかりに白ちゃんは

ウインナーに

むしゃぶりついた。

「こら、白ちゃん。

もっとお行儀よく

食べなさい。

ウインナーは

逃げないんだから。」

彼女は優しく微笑み、

白ちゃんを

我が子でも見るかのような

優しい眼差しで見つめた。

僕はそんな彼女を見て

微笑んでいた。

彼女の痩せた

きゃしゃな姿から

こんなにも逞しい

姿が見られる事に

何処か不思議な

気持ちで居た。

僕たちが帰宅してから、

白ちゃんは僕を

雪ちゃんのそばに

寄せ付けようとはしなかった。

僕が雪ちゃんの隣に座ると

それを邪魔するように

僕と彼女の間座った。

僕が反対側に座ると

すかさず白ちゃんは

僕と彼女の間座り込み

僕に尻を向けた。

「もー

白ちゃんまたこっちに

来るんだね。

わかったよ白ちゃん、

今日は君を

独りぼっちにして

ママを独占したから、

今からは君が

雪ちゃんを独占しな。

それでいいかい？」

白ちゃんは尻尾を

振って僕に

出て行けと

言っているようだった。

僕が立ち上がると

彼女が笑っていった。

「白ちゃん、

そんなに意地悪しないで。

おねがい。

竜ちゃん座って、

白ちゃんもそうして

欲しいでしょ？」

白ちゃんは

彼女の顔をじっと見て、

困った顔をして

僕の方に顔を向けた。

「ワン」

「ありがと、

白ちゃん。

でも、明日も早いし、

先に寝るよ。

白ちゃん

おもっいきりママに

甘えていいんだよ。

それじゃ。」

「えー竜ちゃん。

もう、寝ちゃうの。

一人で……

もーやだよー。」

「白ちゃんが

まだママに

甘えたがってるよ」

彼女は少女と母親が

同時に押し寄せる

感情に困惑したように、

困ったように

白ちゃんを見つめた。

「お休み。雪ちゃん」

「もー白ちゃん。

意地悪しちゃ

だめでしょ。

竜治さん

行っちゃったでしょ。

ぷん」

「ワウー」

「でも、甘えていいよ。」

「ワン」

彼女は優しく白ちゃんを

抱きしめた。

その光景を見た僕は

心がなんとなく

暖かくなるのを

感じていた。

第四節 綺麗なひまわり

「だだいまー雪ちゃん。」

「おかえりー竜ちゃん。

どうだった仕事？」

「うん。疲れた。

あとこれ。」

「まー綺麗なひまわり

ありがとう竜治さん。

でも、これどうしたの？」

「買ったんだよ。

君の為に。」

「ありがとう」

突然彼女の目が曇り、

彼女は地面を見つめて

それを隠すように、

ニコリと笑い僕を見つめた。

「雪ちゃん。

どうかしたの?」

「いいえ、

なんでもないの。

今日はスパゲティー

にしたの。早く二人で

食べましょ。」

彼女は僕の腕を包むように

抱え、ダイニングへと誘った。

僕がワインを

二つのグラスに注ぎ

彼女を見つめると彼女は

首をもたれるようにテーブル

を見つめていた。

「雪ちゃん。どうしたの?

さっきからおかしいぞ」

「うん。何でもない。」

僕はいつもと

違う彼女の様子を

心配しながら、

今日会社で起こった事を

面白おかしく作って話した。

彼女は僕のでかく広げた作り

話を笑いもせずに、

ぼんやりと聞いていた。

そのうち彼女は泣いて、

そのまま、自分の部屋に

こもってしまった。

「コンコン」

僕が彼女の部屋の

ドアをノックしても彼女は

何も返してはくれなかった。

「入るよ雪ちゃん。」

僕がドアを開けると

仰向けで涙を流しながら、

彼女はベッドで泣いていた。

僕は彼女に近づき、

彼女の隣に座り、

頬に落ちる涙を拭きながら

言った。

「どうした。何かあったの？」

彼女はあふれ出る涙を

こらえきれずに泣いて、

ただ天井をみて、

首を左右に振った。

「そんなわけないぞ。

じゃどうして

君は泣いているの？」

「泣いてなんかないもん。」

僕は何も言わず彼女の手を

握り彼女の頬に

流れる涙をふいた。

しばらくの時間が流れ、

彼女は僕に鋭い視線を向けて

僕に言った。

「ねー竜ちゃんの

やさしさは

本物なの?。」

僕はただ黙って彼女を見つめた。

「ねー竜ちゃん、

なんか言ってよ。

私に何か隠しているの?」

「僕のやさしさが

本物かどうか

を判断するのは、

僕にできても

君に伝わらないよ。

だから僕は黙って

君を見つめている。

君にこの思いが

伝わるように、

静かに君を見つめるよ。

どうだい？

君に僕の気持ちが

伝わっているかい？」

「ずるいよ。

竜ちゃん。

そんなのずるい。」

彼女は僕にしがみつき

駄々をこねる子供

のように言った。

「ねー竜ちゃん。

私に隠している事

ないよね。」

「ないよ。

隠してることなんて

何もない。」

「本当に」

「ああ、本当だよ。」

彼女は僕の胸元を

じっと見詰めて

そのまま動かなかった。

「ねー

ちゃんと届いたかな

僕の雪ちゃんへの思い。」

彼女はコクリと頷き、

子供のような眼差しで

僕を見つめた。

「ええ。しっかりと」

「よかった。

それで、

今日はいったい

どうしたんだい？」

「ごめんなさい。

私ったら

ちょっと兄の言った事

思い出してしまって……」

「修さんが君に

いったい何を言ったの」

「その……」

「いいよ、言ってみて」

「あの……」

男の人が浮気したあと、

本命の彼女に花束や、

プレゼントを

突然送るんだって。

それは何でかって言うと、

その女の人への

謝罪なんだったって。

浮気したことに

ついての謝罪。

だから、

女の方は男から

突然プレゼントをされて、

それを受け取ったって事は、

その浮気を許すと

いうことなんだったって、

前に私に話した

ことがあって……

それで、

竜治さんも

浮気したのかなー

なんて思ったら私……」

「わかったよ。

僕は浮気なんて

していないから

安心して。

今日帰り道に花屋の前を

通った時ちょうど

ひまわりをみつけて、

それで君の事を

思い出したんだ。

君がこの花をみたら

喜ぶだろう

と思って買ったんだけど、

まさか涙だったなんて

予想もしていな

かったけどね。」

僕は困ったように言った。

「ごめんね。竜ちゃん。」

「いいよ。」

「でも、それ聞いたら

私とっても

うれしくなっちゃった。」

「よかった。」

「ねー竜ちゃん。

本当は浮気したでしょ。」

「してないよ。

これからもう

雪ちゃんの為に

花を買わない。」

「えーいやだよー」

「だって」

「ごめん。竜ちゃん。

疑って。」

「わかった。もういいよ。」

「許してくれる？」

「もちろん」

「じゃあーキスして。」

「雪ちゃんおなかすいてない？」

「いいから早く」

「じゃあ食べてから」

「いや」

「おなかすいたよ」

「今キスして」

僕は黙ってキスをした。

第五節 雪乃の心遣い

朝目覚めてから、

僕はダイニングで

コンピュータ画面に

かじりつく彼女を見つけ

て言った。

「おはよ 雪ちゃん。

今日は一生懸命

何やってるの?」

「あっおはよう。

竜ちゃん。

んーとね、

秘密。」

「ふーん 秘密なのね」

「そっ秘密」

僕は冷蔵庫からジュースを

もってきて僕と彼女の

グラスに注いで

彼女の側に置いた。

「ありがとう。竜ちゃん。

ねー知りたい？」

「うん。どっちでもいい。」

「怒 どっちでもいい？」

それって私に

興味ないって事なの？

竜ちゃん。 激怒」

「わかったよ。

雪ちゃん。

朝から角を生やすのやめてよ。

聞くよ。

聞かせて」

「いいよ。話さない。

だって竜ちゃんは

私のことなんて

全然興味ないんですもん。」

「そんな事ないよ。」

「どっちでも

いいんでしょ?激怒」

「知りたいな一。

雪ちゃん秘密。」

「ほんとに。

本当に知りたい?

ルンルン」

「知りたいよ。

雪ちゃんの事。」

僕は彼女の隣に座り、

彼女の下着の中に

手を忍ばせた。

「ちょっと竜ちゃん。

そうじゃないよ。」

「えっ何が？」

「だから、

その手は今は止めて

って言っているの」

「ごめん」

「モーマじめに聞いてよ。

竜ちゃん。」

「わかったよ。

ごめん。

それじゃ早く教えてよ」

「実わね、

今私は竜ちゃんの

レポート作りの

為の資料を

集めています。

とっても役立つ資料。」

「ほんとに？」

「エーもちろんほんとよ。

竜ちゃんが

出さなきゃならない

資料って、

これとこれで

終わりでしょ？」

彼女は僕のノートを

たぐり寄せて

僕に聞いた。

「そーだよ。

この二つで終わり。

昨日こっちを

終わらせたから、

あとは、

こっちをやったら

終わりだよ。」

「やったー。

さすが私の感。

ぜったい今

調べてるやつは、

残していると思ったの。」

「どうして？」

「だってこれが一番、

難しいでしょ？

きっと竜ちゃんなら

そういうやつは

手をつけたがらない

そうおもったから」

「ごめいとうでございます。

そう、やっぱりすごいや、

雪ちゃんは」

「へへーん。

私ってすごい。」

「雪ちゃんてすごいね」

「大体はこの資料を基に

まとめてみたの、

そして、

これが私の調べてみた

限りのレポート。

だから、

あとは竜ちゃんが

このまとめた資料をみて、

竜ちゃんの思ったことを

レポートにすれば、

いいんだから、楽でしょ？

私の書いた

レポートに対する

問いみたいな

感じで作ってもいいし、

どうかな?」

僕は彼女から

コンピュータ

を取り上げるように

見つめた。

資料は細部まで、

まとめ上げられ、

そのままレポート

としてあげていいほど

の出来ばえで、

しかも、彼女の書いた

レポートは実に見事だった。

視点、疑問点、

問題点、改良点、

これから先の展望、

自分に何ができるか、

必要な事全てが、

織り込まれ、

これ以上

手をつけられないほど

簡素で解りやすく、

僕は彼女を展望の眼差しで

見るほかなかった。

「雪ちゃん。

これ、

どのくらいの時間で

作ったの?」

「大体・・・・・・・・・・?」

五時間ぐらいかな」

「五時間!!」

本当にこれを

五時間で作ったの。」

「ええ、たぶん。」

「すごすぎる。

雪ちゃん。」

「そっかな？

ありがとう竜ちゃん。

これから、竜ちゃんの

レポートの資料集めは

私がしてあげる。

そしたら、竜ちゃんも

もっと時間が取れて私の事

かまってくれる

時間が増えるでしょ？」

「うわー

それは、

願ったりかなったりだよ。

こちらこそ

よろしくお願いします。」

「竜ちゃん。ご褒美は。」

「チュッ」

「それじゃ足りないよ。」

「ちょっと雪ちゃん。

さっきは自分から

断ったのに」

「りゅーちゃん」

ドサッ

「いたーい」

「あつ、そうだ、今日は

修さんが来るんだよ」

「そうだった。

いけない、

またこんな所見られたら、

私・・・・」

「いよーお二人さん

今日も朝から

イチャついてるな」

僕達はびっくりして

振り向くと、

修さんがそこに立っていた。

「お兄ちゃん

どうやってここまで

入ってきたのよ」

「これ」

修さんは真っ白なジーンズ

の前ポケットから

カードキーを

手に持って

雪ちゃんに見せた。

「ああ、それか」

彼女は修さんの

持っているカード

を受け取り、

僕に手渡ししながら言った。

「これ、

貴方にもっていて欲しくて、

私まだ貴方に

渡していなかったから」

「ありがとう。

無くさないように

しないとね。」

「雪、

それ俺の分も

作っておいたら」

「どーして？

お兄ちゃん。」

「いいだろ。別に」

「まあ、そうだけど・・・

だけど入る時は

黙って入らないで、

ちゃんと連絡してよね」

「いちゃついている所

見られたくないのか？」

「いいから、わかったの？

お兄ちゃん。」

「わかったよ。雪。」

修さんは顔をしかめて、

反対側のソファに座った。

すると気持ちよく眠っていた

白ちゃんは迷惑そうに

修さんを見つめた。

修さんは笑いながら

手をあげて白ちゃんに

挨拶していた。

「所で、どうだお前ら、

仙道はちゃんと

やっているのか。」

「毎日欠かさず、

二人で呼吸法を

やっているよ。

お兄ちゃん」

「ほーそれは、関心。

で、

何か変わったこととか、

感じたことはあるか？」

「それがね、

これといって

報告できることないんだ。

別に変わったこともないし、

ねっ

雪ちゃん。」

「うん。

別に何も無いよ。

お兄ちゃんの言っていた、

お腹に熱のような

ものも感じないし、

ただ腹式呼吸してる

だけって

言う感じかな」

「やっぱり、

お前らは才能はないな。

凡人レベルか」

「やっぱそうだよな。

修さん。」

「まっ気にせづ続けろ、

そのうちわかる。」

「わかった。お兄ちゃん。

このまま続けてみよう。

竜ちゃん」

「そうだね」

「修さん真っ黒に日焼けして、

かっこいいね」

「だろ、昨日までサーフィン

づくめの毎日さ」

「へー今年もあそこに

行って来たんだ。」

「あそこって、

どこ?雪ちゃん」

「ハワイだよ。

竜治。

去年俺は、

お前を誘ったぞ。

覚えてないのか？」

「ああ。そういえば・・・」

「で、竜治。

お前は今年も、

レポートで缶詰状態

ってわけか？」

「その通り。涙」

「まっでも、

雪が手伝うんだろ？

それなら、

楽勝だろうしな」

「えへっん。

お兄ちゃん

わかってるー」

僕は仲の良さそうな二人の

やり取りを見て

とてもうらやましかった。

「どうかしたの？

竜ちゃん。」

「なんでもないよ。

雪ちゃん。

でも、ありがと」

「まー気長に

何も期待せずに、

続けるのも仙道の修行だ」

「またいいかげんな事言って

お兄ちゃん。」

「雪。

いい加減なんかじゃないぞ。

これは忍耐力を

養っているんだ。」

「なるほど。

そうとも言えるわね。」

雪ちゃんは彫刻の考える人を

模写したように座っていた。

「で、

もう一つはどうしてる？」

「もう一つって何だっけ

竜ちゃん。」

「人間性を養うって

言うことでしょ。

修さん。」

「その通りだ。竜治。雪。

お前らはちゃんと

やっているか？」

「修さん。悪いんだけど、

それを聞かれても困るよ。

だってどうやっていいか

分からないもの。」

「なんだ、そうか？」

わかった。

それなら具体的に、

例を出して説明するよ。」

「お願い。修さん」

一、自分がやられて嫌なことは
他人にしない。

一、自分の利益獲得の為の行為
を監視し、その行動を行って、
誰かが悲しむならば、あえて、
それをしない。

一、優しさは人からもらって
返すのではなく自分から
進んで与える。

以上

簡単だろ？」

「そうかな？」

「さすが雪。

そうだ、言うが易し、

これを行うには想像以上の

難しさが潜んでいる。

それは、自分の生活の中に

この決まりを

『生きるルール』として、

実行した時、

初めて実感する。」

「わかったよ。

修さん。

僕たちやって行くよ」

「よろしい。

お前らもがんばれ」

第一節 水島家の秘密

「所で、爺様の資料

は何処まで読んだ。」

「それがね、全然手を

つけていないよ。」

「私は此処に置いてある

資料のうち半分くらい

目を通したよ。」

「そうか

で、

雪何か気になったこととか

なかったか？」

「うーんそうね・・・」

「実は一つ分かった事がある。」

「何?お兄ちゃん。」

「どうやら爺様は、

既に三種の神器を

見つけていたらしい。」

「えっお爺様が？」

「雪。

お前の言う御爺様ではなく、

さらに前の御爺様だがな」

「どういう事お兄ちゃん？」

「あまり詳しくは話せない。」

「なぜ？」

「それも聞くな。

人には知らないほうが

いい事もある。」

「お兄ちゃん。私は知りたい。」

「そう怖い顔するな雪。」

わかった、

どうせお前のことだ、

例えここで俺が

言わなくても

必ず調べるだろ？

それに、

お前も知る時期

が来ているしな」

「さすが

分かってるわね。

お兄ちゃん。」

「実はな、雪。

水島家は古代より

歴史の闇を司る。

そして、

世界を見守り、

時には歴史に

介入してきた。」

「えっ

それって

どういう事？」

「この水島家の

家系をたどると、

ユダヤの、

ある家系とつながり、

日本の天皇の

家系ともつながる。」

「ユダヤの家系

ってもしかして、

お兄ちゃん？」

「そうだ」

「イエス・キリスト？」

「違う。でも

・・・それもある。

実はモーゼ」

「えっ。あの

・・・モーゼ」

「そうだ・・・・・・・・」

「でも何で？」

「詳しくはあとで話す。

ただこの事だけは

忘れるな。

僕たちの一族は

歴史の闇を司る。」

「歴史の闇を司る

ってどういう事？

それに三種の神器と

どう関係が

あるって言うの？」

「水島家は

古代から歴史の闇

に登場し、

姿を変え、形を変え、

時には名前を

変えて存続し、

しかも歴史の表に

登場しない。」

「どうして、

歴史の表には

登場しないの。」

「我々一族は

歴史の闇を

司るからだ。」

「それって

つまり……」

修さんは無表情で

雪ちゃんを見つめた。

「つまり、

悪いことをして

きたって事？」

「人の世は不思議だ。

人の気持ち一つで

今までよかった事が

悪い事となり、

逆に悪事とされていたことが

全て好い行いとされる。

例えば、戦争。

国がもし戦争をする事に

決意を固めた時、

人殺しをしたくない

からそれを放棄すれば、

罪人として処刑される。

平和な世に人を殺せば、

今度は悪人となる。

だが悪いことを

人殺しと定義してしまうなら

そうだ……」

「うそよ、

お兄ちゃん……」

「雪。

うそじゃない。

時にはそういう

決断もあったらしい。」

雪ちゃんは

ただじっと

床を見詰めて、

放心状態になっていた。

修さんはそっと

雪ちゃんの隣に座り

優しく頭をなであげた。

雪ちゃんは

そっと修さんの胸に

寄り添った。

「第二次世界大戦。

あの戦争を起こしたのは、

水島家と対抗するグループ。

つまり、

我々の一族が

起こしたものだ。」

「修さん……………」

それってどういう事？」

「我々一族には掟があり、

その闇の支配者は

額にしるしを持つ。

だが、

二人同時にその

しるしを持つものが

現れる事を誰も

予想できなかった。」

「つまり、

あの第二次世界大戦は

そのしるしを持つ二人

が権力争いの為に

起こしたものだっただの？

お兄ちゃん」

「そうだ。

つまり、わが祖先が、

全ての人々を巻き込み、

そして……」

「うそよ。うそ。

そんなのうそよ」

「俺も同じ気持ちだ雪。」

「お兄ちゃん……」

「修さんよかったら僕にも

詳しく教えて」

「わかった。竜治。

お前も聞いてくれ。」

「我が一族は、

二十歳の誕生日を迎えると

ある儀式をおこなう。」

「サウンドワータール……」

「そうだ、雪。

サウンドワータールだ。

我が一族の成人の儀式。

その儀式が終わり、9日

を過ぎると、

額にそのしるしが

浮かび上がる。

だが全ての人に

そのしるしが

浮かび上がるのではない。

闇の王となる者

にしか現れない。

しかも、

前任の王がこの世から

離れるまで、

それは現れない。

先の王が亡くなってから、

72年が過ぎても、

その額にしるしを持つものは

現れなかった。

所が、

73年目のサウンドワーテル

の年、今までにないことが

起こってしまった。

九日目にある男性、

つまり僕たちの

直系の御爺さんの額に

そのしるしが現れた。

73年も待った

俺たちの先祖は喜びに沸いた。

そして、すぐに、

儀式を執り行い、

闇の王の誕生に

みんなが踊り、歌った。

ところが、

サウンドワートル

から13日目に、

もう一人の女性の額に

そのしるしが現れた。

一族は今までに

なかった事態に驚き、

困惑した。

一族の長、12人が集まり、

協議した結果、

最初にしるしを授かった

俺たちの直系の

御爺さんが、

王として迎えられた。

そして、

それを不服に思ったグループは

反乱を起こし、

そして、もう一人の

額にしるしをもつ女王を掲げて、

争いあった。

そして、

その争いは今でもなお続いている。

幸いなことに二人の権力者達は

同じ日の同時刻に亡くなり、

今その争いは、

戦争という形で我々の

目の前で現れてはいない。

だが、

憎しみあった二つの闇のグループは

その憎しみを忘れずに抱き、

今も権力闘争を行っている。」

「でも、どうして、

三種の神器が

関わっているの？

お兄ちゃん？」

「二つの勢力は

同じ力を持ち、

その戦争を終結させる方法は

ただ一つしかなかった。

それは、表の支配者、

つまり、

表の神の力を必要とした。

表の神とは

三種の神器を意味する。

神々はこの世を作ったあと、

人の手にこの世を

預ける事に決めた。

人はご存知の通り、

神のような力を

この世で発揮する事が

出来ない。

しかし、

時にその力が必要になる

時がある。

そこで、

神はこの世を治める事に

ふさわしい人物、

または、組織

と言えるかもしれない。

とにかくそのものに

その三種の神器

を預けたのだ。

古来から伝わるように

三種の神器を手に入れたものは、

世界を支配すると言われている。

なぜなら神の力を持つからだ。

逆に裏の支配者とは、

神がかつて語った物語通り

この世が作られて行くのを

見守り、時にはそうなるように

力を使う。

神はそのもの達にその使命を

与え、

そして我々はそうしてきた。

しかし、

見守る事が本当の勤め

という事もあり、

我々は闇の

グループと呼ばれる。

話を戻そう。

同じ力を持つ二つの勢力が、

相手より秀でるために、

そして、

この戦争を終結させる

為に選んだ方法は、

表の社会と裏の社会の

支配者になる事だった。

二つの闇のグループは掟を破り、

三種の神器の行方を探した。

本来我が一族の掟では、

『闇は闇を知り、
常にそこに留まる』

というけっして破ってはならない

掟があった。

それは、つまり、

闇の支配者は

三種の神器を手にしてはならない

という掟なんだ。」

「それでも、その掟を破った。」

「そうだ。

そして、世界はまた

戦争に飲み包まれた。」

「当時我が一族の敵と

なるグループは

既に一つの三種の神器

を手に入れていた。

そして、

もう一つのグループ、

つまり

俺たちの御爺さん達が

所属している

グループはその一つを

持っていた。

そして、

それを日本に隠していた。」

「でも、三種の神器って、

日本に古くから

伝わるものなんだから、

日本にあって当然でしょ？」

「雪。

三種の神器は世界で

いろいろな呼ばれ方をして、

そして、安全の為に

世界を転々と旅をして、

存在してきた。

時には三種の神器自身が、

自身の考えで姿を消し、

そして、

再び現れるとも言われている。

例えば、やたの鏡

日本ではそう呼ばれているが、

西洋ではアークと呼ばれている。

だから日本に常に

ある三種の神器は

全て型代、あるいは、

レプリカなんだ。

だから、

本物を当時日本に隠して

ある事を知っていたのは、

我々のグループの一員、

しかもそのトップの数人

しか知らないことだった。

だが、我々のグループの中から、

裏切り者が現れ、

敵対するグループは

その事を知ってしまった。

そして、アメリカを操り、

日本に対し無理難題を

持ち込み、

日本に戦争を仕掛けさせた。

彼らの狙いは

日本を手中に収め、

三種の神器を

探し出す手配を進める事。

なぜなら、

この時代の日本の実力者

へのおじいさんの

影響力は絶大なもので

そのまま、

敵対するグループが

日本を調査すること

など不可能だったからだ。

この時おじいちゃん達は

もう一つの問題に

ぶつかっていた。」

「ナチス」

「そう、ナチスは、

ユダヤ全滅を

図ろうとしていた。

水島家の家系は

ユダヤに通じている。

当然おじいちゃん達は

ナチスの計画を阻止する為に

動いた。

御じいさん達はロシアに手を

回して、ユダヤの血を守ろうと、

紛争したんだ。

当時日本はアメリカに

宣戦布告をし、

ここで日本の敗北は

決まっていたと言える。

これを知ったお爺さんは、

雪の知っている

おじいちゃんだよ。

そのお爺さんは、

日本から隠し場所を移し、

ある場所に隠した。」

「それは、何処？

お兄ちゃん。」

「今探している。

御爺さんは僕たち家族が

狙われることを

知っていたので

わざと誰にもその隠し場所

を明かさなかった。

俺達一族が今

生きていられるのは、

みんなおじいちゃんの

おかげなんだ。

もし、おじいちゃんが

水島の子孫にその場所を

話していたら、

俺達一族は多分今、

生きていない。」

「でも、今、

闇を支配できる王が

いないんでしょ？

もし、その王が現れたなら、

この争いも

終わるんじゃないかな？

修さん。」

「二つに分かれたグループは

既に最大の掟を

犯してしまった。

つまり三種の神器を手に

入れている。

二つのグループはその闇の王

が現れる前に

お互いにどちらかの

グループを抹殺しようと

考えている。

それに、

どちらも両方のグループ

にしるしを持つものが同時に

現れないとも限らない。

一度起こったことは

また起こる可能性を

秘めている。

仮にどちらかの

グループの片方に

しるしを持つものが

現れた場合。

他のグループはその王

になる為の儀式を妨害し、

王になる前に、

その王を抹殺しようとするだろう。

王はその儀式が

済むまでは普通の人

と変わらない。

不思議な力を持っていないんだ。」

「じゃどちらにも

現れなかったら？」

「三種の神器を先に

そろえたグループ

が他のグループを

滅ぼすだろう。」

「どうして？」

どうして、

同じ一族が争いあうの？

憎しみ合わなければ

ならないの？

お兄ちゃん」

「雪。

これは、宿命だ。

すでに回ってしまった歯車を

誰にも止められないんだよ。」

「でも王が現れて、

生き残ったグループを

抹殺しないとは

言い切れないん

じゃないかな？

だって、

どっちにしろ両方の

グループが既に最大の掟を

破ってしまって

いるのだから。

修さん」

「それは俺もそう思う。

ただどちらのグループも

相手のグループに抹殺される

事を恐れている。

王の決めることは

後回しなのさ」

「修さんは、

サウンドワーテルの

儀式を済ませたんでしょ？」

「ああ、もちろん。」

「額にしるしが無いって事は、

修さんじゃなかったんだね。

残念。」

「幸いなのもかもしれないぞ、

我がグループのなかでも、

王に滅ぼされることを

恐れている連中がいる。

彼らは自分のグループに

王が誕生したとしても、

王になる前に

その人物を抹殺しようと、

考えているらしい。

竜治。それに、

例え俺にしるしが

現れているとしても

普通の人には

それが見えない。

我々の一族の中に、

セントと呼ばれる

人たちがいるらしい。

彼らにしか見えないし、

そして、

そのセントが誰なのかも

秘密にされている。

彼らは預言者で

未来を見ることができる

らしい。

そして、

次の王が現れる時期を

既に知っている。」

「それはいつなの？

お兄ちゃん。」

「それは俺にも

わからない。

もし、彼らに出会えたら、

その時はちゃんと

聞いておくよ。」

「でもそれじゃー修さん。

雪ちゃんと修さんは

どちらにしても、

命の保証はない

という事かな？

だって相手の

グループが抹殺

しようとしてるんでしょ。

それに、

王が現れたとしても

許してくれるか

どうか分からない・・・」

「そういう事だ。

だが俺たちだけじゃない。

二つの闇のグループが争えば、

世界はまたそれに巻き込まれる。

つまり世界に住む全ての

人間、あるいは、生命が

危険にさらされている。

だだ、それを知らないだけだ。

だから俺は最初に言ったぞ。雪。

人には知らないほうが

いい事もある。」

「どうしよう。竜ちゃん」

彼女は僕に助けを

求めるように言った。

僕は震える彼女を強く

抱きしめた。

「雪乃。

どうした、しっかりしろ。

大丈夫、やつらは二十歳に

ならなければお前を狙いは

しない。

それに、お前は今まで

知らずにいたが、

俺たち兄妹は、

ずっと俺たちの

グループに守られている。」

「本当にお兄ちゃん。」

「ああ、いつでもな」

「でも、・・・」

「雪乃あれをみろ

あそこに何か見えないか」

修さんは窓の側に行き

遠くのビルを指差した。

雪ちゃんと僕は

寄り添い合うように

窓の側により指差す

方向を見つめた。

「何?あのビルのこと?」

指差す方向を見た彼女は

首を傾げて聞いた。

「何も見えないけど・・・」

「あそこから彼らは

お前をずっと守っている。」

「えっ覗かれているの?」

「言い方を変えれば

そういう事だ」

「うっそー

いやだ、竜ちゃん。

どうしよ。」

僕は真っ赤になって叫ぶ

雪ちゃんを見て

ニコリと笑った。

修さんも何かを

知っているように

僕をみて笑った。

僕はその笑顔の意味を悟り、

そして、雪ちゃんのように

真っ赤に顔を染めた。

「まー二人とも安心して

此処に座れ」

僕は震える雪ちゃんを

抱きかかえるようにして、

二人でソファの

上に腰を落とした。

「修さん。

所でもう一つの

三種の神器は誰が

持っているの。」

「それは、本来の持ち主。

つまり表の神を守るグループ

が持っている。

彼らは僕らの先祖達

の反乱を知り、

その一つを密かに隠した。

しかし、あとの二つは我々の

祖先達が手に入れてしまった。

つまり、我々のグループは

二つの敵を持つ。

一つは闇の別のグループ。

もう一つは、表の神を守る

本来の持ち主。」

「ねー修さん。

一つ聞きたいんだけど、

修さんのグループは悪者なの？」

「竜治、物事はそんなに

単純にできていない。

我々のグループが闇を司る

というのは、例えであって、

けっして、悪人の集まり

という意味ではない。

時には人を助けるが、

時には人を殺す。

それは、表の神を守る者も

同じ事。」

「つまり、どちらとも言えるって

事なの?」

「そうだな。

その者の視点の位置で、

その見方が変わる以上

そう言える。」

「じゃ悪党の集団ではないのね。

お兄ちゃん。」

「そういう事だ。」

「つまり、あと一つの敵対する

闇のグループも悪党の集団

ではないって事?」

「そうだ。

ただ我々のグループの

お堅い連中は

その事を忘れて、

争いあって作られて

しまった憎しみのせいで、

お互いにそう思って

しまっているだけなんだ。」

「何とか仲直り

できないのかな？

お兄ちゃん。」

「ル・マイン・オン

・イン・チュワード」

「どういう意味お兄ちゃん。」

「我々の祖先に語り

継がれる言葉だ。

直訳すれば、

『一人が気づけば世界が変わる。』」

「どういう意味?。」

「正確に知るものはいない。

これを予言だと

いうものもいるし、

これを別な訳し方で、

『平和を愛する心が、世界を満たす。』

と訳す者もいる。

これは、古代の文字でこれが

正確な発音なのか

すらわからない。

ただ、我々の一族に

古くから伝わる

言葉だ。」

「ル・マイン・オン・

イン・チュワードカー。

素敵な響きね」

「ああそうだな。

俺が言いたいのは、

俺たちで何とかして

みないかって

いう事だよ。」

「えっ？」

「俺はこう訳したんだ。

誰かがやらないなら、

俺がやる。」

「素敵お兄ちゃん。

でも、どうやって？」

「わからん。」

「やっぱりね。

そんな事だと思った。」

「僕たちが三種の神器

を見つけて、それを全部

元の場所に戻せば、

いいんじゃないかな」

「竜治そんな事したら、

俺たちは闇の二つの

グループに命を確実に

奪われる。」

「じゃーどうしたらいいの

お兄ちゃん。」

「だから、わからん。」

「雪ちゃん。修さん。

そうしようよ、僕達は

『ル・マイン・オン・

イン・チュウード』を

『誰かがやらないなら、

僕達がやる』って、

そう訳そう。

つまり、僕たちで

何とかするんだ。」

「でも、どうやって？

竜ちゃん。」

「わからない。」

「も一竜ちゃんも

お兄ちゃんと

同じなんだから」

「ごめん。雪ちゃん。」

第二節 新たな展開

「そうか竜治。

お前の方からそう言って

くれると俺も助かるよ。」

「どういう事?修さん」

「竜治。

お前、今から雪と二人で、

沖縄に行って欲しい。」

「沖縄?なんで?」

「ちょっと受けて欲しい

授業があるんだ。」

「お兄ちゃんもしかして・・・」

「何?雪ちゃん。」

「そうだ、竜治。

一つ先に言うておくが、

もし、この授業を受けて、

それなりの知識を

身に付けたとしても、

それを悪用しないで欲しい。

誰かさんみたたく」

修さんはニヤニヤ雪ちゃんを

見てからかうように言った。

「お兄ちゃん。

私はちょっと

見てみただけ。」

「雪。

それは、

いけないことだろ」

「うん・・・・・・・・」

「何?どうしたの雪ちゃん。?」

「実はな竜治。

俺から雪に変わってお前に

誤らなくてはいけない

ことがあるんだ。」

「お兄ちゃん。おねがい。

私から謝らせて」

雪ちゃんは涙を浮かべて

僕をみていた。

それは、子供の頃

雨に打たれた捨て猫を

抱き上げたときの目に

似ていた。

彼女は崩れるように僕の

胸で泣き崩れ、

言葉が涙のあと

のむせ返りでさいぎられ、

何も聞き取れなかった。

「ごっごめんなさい。

竜ちゃん。

実は私・・・

実は貴方と知り合った

ばかりの頃、

あなたの事をよく

知りたくて・・・」

彼女は涙とその

感情のむせ返り

で言葉を失い

ひたすら泣き続け、

修さんがそれを

見守るように言った。

「ハッキングしていたんだ」

「ハッキングって？

あの、コンピュータ情報を

不正に覗く、

あのハッキングの事？

でも、どうやって」

「雪はお前の使っている

メールアドレスを調べ上げて、

それを見ていた。」

「ごっごめんなさい。

竜ちゃん。

ほんとに、

本当にごめんなさい。」

彼女は泣き崩れ、

僕に顔を見られないように

僕から目をそらした。

「竜治。

すまん。俺からも誤る。

どうか、

雪を許してやって欲しい。

こいつも、ほんの出来心だ。

悪気があったわけじゃない。

どうか、わかってやってくれ。」

「二人とも、

そんなに誤らないで。

別にたいしたことじゃないよ。

僕のメールを見られたぐらい、

どうって事ないじゃない。

だって、友達から時々

レポートの資料を

送ってもらうぐらいで、

たいしたこと書いてないし。」

「でも、

こいつはお前のプライバシー

をかってに見ていた。」

「それ程、

僕を愛してくれたって事でしょ。

愛してくれたから

僕の事を知りたくなった。

そうでしょ雪ちゃん。」

雪ちゃんはコクリと頷き、

僕に助けを求めるように

見つめた。

「ありがとう。

雪ちゃん。

そんなに僕を愛してくれて、

でも、

もし本当に僕の事が

知りたいのなら

直接僕に聞いて欲しい。

僕は、君に嘘はつかない。

それでいいかい？

雪ちゃん。」

彼女は少女のように僕に

しがみついた。

「ごめんなさい。

ほんとにごめんね竜ちゃん。

私貴方のこと信じているから

だから、

もうそんな事しないから、

おねがい竜ちゃん、

私の事嫌いにならないで。」

「大丈夫だよ。

僕は、そんな事で君を

嫌ったりしないよ。

でも、

ちょっとショックだった。」

彼女は再び泣き崩れた。

「もういいよ。

雪ちゃん。

君はちゃんと僕に

謝ってくれた。

だから、僕は許すよ。

だからもう、

この事で自分を責めないで、

そして、安心して。

僕は君を愛しているから」

「ありがとう。

竜ちゃん。」

彼女は子供のように僕の

胸にすがりついて泣いていた。

「落ち着いたかい？

雪ちゃん」

「うん・・・ありがと、

竜ちゃん」

「所で、修さんさっき

の話に戻るけど、

沖縄でいったいどんな授業を

僕達は受けるの？」

「スパイになる為の授業さ」

「スパイ？」

「正確には、

アメリカ情報局の

特殊工作員になる

ための授業さ」

「アメリカのスパイ？」

「そうだ」

「でも、なんでそんな

授業を受けるの、

そもそもどうして、

そんな国家機密を

僕達を受講できるの？

修さん。」

「竜治。

水島一族は影の支配者の

一グループの一員だ。

お前が望むなら、

ロシアのスパイ要請コースを

受けさせることも可能だ。」

「うそ？」

「本当だ。

そして、

我々一族は常に監視され

狙われている。

あらゆる情報を集めることも、

自分の身を守る事につながる。

だから、俺も雪もその授業を

受けている。」

「そうだったの。

お兄ちゃん」

「そうだ、その為にお前も

あの授業を

受けさせられたんだよ」

「そうだったんだ・・・」

「そういう事だ」

「でも、具体的にどんな

訓練をするの？

修さん。」

「竜治。

お前にはコンピューター

知識をまず叩き込む。

現在の情報収集には

コンピューターが不可欠だ。

だから、プログラミング、

ハッキング、

クラッキング、

あらゆる事を叩き込まれる。

そして、銃の扱い方。

武器の扱い方。

護身術。

サバイバル。

何でもありさ。」

「じゃー雪ちゃんは何を
教えられるの？」

「雪は何度かこの授業
を既に受けている。
お前より、より高度な
訓練が待っている。

お前はいわば初心者コースを
受講して、雪には
上級者コースを受講して
もらう事になる。」

「じゃー離れ離れに
なるんだね。

しばらくの間。」

「安心しろ。

訓練は別々に行うが、
宿泊する部屋は俺が

二人で居られるように

手配してやるから。」

「よかったね。

雪ちゃん」

「うん。竜ちゃん」

「わかったら二人とも

早く沖縄に行く為の

準備をしろ。

荷物をまとめるんだ。」

「わかったわ、

お兄ちゃん」

「既に羽田にジェット機を

用意してある。

それに乗ってすぐに沖縄に

向かってくれ」

「わかったよ。

修さん」

「竜治すまない。

お前を巻き込んでしまって。」

「いいんだ。

修さん。

僕も雪ちゃんを守りたいから」

「ありがとう。竜治。

妹をよろしく頼む」

「任せて、修さん」

「お兄ちゃん。

ありがとう。

私本当のこといえなくて・・・

でも・・・」

「よかったな。雪。

本当の事が言えて、

竜治はお前の事を

許してくれると

俺は信じていた。

本当によかったな」

「ええ、ありがとう。

お兄ちゃん。」

「もう、

自分を責めなくてすむな。

雪。」

「ええ、ありがと。

お兄ちゃん。」

第三節 エージェントキャンプ

僕と雪ちゃんは修さんの

用意したリムジンで

羽田に向かった。

用意されたジェット機は

水島家の所有するもので、

銀のユニコーンの紋章

が付けられていた。

飛行場に着いた僕らは

黙ったまま飛行機に

乗り込んだ。

雪ちゃんは暗い顔でうつむき、

僕達はただ黙って席に座った。

僕が雪ちゃんに話し掛けると

雪ちゃんは僕から目をそらせ

話しをしたがらなかったのだ。

やがて、

飛行機は着陸態勢に入り、

僕ら二人は目隠しを

させられた。

軍事上の機密の為に

するのだから

安心して欲しいと、

同乗した背の高い

アメリカ兵は言っていた。

目隠しをした僕らは

車に乗せられ、

そして、その訓練を

行っている施設に着いた。

施設の中に僕らが入ると

目隠しを外され、

施設の中の一屋に居る

ことを初めて知る

ことができた。

部屋は真っ白な大理石の

壁で出来ていて、

塵一つ落ちていないほど清潔で、

小さい白いテーブルと椅子が

並べて置いてあった。

そして、僕の隣には

眩しそうに辺りを見回す

彼女が座っていた。

目隠しを外した男がドアを

開けると白人の大きな男が

ベレー帽をかぶり、

いかいかしく

肩を突き出してこちらへ

近づいてきた。

「ヘーイ、雪乃。」

筋肉で覆われたその肉体に

似合わないほど甲高い声の

その男は、

白い歯をみせて、

彼女に手を差しだし

近づく彼女を抱き上げた。

「へーい。ジョー、久しぶり。

元気そうでよかったわ」

彼女はうれしそうに抱きつき、

そして笑った。

「雪乃しばらく見ないうちに、

ずいぶん綺麗になったな

ボーイフレンドでも

出来たのか？」

彼女は照れたように笑い、

僕を指差した。

「オー ナイス

トゥー ミー チュー」

僕が手を差し出すと彼は笑顔で

僕の手をとり握手を交わした。

「僕の名前は竜治といいます。

どうかよろしくお願いします。」

「リュウジ、わかった。

日本人の名前は呼びづらいな。

リュウジ・・・

俺の名前は。ジョー。

ここではみんなそう呼んでいる。

僕を呼ぶときはジョーだけでいい。

君は軍人じゃないからね」

僕が余りに早いネイティブの

英語に困惑していると、

彼が心配そうに僕に聞いた。

「お前英語わかるか？」

僕は首を左右に振った。

「OK」

ジョーは部屋の中に

備え付けられた

電話で誰かを呼び出すと、

彼女にこれからのこと

を説明していた。

僕は彼が雪ちゃんと

話している間ずっと

ボーっとしながら、

辺りを見回していた。

彼の話が一通り終わると、

彼は立ち上がり、

僕にウインクをして

「グットラック」

と手を差し出し、

部屋の中から出て行った。

「ねー雪ちゃん。

これからの事、

彼なんか言っていたの？」

雪ちゃんは僕に

目を合わせずに

下を向いたまま言った。

「えっとね。

今日は訓練はしないって

言っていたよ。

今日はゆっくり休んで

明日に備えなさいって、

そして、

時期にアンジェラが来るから、

貴方と一緒に施設の中を

案内してあげなさい

って言っていたよ」

「雪ちゃん。

さっきの事まだ

気にしてのるの?」

彼女はコクリと頷き

下をじっと見ていた。

「雪ちゃん。

こっちを見て、

もう気にしなくて

いいからね。

君を嫌いになってなんか、

いないから、

安心して欲しいよ。」

彼女はニコリと笑い僕の

首に腕を巻きつけ僕を

抱き寄せた。

「ごめんね。竜ちゃん。

私ね、嫌な所、貴方に・・・」

「いいよ。」

「やさしいね。竜ちゃん。」

僕らが抱き合っていると

突然ドアが開き

日焼けした顔のスレンダー

な女性が大きな声で

近づいてきた。

「ヘーイ雪乃」

「アンジェラ、

わーアンジェラ

久しぶりー」

彼女達は再会を喜ぶように

抱き合い、

なにやら会話をしていたが、

僕には早くて何を

言っているのか

さっぱりわからなかった。

モデルのような

その見知らぬ女性は

ブロンドの髪をかきあげ

しばらく雪ちゃんと

話していた。

その女性は僕のほうを

ちらりと見て、

何かを雪ちゃんと話し、

雪ちゃんも僕をちらりと見て

笑いながら何かを話していた。

見知らぬ女性は顔くと

僕の方に近づき握手を求めて

手を差し出し言った。

「初めまして、

私の名前はアンジェラ

・ドーン。

アンジェラと呼んで。」

僕は西洋人の女性が

完璧な日本語の発音で

手を差し出すのを

あっけにとられたように

見つめ、手を差し出し、

握手をしながら言った。

「はじめまして。

僕はリュウジといいます。

よろしくお願いします。」

「私が日本語を話すのは

以外？」

アンジェラは僕を

見ながら笑って言った。

「ちょっと上手すぎるから、

ビックリして」

「ええ、わかってるわ。

実はこれから、貴方達を

この基地の中を

案内するように

言われているの。

雪は大体知っているのと

思うけど、

立ち入り禁止場所とか、

いろいろあるから、

雪も一緒に来て。」

「ええ、わかったわ」

「さあ、それじゃ

行きましょう。案内するわ。」

「所で、どうしてそんなに

アンジェラさんは日本語が

上手なの。」

「私は12歳まで日本で

生活していたから、

父の仕事の関係で」

「アンジェラのお父様は

外交官なのよ」

「それは、すごいなー」

アンジェラはニコリと笑い

ドアを開けて、僕らを

案内して基地の中を歩いた。

僕らはエレベータに乗り

上へと上がっていった。

「これから案内するのはC15

ブロック。

明日から雪乃の訓練する

場所よ。

ここはフライトシュミュレーター

室になっているの」

「へーどんなシュミレータが

用意されているんですか？」

「ありとあらゆる物が在るわ。

戦闘機、戦車、

何でも在るわ。」

「ここで？」

「そう、明日から貴方は、

戦闘機のフライトシミュレーター

を受けることになっているのよ。

雪乃。」

「ええ、わかったわ。」

「さっ次に行きましょう」

「ここはG30ブロック

新しい兵器の実験場所。

実験と言っても、

私達の使用実験。

つまり、ここで、

その兵器の

性能を測るのよ。

それじゃ次。

ここが、射撃場。

それじゃ。次……」

基地の施設は驚くほど

広く、僕と雪ちゃんは

くたくたになりながら、

アンジェラの後を歩いた。

「二人とも疲れた見たいね。

いいわ、

これ位にしましょう。

それと、

二人に言うておくけど、

ここはよく新しい

立ち入り禁止場所

が作られるのよ。

だからよく注意して、

けっして警告を無視して

入ってはダメ。

警告を無視すると

射殺されるから。

それだけは覚えておいて。

それと、

これが二人の身分証

カードになっているから

ドアを開ける時と、

エレベーターを動かす前に

此処に通してね。

これを使わないと

エレベーター

は動かないし、

何処にも入れない。

これを無くさないで、

無くしたら、

例え貴方達が

民間人でも、

処罰の対象に

なるから。

でも、

雪乃だけは別かもね。

水島グループの

一員ですもの。」

「射殺ですか？」

「ええ、

気をつけてリュウジ。

それと明日から始まる

訓練なんだけど

それをちょっと

説明させて、

さあ、

どうぞ此処が貴方達の部屋。

一応ベットは別々のを

用意したけど嫌なら言って、

変えさせるから。

どうぞ、二人共中に……」

「うわーすごいね雪ちゃん。」

部屋の中はヨーロッパの

高級家具で埋め尽くされ、

三ツ星ホテルのように

洗練されていた。

「雪乃はVIPですもの。

当然よ。

此処の部屋はこの施設の

最高司令官の部屋より

いいのよ」

アンジェラは僕に

ウインクすると

僕達をダイニングの

ソファーに座らせた。

「明日は、朝5時に起床。

10キロのランニングの後、

朝食。

雪乃、貴方は8時からの

訓練に参加して、

走るのは彼だけだから。」

アンジェラは

気遣うように雪ちゃん

に言った。

「リュウジは起床とともに

先ほど教えた屋内の競技上で、

戦闘服を着て待っていて。

そこに教官が待っているから、

彼も日本語を話せるから

安心して、でも、

貴方も英語を

マスターするチャンス

だからなるべく

英語を使って欲しいの。」

「わかりました」

「貴方の戦闘服はその

ロッカーに入っているわ

着方は今夜雪乃に

教わっておいて、

いつでも、

集合時間の五分前には、

その場所に居て欲しいの。

それが軍人のルールだから。」

「わかったわ、アンジェラ」

「それから、

二人にはそれぞれの

プログラムを受けてもらうわ。

訓練期間は三週間。

雪乃は先ほど言ったように、

フライトシミュレーターに

乗ってもらうわ。

明日は空対空の戦闘訓練と、

地上の攻撃訓練を行ってもらう。

そして、リュウジ。

貴方は午前中みっちりと私が

コンピューターの知識を教えるわ。

そして、午後に基本的な

体力作りと、格闘技を教わる事に

なると思う。

17時から19時までは、

また私と一緒にプログラム

の仕組みについて学んで

もらう事になる。

訓練は午後の七時まで

みっちり詰まっているから、

覚悟して。」

「わかりました。」

「そう。よかった。

それじゃ。

あっ言い忘れたけど、

食事は二十四時間

いつでも食堂で

食べられるから

時間のある時に

済ませておいて、

それじゃ」

こうして、

僕達は戦いの準備を始めた。

『誰かがやらないなら、
僕達がやろう。』

その言葉どおりに・・・・

第四節 黒い巨人

僕は目覚ましを

四時四十五分にセットして

すぐに寝ることにした。

雪ちゃんはお風呂に

入っていたので

テーブルにお休みなさい、

と書置きして寝てしまった。

目覚ましの音で目がさめると、

下着姿の彼女が僕のベッドに

忍び込んで僕の首に

腕を絡めて寝ていた。

僕は彼女を起こさないように

静かにベッドから出て、

戦闘服に着替えて、

運動場へと向かった。

辺りが静まり返り、

虫達の寝息が聞こえてくる

様だった。

僕はカードキーになっている、

IDカードを首にぶら下げて、

ゆっくりと歩いた。

思ったより室内運動場に

到着するまでに時間がかかり

ちょうど集合時間五分前に

運動場に着くと既に一人の

背の高い筋肉質の40才ぐらいの

黒人男性が立っていた。

僕が近づき頭を下げると、

彼はいきなりわめき出した。

ものすごい早い英語に圧倒され、

僕は驚いたが、

怒っていることだけは理解した。

ただ英語が理解できない僕は、

なぜ彼が怒っているのかわからなかった。

彼は、全て英語で話し、

日本語を絶対に話さなかった。

僕の言っていることを

理解している彼は、

僕に怒りを更に強くぶつけた。

「お前が英語を理解しようと、

しまいと俺は

知ったこっちゃーない。

いいか、

此処では、俺がルールだ。

お前が何様だろうが関係ない。

それは俺が貴様の

教官である以上、

それ以下でもないと

いう事と一緒にだ。

貴様はこれから糞やろうだ。

俺がそう決めた。

いいかシットマン。

よく聞け。

五分前と言ったら、

十分前だ。

時間に遅れるな。

お前のような

価値のない男の為に

俺は時間を無駄にされた。

この責任はとってもらう。

いいか、これから、

お前と此処を走る。

このコースは一周が二キロだ。

お前が先にいけ、

お前が一キロ地点に行ったら

俺もスタートとする。

俺がお前の肩を叩いたら、

一周追加する。

もし、

一度も肩を叩かれなければ、

お前は五週でこの訓練を

終えて朝飯にありつける。

わかったな。」

僕がキョトンと

していると彼は

僕の顔目一杯近づいて、

「分かったのか？」

とドスを聞かせて言った。

僕はなんとなく理解できた。

と言うか言わないかの内に、

彼は僕の胸ぐらをつかみ、

「サーと呼べ」

と太い声で言った。

「イエッサー」

「それでは、いけ。

なにをしてる。

糞ヤロウ。

早くいけ」

僕は、とりあえず走った。

僕が一キロ地点に達すると、

彼はものすごいスピード

で僕を追いかけ始めた。

僕はたまらないとばかりに

急いで走ったが、

彼はあっけなく僕の肩を

叩き、風のように消え、

また僕の肩を叩いた。

僕は朝の練習時間は

大体一時間ぐらいと

聞いていたので、

名前も知らない教官が

僕の隣に来た時に聞いた。

「あの一。

時間過ぎてるのでは

ないですか。？」

「何？」

「練習時間過ぎて

ないですか？」

彼が走るのを止めたので、

僕も安心して

歩いて彼に近づくと

彼は表情を

鬼のように変えて、

僕にまた怒鳴った。

「誰がお前までも、

走るのを止めて

いいと言った。

止めていいのは、

俺だけだ、

貴様、何度、

俺に肩を叩かれた？

七回だ。

つまり、

後七週残っているだろ。

立ち止まったから、

あと九週だ。

口答えするな。

もし一言でも喋れば、

もっと増やしてやる。

さー糞ヤロウ。走れ。

今すぐだー」

「イエッサー」

「good さーいけ」

僕は痛むわき腹を抱えて、

一生懸命に走った。

結局、追加訓練を終えるまで、

僕は七時四十五分。

まで、かかってしまった。

僕は休憩せずにシャワー

を浴び、部屋に戻ると

すぐに制服に着替え、

指定されていた。

c36ブロックの一室に走った。

僕は五分遅刻してしまっていた。

急いで席に着くと

アンジェラが近づいてきた。

僕は今度は何をされるのか

想像して恐れていた。

今回は完璧な遅刻だからだ。

「リュウジ」

「イエッサー」

彼女はにやりと笑った。

「なるほど。ブルドックね。」

いいわ、今日は遅刻を

大目に見ます。

ただし、今回だけよ。

次に遅刻したら

どんなことが待っているか

覚悟して頂戴。」

僕は安心して大きな声で

答えた。

「イエッサー」

彼女は非常に頭がよく

教え方が素晴らしく

分かりやすかった。

彼女はコンピューター

の動く仕組みから、

僕に講義して、

プログラミングの

動きについて、

分かりやすく説明した。

「いいリュウジよく聞いて。

プログラムはいわば、

条件なの、その条件を

つかって、どのように

電気信号が流れるか

によって、回路が作られている。

その回路がいわばプログラム

であり、電気信号が

通る道とも言える。」

「へえなるほど。」

「一つ一つのプログラム

言語はいわば、条件で、

その条件を複雑にして、

いろいろな仕事をさせている。

こう考えてほしいの。

それじゃー

このプログラムと

このプログラム

を合わせるとどういう働き

が生まれるか予想してみて、

プログラムの最小単位での

動きを監察することで、

それは出来るはずよ」

「分かりました。」

「ねーところで雪乃とは

どうやって知り合ったの?」

僕はコンピューター画面から

目を離すことなく答えた。

「雪ちゃんのお兄さんの

紹介です。」

「シュウジ?」

「そう、修さんと今は同じ大学

に通っているから」

「シュウジ貴方の大学の

大学院に行っているの?」

「いいえ、大学ですよ」

「シュウジ?。」

ハーバード卒業したのに

なぜまた大学に行っているの?」

「えっそれは知らなかった。

ハーバード卒業したんですか?

まさかーだって、

うちの大学で

二年浪人してるし、」

「悪いけど

シュウジは貴方の

大学で浪人なんて

考えられないわ。

彼はハーバードを

12歳で卒業しているの

しかも、首席で」

「えっ?」

「卒業しているのよ。

しかも、12歳で。

信じられる？」

僕は驚いて、

アンジェラの顔を

みて首を左右に振った。

「じゃーどうして？」

「それを私が貴方に

聞いているんでしょ？

まっ本人から

聞いてみるのが一番ね。

さっपोर्टしない。

貴方が学ばないと

いけない事は

まだまだ在るの。」

僕は慌てて

画面に目を戻した。

どうして、修さんは、

あの大学にまた

入りなおしたのか、

考えていた。

午後の講義が始まった。

悪夢と呼べる時間が

また始まった。

朝、突然どなった教官がまた

僕の目の前に立っていた。

そして、もう一人の二十代

の若い軍人はじっと動きもせず

にその教官の隣りにいた。

「紹介する。

シットマン。

この隣にいるのは

リッジモンド少尉だ。

挨拶は抜きにして、

これから、接近戦での

戦闘武術による指導

を貴様に行う。

まず最初に私とリッジモンド

がお前にやり方を見せる、

貴様はそれをしっかり頭に

叩き込め、そして、

俺が体で貴様に教えてやる。

ありがたく思え。

返事はどうした。」

「イエッサー」

僕は何を言ってるのか

わからないのに

大きく返事を返した。

リッジモンド少尉と

名前も知らない黒人教官

は僕の目の前で

取っ組み合い、争った。

ゴム製のナイフを持った

リッジモンドは、

何度も、黒人教官に倒され、

そのたびに這い上がって、

再び戦った。

リッジモンド少尉は動け

なくなるほど首をしめられ、

口から泡を吹き出し、

それを見た黒人教官は

にやりと笑い、

彼の腰に自分の膝を

あてて強く押した。

すると、リッジモンドは

はっとしたように目を覚ました。

「リッジモンド

下がってよし、」

野獣のような

目つきで僕を見た

黒人教官は僕に言った。

「次は貴様の番だ。

糞ヤロウ。

俺にかかって来い。」

僕は猫に見つめられる

ねずみのように

彼を見ていた。

このままでは殺されて

しまうのではないか

という恐怖がそうさせた。

「どうした。

糞男。

怖気づいたのか？

貴様がこないのなら、

俺から行かせてもらうぜ。」

黒人教官はゴム製の

ナイフを振りかざし、

僕に向かって飛び掛ってきた。

僕はとっさに彼の腕を取り

投げ飛ばしていた。

僕は三歳から合気道を

習っていたので、

体が自然に反応して

しまったのだ。

予想もしていなかった

事がおきた教官は

頭を振って置き上がり、

僕に鬼の形相で言い放った。

「おもしろいじゃないか。

ぼうず。

俺を投げ飛ばすとは、

たいした度胸だ。」

教官はパンチとキック

エルボーなどを組み合わせて

僕に向かって突進してきた。

僕はそれをよけるのが

やっとでとうとう彼に

後ろから羽交い絞めにされた。

何度か彼の足の指先を

めがけてキックを放ったが、

それは空中を空回りした。

僕は気絶して、

それから先のことを

まったく覚えて

いなかった。

目を覚ますと心配そうに、

雪ちゃんが僕を見ていた。

「竜ちゃん。

竜ちゃん。

大丈夫?」

彼女は目に一杯涙を浮かべて

泣き出した。

「よかったー

本当によかった。

このまま竜ちゃんが

死んでしまったら

私どうしたらいいか

わからなくて・・・

でも、よかったー

竜ちゃん。」

「雪ちゃん。

ここは何処?。」

「安心して竜ちゃん

此処は私達のお部屋よ。

今日の訓練はこれで

おしまいですって。

だから、ゆっくり休んでって。

アンジェラが。」

「そっかー痛ってー」

「竜ちゃん。

無理して起きないで」

「でも、お腹がすいたよ。」

「じゃ私が食べさせてあげる。

此処に用意してあるから。

ちょっと待って」

すると、ドアをノックする音が聞こえ

あの黒人教官が姿をあらわした。

僕はさっと置き上がり

彼を睨んだ。

「どうだ、体は大丈夫か？」

「ブルドックー

ヒドイヨー

竜ちゃんをこんなに成るまで

痛めつけるなんて。」

「雪乃、これが俺の仕事だ。」

彼は僕が一度も見た事のない

紳士的な態度で雪ちゃんに

接した。

「そう睨まないでくれ。

リュウジ。

お前の言いたい事は

分かっている。

俺の名前はブルドック

そう呼んでくれ。」

彼は紳士的に手を

僕に差し出し、

僕に握手を求めた。

「リュウジです。

よろしく。」

僕は何処か警戒しながら

彼と握手を交わした。

「俺はお前という人間を

知る必要があった。

だから、ああいう接し方をした。

これが俺のやり方なんだ。

分かってくれるか？」

僕は黙って頷いた。

「そうか、それならよかった。

お前のパンチ効いたぜ。

いいガッツだ。

気に入ったぜ。」

彼は僕に初めて

笑顔をみせて、笑った。

僕も自然に笑って親指を

立てた。

雪ちゃんは相変わらず

ブルドックを睨みつけ

口を大きく膨らませていた。

第五節 解けた謎

訓練は永遠のような感覚を

僕に刻みながら、

過ぎていった。

訓練期間が最初から

少ないせいで、

その密度を濃くする

必要があった。

つまり、ハードだった。

僕は目覚めと共に

ベットを飛び出し、

朝から走った。

訓練当初、

僕の右肩はブルドックの手跡が

付くぐらい彼に触れられたが、

訓練が二週間を過ぎる頃、

一度も叩かれることがなくなった。

僕は格闘技の技術を認められ、

格闘技の授業を免除され、

その代わりに、

射撃や、壁登り

ロープを使った

様々な戦闘訓練

が行われた。

部屋に帰る頃には

意識がもうろうと

していたが、

すぐに夕食とシャワー

を済ませて、

午後の最後の

コンピューター

の授業を受けた。

雪ちゃんの希望で、

雪ちゃんも

そのアンジェラの

授業に参加して、

僕らはなるべく二人で

居れる時間を

増やしていた。

授業が終わると

なだれ込むように

ベットに入り、

一分もしないうちに

深い眠りについた。

僕達はこの訓練期間中に

ろくに話もできず、

僕は彼女に悪い気がしていた。

それでも彼女はいつも僕に、

優しい笑顔を投げかけて、

僕もそれに答えた。

今思えばそれが沈黙の会話

だったに違いないと思う。

普段僕らは声を

出さない会話

が存在する事を

忘れがちだが、

こういう時に再び

現れるモノなのだと

今では思う。

僕らはお互いの

気持ちを笑顔

で伝え、そして、

それが唯一の

会話だった。

彼女は黙って

僕の隣に寝転び、

僕の髪を優しくなでながら、

僕が眠りに落ちるまで

見守ってくれた。

僕は彼女に母親の

優しさを感じながら

深い安心と共に

眠りに落ちた。

三週間で過ぎ、

訓練を終えた僕は、

東京に帰ってすぐに、

最後のレポート

を作り上げ、

その次の日には

大学の授業を受けていた。

スパイ学校とは違い、

だらけたキャンパス

内の空気が、

僕に安らぎをくれている

ような気がした。

「あの一すみません。」

僕の目の前に

見覚えのある女性が

すまなそうに僕を見ていた。

「はい？」

僕ですか？

どこかでお会いしましたか？」

「はい、実は・・・

その・・・コンパで・・・」

僕は彼女の顔をまじまじと見て

僕の記憶の扉から

彼女の像を探した。

「あっ・・・あの時の」

「そうです。あの時の。

ごっごめんなさい。」

彼女は突然深深とお辞儀

をして、僕に謝罪した。

彼女は金森の主催した、

合コンに参加していた女性。

しかも、ワイングラスを片手に

僕の前に立ち

「あなたって最低ね」

そう言うか言わないかのうちに

僕の頬におもいきり

ピンタを食らわせた。

あの女性だった。

僕はあの殴られた時のように

突然の出来事に驚いて、

ただ頬に手をあてて

呆然と彼女を見つめた。

彼女の目は僕に

許しを求めるように

おどおどして、

また、頭をさげて

僕に謝罪した。

「ごめんなさい。私、貴方と

他の人を勘違いして、

あなたの事を殴ったりして、

本当にごめんなさい。」

「あっっっあいんです。

もう気にしていませんから、

そんなに謝らないでください。」

「本当にごめんなさい。」

「いいですよ。

もう、終わったことですから、

所でどうして、此処に？」

「あっ貴方に

謝ろうと思って・・・」

「そうなんだ。

あっそういえばどうして

僕は君に殴られたの？

理由を聞かせてよ。」

彼女は頭をかいて

おちゃらけたように言った。

「私ったらドジで

オッチョコチョイ

だから、

貴方と別の人を

間違っちゃって。

その一私の親友に

あきって娘がいて、

その娘とっても美人で、

性格もいいんだけど、

いつも人見知りばかりして、

友達も少ない娘なの。

それで、私、

彼女の唯一の友達なの。

ある時彼女、

すごく素敵な人に出会った

って私の所に来て

天使のような笑顔で言うの。

私もそんな彼女を

見たのは初めてだったし、

彼女のそんな姿を

見ていて幸せに思えたわ。

彼女の話では、

彼はとてもハンサムで、

何処となく

優雅な雰囲気をもっている

と聞いていたから

・・・私・・・

てっきり貴方だと思って・・・

その一・・・」

「僕をなぐった。」

「ごめんなさい。」

「そのあきちゃんって娘と、

その彼の間で何があったの？」

「それが、私にも彼女詳しく

話してくれないの・・・

だだ、彼と出会って何度か

会っている内に彼女が彼に

恋をしたのは確かよ。

だって、

彼女はすごく輝いていた。」

「それでどうなったの？」

「彼はもう会えないって

彼女に言ったらしいの。

それからの彼女は、

まるで亡霊にでも

なったみたいに

すっかり心を閉ざして、

いつも泣いてばかりいたわ。

私そんな彼女にってしまった

男が憎くて、憎くてたまらない。

あんない子を騙したなんて

許せないって思ったの。」

「彼はあきちゃんを騙したの？」

「それも、私の勝手な思い込み

だったかも……………

あきの様子からして、

やっぱりそうなのかな？

なんて今思ったりもするの。

……………

でね、前に、

彼女からこの大学に

彼が通っているって

聞いていたし、

名前も竜治と

名乗っていたらしいから

てっきり私貴方

の事だと思ったの。

私は調べたのよ、

この学校に通ってて、

竜治という名前を

持つ学生は

貴方しかいなかった。

私は彼女の為にあのコンパに

参加したのよ。

しかも今の彼を説得して・・・

彼女の気持ちを踏みにじった

男への復讐のつもりだった。

でも、竜治は貴方じゃなかった。

誰か別の奴が貴方の名前を

使って彼女に近づいた。

それが、真相って訳。」

「でも、その男と僕が違うって

いつ気が付いたの?」

「貴方を殴ってから

あきにそのことを話したの。

そしたら、彼女その事を

彼に謝りたいって私に

言うから、私、彼女と

二人でこの大学に来て

あなたの事を探したの、

そしたら、夏休み前に

りさにちょうど会って……

貴方達友達なんでしょ？

経営学部のりさと。」

「ああ、そうだよ」

「あの時の事、りさに話したら、

りさは、しきりにあなたの事を

かばうのよ。

貴方はそんなことしないってね。

私は反論したわ。

だって、竜治って言う

名前の学生は

間違いなくこの大学の中に

一人しかいないんですもの。

そしたら、

りさが貴方の写っている

写真を取り出して、私に聞くの

本当にこの男かってね。

その写真をみて、あきが首を

振るまで、てっきり、私は、

貴方があきの知っている。

竜治さんだと思っていたの。

本当にごめんなさい。」

「いいよ。気にしないで

ところで、その、あきさんは？」

「さっきまで一緒に

居ただけど

.....

彼女ショックだった見たい。

あの娘を騙していた男

本当に許せない。

彼女そのことにも深く

傷ついて、必死で貴方と同名

の男を捜してるみたい。

この学校に通っていると信じて。

何日も何日も探しているの。

彼女貴方に対しても申し訳

無いと言って、

謝りたがっていたわ。

私がかってにやった事なのに、

自分を責めるの。

そんな優しい娘なの。

彼女は。」

「そっか。

あきちゃんに言うておいて

欲しいんだ。

『僕に謝る必要は無い』

そう言うておいて。

そして早く元気になって、

って伝えてよ」

「ありがとう。

竜治さん。

それと本当に

すいませんでした。」

「君も気にしないで。

僕は授業あるからこれで、

また、いつか」

「はい、また・・・」

「あっそうだ。君の名前？

聞いてないよ？」

「ごめんさい。

私、ルナ。

江本ルナです。」

「ルナちゃんか・・・

とても、いい

平手打ちだったよ。

ルナちゃん」

僕は悪戯げに

ウインクをして言った。

彼女は笑いながら首をまげて、

テレを隠した。

「それじゃまた。

ルナちゃん」

「それじゃまた。・・・」

僕は忘れかけていた

謎の出来事をひとつ

解くことが出来たことに

満足して、

その日の講義に

向かった。

第六節 変わる季節

季節は冬を迎え

街はクリスマスの

装飾に飾られていた。

街は色とりどりの

鮮やかな色彩に彩られ、

道行く人にそれぞれの

世界を提供していた。

ある人には幸せを、

そして、

ある人には寂しさを。

いつもならこの時期の

僕は暗く沈み込み、

道行く人々を羨ましそうに

見つめながら、家路を急ぐ。

通りを仲良く手をつなぐ

歩くカップルを尻目に。

「どうしたの？」

竜ちゃん」

手をつなぎ隣を歩く

僕に彼女が聞いた。

「うん、何んでもないよ」

「また竜ちゃん何か

考えているの？」

「何んでもないよ。」

「また、そうやって雪に隠すの？」

「何も隠してないよ」

「うそ。そうやって

寂しそうな目をしてるわ」

「わかったよ。雪ちゃん。

話すよ。」

「うん。話して」

「実はちょっと

考えていたんだ。」

「うん。何を？」

「クリスマスって

不思議だなーって」

「どうして？」

「クリスマスになると

なぜか神聖な空気が

街を包み込むでしょ。

まるで本当に神様が現れて、

街を包み込んでいるように。」

「そうね、ほんとね。

本当に不思議だわ」

「この雰囲気は人それぞれの

心を強く揺さぶるでしょ。

幸せな人には幸せを強く感じ

させる。

寂しい人にはその寂しさを

揺さぶるように映し出す。」

「うん。」

「去年のクリスマス

雪ちゃんは

何をしていたの？」

「私はニューヨークにいて、

パーティーに出ていたよ。

竜ちゃんは？」

「一人でレポート作りに

追われていたよ」

「なんだ。よかった。」

彼女は安心したように笑った。

「私はてっきり他の女の人

と一緒にいたんだと思った。」

「違うよ。一人だったよ」

「そう、よかった」

満面の笑顔で彼女は笑った。

「でも、とても寂しかったよ。

それを思い出していた。」

「そう、ごめんね竜ちゃん。

私ったら・・・」

「いいよ。誤らないでよ。

今年は君が居てくれるから

・・・」

「寂しくない？」

「寂しくないよ。幸せだ。

でも、去年の僕のように

その寂しさの中で暮らして

居る人も居るんだろうな・・・

なんてね」

「そうね、

きっと居るでしょうね。

去年は私もとても寂しかった。

パーティー会場は華やかで

着飾った人々が楽しそうに

話していたわ。

でも、私は窓の外を見つめて、

考えていたの・・・・・・・・

繰り返す日々に

何の意味があるの・・・・・・・・

なんてね・・・・・・・・

でもね、今年は貴方が

居てくれるから私は幸せ。

貴方の側に居られる事が

とっても幸せ」

彼女は僕の腕にしがみついた。

「私思うの、

今寂しさに震えている人にも

必ず幸せに包まれる日が来る。

だって、私がそうだから。

きっとその人達にも必ず素敵な

人が現れるわ、今の私達のように

きっと……」

「そうだね……雪ちゃん。」

「絶対そうよ」

彼女は明るく笑いかけた。

「ねー竜ちゃん。

明日はクリスマスイブよ。

そして、その次の日は

貴方の誕生日。

ねー何かプレゼント

欲しい物はないの？

一応は用意してあるけど

竜ちゃんには特別に

もう一つあげちゃう。

特別だよ」

彼女は悪戯な笑いを見せて

僕の顔を覗き込んだ。

僕は真面目な顔で彼女を

見つめていった。

「君がほしい。

君の全てが」

それは僕の心の奥から

聞こえる叫びだった。

彼女は僕をやさしく見つめて

子供に言い聞かせるように

言った。

「だったら安心して。

私の全てはもうずっと前

から貴方のものよ。」

「じゃーもう何もいらないよ」

「も一竜ちゃんったら、

嬉しい事言ってくれちゃって。

いいわ、私が考えるから。

そうだな、何がいいかな？」

「ありがとう。

でも、そうやって僕の事を

思ってくれる

君を見ているだけで

十分に幸せな気持ちに

させてくれている事

雪ちゃん知ってた？」

「私はそうやって笑って

私を見ていてくれる貴方を

見て幸せになれるの。

竜ちゃんこそ知ってた？」

僕はキュンと胸に刺さる

思いに駆られ彼女の手を

引き寄せ強く抱きしめた。

「ずっとこのままで居たいよ。

雪ちゃん。

君とこのまま・・・ずっと」

「痛いよ竜ちゃん」

彼女を見つめると彼女は

照れくさそうに僕を見つめ

そして、唇を重ねた。

その柔らかな唇は

幸せの味がした。

あの冬の出来事だった。

第七節 クリスマスイブ

聖なる夜

聖なる夜は静寂に包まれ

私は貴方の優しさを知る

貴方は静寂という名の

マントに身を包み

私の心を強く揺さぶる

時には暗く寂しい夜へ

と誘い(いざない)

時には幸せで私を潤す

それが貴方の特別な

優しさなのだと

知るまでに

私は多くの月日を

必要とした

貴方が私を包み込むように

見つめる度

私の心は幸せに包まれた

貴方はとても暖かく

そして孤独な人・・・

私の心は貴方の寂しさに触れ

そして震える

貴方の優しさは私の心を

激しく揺さぶる

どうしてこんなに暖かく

寂しいのだろう

私は同時に押し寄せる

感情に困惑し

涙が自然と溢れ出す

聖なる夜に現れる

私の大切な存在の貴方・・・

貴方は私を包みこみ

さびしげな目で遠くを見つめる

聖なる夜は静寂に包まれ

私は貴方に全てをゆだねる

「竜ちゃんそろそろ

起きて寝ボスケさん」

彼女は僕のベットの上に

腰をおろして見つめていた。

「おはよう。雪ちゃん。」

「メリークリスマス

竜ちゃん」

「メリークリスマス

雪ちゃん」

「竜ちゃんもう午後三時よ

そろそろ起きてくれないと

寂しいよ・・・雪は・・・」

「わかった。

起きるよお姫様」

「もう今夜の準備は

終わったよ。

後は貴方が起きてくれるだけよ」

「わかった。雪ちゃん。

ありがとう一人で

準備してくれたんだね。

ごめんね手伝わないで」

「いいよ。

だって楽しいから。

だから早く起きて。

私の王子様。」

彼女は僕の頬にキスをして

僕の手を引きダイニングに

連れて行った。

「じゃじゃーん。

雪はがんばって

フルコースを作りました。」

「ありがとう。

こんなに作るの大変だったでしょ」

「えへん。

竜ちゃんのためだから」

「あつても、

さっき出かけていったでしょ

どこに行っていたの」

彼女は舌をだしてオチャラケて

言った。

「実はこの料理、知り合いの

シェフが作ってくれたの

それを取りに行ってた。

ごめんね竜ちゃん。」

「なんだそうか

いいよ、その気持ちだけで」

「本当に雪は自分で作るつもり

でいたの・・・・・・・・

でも・・・・・・・・」

「いいよ。

うれしいよ」

「そういつてくれると

思ってた。」

「確信犯だったりして」

「ばれた？」

「いいからここに座って

雪ちゃん。」

「何、なに」

「これ僕から君へのプレゼント」

僕は部屋の暖炉の脇に

飾られたクリスマスツリー

の下に置かれたプレゼント

を取り出して、彼女に

手渡した。

「わー何かしら

ちょっとまって

私からも竜ちゃんに

プレゼントがあるから。

取ってくるね。」

彼女は立ち上がり

彼女の部屋から

僕へのプレゼントを

手に取り戻ってきた。

「これ、竜ちゃんへ

私からのプレゼント。」

「ありがとう雪ちゃん。

なんだろう？

一緒に開けようよプレゼント」

「うん、そうしよ

竜ちゃん」

僕たちは互いのプレゼント

の包装を開けた。

「わーりゅーちゃん。

ありがとう綺麗な指輪ね。

うわー私の指にピッタリ。

どうしてサイズがわかったの?」

「僕は雪ちゃんのことなら

何でも知ってるからね」

「本当に?」

彼女は疑いの目で僕を見つめた。

「ごめん。

実は君が隣で寝ている間に

調べてたりして・・・」

「モ一竜ちゃんったら

女心をわかってないんだから。

そういう時は最後まで

雪のことなら

何でも知ってるって言って。

そしたらもっと喜ぶのに一

でも、ありがとう。

大切に作るね。

さ一竜ちゃんも開けて」

「わかったよ。

それじゃ開けるね」

僕はその大きな

プレゼントの包装を

外した。

「へーかっこいいスーツ

だね。ありがとう。

雪ちゃん。」

「いいえ、どういたしまして。

竜ちゃんはかっこいいんだから

もっとおしゃれして欲しくて

私・・・・」

「ありがとう。雪ちゃん。

それにしても、高そうな

スーツだね。」

「竜ちゃんに似合うと思ったから」

「ありがとう雪ちゃん

大切にするね」

「じゃじゃーん。

プレゼント第二段。

これ、開けてみて

こっちは誕生日の

プレゼントだよ」

「えっいいの？」

「もちろん」

「何かな？」

うわー高そうな靴だね。」

「そのスーツに合うと思って」

「ありがとう雪ちゃん。」

「どういたしまして。」

「今夜はこのスーツで

君と過ごそうかな」

「いいわね。

それじゃ私も着替えて

来るね。

竜ちゃんもシャワー

済ませてそのスーツに

着替えてよ。

私は準備を済ませて

待ってるから」

「わかった、

それじゃそうしよ」

シャワーを済ませた僕は

雪ちゃんからもらったスーツ

に着替えダイニングに向かった。

雪ちゃんは白いドレスに身を包み

僕を笑顔で迎えた。

彼女の隣には白ちゃんが

サンタクロースの衣装に

着替え、僕たちから送られた

プレゼントの大きな骨に

むしゃぶりついていた。

「竜治さん。素敵。

とっても似合ってるわ

そのスーツ。」

「ありがとう雪ちゃん。

君も相変わらず素敵だよ」

僕は彼女の手を取り

彼女をエスコートして

ダイニングの

テーブル席に座らせた。

「それじゃ乾杯しましょ。

竜ちゃん」

彼女はワイングラスを手に

取り僕にグラスを差し出した。

「メリークリスマス。雪ちゃん。」

「メリークリスマス竜治さん」

僕達はグラスを合わせ

クリスマスを祝った。

「ねー雪ちゃん。

修さんから何か連絡なかった？」

「それがね、

ぜんぜんお兄ちゃん

が捕まらないの。

携帯電話はいつも

留守電のままだし

何処にいるのやら？」

「時々修さんは突然姿を消すよね」

「でも、心配は要らないよ。

きっと。

だっていつも突然ひょっこり

現れるんだから」

『ピンポン』

玄関のチャイムが

訪問者を伝え

僕と雪ちゃんは顔を見合わせて

笑った。

「噂をすれば・・・

きっとお兄ちゃんよ」

僕と雪ちゃんは立ち上がり

玄関まで手をつないで

修さんを迎えた。

「メリークリスマス。

雪。それと竜治。

シャンパン持ってきたぞ

一緒に飲もう」

「ありがとうお兄ちゃん」

「修さん久しぶりだね。

何処に隠れていたの？

今雪ちゃんとちょうど修さんの事

話してた所」

「おお竜治。

本当に久しぶりだな。

ちょっとヤボ用って奴でな。

すまん、すまん。」

「さーみんなで食事しましょ。

お兄ちゃんも早く上がって」

「そうだな」

テーブルを囲み僕ら三人は
クリスマスを祝い、そして、
会話を楽しんだ。

「お前らうまく
行ってるみたいだな。
仲がよさそうで安心したよ。」

「もちろんよお兄ちゃん。
ね一竜ちゃん」

「竜治。
お前も幸せそうでよかった。」

「ありがとう。修さん。
所で修さんは今年は
誰とも約束はないの？」

「そんな訳ないだろこの俺が、
お前でもあるまいし
一人でクリスマスを過ごす

なんてありえると思うか？

この俺が」

「んーやっぱりそれはないか」

「そーいうこと。

ちょっとお前らの様子を

見に来ただけだよ。

邪魔者はすぐに退散するから

安心しろ。竜治くん」

「別にそんな意味じゃないよ」

「わかってるって。竜治。

でも、お前がそうでも雪は

どうかな？」

「私はお兄ちゃんが

来てくれてうれしいわよ、

もちろん。」

「そっか。ありがとな雪」

「お兄ちゃんいったい

何処で何をしていたの？

携帯電話は留守電のままだし、

お父様も心配していたわよ」

「その事で今日はここに寄ったんだ。」

第八節 古くから使っていた言葉

「おい、雪。

これはお前が作った

料理じゃないな」

「えっどうして」

「これは、

ミルトンのシェフ。

俺にはわかる。」

「ご名答」

「なんだ雪。

俺はてっきりお前の

料理が食えると思って

やって来たのに残念だよ。」

「ごめんお兄ちゃん。

私、寝坊しちゃって。」

「これじゃ竜治もガッカリだろ？」

修さんはホークで料理を

刺して上に上げるように言った。

雪ちゃんは心配そうな顔で

僕をみつめ今にも

泣き出しそうだった。

「修さん、僕は修さんと違って

いつでも雪ちゃんの手料理を

食べれるからね。

雪ちゃんもそんな顔しないで、

これはこれでおいしいよ。

君の料理程じゃないけど・・・」

「ごめんね竜ちゃん」

「いいよ。

修さんもそんな顔しないで、

また遊びに来た時に

雪ちゃんに作ってもらえば

いいじゃない。」

「ごめんねお兄ちゃん」

「まっいいよ。雪。

ちょっと残念だったけど」

「修さんそれより

早く話してよ。」

「おお、そうだった。」

修さんは手にもったホーク

を皿の上に置き、

ワインを一口飲んで

真面目な顔で話し始めた。

「実はな、爺様の隠した

三種の神器について

新たな展開があった。

これを見てくれ」

修さんは自分の持ってきた
バックの中から資料ケース
を取り出し中の資料を僕達
に手渡しながら話し続けた。

「この衛星写真は検索チーム
が推測した地域の写真だ。

おそらく爺様はここに三種
の神器を隠したはずだ。

それを裏付けるのがこの資料だ」

「これはいったい何」

「これは爺様の残した資料
の中にあったものだ。

神代文字と呼ばれる文字
に似ているがそうではない。

これは古代文字で学名はない。

つまり、学者たちはその存在
すら知らない。

この文字は我ら闇のグループ

の幹部ですら見た

ことがない者が

多い、しかし、

これは、我々の先祖

が古くから

使っていた言葉で、

我々はゾーマ文字

と呼んでいる。」

「ゾーマ文字？」

「そうだ。

我々はこの文字の解読に

二年の歳月を費やし、

ようやくその解読に成功した。

しかし、

それは意味を解読できた

訳ではなかった。」

「と言うと、どういう事？」

「解説したものは詩だった。」

「詩って、ポエムって事？」

「そうだ。」

そこに書かれてた詩は

暗号になっていて、

そのままの意味ではない事に

気づくまで随分と骨を折ったよ。」

「で、その意味が解けたの？」

「ああ、これは鍵だった。」

「鍵？何の鍵？」

「意味を説くための鍵さ。」

つまりもう一つこの謎を

解くための資料が必要

という事だったんだ。

それで、これを見せてくれ。

これがその資料」

「これは何？

金属かな？

金属の積み木？

丸いのと、四角いの、

そして三角の金属」

「それは古代の祭壇に

飾られていたものらしい。

宗教儀式に使うもので、

ビータと呼ばれる物だ。

この絵に描かれているものは、

爺様がスケッチしたもので、

例の資料の中に入っていた。

これをどうやって使うのか

はまだ分かっていないが、

このもう一つの鍵が

隠されている

場所が判明して今、

調査チーム

がそこに向かっている。」

「それじゃ。

もうすぐ見つかるんだね。

お兄ちゃん。」

「ああ、その筈だ。

そこで、雪。

お前は俺とそこに

行って欲しい。」

「ええ、いいわ。

で、いつ？」

「明日だ。」

「でも、お兄ちゃん。

明日は竜ちゃんの誕生日

だから私行けないよ」

「それじゃ明後日でもいい。」

とにかく来てくれ。」

「ええ、わかったわ」

「修さん。僕も一緒に・・・」

「竜治、悪いが今回は

ここでおとなしく

していてくれ。

今回の冒険は

俺と雪で行く。」

「お兄ちゃん。

竜ちゃんも一緒に

連れて行って。」

「雪。今回の冒険は危険が伴う。

お前と俺なら何とかなるが、

訓練もろくにしていない竜治は

足手まといになる。

それに、お前は竜治の生命を

危険にさらしたいのか?」

「修さんそんなに危険なの？」

「ああ、お前が来ればさらに
その危険は高まるだろう。」

「わかった。

僕はここで、待っているよ。

でも……」

「雪のことなら心配するな。

お前より頼もしい。

俺が言うんだから、

間違いない。」

僕が心配そうに言うと彼女は

僕を見て言った。

「大丈夫。

私のことなら心配要らないわ。

こう見えても、

エージェント教育は

特級を持っているし、

お兄ちゃんがいるから。」

「そうか、頼りなくてごめん。」

「そんな事ないよ。

いつも頼ってるでしょ私。」

「それじゃ。

決まりだ。

明後日、迎えに来る。」

「ええ、わかったわ。

お兄ちゃん。」

「行き先は何処？

修さん。」

「それは、お前にも

教えられない。

お前の安全のためにも」

「わかったよ。

これ以上は聞かない。」

「そうしてくれ」

雪ちゃんは僕を見つめ

僕の手を強く握った。

第九節 仙道ミッション2

「所で、お二人さん。

仙道の修行の方は

きちんとやっているのか？」

「ええ、二人ともお腹に熱を

作り出せるようになったわ。

腹式呼吸してるとお腹が

熱くなってまるでホッカイロ

が入っているみたい。

ね一竜ちゃん。」

「そお、そお。

修さん僕達凄いでしょ？」

「それは、いい兆候だ。

それでは、次の工程に

進もう。

お前たちはどうやらやっと

『気』の存在を確かめることが

できた、

今度はそれをコントロール

する為の訓練を行う。」

「コントロールできるの?」

「ああ、もちろんだ。」

「どうやって?」

「意識を使う。」

「意識?どうやって」

「お腹に発生した熱を

意識で感じ取る。

方法はやってみると簡単だが、

それを説明するのは非常に

難しい。」

修さんは深く考え

込んでいる様だった。

「そうだな・・・

例えば・・・

誰もいない筈の部屋で

物音がした時、

雪お前なら

どうする?」

「私???

そうね、

辺りに耳をすまして、

誰かが居ないか

感じ取ろうとするわ」

「そうだ、

その感じ取る感覚に似ている。

感じ取ろうとする感覚を

腹に発生している熱に焦点を

あわせて、

それをただ見つめる。

そうしていると

自然に動き出すんだ。

それまで辛抱強く

待たねばならない。」

「難しいわね」

「だが、やれるようになると

簡単なことに気付くよ。」

「でも修さん。動かす場所

は何処でもいいの？」

「いや、動かすべき

ルートが決まっている。

そのルートにそって『気』

を還流させる事を仙道では、

小周天と読んでいる。」

「動かすべきルート？」

「つまり気脈の事だ」

「気脈？」

「漢方医学では、

気脈の事を『経絡』と

呼んでいる。

経は支線で、

体内には十二の

経と、十五の絡が

あると言われている。

これは正経と呼ばれ、

ここを気が巡っている。

だが、気を全身に

還流させる為には

これだけでは不十分だ。

この他に八つの気脈がある。

それは、

人間が母の胎内で生活

している時に、

呼吸や重要な

生命活動に

必要なエネルギー

を運ぶための器官

として利用され、

生まれて来ると

同時に閉鎖されてしまう。

この八つの気脈を

「奇経(きけい)八脈」

と呼び、

これから

お前たちはそのルート

に気を回し、

同時に閉鎖されてしまった

「竅(きょう)」と

呼ばれるポイントを

開通させていく。

「奇経(きけい)八脈」

とはつまり、

督脈(とくみやく)

任脈(にんみやく)
衝脈(しょうみやく)
帶脈(たいみやく)
陽竅(ようきょう)
陰竅(いんきょう)
陽維(ようい)
陰維(いんい)

の事をさす。

このうち

督脈(とくみやく)
任脈(にんみやく)

が二大幹線で、

他の六つは補助線だ。

つまり、お前たちは

この二つの二大幹線

督脈(とくみやく)
任脈(にんみやく)

に気を回す。

それがうまくいけば

他の六つの補助線にも

自然に気が回るようになる。

督脈(とくみやく)は

上あごから前額部、

頭頂を通り、

延髄、脊椎に

そって身体の背部を縦に走り、

尾骨から会陰(えいん)に達し、

ここで任脈と交合する。

任脈(にんみやく)は

下あごから咽喉仏、胸部と

身体の前部を通過して、

前身部を縦に走り

会陰(えいん)に達する。

図の挿入

つまり前身と

後身をぐるりと回り

肛門の前の指三本

ぐらいの場所、

会陰(かいえん)で

つながれている。

この身体の前後に

円を描く様に

存在する気の脈に

気を回していく事を

これからしていく

って訳さ」

「修さん

督脈(とくみやく)と

任脈(にんみやく)

の位置は大体

わかったけど

他の六つの補助線

の場所は何処なの？」

「別に知らなくても

督脈(とくみやく)と

任脈(にんみやく)に

気が回れば

かってに気が回る

ようになるが、

参考までに言っておくよ。

衝脈(しょうみやく)は

任脈の後方を縦に走る

中央線で咽喉で任脈と

つながっている。

帯脈(たいみやく)は

腹部に合って

横隔膜にそって、

横に帯状にある気脈だ

陽竅(ようきょう)と

陰竅(いんきょう)は

両足にあり、

陽竅(ようきょう)は

足の外側

陰竅(いんきょう)は

足の内側

を通る気脈だ。

陽維(ようい)と
陰維(いんい)は、

両手にあり、

陽維(ようい)は

腕の外側

陰維(いんい)は、

腕の内側

を通る気脈だ。」

「でもお兄ちゃん。

督脈(とくみやく)と
任脈(にんみやく)は

生まれて来ると同時に

閉鎖されてしまうんでしょ?。」

「生まれて来ると同時に

閉鎖されてしまうがそれは

脈自体が詰まっている

わけではないんだ。

ただ、あるポイントに

蓋のようなものがかぶさり

それで流れなくなっているに

すぎない。

つまりその蓋を

はずせばいいだけなんだ。

督脈(とくみやく)と

任脈(にんみやく)には

十二の「竅(きょう)」

と呼ばれる

塞がれたポイントがある。

しかし、

この全部を一つ一つ

開く必要はないんだ。

督脈(とくみやく)にある

主要な「竅(きょう)」は三つ、

任脈(にんみやく)にある

主要な「竅(きょう)」三つ

これを開く事によって

他の「竅(きょう)」

は自然に開く。

督脈(とくみやく)にある

主要な「竅(きょう)」の

一つは

『尾閭(びろ)関』

それは尾骨の下にある。

二つ目に

『きょう脊(きょうせき)関』で

これは脊椎五番目あたり

にある。

三つ目に

『玉沈(ぎょくちん)関』

で延髄の上にある。

任脈(にんみやく)にある

主要な「竅(きょう)」の

一つは

『山根(さんこん)』で

両眉の中央の奥で

脳下垂体のある場所。

二つ目に

『みぞおち』にあり。

これを『中黄(ちゅうこう)』

または、『檀中(だんちゅう)』

と呼んだりもする。

生理学的に言えば、

太陽神経叢の場所。

三つ目に

『会陰(かいえん)』で

肛門の前の

指三本ぐらいの場所

ここを別名で

『陰驕(いんきょう)』

と呼び、ここは性機能を
司る場所と言われている。

この場所が六つ

の塞がれている

ポイントの中で一番重要な

場所で

「主竅(しゅきょう)」と

呼ばれ、初めに開くべき

場所でもある。

これら一つ一つを熱くする。

熱くなるということは、

気がそこに入った

事を意味する。

そうしているうちに

閉鎖は解かれ

開放され、

気が自然に流れる

ようになる。」

「それじゃ僕らはまず第一に

その「主竅(しゅきょう)」と

呼ばれ、初めに開くべき

場所を開く必要があるんだね。」

「そういう事だ。

今まで通り腹式呼吸をして、

男である竜治は、へその下

、丹田と呼ばれるポイント。

女である雪乃は、両乳首の

真中、中丹田と呼ばれる

ポイントに熱を発生させる。

それを続けていると、

その熱の範囲も広がって

来て熱が上の方へ

上がってくる。

そういう状態に

なったら意識で

それを下げてやり、

男である竜治は、へその下

、丹田と呼ばれるポイント。

女である雪乃は、両乳首の

真中、中丹田と呼ばれる

ポイントに熱を収めるように

もどす。

すると陽火はさらに熱く広い

範囲に拡大するはずだ、

そうして範囲が広がると

性器にむずがゆいものを

感じ出す。それは、性欲

を伴い、

sexをしたくて仕方ない

感覚と言った方が

いいかもしれない。

これが起こった時、

『会陰(かいえん)』つまり、

肛門の前の指三本ぐらいの場所

に意識を置きそこに陽火を導く、

この時男性はペニスが急に

勃起したりするが、これは、

陽火が流出して性器に充満

するため起こる事で、

決して射精してはいけない。

射精衝動がおきたら、

肛門の前の指三本ぐらいの場所

を意識で見つめつづけ、

その衝動が消えるのを待つ。

こうしている内に自然に

『会陰(かいえん)』のつまりが

取れるので次に

『尾閭(びろ)関』

それは尾骨の下にある

ポイントに意識をあてる。

こうして、次に、

『きょう脊(きょうせき)関』で

これは脊椎五番目あたり

にあるポイントに意識をあてる。

次に、

『玉沈(ぎょくちん)関』

で延髄の上にある

ポイントに意識をあてる。

次に、

『玉沈(ぎょくちん)関』

で延髄の上にある

ポイントに意識をあて

次に、

『山根(さんこん)』で

両眉の中央の奥で

脳下垂体のある場所

に意識をあて

次に、

『みぞおち』にあり。

これを『中黄(ちゅうこう)』

または、『檀中(だんちゅう)』

と呼んだりもする。

生理学的に言えば、

太陽神経叢の場所

に意識をあて

次に、

『会陰(かいえん)』

肛門の前の指三本ぐらいの場所

にもどす。

これで体の中を陽火が一周

した事になり、これを

小周天と呼んでいる。

大体一つのポイントが開通

するまで多くの月日が

必要になるはずだ。

これを根気よく

これから二人で

やって欲しい。」

「うーん。

わかったような

わからないような。

なんだか、難しいね。

修さん」

「一気にわかろうと

するからさ。

あせらず一つ一つ

行えばいい。

まずは、一つ。

そこからさ」

「そうだね。修さん」

「ただ一つここで注意して

おかなくてはならない。

それは、意志や想像の

力で動かさないで欲しい。

陽火は自然に動くものだから

あくまでその熱を

見つめつづける

だけにして、

引っぱったり、

想像で動かさないでほしい。

ただ、

この感覚は説明できない。

お前たちが実際に行って、

その意味をつかむ

しかないんだ。」

「うーむ

難しいね竜ちゃん。」

僕と雪ちゃんは

顔を見合わせて

大きく肩を落とした。

「二人ともそんなに

落ち込むな、

これはあくまでも仙道を

する為の下準備だぞ。」

「そうだよねー」

「さーみんなでこの料理

をいただく。

竜治、雪」

修さんの言葉で

僕らは再び笑顔を取り戻し

三人で料理を堪能した。

第十節 クリスマス

12月25日 クリスマス

この日は僕の誕生日。

本当の事を言えば

捨てられた日

と言う事になる。

なぜ、

僕の親は僕の事を

捨てたのか？

子供の頃の僕は

この日になるといつも

考えてしまっていた。

楽しいはずの

誕生日がこの事を

考え始めると

辺りが暗く淀むように

僕の気持ちは

沈んでいった。

僕は冷たい風に

ガタカダ揺れる窓越しに、

いつも期待を込めて

見つめていた。

今日こそ僕の願いが

サンタさんに届き、

お母さんが迎えに

来てくれると

期待を込めて待っていた。

お母さんは

優しい笑顔で僕を

抱いて涙を流して

僕に謝る。

「竜治今まで独りぼっち

にしてごめんね。」

お母さんは僕の頬に暖かい

キスをしてこう言う。

「これからは一緒に、

いつまでも一緒に

居ましようね。

竜治」

そういつてくれる人を

ずっと僕は待っていた。

これが僕のクリスマス

の思い出だった。

「どうしたの？

竜ちゃん。」

「何でもない。

これで明日の準備が

終わったね。」

「うん。」

でも、またしばらく

会えないね。

竜ちゃん」

「仕方ないよ。

僕は君の帰りを

ずっと待ってるから。

きっと帰って来るんだよ」

「何そんな暗い顔して。

竜ちゃん。

そんなに心配しないで。

ちゃんと帰ってくるから。」

「君をずっと

待ってるからね。」

「大丈夫だよ。

必ず帰るから。

私ね、生まれた時から

心臓に欠陥があるの？

他の人には隠すけど

竜ちゃんは

特別だから、話すね。

だから、お兄ちゃんったら

昔から私の事過保護なくらい

運動をさせようとしらないの。

わたしがちょっと走るだけで

心配そうに走るな!ってね。

だから、心配しないで

私がお兄ちゃんの仕事

手伝う時はいつも、

プログラム作りで危ない事

なんて、一切させて

もらえないから」

「そうか、

それなら僕も安心だよ」

「さっ竜ちゃん。これから

竜ちゃんの誕生日。

一緒に祝いましょ」

彼女はキッチンに向かい

何か料理を作り始めようと

したが僕は彼女の手をとり

ベットルームに向かった。

「どうしたの？」

竜ちゃん。」

僕は何も言わなかった。

心配そうに見つめつづける

彼女を見て僕は

堪えきれずに

涙を流していた。

彼女は僕の頬に流れる

涙に唇をあてて

そっとキスをした。

それから、

僕を気遣うように

ベットに座らせ

僕の髪を優しくなでた。

僕達はただ黙って

見つめ合い

お互いの洋服を

ゆっくり脱がせた。

彼女をそっと寝かせ僕は

彼女の乳首に

そっと唇を乗せた。

彼女はピクリと

上半身を動かし

そっと僕の頭を

撫でていた。

胸から中央に舌を走らせ

ゆっくりと彼女のバギナに

近寄ると彼女は僕のベルト

を外し、ズボンのファスナー

を下ろした。

僕は自分でパンツを脱ぎ捨て

彼女の下着を脱がせた。

彼女のバギナはうっすらと

湿っていた。

僕はどうしようもない

不安な気持ち

がこみ上げていて、

それをどう処理して

いいかわからず

じっとして動けなかった。

彼女は僕を抱きしめて、

そして僕の涙を拭いていた。

そして、

僕らは何もしないまま

ずっと二人でベッドの中で

抱き合った。

気が付くと彼女の頬から

涙が流れていた。

それは、僕のために彼女が

流した涙だった。

彼女は僕をただ

優しく見つめ

僕と一緒に泣いてくれていた。

僕達は沈黙に包まれ

闇がそれを深くした。

僕は彼女の温もりを心で感じ

彼女は僕の寂しさを感じていた。

時間の流れがあいまいになり、

時の止まる感覚を僕は感じていた。

暗い闇が暖かいなんて・・・

僕は初めて思った。

「これからは一緒に、

いつまでも一緒に

居ましようね。

竜ちゃん。

だから泣かないで。

竜ちゃん」

そういつてくれる人をずっと

僕はずっと待っていた。

それが君だったんだ。

僕は心の中で叫んでいた。

遠い記憶の物語・・・・。

第一章 長い夜

雪ちゃんが居なくなって

ちょうど二週間が過ぎていた。

僕達はお互いに何の連絡も

取れなかった。

それは、この作戦が秘密裏に

行われている事から仕方ない

とわかってはいるものの

僕にとっては地獄のような

日々だった。

会えない日は時間の流れが

止まったように長い。

僕はモンモンとした

気持ちのまま

最後のレポートを

完成させた。

これで僕は入学当初の目標

を成し遂げた事になる。

僕は何か充実した気持ちが
湧き上がるのを感じて、
うれしさでいっぱいだった。

僕の入学当初に
立てた目標とは、
卒業に必要な
単位を二年で全て取り、
そして、一年間は
やりたい事を
見つける旅に
出ると言う計画だった。

単位を落としても
いいように
多めに授業を取っていたが
雪ちゃんの協力のおかげで、
全て落とすことなく
卒業必要単位以上を
取る事ができた。

あとはこのレポートを

提出してこの題材を

卒業論文として扱っていいか

を大学側が審議する。

僕の卒論のテーマは

『神』

というテーマにした。

なぜなら雪ちゃんのお祖父さん

が残した資料だけで

この卒論のための資料は

十分な事と、

僕自身がその『神』という

存在に強く興味を持っていた。

これは修さんや雪ちゅん

との出会いによって生まれた

興味なのだが、

運命を神が作るのなら

これは必然なのでは

ないのかと自然に思えるような

気がした。

僕は一人きりの寂しさを

雪ちゃんの

お祖父さんが残した

資料を読む事に

よって紛らわした。

時々何処からともなく

彼女の笑い声が

聞こえる気がして、

また寂しくなったりもしながら。

そして、

雪ちゃんがいなくなった事で

元気がなくなった白ちゃんも

その寂しさを紛らわそうと

僕の側から離れようと

しなかった。

何処に行くにも僕の

後を追いまわし、

トイレまでついて来るほど

白ちゃんは寂しがっていた。

僕と白ちゃんは

雪ちゃんの居ない

部屋がどれほど惨めで

寂しいのかお互いに

分かち合い、慰めあっていた。

白ちゃんは日に二回の

散歩の時間になると

必ず僕の顔を覗き込み

僕がリードを取りに行くまで

何度も何度も僕の邪魔をした。

僕はとうとう諦めてリード

を白ちゃんの首につけ

散歩に出かけた。

外は朝方に降った雪が

道路一面を覆い、

冷たい空気が凍てつく路面に

霧のようにへばり付いていた。

白ちゃんと散歩しながら

僕はぼんやりと考えていた。

『神』とはいったい

何なのだろうと。

僕が仙道を初めてから、

『神』に対する

認識が少しだけ

変わったような気がする。

以前僕が『神』に

ついて考えていた像は

人間的な存在だった。

例えばイエス・キリスト。

例えばお釈迦様といった具合に。

ただ仙道をはじめてから僕は

『神』という存在を

もっとエネルギー

的に捉えるようになっていた。

例えば、『気』

例えば物事を動かす根源的な力。

この違いを説明するには

とても骨を折る作業だが、

あえて言えば、

イエス様をイエス様と

存在させるエネルギー。

お釈迦様をお釈迦様と

存在させるエネルギー。

僕はそう考えるように

なっていた。

僕達はイエス様やお釈迦様

と何ら変わらない人間で

違っているとすれば、

その存在させるエネルギー

の形態だけの違いではないか？

そう思った。

イエス様やお釈迦様を存在

させるエネルギー形態は

おそらく慈愛というもので、

その形態の事を西洋では

キリストと呼び、

東洋ではタオあるいは

道と呼んでいるのでは

ないかと考えていた。

僕達は知らぬ間にあるルール

に縛られ動かされている。

例えば人は優しくされた人に

対して、唾を吐きかける事が

できない。

たとえ出来たとしてもそれが

本心では決してない。

それが人間として生きる

見えないルールであり、

心の中に深く刻まれ、

僕たちを人間として

生きらせている。

そんな気がする。

そのルールこそが

神という人もいるが

それも間違いではないだろう。

視点を変えれば見え方が

変わるように・・・・

以前の僕は神という存在は

常に僕の外にいて、

僕を見守り、守っている。

そう思っていた。

しかし、『神』は僕たち人間、

全ての生き物の中に、

存在の中に気という存在で

存在し、なお、

僕らを生かし続けている

と知った今、

僕は自分の中に神を

見つけ出そうと

方法を変えた。

僕は暗闇の中、目をつぶり、

ただ心の目で暗闇を見つめる。

僕はいずれ神を見るだろう。

自分の中に、

そして、

この旅を終わらせるだろう。

そして、

新たな何かをまた

始めるのだろう。

それが、神という存在が

僕に贈ったプレゼント

なのではないだろうか。

今の僕にはそれが正しいのか

どうかはわからない。

ただこの僕を動かす

強烈な興味を誰も止める事

など出来なかった。

昔、ある僧が趙州(じょうしゅう)

和尚(おしょう)と

いう名前の和尚に尋ねた。

「達磨和尚は、何の目的で我が

国に来たのでしょうか？」

『庭先にある柏の木だ』

「和尚たとえばやめてください。」

「私は、たとえなどで

答えてはいない」

「達磨和尚は、

なぜわが国に来たのですか。」

『庭先にある柏の木だ』

という『禅』の問答があるが、

僕はこの答えを

人を動かす強烈な興味

を誰も止める事など出来ない。

という意味ではないかと考えた。

これが正しい答えかどうかは

その辺に投げ捨てて・・・・・・・・。

もうひとつ、

こういう話も思い出した。

ある僧が趙州(じょうしゅう)

和尚(おしょう)に尋ねた。

「犬のようなものにも、

仏の性質がありますか」

「ない」

「なぜないのですか」

「自分に仏の性質がある

ことを知らないからだ」

ここで言われているように、

僕らは仏の性質を

持っているのに、

それを知らないままにいる。

その性質を取り戻せるのなら

僕らはきっと神になる。

イエス・キリストのように、

あるいは、お釈迦様のように。

そう考えるようになっていた。

僕は必ず『神』を見つける。

僕の闇の中で・・・・・・・・

そう思っていた。

第二節 白ちゃんの予感

散歩道の帰りに、

白ちゃんは突然

僕を引きずる

ように走り出し、

僕は引っ張る

白ちゃんに頼み

込むように

何度も何度も叫んだが、

白ちゃんの耳には

届かなかった。

僕が疲れてリードを放し、

白ちゃんを先に

行かせようとする

白ちゃんは僕の所に

戻ってきて、

僕をせき立てるよう

に吠えた。

「わかったよ。

わかったってば

白ちゃん。

わかってるけど

ちょっと休もうよ。」

白ちゃんは怒ったように

僕を睨みつけ、

更に僕に吠えた。

「そんなのにらまないの。

わかった白ちゃん。

行こう。

走ろうよ。

ゆっくりだよ」

僕が白ちゃんのリード

を持つとまた物凄いスピード

で僕を引きずりまわして

マンションの前でようやく

止まった。

僕がカードキーでドアの

ロックを外すとまた僕を

引きずるようにエレベータ

に乗り込み僕を笑わせた。

「どうかしたの？

白ちゃん今日の君は

何処か変だぞ、

散歩は走るだけが

楽しいわけじゃない。

君だって景色を楽しんでる

筈だろ。

今日はほんとに参ったよ。

白ちゃん」

白ちゃんは目を輝かせ

いたずらっ子のように

僕に笑いかけて僕の

顔を舐めまわした。

「だだいま って。

誰もいないね。」

「お帰りー

りゅーちゃーんー

白ちゃーんー。」

「えっ？」

白ちゃんはこの事を知って

いたかのように雪ちゃんに

かけより、

そして雪ちゃんの

顔を舐めまわした。

「白ちゃーん。

ただいま。

ママ帰ったじよ。

あーん。

もーくすぐったいよ。

そんなにうれしいの

んーかわいい奴め。」

「おかえりー雪ちゃん。

なんだ白ちゃんそれを

知ってて急いで帰ったのか。

ママに甘えて

うれしそうだね。」

「ねーりゅーちゃん。

ハグして、ぎゅっと。

早くー。ぎゅっと」

僕は彼女を強く抱きしめた。

「お帰り、雪ちゃん」

「ただいま、竜ちゃん。」

僕達は見つめ合い激しい

キスをした。

お互いに会えなかった時間の

寂しさを消し去ろうとしていた

のかもしれない。

「寂しかったよ。竜ちゃん。」

「僕と白ちゃんもそうだった。

また、痩せちゃったみたいだね。」

「そうかな？

忙しかったしね。」

「宝物は探し出せたの？」

「なかったみたい。

でも、私が別に発見された

手ががりを元に解読プログラム

を作って、解析してみたの、

そしたら、座標らしき物が

出できたから、それを元に

今、お兄ちゃんと探索チーム

が探してるの」

「そっか。

それで、君は戻ってきたの？」

「なんかちょっと気にさわったよ。

竜ちゃん。

私が帰ってきてうれしくないの?」

「うれしいけど、

それで、修さん困らないの?」

「大丈夫よ。

私の仕事は最初からここまで。

心配しないで竜ちゃん。

誰にも迷惑はかけていないから」

「それなら本当に喜べるね。

よかった元気そうで。」

「うん。元気だよ。

でもなんかちょっとだけ……」

「も一暗い顔しない。

会えてうれしいよ。

本心から。

信じて」

「うん。信じる。

信じちゃう。」

「雪ちゃん。

君も今日は疲れてるだろ。

だから僕がスペシャル料理で

君をもてなすよ。」

「えーうれしい竜ちゃん。

私のために作ってくれるの?」

「もちろん。

君のため」

「わーうれしい。

私。

でっ 何作ってくれるの?」

「カレーだったりして」

「カレーか」

「何？」

雪ちゃん。

今、すこし、カチンときた。」

「冗談。竜ちゃん冗談。

そんなに睨まないで 笑」

「笑 作ってやんない。」

「もーいじわるー 笑

ねー竜ちゃん作って。

ねーってば

ねー竜ちゃん」

「そうだなキスしてくれたら

考えてもいい」

「えーじゃーいい。 笑」

「もー怒った。」

「冗談 笑

冗談だってば

そんなにすねないで。

チュ

これでいいかな？」

「たりない」

「チュ チュ」

「だりない」

そして長いキスをした。

彼女の瞳は真っ直ぐに僕をみつめ

僕はその瞳の中にすいこまれた。

力強く、優しさに満ちた瞳は

僕の目をじっと

捉えて放さなかった。

僕が彼女をみつめると彼女は

ガラス細工を扱うように

僕の頬に手をあてて、

優しく撫で下ろした。

第三節 運命の意図

僕の作ったカレーが

雪ちゃんの口に

どうやら合っていた

みたいで、

雪ちゃんは僕を

誉めまくった。

彼女は非常に人を

誉める性格で、

人の事を悪く

言っている所を

僕は見た事がなかった。

彼女は見ず知らずの人に

話し掛けても、

話し掛けられても、

全ての人に

受け入れられ、

溶け込んでしまう人で、

僕はそんな彼女を

いつも尊敬していた。

人をあまり寄せ付け

ようとしなない僕とは

対照的なその彼女の

性格に憧れていたの

かも知れない。

彼女があまり

誉めすぎるので

僕は何処か

恥ずかしくなり

はにかんで笑っている

しかないほどだった。

「この味は僕が作った

もではないよ。

雪ちゃん。」

僕がたまらなくなって

言うと彼女は

悪戯な顔をして

僕に言った。

「いいえ。

貴方の

愛の味がするの。」

「ありがと。

雪ちゃん。」

「どういたしまして。

私こそ

ありがと竜ちゃん。」

「どういたしまして」

「所で竜ちゃん。

大学の卒業論文

何書くか決めたの？」

「うん。

あとは原案を

出すだけだよ。」

「そうか、でっ何にしたの」

「神」

「神？」

「そうだよ」

「竜ちゃん

あったまいいー

一石二鳥って訳ね」

「そういう事」

「それで、後二年は

どうするか決めた？」

「大学のあと二年って事？」

それなら、

なんとなく決めた」

「えっもー決まったんだ。

早いー。

でっ どうしょっか？

二人で南の島にでも

住んじゃうとか？」

「それは思い

つかなかった。

いいかもねー。」

「えっ違うの？」

「実はこの前修さんに

集中的に訓練に

参加したらどうか

って誘われたんだ」

「訓練って、もしかして、

スパイエージェントの？」

「そう。それ」

「えーそうなのー」

「実は修さんに

もう話したんだ。

その訓練に

参加したいってね。」

「だったら私も・・・」

「それも修さん

手配するって

言っていたよ。

竜治が行くなら

雪も必ず来るだろう

からって言ってね」

「お兄ちゃんも

気が利くのか

きかないのか・・・・・・・・

で、

どれ位の期間なの」

「一年って言ってたよ」

「一年か・・・

厳しいよきっと」

「わかってるよ。

でも、僕は君を守れる

男になりたいから・・・」

「ありがとう竜ちゃん。

でも・・・

私の為に無理はしないで」

「君の為なら少しぐらい

の無理は何でもないよ。

君を僕は守りたい、

ただそれだけだよ。」

「竜ちゃん・・・

も一大好きー

竜ちゃん。」

この辺りから僕の人生は

少しずつその姿を

変え始めた。

僕が考えていた

平凡な人生は

スリルの味が

少しだけするように

なっていったのだ。

僕はその先に

待つ運命の糸に

引かれるように

歩み始めていた。

自分の意志で

ありながら、

何かに

導かれるように時間が

支配し、

僕の意志とは

無関係に流れて

いる事に

もちろん気付く筈も

なかった。

第四節 高高度ダイブ

僕と雪ちゃんは

スパイエージェント

集中教育を受け

早三ヶ月が過ぎいてた。

僕は基礎的な

訓練を全て終え、

地上一万メートルから

酸素ボンベをつけて、

飛行機から飛び降りる

クレイジーともいえる

パラシュート

降下訓練の為に

アメリカのネバダに

来ていた。

雪ちゃんは

本物の戦闘機の操縦

訓練でネバダに

行かなければならず、

それにあわせて

修さんがわざわざ

いつも二人で

居れるように、

僕の訓練スケジュールを

作ってくれていた。

「ハイ リュウジ

準備はいいか」

僕の乗った飛行機に

赤い回転灯が回り、

ハッチが開き

始めていた。

「OK もちろん」

「リュウジ

首に気おつけろ。

首だ。

聞こえるか。」

「わかってる。」

上空一万メートルから

の降下は物凄い

スピードをもたらし、

バランスを失えば

そのスピードで

首がへし折れてしまう。

その為、細心の注意力で

落下角度を調整し

首を守る必要があった。

青い点灯ランプと

同時に僕は

空へと舞い上がり、

そのまま地上へと

落下していった。

雲に覆われた空を

突き破るように降下し、

やがて砂漠の荒々しい

赤い土が物凄い勢いで

僕の目の中に

飛び込んできた。

僕はバランスを

失わないように

体勢を変えて

背中に背負った

パラシュートの

紐をおもいっきり引くと、

勢いよくパラシュートが

開き、空に舞った。

僕の緊張は一気に

ほぐれ空の快適な

パラシュート旅行を

楽しんだ。

空は透き通るように青く、

何処までも続く

砂漠の大地が

僕を温かく

迎えてくれている

気がした。

僕はパラシュートを

操作して

指定された

着陸ポイントに降りた。

「りゅーちゃんおめでとう

成功したのね。」

ヘルメットの中の

無線から

雪ちゃんが僕に話した。

「雪ちゃん。

最高だったよ。

とても気持ちよかった。」

「じゃーもう一度やる？」

頼んであげようか？」

「意地悪だね。雪ちゃん。

出来ればもうしたくないよ

ーだ」

「えへへ

早く基地に

帰ってきてね。

待ってるから。

今日はシャンパンね。」

「ジュースがいい」

「贅沢ね」

「そう？」

「子供なんだから」

「いいから」

「わかったよ。

竜ちゃん。

竜ちゃんの為に

私がオレンジジュース

作ってあげる。

たくさん愛を込めて」

「期待してる」

「それじゃ

待ってるね。」

「わかった。

交信を切るよ」

第五節 ルート32発動

僕を迎えに来た

トラックが砂を巻き上げ

僕の視界に入ると

僕は大きく手を振り

ここに居ると合図をした。

すると後ろの方から

戦闘機が飛んできて

僕の頭上を超えて

トラックをミサイルで

吹き飛ばした。

僕はとっさに岩場の

影に身を隠し

急いでベース基地に

連絡を取った。

「ベース基地

こちらアルファガンマ

応答願います。」

「こちらベース基地

現在戦闘中、

アルファガンマ

ルート32発動

健闘を祈る」

「ルート32?」

ルート32とは

計画外の事例が

おきた場合

指揮権を個人に

与えられ

以後

作戦は僕自身に

任されるという事を

意味していた。

僕は予測される全ての

状況を頭に思い描いた。

敵対するグループが

何らかの情報を得て、

僕たちを狙っているの

だろうか？

それとも、

アメリカが他の国と

戦争を始めてしまった

のだろうか？

いずれにしても

一度基地に戻る

必要がある。

雪ちゃんの安否を

確認して、

助け出さなければ

ならない。

僕は自分の装備品を

確認した。

サバイバルキットに

拳銃。

拳銃の予備弾装が

二つ。

後は

パーソナルコンピュータ。

これしか僕は持って来て

いなかった。

僕はパラシュートと

ヘルメットを穴の中に

隠し、地図を手に

今後の計画を練った。

ここから基地までおよそ

50キロの距離、

基地は監視カメラで

監視され

動くもの全てに反応する

ムーブセンサーで

張り巡らされ

基地の裏側のフェンス

越しには

地雷原と

高電圧のフェンス、

何処から潜入すべきか

僕は考えていた。

しばらく考えるうちに

あるひらめきが

生まれた。

基地の裏側は

地雷原だが、

そこをもし抜ける

事が出来れば、

監視カメラのみで、

ムーブセンサーは

置かれていない。

潜入するポイントは

ここしかない。

僕は以前基地の

設備設計図を一度だけ

見た事がある事を

思い出し、

そのかすかな記憶

をたぐりよせた。

基地裏側の空調設備、

それと、

下水道見取り図、

配電図、そして、

コンピュータケーブル配電図。

一生懸命に思い出した。

そして、作戦を決めた。

昼間のうちに出来るだけ

基地に近づくために

岩場の多い道を

南下する、

少し遠回りだが

空からの敵に対し

自分を隠す場所が

いくらでもある。

この道を行くと、

朝方のまだ暗いうちに

基地に到着できる。

問題は地雷原。

ここは、

慎重に行くしか方法が

ない。

監視カメラは基地に

続く道の脇に走る

光ケーブル

をハッキングして、

静止映像を流し

つづける。

そして、

ここでもう一つ

問題が生まれる。

ハッキングするために、

ここでコンピュータを

失うと、

中に入った後の

行動が非常に難しい。

コンピュータがない以上

それから、

ハッキングをする事が

不可能になってしまう。

とすれば、

滞在中に使っていた

キーカードが、

無効になっていない

必要がある。

僕はそれに

かけるしかない。

キーカードが有効

ならば潜入後の

行動は自由という

事になるからだ。

僕は前身の神経を

研ぎ澄ませ

上空からくる敵にむけ、

ひたすらに

歩きつづけた。

焼け付く太陽が

全身の水分を奪い取り、

僕は残り少ない

ミネラルウォーターを

少しずつ口に入れて、

渴きを癒した。

基地から二キロほど

離れた丘の上から

ナイトスコープを使って

基地の様子を

うかがった。

基地周辺は静まり返り、

滑走路を示す明かりが

全て消えていた。

普段なら夜間飛行訓練

の為こうこうと

照らされている

ライトは全て

消されていて、

滑走路には
爆破されたトラックが

転がり、戦闘があった

ことが伺えた。

滑走路脇のドッグは

全て戦闘機の姿はなく

空の状態で

僕はいったい何が

起こっているのか

わからなかった。

僕は守備よく

光ケーブルをみつけ、

コンピュータをつなぎ、

インターネット上にある

僕のホストストレージサーバー

を呼び出し、

ハッキングソフト

を駆使して、

何とか基地の中の

メインコンピュータに

潜入する事が出来た。

システムに取り

付けられた

ファイアーウォールは

ある時間になると

切り替えられ、

外部との接触を

調べるので

そのタイミング

アルゴリズム

を計算する必要が

あったが

僕は雪ちゃんから

教えてもらった方法で

この問題を解決する

事ができた。

それから僕の潜入ルート

の監視カメラを時間差で

静止画像に切り替える

ようにセットした。

基地の中の様子を詳しく

見たい気持ちも

あったが、

外部からのアクセスは

ハッキングしている事を

気づかれる危険を

増やすので最小限に

留め、内部に潜入して

から詳しく行う事にした。

腕時計を

バイブレーションタイマー

に切り替えて、

振動で次にどのカメラに

静止映像が

送られるのかを

知らせるようにして、

頭の中で何度も何度も

シュミュレーションし、

切り替わるタイミングと、

その時に自分が

どの位置に

居なければならないのか

を確認した。

僕の腕時計が振動して

作戦開始の合図を

僕に知らせた。

僕は出来るだけ

腰を落とし

急ぎ足で地雷原まで

走った。

フェンスを破り

慎重にナイフで

地雷のありかを探り、

三百メートル続く

地獄の道を

二時間かけて渡った。

高圧線のフェンスの

前で、監視カメラが

静止画に切り替わる

合図を腕時計が知らせ、

それと同時にこの一帯の

送電線が切れた。

送電線が予備電源に

切り替わるまでに

二分三十秒

その間に高圧線の

フェンスを上り

僕は基地の内部への

潜入を完了した。

僕は監視カメラの

切り替わりの

合図と共に基地の内部

深く入り込み空調施設の

中に身を隠した。

問題はここからだ。

内部をよく知る

ためには、

メインのコンピューター

に潜入する必要が

あるのだが、

コンピューターを設置

している場所は

作戦司令室と

ターミナルセンター

にしかない。

この基地を占拠する

人間がその場所に

居ないはずはない。

つまり、

そこにはいけない。

僕はここであることに

気がついた。

僕の部屋に

コンピューターがある。

しかし、そこに行くには

どうしたらいいのだろうか？

僕はない知恵を

振り絞って考えた。

ここから内部に通じる

空調設備の中には

全てモーションセンサー

が取り付けられ潜入は

不可能といえた。

ただ、

もし今まで僕が

使っていた

IDキーカードが無効に

なっていなければ

エレベータを使って

僕の部屋まで

たどり着ける。

しかし、監視カメラは

生きつづけていて、

今でも監視を

続けているのなら、

僕は見つかってしまう。

ここから先の

監視カメラは

ネットワークに

つながっていないため

ハッキングが

出来なかったのだ。

僕はいちかばちかの

賭けに出た。

急いで廊下を

駆け抜けて、

エレベータの前に立ち、

カードキーを差し込んで

エレベータの

ボタンを押した。

運良くエレベータは

動き出し

僕の部屋の階に

止まった。

僕は部屋の前まで

走りキーを差込み

部屋に入った。

急いでかばんの中から

ラップトップのパソコンを

だして、振り向くと

ライフルを持った

二人組みの男が

ライフルを

僕に向けていた。

僕は観念して両手を

上げた。

「よく、やった。リュウジ」

ライフルをもった男が

銃口を下げて

僕に笑いかけた。

「これは、もしかして、

訓練なの？」

「その通り、

しかし、ここまで

これた奴は

お前が初めてだよ。

リュウジ」

「竜ちゃん。

大丈夫だった。」

雪ちゃんが心配そうに

ドアから飛び出してきた。

「雪ちゃん」

「もーみんな無茶して、

竜ちゃんが死んだら

どうする気なの？」

「ほっとしたよ雪ちゃん。」

雪ちゃんは泣き出して

僕の胸にすがった。

「リュウジ、

君がどうやってここまで

潜入したのか後で教えて

ほしい。

この基地の

セキュリティー

を見直す材料にしたい。

今日のご苦労さん。

ゆっくり休んでくれ」

「訓練はこれで

終わりですか?」

「ああ、終わりだ。

ゆっくり休んでくれ」

僕は泣き止まない

雪ちゃんを

両腕で抱いて

ほっとため息をついた。

第七節 プライベートアイランド

僕と雪ちゃんはスパイ

エージェント教育の合間

に二週間の休みをもらい

カリブのプライベート

アイランドで

二人きりのデートを

満喫していた。

夜、星空の下の

ビーチで二人きり、

聞こえるのは

優しく聞こえる

波の音だけだった。

「綺麗な星空ね。

竜ちゃん」

「ああ、綺麗な星空だ

ね・・・」

夜空にはダイヤモンド

が光を発するように

星が輝き、

空が透き通るように高く、

そして月が煌煌と

海を照らしていた。

「竜ちゃん。

私竜ちゃんに

お願いがあるの・・・」

「いいよ。言ってみて。」

「もう、エージェント教育

受けなくて欲しいの」

「どうして？」

「私、心配なの。

だって竜治さん無茶する

から」

「そんな事ないよ」

「地雷原を300メートル

通る事が？」

「あれは・・・」

「だから心配なの」

「・・・・・・・・」

「私を守ってくれるのは

うれしいけど、

これ以上

貴方を危険な目に

合わせる訳には

いかないわ。」

「雪ちゃん聞いて、

これは僕が決めた事だ、

決めた以上僕は

最後までやる

つもりだよ。」

「でも・・・」

「でもない。

雪ちゃん。

僕は意外と頑固なんだ。

悪いけどこれは

やめられない」

「わかった・・・

竜治さんもお兄ちゃんと

一緒なのね。

一度言い出したら

聞かない」

「それを言うなら

君だって・・・

修さんも言っていたしね」

「わかったわ。竜ちゃん。

でも・・・

もう、無茶はもうしないで

．．．．」

「わかったよ」

彼女は僕に寄り添い

僕は彼女の肩を抱いた。

「こうしてると世の中に

私達二人きり

になったように感じるね」

「そうだね．．．．

無人島に遭難した二人

．．なんてね」

「遭難して、

二人でこうして

星空を見られるなら

それもいいかもね」

「もし、

ほんとに遭難していたら

そんな事言って

いられないよ、

きっと、食事の事とか・・・

水の事とか考えなくちゃ

いけないだろうし」

「でも、こうして二人で

夜空を見上げたら

きっと私は今の気持ちと

何も変わらないよ・・・

私・・・とっても幸せ・・・」

「それは言えるね。

僕も幸せだ・・・

こうして君といれるだけ

で」

彼女は僕をみつめ、

僕の唇に自分のおでこを

あてた。

乾いた暖かい風が

彼女の髪を揺らし

打ち寄せる波が僕らの

足元を濡らした。

「ねーどうして竜ちゃんは

私の事好きになったの？」

「どおしてかな？

どうしてだと思う？」

「もーそれは私が

聞いているの？」

「雪ちゃんは初めて

会ったのに

初めて会ったと

思わない、

なんとなく懐かしい……

そんな人に出会った事

ある?」

「もちろん。」

「それが、君だった。

君と出会った時、

それを君に感じたんだ。

僕は初めて君を見た時

美しい人だと思ったよ。

そしてなぜか

懐かしかった。

そして、いつの間にか

君に心を奪われていた。

だって君は優しい人

だから、

だから君に心を

奪われた。」

彼女は僕をぼんやりと

見つめつづやくように

言った。

「ありがとう。竜ちゃん」

「どういたしまして。」

「竜ちゃんは

聞きたくないの？

どうして私が貴方を

好きになったか」

「聞きたいかな？」

「はっきりしないんだね」

「聞きたいよ」

「本当に？」

「またそんな暗い

顔して・・・

聞きたいよ。

ごめんね、

またからかったりして」

「いいの・・・・・・・・」

「聞かせてよ。

どうして僕を好きに

なったの？」

「わからない・・・笑」

「なんだ・・・

わからないんだ

やっぱり・・・笑」

「うそよ。

恥ずかしいから

言いたくない」

「じゃ

恥ずかしくなくなったら

聞かせてよ」

「えーそれで

おしまいなの？」

「君は話したいの？」

話したくないの？

どっちなの？」

「話したいような・・・

恥ずかしいような・・・

いいわ・・・

それじゃ言うね。

一目ぼれ。」

彼女は真っ赤になって

俯いていた。

「ありがとう。雪ちゃん。」

僕は彼女の頭を

子供をあやすように

撫でた。

すると彼女は僕に甘えて

僕の胸の中に顔を

うずめた。

「この幸せがずっと

続くといいね。竜ちゃん」

「『二人でそうなるように

作っていこう、

僕達の未来を』

っね

雪ちゃん」

「うん。竜ちゃん。」

打ち寄せる波の音

だけが二人の間で流れ

ていた。

寄せては返す波音に

僕らは誘われるように

見つめ合い、

そして寄り添いあい、

抱き合った。

· · · to be continue

time is come II